

鬼川辺(1)遺跡 鬼川辺(2)遺跡 鬼川辺(3)遺跡

—津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2014年3月

青森県教育委員会

鬼川辺(1)遺跡
鬼川辺(2)遺跡
鬼川辺(3)遺跡

—津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2014年3月

青森県教育委員会



上空から見た鬼川辺(1)遺跡(手前)・鬼川辺(2)遺跡(中央)・鬼川辺(3)遺跡(奥)

東より



上空から見た鬼川辺(1)遺跡(奥)・鬼川辺(2)遺跡(中央)・鬼川辺(3)遺跡(手前)

南西より



鬼川辺(1)遺跡出土土器(縄文時代草創期)



鬼川辺(1)遺跡出土石器(縄文時代草創期)



鬼川辺(3)遺跡出土
硬玉製磨製石斧

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成24年度に津軽ダム建設事業予定地内に所在する鬼川辺(1)遺跡、鬼川辺(2)遺跡、鬼川辺(3)遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、鬼川辺(1)遺跡では、岩木川（現美山湖）を見下ろす段丘先端部から、縄文時代草創期の隆起線文土器や尖頭器等の石器が出土しました。これらは津軽地方初の出土事例として大変貴重です。

また、鬼川辺(2)遺跡では、美山湖に沿って縄文時代中期～後期の集落跡を検出しました。

鬼川辺(3)遺跡では、縄文時代中期の集落跡を検出しました。特に第6号竪穴住居跡の堆積土から出土した硬玉製の磨製石斧は、出土事例が少なく貴重なものです。

本報告書は、それらの調査成果をまとめたものです。今後埋蔵文化財の保護と研究等に広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたりご指導・ご協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

平成26年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 柿崎 隆司

例　　言

- 1 本書は、国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所による津軽ダム建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成24年度に発掘調査を実施した、中津軽郡西目屋村鬼川辺(1)遺跡、鬼川辺(2)遺跡、鬼川辺(3)遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は、鬼川辺(1)遺跡で4,700m²、鬼川辺(2)遺跡で6,000m²、鬼川辺(3)遺跡で2,900m²である。
- 2 鬼川辺(1)遺跡の所在地は、青森県中津軽郡西目屋村大字砂子瀬字鬼川辺、青森県遺跡番号は343032である。鬼川辺(2)遺跡は青森県中津軽郡西目屋村大字砂子瀬字鬼川辺、青森県遺跡番号は343033である。鬼川辺(3)遺跡は青森県中津軽郡西目屋村大字砂子瀬字鬼川辺、青森県遺跡番号は343034である。
- 3 発掘調査と整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所が負担した。
- 4 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	平成24年5月8日～同年11月20日
整理・報告書作成期間	平成25年4月1日～平成26年3月31日
- 5 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は青森県埋蔵文化財調査センター能代谷征則文化財保護主幹、浅田智晴文化財保護主査が担当し、文末に執筆者名を記した。依頼原稿については、文頭に執筆者名を記した。
- 6 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

基準点測量	株式会社キタコン
空中写真撮影	株式会社シン技術コンサル
石質鑑定	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科教授　柴正敏
石器実測図作成	株式会社ラング
放射性炭素年代測定	株式会社加速器分析研究所
炭化材樹種同定	株式会社パレオ・ラボ
遺物の写真撮影	フォトショッピングなみ・シルバーフォト
- 7 発掘調査成果の一部は、現地見学会等において公表しているが、それらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書がそれらに優先する。
- 8 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 9 発掘調査及び整理・報告書作成に際し、下記の方々からご協力、ご指導を得た（敬称略、順不同）。三宅徹也、三浦圭介、長尾正義、安斎正人、谷口康浩、中村耕作、渋谷孝雄、秦昭繁、長井謙治、井田秀和、村上昇、平澤悠
- 10 図1 遺跡位置図に掲載した地形図は、国土地理院発行の「電子地形図25000(140.24-40.53-A3-y-20140119-025512-0000)」を用いている。
- 11 測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。

- 12 挿図中の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。
- 13 全体図等の縮尺は各挿図毎にスケール等を示した。
- 14 遺構については、検出順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺構に使用した略号は次のとおりである。S D－溝跡、S I－竪穴住居跡、S K－土坑、S N－焼土遺構、S R－土器埋設遺構、S X－性格不明遺構

- 15 遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付した。
- 16 遺構実測図の縮尺は、原則として1/60に統一し、各挿図毎にスケールを示した。
- 17 基本層序の層序番号にはローマ数字、遺構内堆積土の層序番号には算用数字を使用した。
- 18 遺構実測図に使用した網掛けの指示は、以下のとおりである。

 : 被熱範囲  : 炭化物範囲  : 火山灰範囲

- 19 土層の色調表記等には、『新版標準土色帖2003年度版』(小山正忠・竹原秀雄)を使用した。
 - 20 遺物については、取り上げ順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺物に使用した略号は、次のとおりである。P－土器 S－石器 C－文化遺物・炭化物
 - 21 遺物実測図には、挿図毎に1から通し番号を付した。
 - 22 遺物実測図の縮尺は、原則として大型礫石器及び大型石製品は1/6、縄文土器・礫石器は1/3、剥片石器・土製品、小型石製品は1/2に統一し、各挿図毎にスケール等を示した。
 - 23 遺物実測図に使用した網掛けの指示は、以下のとおりである。
-  : 黒色物質付着範囲  : 石器敲打痕  : 石器磨痕
- 24 遺物写真には遺物実測図と共に番号を付した（例：図5-3は5-3と表記）。
 - 25 遺物写真の縮尺は、巻頭図版を等倍、写真図版を不同とした。

目 次

卷頭図版	
序	
例言	
目次	
挿図目次・表目次・写真図版目次	
第1章 調査概要	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法	1
第3節 調査の経過	3
第2章 周辺環境	
第1節 遺跡周辺の地形及び 地質について	7
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	14
第3章 鬼川辺(1)遺跡の検出遺構と 出土遺物	
第1節 検出遺構	15
(1) 土坑	15
(2) 性格不明遺構	18
第2節 出土遺物	19
(1) 繩文土器	19
(2) 石器	24
(3) 土製品	30
(4) 石製品	30
第4章 鬼川辺(2)遺跡の検出遺構と 出土遺物	
第1節 検出遺構	31
(1) 竪穴住居跡	31
(2) 土坑	36
(3) 燃土遺構	36
第2節 出土遺物	37
(1) 繩文土器	37
(2) 石器	43
第5章 鬼川辺(3)遺跡の検出遺構と 出土遺物	
第1節 検出遺構	47
(1) 竪穴住居跡	47
(2) 土坑	57
(3) 土器埋設遺構	60
(4) 燃土遺構	61
(5) 溝跡	61
(6) 炭窯跡	61
第2節 出土遺物	63
(1) 繩文土器	63
(2) 土師器	80
(3) 石器	80
(4) 石製品	94
第6章 自然科学分析	
第1節 放射性炭素年代測定	95
第2節 鬼川辺(1)・(3)遺跡出土 炭化材の樹種同定	100
第7章 総括	
第1節 鬼川辺(1)遺跡	105
第2節 鬼川辺(2)遺跡	106
第3節 鬼川辺(3)遺跡	108
引用・参考文献	110
遺構観察表	111
遺物観察表	111
写真図版	125
報告書抄録	
奥付	

挿図目次

図1 滅跡位置図	5	図41 鬼川辺(3)滅跡	第6号堅穴住居跡	55
図2 調査区位置図	6	図42 鬼川辺(3)滅跡	第7号堅穴住居跡	56
図3 津軽ダム脇の空中写真	12	図43 鬼川辺(3)滅跡	土坑-1	58
図4 滅跡周辺の地形図	12	図44 鬼川辺(3)滅跡	土坑-2	59
図5 地形分類図	13	図45 鬼川辺(3)滅跡	土器埋設遺構	60
図6 鬼川辺(1)滅跡基本層序	13	図46 鬼川辺(3)滅跡	焼土遺構	60
図7 鬼川辺(2)滅跡基本層序	13	図47 鬼川辺(3)滅跡	炭窯跡-1・溝跡	62
図8 鬼川辺(3)滅跡基本層序	14	図48 鬼川辺(3)滅跡	炭窯跡-2	63
図9 鬼川辺(1)滅跡 遺構配置図	16	図49 鬼川辺(3)滅跡	縄文土器-1	65
図10 鬼川辺(1)滅跡 土坑	17	図50 鬼川辺(3)滅跡	縄文土器-2	66
図11 鬼川辺(1)滅跡 性格不明遺構	18	図51 鬼川辺(3)滅跡	縄文土器-3	67
図12 鬼川辺(1)滅跡 縄文土器-1	20	図52 鬼川辺(3)滅跡	縄文土器-4	68
図13 鬼川辺(1)滅跡 縄文土器-2	21	図53 鬼川辺(3)滅跡	縄文土器-5	69
図14 鬼川辺(1)滅跡 縄文土器-3	22	図54 鬼川辺(3)滅跡	縄文土器-6	70
図15 鬼川辺(1)滅跡 石器-1	25	図55 鬼川辺(3)滅跡	縄文土器-7	71
図16 鬼川辺(1)滅跡 石器-2	26	図56 鬼川辺(3)滅跡	縄文土器-8	72
図17 鬼川辺(1)滅跡 石器-3	27	図57 鬼川辺(3)滅跡	縄文土器-9	73
図18 鬼川辺(1)滅跡 石器-4	28	図58 鬼川辺(3)滅跡	縄文土器-10	74
図19 鬼川辺(1)滅跡 土製品	29	図59 鬼川辺(3)滅跡	縄文土器-11	75
図20 鬼川辺(1)滅跡 石製品	29	図60 鬼川辺(3)滅跡	縄文土器-12	76
図21 鬼川辺(2)滅跡 遺構配置図	32	図61 鬼川辺(3)滅跡	縄文土器-13	77
図22 鬼川辺(2)滅跡 第1号堅穴住居跡	33	図62 鬼川辺(3)滅跡	土師器	80
図23 鬼川辺(2)滅跡 第2号堅穴住居跡	34	図63 鬼川辺(3)滅跡	石器-1	85
図24 鬼川辺(2)滅跡 第3号堅穴住居跡	34	図64 鬼川辺(3)滅跡	石器-2	86
図25 鬼川辺(2)滅跡 第4号堅穴住居跡	35	図65 鬼川辺(3)滅跡	石器-3	87
図26 鬼川辺(2)滅跡 第5号堅穴住居跡	35	図66 鬼川辺(3)滅跡	石器-4	88
図27 鬼川辺(2)滅跡 土坑	37	図67 鬼川辺(3)滅跡	石器-5	89
図28 鬼川辺(2)滅跡 焼土遺構	37	図68 鬼川辺(3)滅跡	石器-6	90
図29 鬼川辺(2)滅跡 縄文土器-1	38	図69 鬼川辺(3)滅跡	石器-7	91
図30 鬼川辺(2)滅跡 縄文土器-2	39	図70 鬼川辺(3)滅跡	石器-8	92
図31 鬼川辺(2)滅跡 縄文土器-3	40	図71 鬼川辺(3)滅跡	石器-9	93
図32 鬼川辺(2)滅跡 縄文土器-4	41	図72 鬼川辺(3)滅跡	石製品	94
図33 鬼川辺(2)滅跡 石器-1	44	図73 鬼川辺(1)滅跡	縄文土器時期別分布図	107
図34 鬼川辺(2)滅跡 石器-2	45	図74 鬼川辺(1)滅跡	剥片石器種別分布図	107
図35 鬼川辺(3)滅跡 遺構配置図	48	図75 鬼川辺(3)滅跡	遺構時期別分布図	109
図36 鬼川辺(3)滅跡 第1号堅穴住居跡	49			
図37 鬼川辺(3)滅跡 第2号堅穴住居跡	50			
図38 鬼川辺(3)滅跡 第3号堅穴住居跡	51			
図39 鬼川辺(3)滅跡 第4号堅穴住居跡	52			
図40 鬼川辺(3)滅跡 第5号堅穴住居跡	54			

表目次

表1 鬼川辺(1)滅跡 土坑観察表	111	表12 鬼川辺(3)滅跡 堅穴住居跡観察表	118
表2 鬼川辺(1)滅跡 性格不明遺構観察表	111	表13 鬼川辺(3)滅跡 土坑観察表	116
表3 鬼川辺(1)滅跡 縄文土器観察表	111	表14 鬼川辺(3)滅跡 土器埋設遺構観察表	117
表4 鬼川辺(1)滅跡 石器観察表	113	表15 鬼川辺(3)滅跡 焼土遺構観察表	117
表5 鬼川辺(1)滅跡 土製品観察表	113	表16 鬼川辺(3)滅跡 溝跡観察表	117
表6 鬼川辺(1)滅跡 石製品観察表	113	表17 鬼川辺(3)滅跡 炭焼窯観察表	117
表7 鬼川辺(2)滅跡 整穴住居跡観察表	114	表18 鬼川辺(3)滅跡 縄文土器観察表	117
表8 鬼川辺(2)滅跡 土坑観察表	114	表19 鬼川辺(3)滅跡 土師器観察表	122
表9 鬼川辺(2)滅跡 焼土遺構観察表	114	表20 鬼川辺(3)滅跡 石器観察表	122
表10 鬼川辺(2)滅跡 縄文土器観察表	114	表21 鬼川辺(3)滅跡 石製品観察表	124
表11 鬼川辺(2)滅跡 石器観察表	116		

写真図版目次

写真図版1 鬼川辺(1)遺跡	125	写真図版20 鬼川辺(3)遺跡	144
鬼川辺(1)・(2)遺跡遠景、調査区中央調査終了、 トレンチ35基本層序断面		第3号竪穴住居跡完掘、断面	
写真図版2 鬼川辺(1)遺跡	126	写真図版21 鬼川辺(3)遺跡	145
第1号土坑断面・完掘、第2号土坑断面・完掘、 第3号土坑断面・完掘、第4号土坑断面・完掘		第4号竪穴住居跡完掘、断面、炉断面、伊断割断面	
写真図版3 鬼川辺(1)遺跡	127	写真図版22 鬼川辺(3)遺跡	146
第5号土坑断面・完掘、第6号土坑断面・完掘、 第7号土坑断面・完掘、炭化物出土状況		第5号竪穴住居跡完掘、断面、炉断面、炉完掘、 炉断面	
写真図版4 鬼川辺(1)遺跡	128	写真図版23 鬼川辺(3)遺跡	147
第8号土坑断面・完掘、IV層焼込断面・炭化物出土状況、 第9号土坑断面・完掘、第10号土坑断面・完掘		第6号竪穴住居跡完掘、断面、炉断面、Pit10断面	
写真図版5 鬼川辺(1)遺跡	129	写真図版24 鬼川辺(3)遺跡	148
第11号土坑断面・完掘、炭化物出土状況、 第1号性格不明遺構確認、完掘		第7号竪穴住居跡完掘、断面、炉完掘、炉断面、 炉断面	
写真図版6 鬼川辺(1)遺跡	130	写真図版25 鬼川辺(3)遺跡	149
第2号性格不明遺構断面・完掘、 第3号性格不明遺構断面・完掘、炭化物出土状況、 第4号性格不明遺構断面・完掘、 第5号性格不明遺構断面・完掘		第1号土坑断面・完掘、第2号土坑断面・完掘、 第3号土坑断面・完掘、第5号土坑断面・完掘	
写真図版7 鬼川辺(1)遺跡	131	写真図版26 鬼川辺(3)遺跡	150
縄文土器		第6号土坑断面・完掘、第7号土坑断面・完掘、 第10号土坑断面・完掘、第11号土坑断面・完掘	
写真図版8 鬼川辺(1)遺跡	132	写真図版27 鬼川辺(3)遺跡	151
石器、土製品、石製品		第12号土坑断面・完掘、第13号土坑断面・完掘、 第16号土坑断面・完掘、第18号土坑断面・完掘	
写真図版9 鬼川辺(2)遺跡	133	写真図版28 鬼川辺(3)遺跡	152
調査終了		第19・21号土坑断面・完掘、第20号土坑断面・完掘、 第1号土器埋設遺構確認、断面、 第2号燒土遺構確認、断面	
写真図版10 鬼川辺(2)遺跡	134	写真図版29 鬼川辺(3)遺跡	153
基本層序断面、南側斜完掘、 第1号竪穴住居跡炉断面・炉完掘、炉確認		第3号燒土遺構確認、断面、第4号燒土遺構確認、断面、 炭窯跡確認、断面	
写真図版11 鬼川辺(2)遺跡	135	写真図版30 鬼川辺(3)遺跡	154
第1号竪穴住居跡完掘、炉完掘 第2号竪穴住居跡断面・炉完掘、完掘		炭窯跡完掘、涇道部確認、完掘、外周薄断面・完掘、 炭窯跡方完掘、第1号溝跡断面・完掘	
写真図版12 鬼川辺(2)遺跡	136	写真図版31 鬼川辺(3)遺跡	155
第3号竪穴住居跡断面・遺物出土状況・完掘、 第4号竪穴住居跡断面・炉断面		縄文土器・竪穴住居跡	
写真図版13 鬼川辺(2)遺跡	137	写真図版32 鬼川辺(3)遺跡	156
第4号竪穴住居跡完掘 第5号竪穴住居跡完掘、炉、Pit6断面		縄文土器・竪穴住居跡	
写真図版14 鬼川辺(2)遺跡	138	写真図版33 鬼川辺(3)遺跡	157
第1号土坑断面・完掘、第2号土坑断面・完掘、 第3号土坑断面・完掘、第1号燒土遺構確認、断面		縄文土器・竪穴住居跡、土坑	
写真図版15 鬼川辺(2)遺跡	139	写真図版34 鬼川辺(3)遺跡	158
縄文土器		縄文土器・土坑	
写真図版16 鬼川辺(2)遺跡	140	写真図版35 鬼川辺(3)遺跡	159
石器		縄文土器・土器埋設遺構・遺構外 土師器	
写真図版17 鬼川辺(3)遺跡	141	写真図版36 鬼川辺(3)遺跡	160
南側隣接調査終了(合成)、北東尾根調査終了、 林道北側調査終了、基本層序断面、第1号竪穴住居跡 断面・炉断面		石器・竪穴住居跡	
写真図版18 鬼川辺(3)遺跡	142	写真図版37 鬼川辺(3)遺跡	161
第1号竪穴住居跡完掘、炉完掘、炉断面 遺物出土状況		石器・竪穴住居跡	
写真図版19 鬼川辺(3)遺跡	143	写真図版38 鬼川辺(3)遺跡	162
第2号竪穴住居跡完掘、断面・炭化物出土状況、 遺物出土状況		石器・竪穴住居跡	

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経過

平成14年、国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所（以下、「津軽ダム工事事務所」）から青森県教育庁文化財保護課（以下、「県文化財保護課」）へ、津軽ダム建設予定地に所在する埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する協議の依頼があった。これを受け、同年7月10日に津軽ダム工事事務所、県文化財保護課、西目屋村教育委員会の三者による、津軽ダム建設工事の工程、内容、建設予定地内の埋蔵文化財調査の進め方等に関する協議が行われた。平成15年6月25日に県文化財保護課による最初の現地踏査が実施された。その後、津軽ダム建設予定地常時満水地区内の埋蔵文化財調査対象範囲は12地区、総面積約768,000m²とした。

当該地区的試掘調査は、県文化財保護課が平成22年6月と11月に実施した。その結果を基に、3遺跡とも平成23年3月15日付け青教文第1462号により新規登録された。本調査は、青森県埋蔵文化財調査センター（以下、「県埋文センター」）が担当し、平成24年5月から実施することになった。なお、周知の埋蔵文化財包蔵地に対する土木工事等のための発掘に関する通知は、平成24年4月に津軽ダム工事事務所から提出され、青森県教育委員会から記録保存のための発掘調査実施の通知がなされた。

第2節 調査の方法

（1）発掘作業の方法

県文化財保護課が実施した試掘調査の結果（青森県教委2011）、鬼川辺（1）遺跡、鬼川辺（2）遺跡では、縄文時代中期末葉から晩期前半にかけての土器、石器の遺物を検出し、鬼川辺（3）遺跡では、縄文時代中期後半から後期前半にかけての竪穴住居跡の可能性のある遺構や遺物を検出した。このため、調査開始時は縄文時代の遺構検出に重点をおいた。

遺構測量点は、調査区近隣に基準点が存在しないため、4級基準点の設置を株式会社キタコンに委託した。基準点からの測量に支障が生じた場合は、調査区内に任意点を設置した。また、水準原点も4級基準点を用い、調査区内の任意点に適宜水準移動を行った。グリッドは、各遺跡を網羅するよう設定した。1グリッドは4×4mとし、原点は、鬼川辺（1）遺跡及び鬼川辺（2）遺跡が平面直角座標第X系のX=59100、Y=-50500、鬼川辺（3）遺跡がX=59000、Y=-50900とした。南から北方向に向かってローマ数字（I～V）とアルファベット（A～Y）を組み合わせ、西から東方向に算用数字を付し、南西隅の組み合わせで呼称した。このため原点の呼称はIA-0となる。

遺跡の基本層序は、地表面から順に層序番号をI層、II層とローマ数字で付した。付す際は試掘調査の結果を基にしたが、一部変更を加えた。

試掘調査において、I層にあたる表土及び盛土は遺物が希薄であると判明したため、掘削時に重機を併用して省力化を図った。出土した遺物は、適宜グリッドと層位を基準に取り上げた。

検出した遺構には、原則として確認順に種類別の番号を付して精査した。遺構内堆積土観察用のセクションベルトは、遺構の形態・大きさ等に応じて、基本的に4分割又は2分割で設定した。遺構内堆積土には、層序番号を確認面から順に算用数字で付し、ローマ数字を付した基本層序と区別した。

遺構の実測と遺物の出土位置は、ソギア製トータルステーションによる測量点を元に、株式会社Cubic製「遺構実測支援システム」を用いて作図した。実測図は縮尺1/20を基本として作成し、遺構規模や性格に応じて縮尺を変更した。出土遺物は、遺構単位で層位を取り上げることを基本とし、必要に応じて形状実測図等を作成した。実測に際しては遺り方測量を併用した。

写真撮影は、原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサルの各フィルム及び1790万画素数のデジタルカメラを併用し、遺構検出状況、遺物出土状況、発掘作業状況等について記録した。また、ラジコンヘリによる調査区域全体の空中写真撮影を株式会社シン技術コンサルに委託して行った。

(2) 整理・報告書作成作業の方法

鬼川辺(1)遺跡は、縄文時代の土坑11基、性格不明遺構5基を検出し、遺物は土器や石器が段ボール箱に換算して11箱出土した。鬼川辺(2)遺跡は、縄文時代の竪穴住居跡5軒、土坑3基、焼土遺構1基を検出し、遺物は土器や石器が段ボール箱に換算して9箱出土した。鬼川辺(3)遺跡は、縄文時代の竪穴住居跡7軒、土坑15基、焼土遺構3基、土器埋設遺構1基と近世以降の溝跡1条、窯跡1基を検出し、遺物は土器や石器が段ボール箱に換算して35箱出土した。整理・報告書作成作業は、検出された遺構の構築時期や性格等の検討をしながら進めた。

トータルステーションによる測量で作成した図面は、パソコン上で確認作業及び図面調整を行った。遺り方測量で実測した図面は調整後スキャナーでデジタル画像化し、トータルステーションで作図したものと合成した。また、遺構台帳・遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

35mmモノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、遺構毎の検出・精查状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータはタイトルを入力し、日付毎と内容毎に整理した。

遺物の注記は調査年度、遺跡名、遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器等直接注記できないものは、収納したポリ袋に注記した。接合・復元にあたっては出土地点・層位等の整理を怠らないようにした。

遺物の選別は遺物全体の分類を適切に行った上で、遺構に伴って使用・廃棄された資料、遺構の構築・廃絶時期等を示す資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料、所属時代・型式・器種等の分かる資料等を主として選別した。選別資料は慎重に観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。また、遺物台帳・観察表・計測表等を作成した。

写真撮影は業者に委託して行ったが、実測図等では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等を伝えられるように留意した。また、石器の石材産地を同定するため、石質鑑定を専門家に委託して行った。

遺構・遺物の実測図やその他の挿図のトレースは、株式会社Cubic製「遺構実測支援システム」を使用した。実測図版・写真図版等の版下作成はアドビシステムズ製「Illustrator」、「Photoshop」をそれぞれ使用した。また、割付作業はアドビシステムズ製「InDesign」を使用した。

遺構・遺物の検討結果を踏まえて、時期・構造・変遷等について検討・整理した。

第3節 調査の経過

(1) 発掘調査の経過

発掘調査体制は、以下のとおりである。

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 柿崎 隆司

次長(総務GM) 高橋 雅人

調査第三GM 白鳥 文雄

文化財保護主幹 畠山 昇 (発掘調査担当者)

文化財保護主幹 能代谷征則 (発掘調査担当者)

文化財保護主査 浅田 智晴 (発掘調査担当者)

専門的事項に関する指導・助言

調査員 藤沼 邦彦 青森県文化財保護審議会委員 (考古学)

" 上條 信彦 国立大学法人弘前大学人文学部准教授 (考古学)

" 柴 正敏 国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科教授 (地質学)

" 佐々木辰雄 日本地質学会会員・故人 (地質学)

発掘作業の経過・業務委託状況等は、以下のとおりである。

鬼川辺(1)遺跡

5月上旬 調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等、事前の準備作業を行った。

5月8日 発掘器材等を現地へ搬入し、環境整備を行った後、調査区南側より粗掘を開始した。

5月下旬 調査区中央及び北側の粗掘と南側の遺構精査を開始した。調査区内の基準点測量を株式会社キタコンに委託した。

6月中旬 重機による表土及び旧道部分の盛土除去を行った。

6月下旬 調査区中央及び北側の遺構精査を開始した。

9月14日 予定されていた調査範囲 (4,700m²) の調査を終了した。

鬼川辺(2)遺跡

5月中旬 調査区内の環境整備を行った。

5月下旬 調査区内の基準点測量を株式会社キタコンに委託した。

7月下旬 調査区内の表土除去を重機を併用して行った。

7月25日 表土除去の際に砲弾が約200個検出され、弘前警察署員による立入調査が行われた。

8月上旬 調査区内の遺構精査を開始した。

10月12日 予定されていた調査範囲 (6,000m²) の調査を終了した。

鬼川辺(3)遺跡

9月上旬 調査区内の環境整備を行った。

9月中旬 調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等を行った。

調査区内の基準点測量を株式会社キタコンに委託した。

10月上旬 調査区内の遺構精査を開始した。

- 10月12日 上條調査員から遺構・遺物に関する現地指導を受けた。
- 10月18日 株式会社シン技術コンサルに委託して、遺跡及び調査区域内の空中撮影を行った。
- 10月24日 佐々木調査員・山口調査員による、地形・地質に関する現地指導を受けた。
- 11月20日 予定調査範囲(2,900m²)の調査を終了した。

(2) 整理・報告書作成作業の経過

平成24年度に実施した発掘調査に関する報告書刊行事業は、平成25年度に実施することになったが、写真類の整理作業等は発掘作業終了後の平成24年12月に終了した。この他の整理作業・報告書作成作業は平成25年4月から平成26年3月まで行った。3遺跡ともに主体となる時期は縄文時代であるため、これに応じた整理作業の工程を計画した。

整理主体 青森県埋蔵文化財調査センター

文化財保護主幹 能代谷 征則 (発掘調査担当者)

文化財保護主査 浅田 智晴 (発掘調査担当者)

本報告書に関する整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況等は以下のとおりである。

平成24年12月 写真類の整理作業と図面類の整理作業の一部を行い、写真類の整理作業は終了した。

平成25年4月 発掘作業で作成した図面類の整理作業を行った。遺物は数量や重量計測後、縄文土器から順次接合・復元作業を進めた。石器は報告書掲載遺物を選別した。

5月上旬 土器類の接合・復元作業が終了したので報告書掲載遺物の選別作業を行った。引き続き選別した遺物の拓本、実測作業を開始した。

6月上旬 炭化材樹種同定委託を株式会社パレオ・ラボに委託した。

8月下旬 報告書に掲載する剥片石器について、実測・図化作業を株式会社ラングに委託した。また、放射性炭素年代測定を株式会社加速器分析研究所に委託した。

10月中旬 図化作業の終了した遺物から順次トレースを開始した。

11月上旬 トレースが終了した図版から順次粗版作業を開始した。

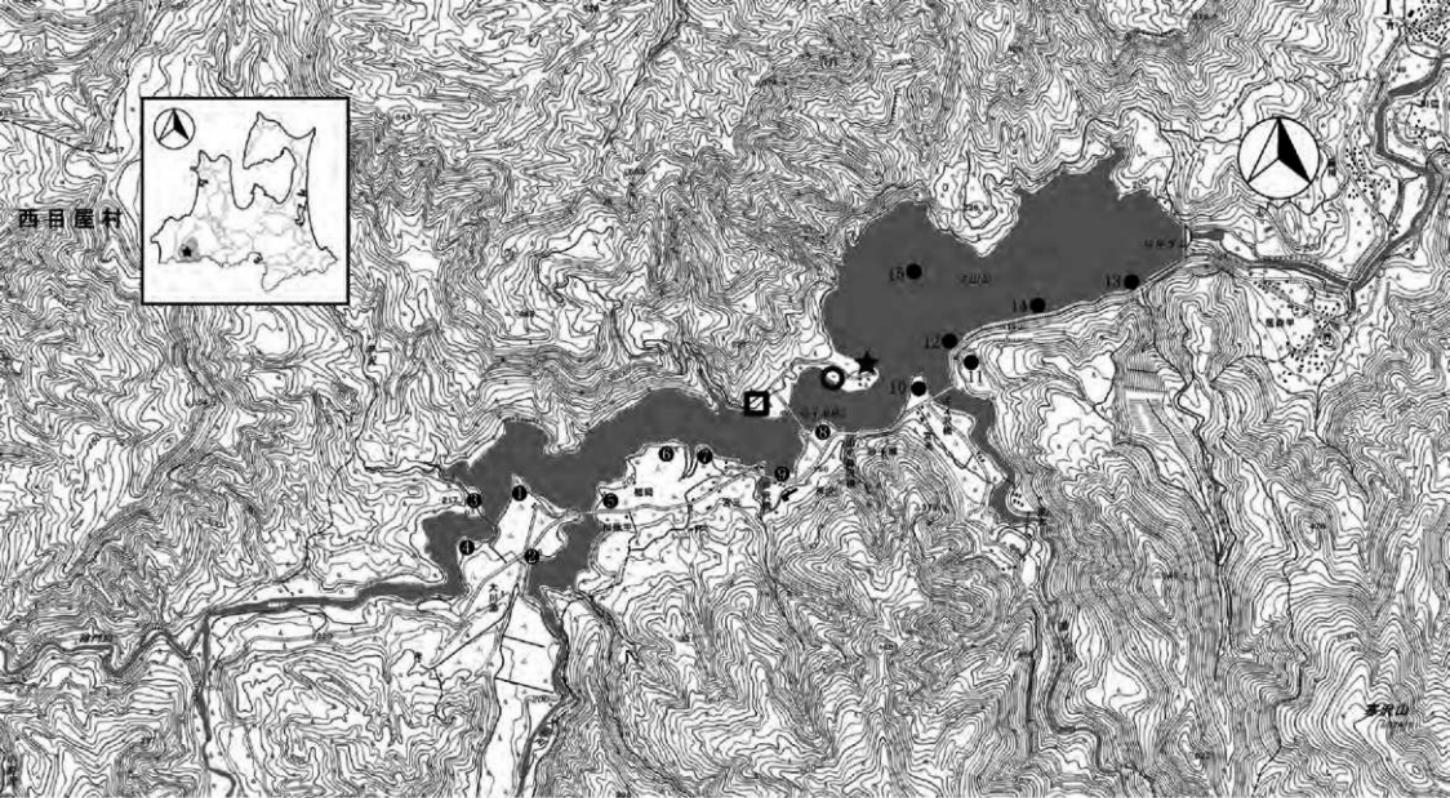
12月上旬 報告書掲載遺物(石器)の写真撮影をフォトショップいなしに委託した。調査成果を総合的に検討し、報告書の原稿作成を開始した。

12月中旬 報告書掲載遺物(土器)の写真撮影をシルバーフォトに委託した。また、柴調査員に石質鑑定を依頼した。

1月下旬 原稿・版下が壊ったので、報告書の編集を行い、印刷業者を入札・選定して入稿した。

3月31日 3回の校正を経て報告書を刊行した。最後に記録類・出土品を整理して収納した。

(能代谷・浅田)



★ 鬼川辺(1)遺跡 ○ 鬼川辺(2)遺跡 □ 鬼川辺(3)遺跡

津軽ダム建設事業に伴う本発掘調査が行われた遺跡
 1: 大川添(1)遺跡 2: 大川添(2)遺跡 3: 大川添(3)遺跡 4: 大川添(4)遺跡 5: 川原平(1)遺跡
 6: 川原平(4)遺跡 7: 川原平(6)遺跡 8: 芹沢(1)遺跡 9: 芹沢(2)遺跡 10: 砂子瀬遺跡
 11: 水上(1)遺跡 12: 水上(2)遺跡 13: 水上(3)遺跡 14: 水上(4)遺跡 15: 砂子瀬村元遺跡

図1 遺跡位置図

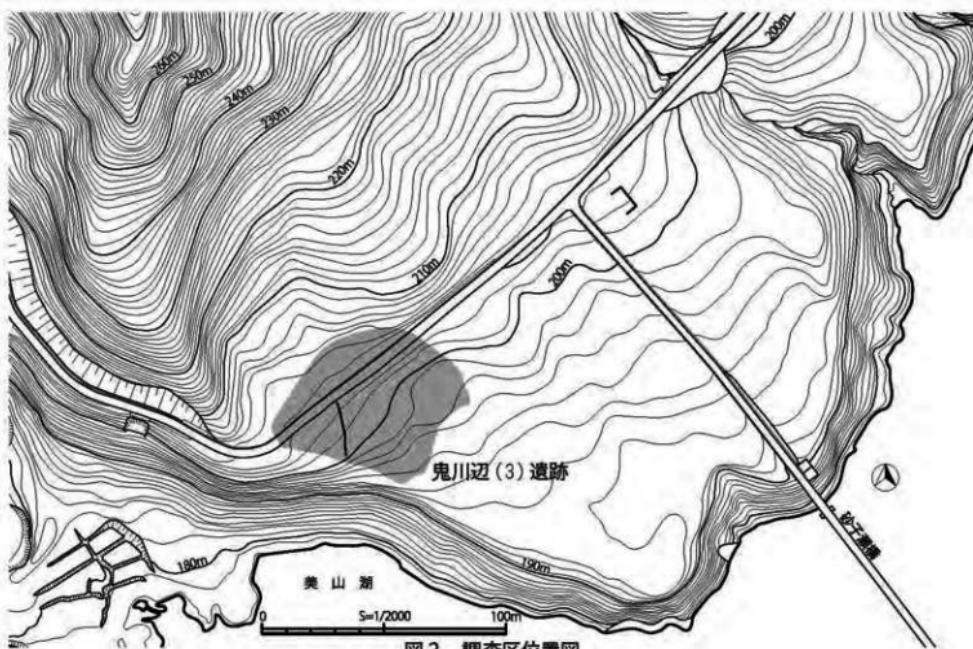
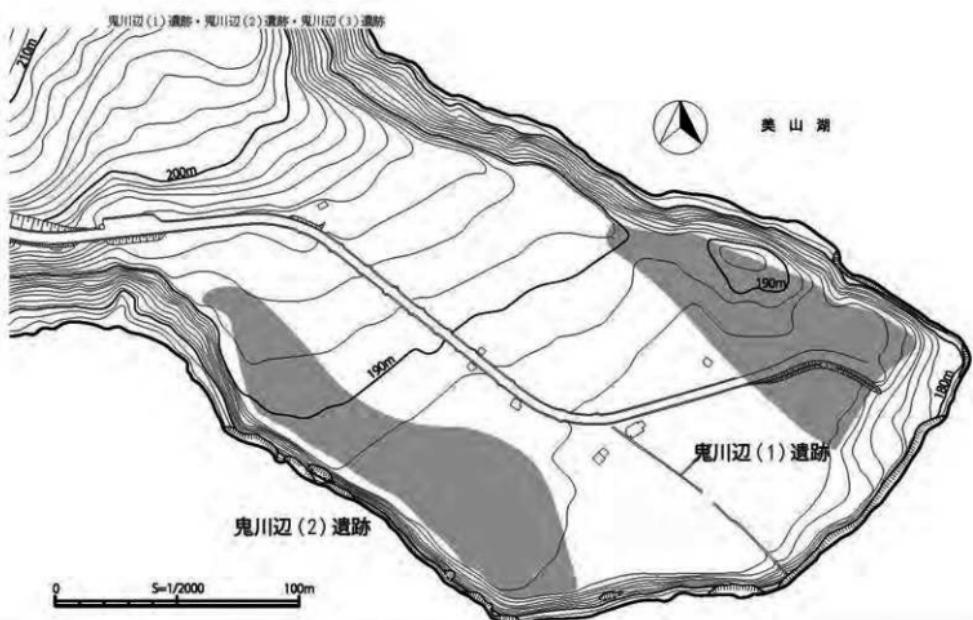


図2 調査区位置図

第2章 周辺環境

第1節 遺跡周辺の地形及び地質について

調査員 山口 義伸

鬼川辺(1)・(2)・(3)遺跡は白神山地内の、中津軽郡西目屋村砂子瀬字鬼川辺地内に所在し、岩木川上流の美山湖北岸に発達する河成段丘上に立地している。美山湖は、支流である湯ノ沢川のやや下流側に築堤された1960年完成のダム湖であって、湖面は満水時で標高180mとなる。

岩木川上流は深いV字谷をもつ起伏量の大きい山容を呈するが、図3をみると、湛水期の美山湖南岸には河成段丘が発達しているのが判読できる。一方、美山湖北岸は岩木川の蛇行により大きく湾曲し、急傾斜する山地斜面が谷底平野に臨んでいることが多く、一部鬼川辺(1)・(2)・(3)遺跡周辺で河成段丘が認められる。また、大正6年発行の5万分の1地形図(図4)をみると、大沢川及び湯ノ沢川との合流点において岩木川の流路が北側に大きく湾曲し、張り出した南岸の河成段丘面上に西目屋村砂子瀬及び同村川原平の各集落が所在している。なお、大沢川との合流点のやや上流側と湯ノ沢川との合流点の下流側には山地斜面の崩落跡が認められ、流域沿いの氾濫原の一部が水田として利用されていた。

白神山地を蛇行する岩木川水系の暗門川は鬼川辺沢や横倉沢など多くの枝谷を集めて流下し、やや下流において支流の大川と合流している。さらに下流側の美山湖周辺では、大沢川、湯ノ沢川などの支流とも合流して本流の岩木川となっている。青森県史(青森県2001)によると、白神山地は山地地盤の隆起と河川の下刻作用によってV字谷をもつ険しい山容の壯年期山地であると指摘し、暗門の滝に象徴されるように流紋岩や花こう閃緑岩など浸食から取り残された硬質部分が懸谷状の滝として多くみられるという。また、白神山地内には山地斜面の崩壊及び地すべりの多発地が多く存在し、その分布は浸食や風化にさらされ滑材となりやすい砂岩・泥岩、そして頁岩の堆積地域に集中しているという。鬼川辺(1)・(2)・(3)遺跡が立地する美山湖周辺にも数多くの地すべり地形や山地崩落跡が認められ、中村(2008)は詳細な分布を報告している。

この地域の地質を概観すると、新第三系中新統の藤倉川層、砂子瀬層、そして大和沢層が広く分布し、白神山地及び弘前市南部の基盤をなしている。藤倉川層は美山湖南方に広く分布していて、緑色～紫緑色の火山礫凝灰岩を主体とし、一部デイサイト質溶結凝灰岩を伴っている。砂子瀬層及び大和沢層は美山湖北方に広く分布していて、砂子瀬層は砂岩・砂質シルト岩を主体とし、安山岩～デイサイト質火碎岩を挟在している。大和沢層は細粒凝灰岩を主体とし、珪藻質泥岩あるいは珪質泥岩と互層をなしている。大和沢層は風化による粘土化が進行して地すべりを誘発しており、その崩落箇所が美山湖北岸に数箇所認められる(鎌田・根本、2004)。

図5には美山湖周辺の、特に蟹沢～湯ノ沢間における河成段丘の分布を示した。水野・堀田(2003)によると、美山湖周辺には砂礫層を主体とする川原平台地が分布し、高位段丘と低位段丘に区分できること指摘している。今回、25,000分の1地形図「川原平」及び1,000分の1津軽ダム貯水池平面図(平成8年12月作成)をもとに現地踏査し、面の高度、開析度、堆積物等から判断して概ね4段に区分した。

ただ、段丘構成層中に指標テフラを確認できず、各段丘面の形成時期に関しては不明である。豊島(1994)によると、奥羽・出羽両山地の諸河川には地盤変動とは関係なく、最終氷期極相期の約2万年前に堆積段丘が離水し、それに伴う浸食段丘が形成されたという。気候変化による地形の存在を指摘している。そして、連続性の良い浸食段丘が形成されるためには下刻速度が鈍化し、ほぼ同じ河床高度を保つ側削作用が繰り返され、同時に下刻分を補填する多量の土砂の堆積が必要であると述べている。また地すべりに関しては、渡部・八木(1994)が湯ノ沢川上流域にある200箇所の地すべり地形を調査し、地すべり移動体内からは十和田一八戸軽石層(To-HP)、白頭山一苦小牧火山灰、十和田a降下火山灰等の降下火山灰を確認している。地すべり地形には尾根の末端部が滑落したような初生地すべりと初生地すべり末端部に形成された二次的なものがみられるとして、初生地すべりは最終氷期極相期からTo-HP降下時期(約1.3万年前)にかけて、現河床に沿った二次的、三次的な地すべり地形は完新世に形成されたものと推測している。

以上のことから、美山湖周辺に分布する下記の河成段丘のうち、I面は水野・堀田(2003)の高位段丘に相当し、約2万年前までに形成された堆積段丘(豊島; 1994)に対応すると考えられる。また、IIa面は山間河谷において幅広く連続性のよい河成段丘として分布することから、水野・堀田(2003)の低位段丘に相当し、浸食段丘(豊島; 1994)に対応すると考えられる。今回の発掘調査において、IIa面上に立地する鬼川辺(1)遺跡から縄文時代草創期の隆起線文土器が出土し、放射性炭素年代測定の結果、 12610 ± 30 yr BP (^{14}C 年代: 第6章第1節参照)の数値が得られた。この数値から判断して渡部・八木(1994)が指摘するように、IIa面は最終氷期極相期から晩氷期にかけて形成されたと考えられる。なお、岩木川南岸の、支流大沢川～湯ノ沢川間の山地内には標高280～330mの平頂な面が点在するが、地すべりによりやせ尾根の状態であって、段丘かどうかは不明である。

I面は岩木川と支流大沢川との合流点付近にあって、本流に面した山地斜面の前線に標高200～300mの幅で分布している。大沢川よりも上流側が標高230～250m、下流側が標高220～240mであって、背後の山地斜面に認められる地すべりによる崩落物の供給もあってやや勾配のある段丘面をなしている。大沢川沿いの露頭で確認したところ、段丘構成層は角礫～亜角礫からなる疊層が主体であって、基盤岩の高度分布から推して7～8mの厚さと思われる。疊層は中部に挟在する塊状の暗灰色粗粒砂層(厚さ約1.5m)を境にして上下2層に区分できる。上部疊層(厚さ約2m)は径20～30cm大の凝灰岩や安山岩の礫が目立ち、下部疊層(3m以上)は径30～50cm大と礫径が大きい。疊層に包含される礫の円磨度の低さを考慮すると、最終氷期極相期に供給された岩屑によって形成されたと考えられる。なお、前線には下位のIIa面が分布し、15m超の急峻な段丘崖で接している。

IIa面は岩木川南岸に分布するほか、上流域に地すべり多発地を有する大沢川や湯ノ沢川の各支流沿いにも認められる。段丘面は各支流との合流点付近に展開する扇状地形をなしているが、本流の浸食・運搬作用により面的な広がりが下流側にも延伸している。段丘面の高度は大沢川よりも上流側が標高207～212m、大沢川～蟹沢間では標高200～205m、芦沢～山毛櫟沢間では標高190～200m、と下流側ほど面の高度を下げている。大沢川流域においては段丘面が約2km上流まで分布し、扇頂部付近の高度は標高230mにも達している。なお、IIa面前線には一段低いIIb面が小規模に分布し、暗門川流域では標高198～199mのIIb面に大川添(4)遺跡が立地してIIa面とは約10mの、現河床とは15～16mの段丘崖で接している。また、大沢川～芦沢間では標高197～198mの段丘面に川原平(4)遺跡

A区が立地し、II a面とは2~3mの急斜面で接している。

上位のII a面の構成層は砂礫層が主体であって、芦沢(2)遺跡周辺の露頭で確認したところ、層厚は約6mに達するが、肩端部ほど薄くなり基盤岩の露出高度から推して2~3mと推定される。包含される礫の円磨度が高く、礫径も1面構成層と比較して小さい。構成層は層相から3層に区分され、下部の砂礫層(厚さ2~3m)は径5~10cm大、最大径30~50cm大の円礫を主体とし、中部には薄成層した中粒~粗粒砂と砂礫(礫径5cm大以下)の互層(厚さ約2m)が、上部には細粒~中粒砂(レンズ状の砂礫を含む)と細粒砂質シルト(厚さ約1m)が堆積している。そして、最上部には崖錐性の堆積物と考えられる亜円礫~亜角礫を包含する粘土質砂(厚さ約2m)が認められるが、肩端部では欠いている。II a面の堆積相から推して、最終氷期極相期以降の、温暖期の降水と地すべりの多発によって大量に供給された土砂が堆積したものと考えられる。

下位のII b面は蛇行河川のポイントバーのような環境下であったと推測される。この面に立地する川原平(4)遺跡A区では東西方向に延びるマウンド状の砂礫堆が露出し、砂礫堆に並行する谷状凹地がII a面との境界をなしている。おそらく扇状地形をなすII a面が形成された後、浸食・運搬作用により河床には中洲状の砂礫堆が形成され、境界部に認められる谷状凹地は当時の流路跡と考えられる。なお、発掘調査終了後の工事現場で確認したところ、円礫(礫径10~30cm大が主体)からなる礫層が約1.5~2mの厚さで堆積し、直下に白色細粒凝灰岩からなる基盤岩が露出していた。同じく川原平(1)遺跡でも谷状凹地を挟んだ北端部にII b面が分布し、構成層は砂礫層とシルト岩の細礫・破片を多量に包含する地すべり崩落物の再堆積層との互層をなしている。

III面は岩木川南岸の、大沢川~蟹澤間に小規模に分布するのみである。II b面と同様に、ポイントバー的な環境下であったと考えられる。川原平(4)遺跡E区が立地するIII面は標高185~186mの平坦面であって、II b面とは約15mの段丘崖で接し、崖下には流路跡と思われる地形的な凹地が認められる。なお、現河床とは5~6mの段丘崖で接している。段丘構成層は黄褐色中粒砂を基質とする砂礫層で構成され、2~3mの厚さを有する。下部は円礫(径30~60cm大、最大径100cm大)層であって、段丘末端部では凸状に盛り上がり地表面に露出している。

IV面は岩木川流域の氾濫原であって、概ね湯ノ沢付近までは確認でき、下流側ではダム湖に水没している。面の高度は、暗門II~甲沢間では標高178~185m、大沢川付近では標高180~185m、芦沢より下流側では標高178~182mである。氾濫原は標高約180mを境に2段に区分でき、上位のIV a面は甲沢、大沢川、湯ノ沢川、ハヤリ沢など地すべり多発地を有する支流との合流点付近に広く分布し、谷壁の崩落地直下にも形成されている。下位のIV b面はほぼ流域沿いに分布している。

さて、鬼川辺(1)・(2)・(3)遺跡は岩木川本流と湯ノ沢川との合流点のやや上流側の対岸にあって、舌状に突き出た河成段丘上に立地している(巻頭図版1:上)。美山湖北岸は上述のように、地すべりや斜面崩壊により急峻な山地斜面が湖岸に臨んでいる。斜面途中には初生あるいは二次的に発生した円弧状の地すべり地形がみられ、滑落崖や凸状のすべり堆などが観察できる。特に、鬼川辺(3)遺跡西側を流れるハヤリ沢においては上流側が地すべり多発地であって、多量の土砂が本流へと供給されている。1,000分の1津軽ダム貯水池平面図と大正6年発行の5万分の1地形図を比較すると、鬼川辺(1)遺跡から鬼川辺(3)遺跡にかけては岩木川本流沿いに河成段丘が広く分布し、また本流の流路が狭く、谷壁が急崖となっているのが判読できる。今日、鬼川辺(1)遺跡東側では山地斜面

が崩落し、鬼川辺(2)遺跡～鬼川辺(3)遺跡間では段丘面が崩落していて、流路が大きく湾曲している。そして、渴水期になると、斜面崩壊で後退した箇所や、ハヤリ沢など本流と支流との合流点付近には谷底に一段高い氾濫原(IV a面)が露出する(巻頭図版1;下)。なお、巻頭図版1;下から鬼川辺(1)・(2)遺跡が立地する段丘は谷壁に緑色凝灰岩からなる基盤岩が露出していて、段丘構成層の厚さは2～3mと推定される。

鬼川辺(1)・(2)・(3)遺跡調査区は標高187～195mの段丘Ⅱa面であるが、段丘末端部は標高187～188mのきわめて平坦な面となっている。特に鬼川辺(1)・(2)遺跡調査区では標高188mの等高線にはほぼ平行する形で細長い埋没谷が検出されている。この平坦面を覆う、基本層序第IV層は径10～50cm大の円礫を多量に包含する砂礫層であるが、山地斜面側の標高188～190mでは円礫をあまり含まないシルト質土に移化し、標高190m以上では砂礫層を欠如している。この砂礫層は下位のⅡb面形成時の氾濫による河床礫と推測され、Ⅱa面の浸食面に堆積したと考えられる。また、検出された埋没谷は同時期の氾濫原内を流れる谷状凹地の可能性がある。

一方、山地斜面寄りでは標高190～195mとやや勾配のある傾斜地であり、地表水により運搬されたシルト岩の円礫(径5cm大以下)や破片が多量に包含する黄褐色シルト質土層が第IV層として堆積している。標高200～205m付近は地すべり末端にみられる、地すべり堆の押し出しによる凸状の平坦面となっていて、段丘面との境界部が比高2～5mの急傾斜面となっている。鬼川辺(3)遺跡ではこの凸状の平坦面から繩文時代中期の竪穴住居跡が検出されている。鬼川辺(1)遺跡調査区ではその北端部に比高3m以上もある長楕円形をなすマウンド状の地すべり堆があり、西方の山地斜面の途中にも弧状の滑落崖と凸状の地すべり堆が観察できる。地すべり堆が段丘面上に押し出されていることから、渡部・八木(1994)が指摘するように渴水期に形成された初生地すべり地形と推測される。

次に、鬼川辺(1)・(2)・(3)遺跡調査区内の基本層序については鬼川辺(2)遺跡のメインセクションでの土層(図7)をもとに記述し、鬼川辺(1)遺跡のトレーナー30・35での特徴も付加する(図6)。なお、鬼川辺(1)・(2)遺跡調査区内は橋脚設置等のために部分的に基本層序第Ⅱ～Ⅲ層までは擾乱されており、下位の遺構確認面、第IV層を地山として発掘調査を実施した。

I層 黒褐色土(10YR2/3) 表土。下位のⅠb層は粘性・湿性に欠け締まりなく脆い。全体的にシルト質である。山地斜面側はシルト岩の細礫や破片を多く含み、本流側は円礫を多く含む。

なお、Ⅰa層は橋脚設置及び畑地整備による盛り土であり、下位層を擾乱している。

II層 黒褐色腐植質土(10YR3/2) 粘性・湿性が多少あり、全体的にシルト質であるがやや締まりもみられる。トレーナー30・35では炭化粒を含み、また最大10cm大の円礫を包含することが多く、暗褐色(10YR3/3)のシルト質土となっている。

III層 褐色土(10YR4/6) 下位のIV層の風化再堆積層であって、IV層との境界は不明瞭である。山地斜面側ではシルト岩の細礫・破片を多量に含むシルト質土であるが、本流側の平坦面では細粒砂混じりのシルト土で円礫の含有量が多い。また全体的にシルト質である。

IV層 黄褐色シルト(10YR5/8) メインセクションの1～4層では酸化の染みのある塊状のシルト質土であるが、場所によって土相が大きく変化する。本流側の平坦面では中粒～粗粒砂を基質とする径10～50cm大の円礫を多量に包含する砂礫層であるが、高度を増すにつれて円礫をあまり含まないシルト質土に移化している。山地斜面寄りではシルト岩の細礫・破片を多量に包含する黄褐色シ

ルト質土層となっている。

V層 灰白色砂泥互層 (2.5YR7/1) 灰白色泥・シルトと浅黄色砂とが互層をなし、全体として薄成層している。砂層部分には酸化の染みがみられ、円礫（径10cm大以下）が多少混入し、下部ほどシルト岩を含め礫の混入も多くなる。6～7層は灰白色粘土で、シルト岩の細礫、破片が多少包含されている。なお、5層は風化帯で、乾くとクラックが発達する。8～12層は中粒砂と砂質シルトの互層をなし、砂層中にはシルト岩の細礫・破片が多く含まれる。最下部の13層は酸化の染みのある砂礫層で、円～亜円礫の花こう閃綠岩、凝灰岩、シルト岩（最大20cm大）等を多く含んでいる。6～12層は段丘構成層中の上部層に相当し、13層は中部層中の砂礫層に相当すると考えられる。なお、巻頭図版1：上から判読できるように、遺跡周辺での段丘構成層の厚さは2～3mと推定され、13層の下位には中部層の中粒～粗粒砂、下部層の砂礫層が堆積していると考えられる。

最後に、鬼川辺(3)遺跡調査区を流れる小谷内の土層について述べたい。セクションは図8に示した。小谷は約1.5mの深さがあり、埋積層下部にはシルト岩の細礫や破片が多量に含んだ暗灰色シルト質粘土が50cm以上と厚く堆積している。このシルト質粘土は基本層序第IV層に相当し、地すべり堆の再堆積層と考えられる。第IV層の上位には第I～III層相当層の黒色泥層が堆積し、各層間にはシルト岩の細礫や破片の密集する黒褐色砂質泥層が堆積している。第I～II層間には酸化した黒褐色細粒砂質泥層、第II～III層間にはシルト岩の細礫や破片の密集する黒褐色泥質砂層、第III～IV層間には暗灰色のシルト岩の細礫や破片の密集層が確認できた。この小谷は、地すべり堆末端部にみられる亀裂がその後の浸食作用で谷状地形と化し、供給された土砂によって堆積されたと考えられる。

引用・参考文献

- 中山英二・八木浩司（1987）最終氷期における飯豊山地および朝日山地周辺の堆積段丘、東北地理39、
豊島正幸（1994）わが国における最終氷期後半の広域的な侵食段丘の形成、季刊地理学46、
渡部寿郎・八木浩司（1994）白神山地東部・湯ノ沢川上流域におけるテフロクロノロジーからみた最
終氷期の地すべり地形発達、季刊地理学55、
鈴木隆介（2000）建設技術者のための地形図読図入門、第3巻、段丘・丘陵・山地、古今書院、
箕浦幸治・小菅正裕・柴 正敏・根本直樹・山口義伸（1998）青森県の地質、青森県、
水野 裕・堀田報誠（2003）土地分類基本調査（5万分の1）、地形分類図「川原平」、青森県、
鎌田耕太郎・根本直樹（2004）土地分類基本調査（5万分の1）、表層地質図「川原平」、青森県、
副田宣男・宮内崇裕（2007）変動地形と断層モデルからみた出羽丘陵の第四紀後期隆起過程と上部地
殻の短縮変形、第四紀研究46、83-102、
青森県（2001）青森県史 自然編 地学、
中村朝日（2008）白神山地岩木川上流部における地すべり地形の分布と変遷過程、弘前大学大学院農
学生命科学研究室地域環境科学専攻、平成20年修士論文、



図3 津軽ダム周辺の空中写真

(提供: 津軽ダム工事事務所・同所ホームページ「津軽ダム建設事業における環境保全への取り組み(津軽ダム環境レポート)」要覧版より転載)

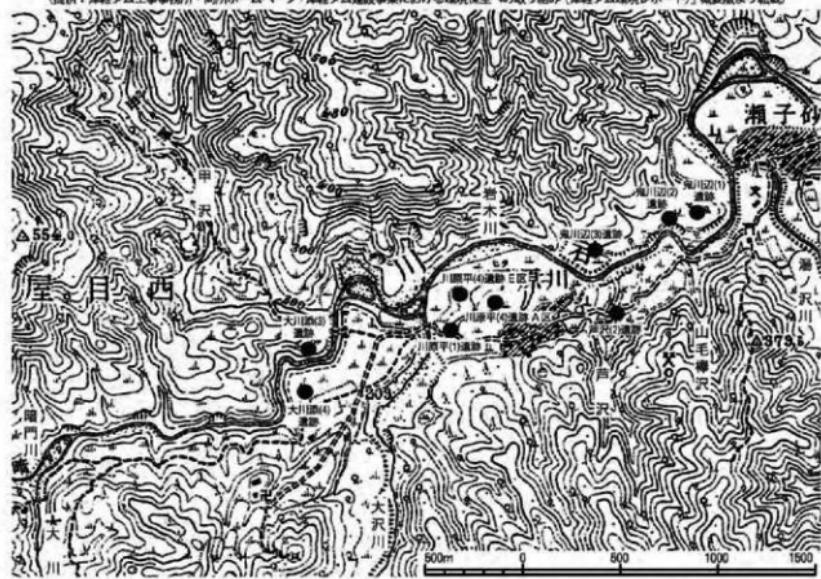


図4 遺跡周辺の地形図 (大正6年発行の5万分の1地形図「川原平」を拡大して複写)

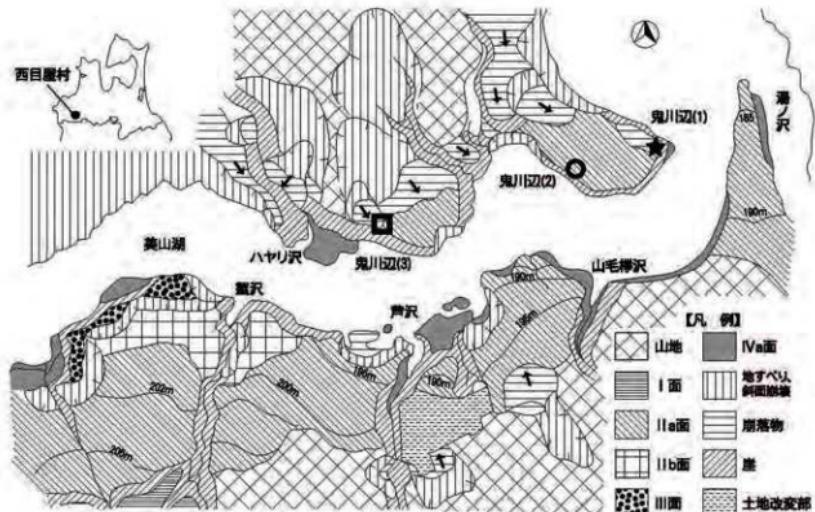


図5 遺跡周辺の地形分類図

トレンチ30 (〔〕は試掘調査時(青森県教委2011)の表記)

Ia	〔I〕 喀褐色 10YR5/3 盛土
Ib	〔II〕 喀褐色 10YR5/3 しまりあり
II	〔III〕 黒褐色 10YR3/2 柔らかい
III	〔IV〕 喀褐色 10YR3/4 清透層
IV	〔V〕 黄褐色 10YR5/6 小礫 (ϕ -30mm) 多量混入

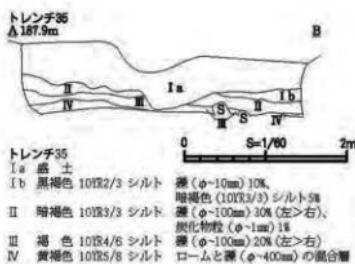


図6 鬼川辺(1)遺跡基本層序



図7 鬼川辺(2)遺跡基本層序

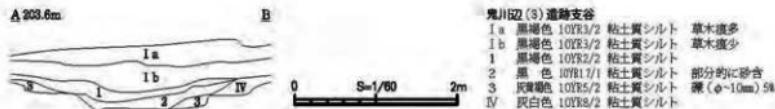


図8 鬼川辺(3)遺跡基本層序

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

美山湖周辺には、18箇所以上の遺跡が分布する（図1）。遺跡立地の内訳を見ると、美山湖右岸では河成段丘の発達により集落形成に適した平坦面が広がることもあり、美山湖に面する緑辺部を中心にして14遺跡存在する。一方、美山湖左岸は鬼川辺(1)・(2)・(3)遺跡と、同一段丘面上に位置する大川添(3)遺跡の4遺跡となっている。これは美山湖左岸に地すべり地形で急崖が多く、平坦面が少なく狭小であることが影響していると考えられる。

鬼川辺(1)・(2)・(3)遺跡周辺の遺跡を段丘面別にみると、同一段丘面上に立地するのが、鬼川辺(1)遺跡の対岸に位置する砂子瀬遺跡。鬼川辺(2)遺跡の対岸に位置する芦沢(1)遺跡、鬼川辺(3)遺跡の対岸に位置する芦沢(2)遺跡である。砂子瀬遺跡は縄文時代後期後葉の構築と考えられるものを含む掘立柱建物跡が環状に巡る構造を確認している。他に竪穴住居跡や土坑、土器埋設遺構、焼土遺構、配石遺構を検出した他、縄文時代前期～晩期の遺物が出土しており、主体は縄文時代後期前葉となっていている。（青森県教委2009・2010・2012・2014予定）。また、砂子瀬遺跡の東側、湯ノ沢川の対岸に水上(1)遺跡（旧水上遺跡）が存在し、鬼川辺(1)遺跡及び鬼川辺(2)遺跡から一望することができる。土坑、焼土遺構、配石遺構、道路の他、縄文時代中期と縄文時代後期後葉～晩期初頭の遺物が出土している（青森県教委2006・2008）。芦沢(1)遺跡では遺構は検出できなかったが、縄文時代中期中葉、後期前葉、後期後葉の遺物が出土している（青森県教委2011）。芦沢(2)遺跡では縄文時代後期の竪穴住居跡や縄文時代中期中葉～後葉の土坑が段丘縁辺部を中心に構築されており、縄文時代中期～晩期の遺物が出土している（青森県教委2014予定）。

鬼川辺(1)・(2)・(3)遺跡より下位の段丘面上に位置するのは、鬼川辺(1)遺跡の東側に位置する水上(2)遺跡、砂子瀬村元遺跡、鬼川辺(3)遺跡の西側に位置する川原平(6)遺跡である。水上(2)遺跡及び砂子瀬村元遺跡との直線距離は短く、鬼川辺(1)遺跡の段丘縁辺部に立つと各遺跡を一望することができる。しかし、鬼川辺(1)遺跡の東側縁辺部は美山湖と垂直に切り立つ急崖で接しており、河川からの比高差は約7mある。また美山湖と湯ノ沢川の合流地点となっていることから、鬼川辺(1)遺跡から水上(2)遺跡への直線的な移動は困難であったと考えられる。一方、前述した砂子瀬遺跡に面する南西側には、段丘端部から若干緩やかな傾斜部分が存在し、崖も河川からの比高差が他と比べ少なくなっている（図2）。鬼川辺(2)遺跡につながる西側は再び急崖になることから、遺跡周辺では河川への往来可能な数少ない箇所となっている。但し、対岸の砂子瀬遺跡側は急崖となっており、対岸との直線的な往来は容易ではなかったと想定される。

縄文時代以降の調査事例については、大川添(3)遺跡で古代の竪穴住居跡を検出している他（青森県教委2014予定）、川原平(4)遺跡A区で製炭土坑と考えられる土坑から出土した炭化材の放射性炭素年代測定の結果、中世から近世の年代が得られている（青森県教委2013）。

(浅田)

第3章 鬼川辺(1)遺跡の検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構

(1) 土坑【SK】(図10)

土坑は11基検出した。これらを平面形や堆積状況など、諸特徴を基にⅠ～Ⅲ群に分類した。

Ⅰ群：第7・8・10・11号土坑は、堆積土が単層から2層と単純な様相を示すが、底面付近に細かく碎けた炭化物粒や炭化材を多く混入し、壁面や底面の一部に僅かな被熱痕を有する共通点を持つ。検出面はⅡ層上面で1基、Ⅳ層上面で3基となっている。検出面からの掘り込みはいずれも深くなく、7～22cmを測る。平面形は第7・10号が隅丸方形、第8・11号が不整円形となっており、大きく二分できる。平面分布を見ると調査区内に広く散らばっており、それぞれが約30～40mの間隔をあけて存在する。いずれも時期比定可能な出土遺物は確認できなかった。出土した炭化材を用いて放射性炭素年代測定を行った結果、IntCal09データベースを用いた暦年較正年代(1σ)で第7号が1278～1294calAD(68.2%)、第10号が1481～1522calAD(35.2%)、第8号が1731～1777calAD(38.8%)、第11号が1735～1777calAD(44.8%)との結果を得た(第6章第1節参照)。また、出土炭化材の一部を樹種同定した結果、第7号でアサダが1点同定された以外は全てクリとの結果を得た(第6章第2節参照)。本群の類例として、美山湖右岸に位置する川原平(4)遺跡A区の第31号土坑と第36号土坑を挙げることができる。平面形は、第31号が隅丸方形、第36号が橢円形を呈する。出土炭化材の放射性炭素年代測定を2点ずつ行った結果、第31号土坑が1645calAD～1659calAD(68.2%)と1783calAD～1797calAD(47.9%)でいずれも近世との結果が出ている。また、第36号土坑は1454calAD～1490calAD(58.1%)と1480calAD～1521calAD(38.9%)で中世～近世との結果が出ている。これらは炭窯としての用途が推定されている(青森県教委2013)。

上記の諸特徴や年代等から、本群は伏焼式の製炭土坑と捉えることができる(窯跡研究会1997)。また、放射性炭素年代測定の結果からは、調査区内において中世から近世にかけて断続的に構築されるが、第8・11号は近接した時期に機能していた可能性が指摘できる。

Ⅱ群：第1～6号土坑は、平面分布で調査区東側の段丘縁辺に謹まりを見せる。確認面はⅡ層上面が多く、一部Ⅲ層上面となっている。平面形は隅丸方形か不整円形を呈し、上述した製炭土坑と類似するが、規模を比較するとより小型で、壁面等の焼け込みは確認できず、最も特徴的な炭化物の混入も少ない相違点がある。掘り込みは浅く、堆積土は単層で自然流入の様相を呈するものが多い。その中で第3号のみ3層に分層できた。いずれも礫の混入が目立つ。これは周囲のⅢ層からⅣ層にかけて礫層となっていることから、掘り上げ土に含まれた礫が再流入したものと思われる。出土遺物は剥片石器が第3号土坑堆積土から1点のみであり、堆積土流入時に混入した可能性がある。時期比定の材料に乏しく、縄文時代以降の構築と捉えておきたい。

Ⅲ群：第9号土坑は、調査区中央のマウンド斜面で検出した。長径が309cm、深さ76cmと最も大きな掘り込みを持つ。底面に掘方の凹凸を調整するような貼床を確認したことから、意図的な掘り込みであると判断した。堆積土は自然流入の様相を呈する。出土遺物や炭化物などは確認できなかったため、時期比定に関する情報は得られなかった。

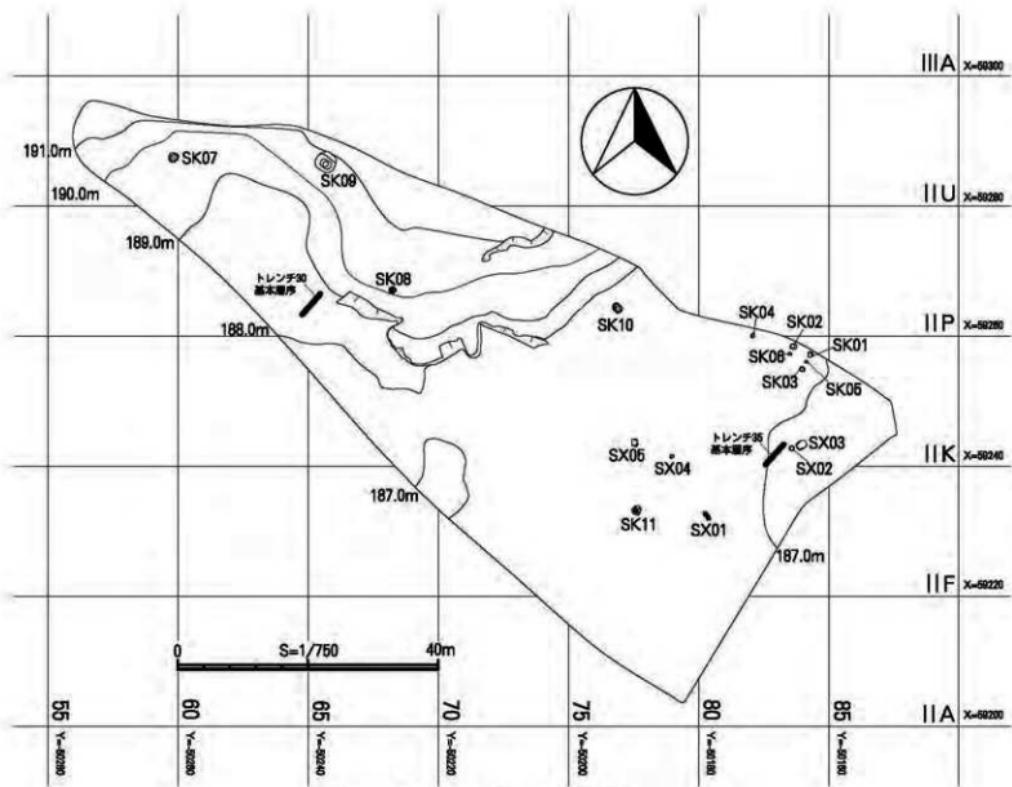


図9 鬼川辺(1)遺跡 遺構配置図

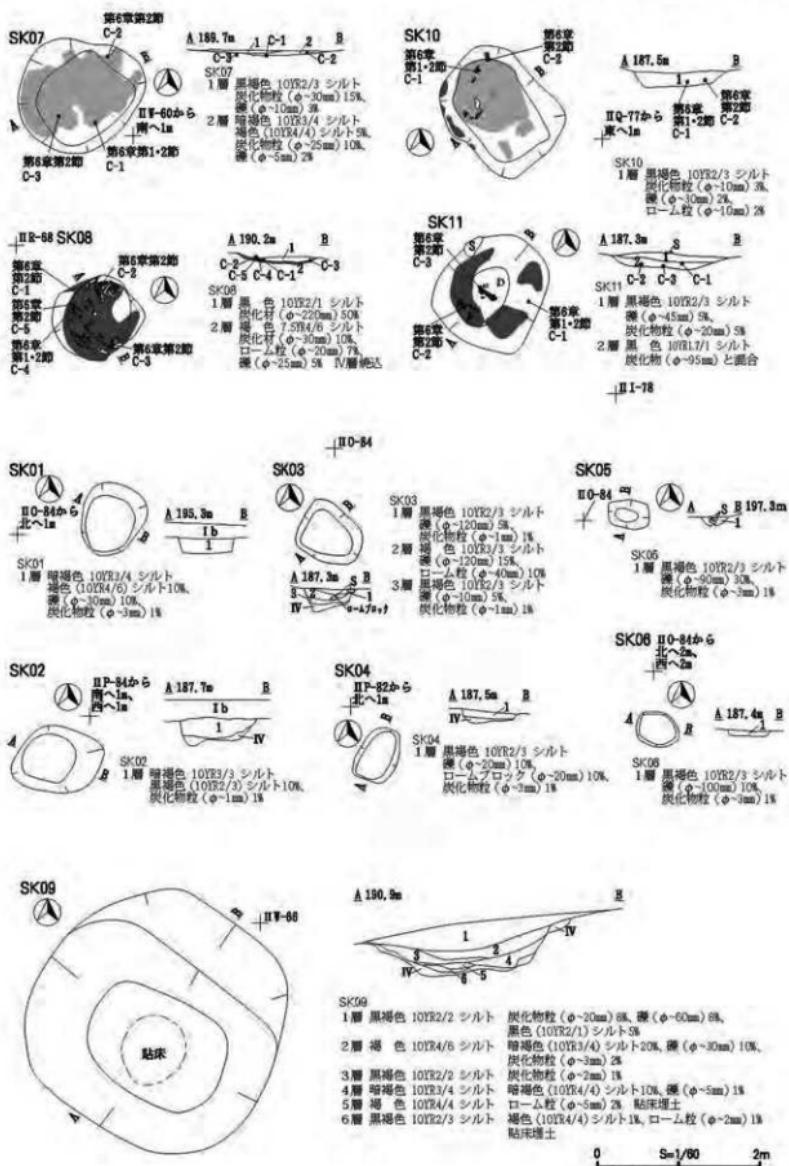


図10 鬼川辺(1)遺跡 土坑

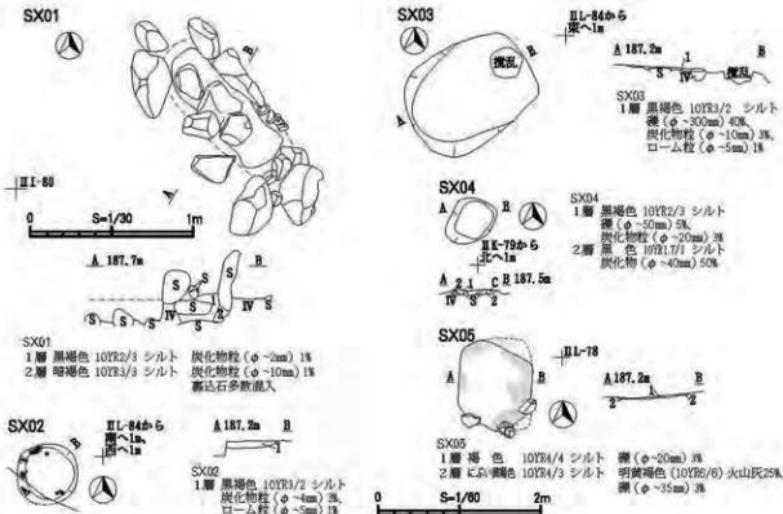


図11 鬼川辺(1)遺跡 性格不明遺構

(2) 性格不明遺構 [SX] (図11)

5基検出した。第1号は、調査区南側の段丘縁辺部に展開する疊層の範囲内にあり、周囲よりわずかに高くなっている微高地に位置する。調査時に直立する板状の疊を1点確認し、その南西側に黒褐色土が分布することを確認した。遺構の一部が削平されている。平面形は残存値で長軸が160cm、短軸が70cmの長方形を呈するものと思われる。IV層を掘り込んでおり、底面には平坦面を持つ疊が並んでいるように見えるが、一部がIV層に入り込んでいることから、掘り込んだ際に出土した自然堆積の疊をそのまま利用していると判断した。堆積土は直立する疊の下部で2層の暗褐色シルトを確認した。裏込に使用されたと考えられる小疊を多く含んでおり、石を立てる際に固定する目的で詰められたものと捉えることができる。また窪地を埋める1層の黒褐色土は混入物が少なく、自然流入の様相を示す。出土遺物は1層から疊石器が1点と剥片が1点のみであるが、遺構周辺は御文時代後期後葉の遺物分布範囲となっており、関連性は高いものと考える。平面形や直立する板状の疊からは、配石遺構や石棺墓である可能性が挙げられるが、直立する疊が1点のみであり、明確に掘り込みを取り囲んでいた痕跡が確認できなかったことから、可能性の指摘に留めておきたい。

第2～4号は平面形が隅丸方形を呈し、確認面からの掘り込みが浅い共通点を持つ。また、炭化物が堆積土に混入する点は上述した製炭土坑と類似するが、壁面や底面の被熱が確認できない点で異なる。この要因として、上部の削平に伴い失われた可能性が挙げられる。

第5号は明黄褐色の火山灰範囲として確認した。確認面からの掘り込みは非常に浅く、自然の窪みである可能性もあるが、火山灰の分布状況から、平面形が隅丸方形を呈すると捉えることができたこ

とから遺構として取り扱った。堆積した火山灰は土壤との混在が進んでおり、二次堆積の様相を呈する。火山灰の起源については、肉眼観察の所見として平安時代の降下火山灰である白頭山－苦小牧火山灰（以下B-Tm）の可能性を挙げることができる。本遺跡内においては基本層序中でB-Tmは検出していないが、美山湖対岸に位置する水上(2)遺跡では、基本層序Ⅱa層でB-Tmを検出している（青森県教委2013）。このため第5号はB-Tm降下以前に構築された可能性が高いと推測する。（浅田）

第2節 出土遺物

(1) 繩文土器（図12～14）

縩文土器は総数1581点、13367g出土した。掲載土器は全て遺構外からの出土である。器形や文様等よりⅠ～Ⅳ群に分類した。さらに細分可能なものは群別に基準を提示した。

Ⅰ群：横方向に細い隆起線文を巡らす特徴を有する一群である。総数4点出土した。内訳はⅡ L-84グリッドから1点、Ⅱ L-85グリッドから1点、Ⅱ M-85グリッドから2点と、相互に隣接するグリッドから出土している。層位はいずれもⅡ層で、後述する他時期の縩文土器と同一である。4点の内、口縁部と思われる1点は磨滅が著しく図化に耐えられないため、3点を図示した（図12-1～3）。図12-1は口縁部、図12-2は胴部、図12-3は胴部下半で、底部に向かって窄まる湾曲が確認できる。諸特徴が共通することから、いずれも同一個体と考えられる。遺物の取り上げは他の遺物と同様にグリッド内層位一括取り上げを行っている。

諸特徴から本群は草創期の隆起線文土器に比定できる。いずれも破片資料で接合しないため、器形の全体像は不明であるが、類例として六ヶ所村発茶沢(1)遺跡出土隆起線文土器（青森県教委1988）や表館(1)遺跡第1群土器（青森県教委1989）が挙げられる。特に表館(1)遺跡例は外反する口縁部から垂直に伸びる胴部を経て、尖底となる全体像が把握できる点で注目される。表館(1)遺跡と本群土器を比較すると、胴部は点数が少ないため、表館(1)遺跡のような長い胴部を伴うかは不明だが、胴下半部の屈曲度合や隆起線が胴下部まで施される点では共通点が見られる。

製作技法を見ると、器壁は共通して4mm程と薄く、胎土には砂粒と共に光沢を持つ有色鉱物が特徴的に混入するが、八戸市鶴平(2)遺跡（青森県教委1983）出土の爪形文土器で特徴的に混入している金雲母は確認できなかった。また鐵錐等の特徴的な混入物も確認できなかった。焼成は比較的良好で、脆さは感じられない。器表面の発色は、にぶい黄橙色(10YR6/4)周辺と明るいが、図12-2の断面観察の結果、器表面から1mm程の明るい発色部分が剥離するような部分があり、化粧土が施されていた可能性がある。断面から内面にかけては煤状の黒色物質吸着によると考えられる黒化が顕著である。このため内面の明瞭な調整痕は確認できないが、いずれもミガキに近いナデ調整と判断した。また図12-3では凹凸の様子から指頭圧痕がそのまま残存している部分が観察できる。図12-1では特に多くの炭化物の付着を確認できた。この一部を探取し放射性炭素年代測定を行った結果、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行った ^{14}C 年代は12610±30yrBP、IntCal09データベースを用いた暦年較正年代（1σ）で13158calBC～12842calBC (63.5%)との結果を得た（第6章第1節参照）。また、IntCal13データベースを用いた暦年較正年代（1σ）では、13168calBC～12963calBC (68.2%)となる。

本群を最も特徴づける隆起線一単位は、器表面に2～3mm幅の細い粘土紐を横方向に貼付することで構成している。器面定着のために両側縁からナデ付けており、結果として隆起線の高さは1mm程度

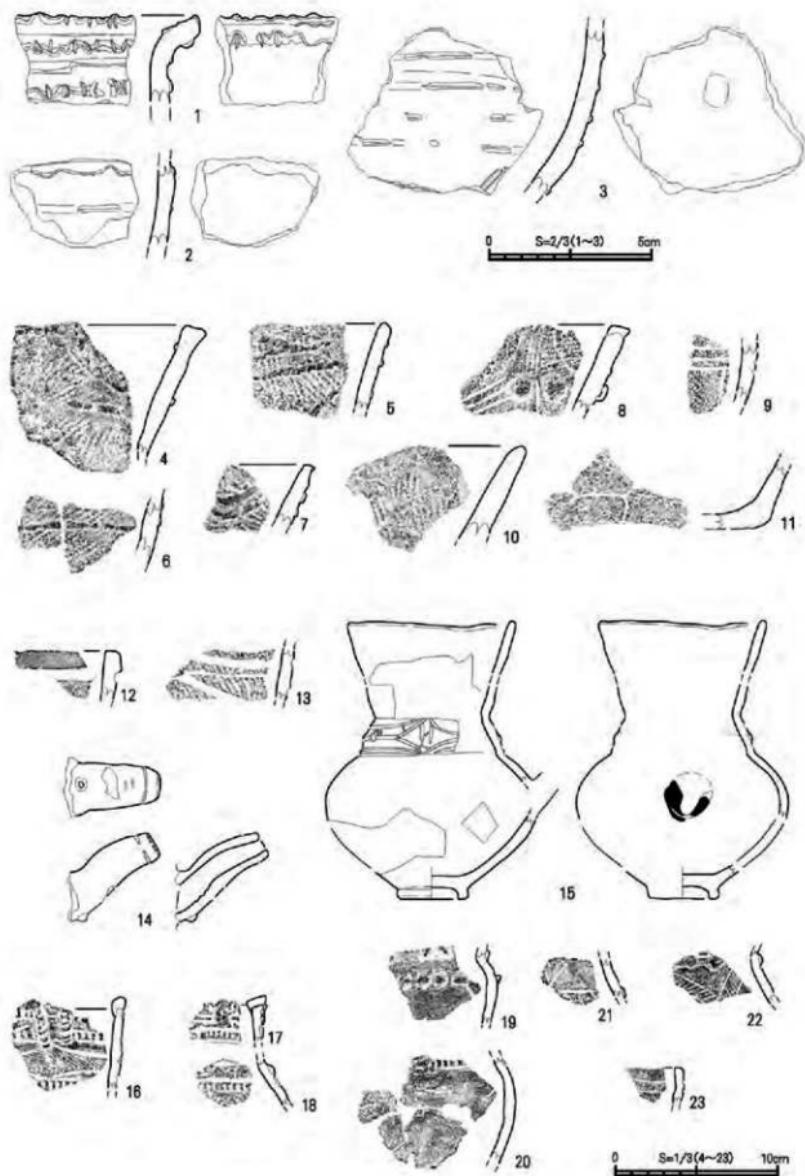


図12 鬼川辺(1)遺跡 繩文土器-1

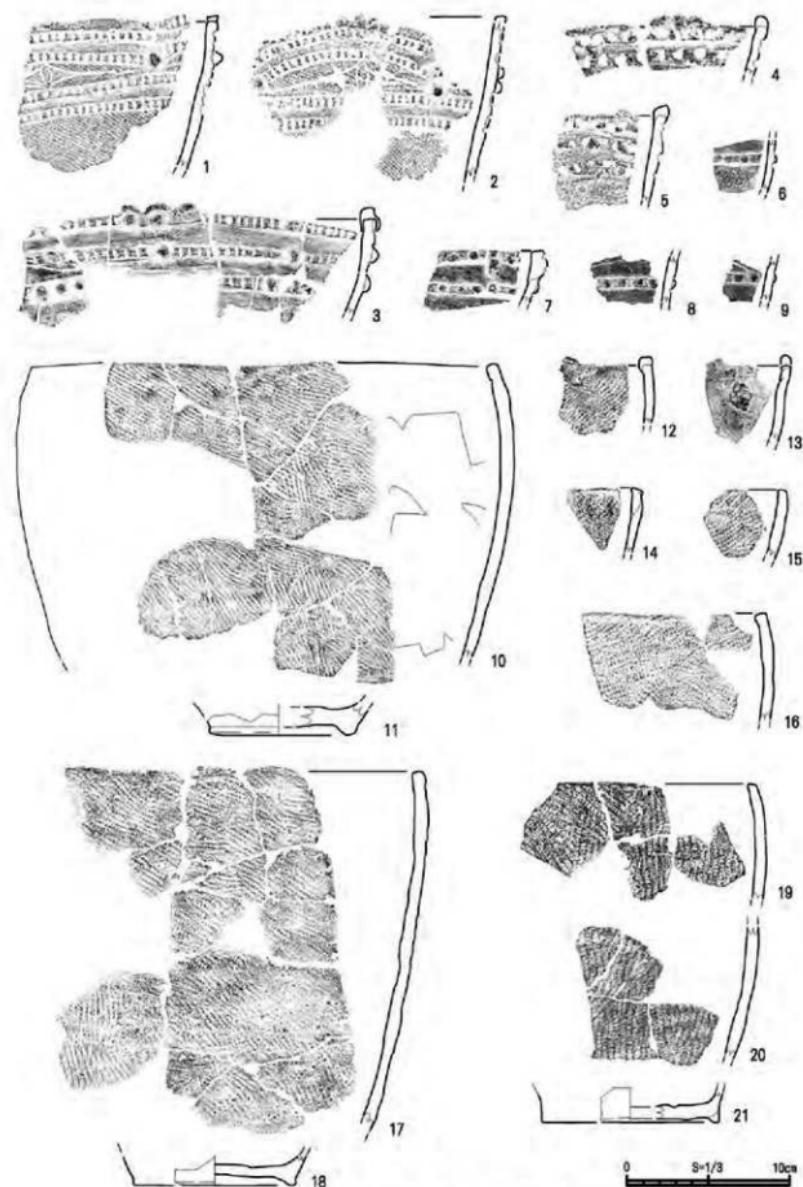


図13 鬼川辺(1)遺跡 繩文土器-2

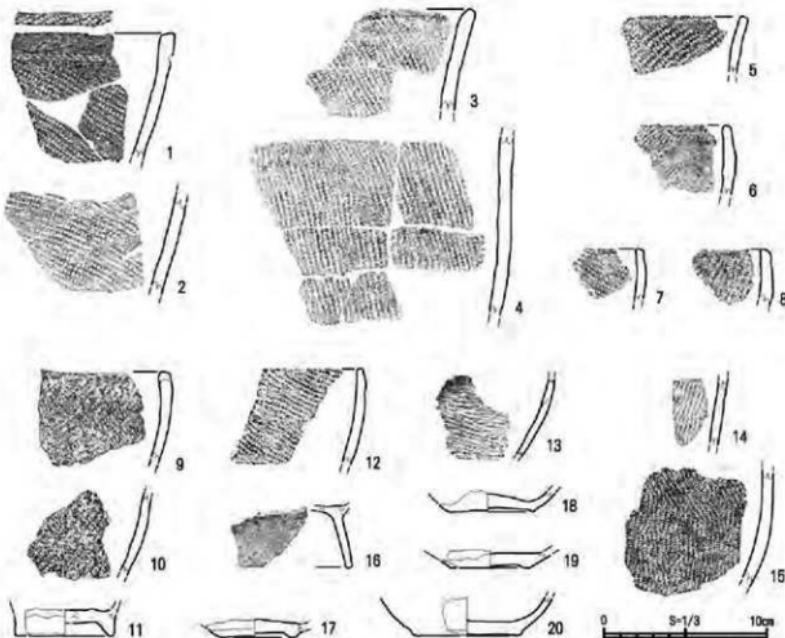


図14 鬼川辺(1)遺跡 縄文土器-3

になっている。このナデ付けに伴い、隆起線間には平行するナデ痕が部分的に残存する。隆起線が一部剥落により途切れているが、明確な貼付痕跡が確認できないことから、定着が不十分な箇所であつた可能性がある。上記の手法を用い、約1cm間隔で口唇部から胴部下半まで貼付を繰り返している。胴部に横走する隆起線は直線的な貼付けのままだが、口縁部である図12-1の口唇部と口唇直下では、指先の摘みによる捻りが「ハ」の字状に加えられている部分が存在する。その際に爪先が食い込んでいたと考えられる、縦方向の短く鋭利な傷が観察できる。また、口縁部内側にも隆起線が1条巡っていることが確認できる。

次に部位毎の諸特徴を記載する。図12-1は口縁部で強く外反する。断面観察から、器壁を強く引き出すことで外反する口縁を作出しているものと思われる。外面は口唇頂部から屈曲する口縁部にかけて隆起線貼付が観察でき、屈曲部分の隆起線以外は指先の摘み出しによる捻りが加えられ、波状表現がなされている。小片であるため詳細な口径復元は困難であるが、口径復元値を平均すると約20cm前後になり、前述した表館(1)遺跡出土隆起線文土器の口径22cmと似た数値となる。しかし表館(1)遺跡と比べ、より外反の度合いが強く口縁の長さが短いこと、括れ部分の屈曲が明確なことが異なる点である。このことから表館(1)遺跡例より一回り小型になる可能性が挙げられる。図12-2は胴部

片で隆起線の残存が少なく、一部器表面の剥離が確認できる。図12-3は胴部下半で底部に向かって大きく湾曲する変化点となっている。湾曲する部分まで隆起線が確認できることから、表館(1)遺跡例のように、隆起線の施文範囲が胴部下半まで連続することを示している。また下部に斜方向の細い沈線が観察できる。沈線としたが、土器製作者が意図的に作出したものではなく、製作時に偶然ついた傷である可能性もある。

II群：器厚があり砂粒の目立つ胎土で、主に粘土紐貼付による隆線や沈線による文様施文が観察できる。中期の円筒上層式に比定できる。8点図示したが、いずれも破片資料で器形復元は困難である。出土位置は調査区中央に位置する地すべり堆の裾野にあたるII 0・P・Q-75・76グリッドから多く出土している。施文方法により以下のように細分した。

a類：地文繩文上に粘土紐貼付により弧状文を施文するもの。4点図示した(図12-4～7)。円筒上層d式に比定できる。

b類：沈線により文様施文するもの。図12-8・9が該当し、円筒上層e式に比定できる。図12-8は波状口縁の頂部で、瘤状の貼付が施され3本1単位の平行沈線で文様施文している。図12-9・10は特徴に乏しいため細分は不可能だが、胎土等の特徴から本群に含めた。

III群：地文繩文上に主に沈線で施文する一群で、後期に比定できる。施文方法により以下のように細分した。

a類：太めの棒状工具で幅広い沈線が施される。2点図示した。II L-81・82グリッドのII層から出土している。図12-12は口唇部に平坦面が作出され、断面形が角状になる。いずれも後期初頭に比定できる。

b類：沈線や磨消繩文、刻目列の他、器表面に小さい粘土粒を貼り付け、瘤状突起を作出する。当遺跡出土土器の主体を成す一群である。19点図示した。出土位置は、第1号性格不明遺構と段丘縁辺の間にあたるII G・H-80～82グリッド周辺に大きな纏まりがあり、他にもII K・L-82・83グリッド周辺とII M-78グリッド周辺にも小規模な纏まりが確認できる。II群が出土した調査区中央の地すべり堆周縁での出土は無く、美山湖に面した調査区南東側の段丘縁辺を中心広がっていることがわかる。この範囲は基本層序IV層に亜円碟を多量に混入する範囲とほぼ重なっている。遺存状況は良好ではなく、器形の復元が可能なものは少ない。器形が明確なものとして、図12-15の注口土器が挙げられる。大きく外傾する口縁を持ち、口唇部にやや平坦面を持つ平口縁である。頸部には唯一の文様帶として沈線と貼瘤が施される。貼瘤を起点に弧線文を施文し、沈線間に繩文施文が僅かに確認できる。繩文を意図的に磨り消した痕跡は確認できず、製作者が繩文施文自体を積極的に行わなかった可能性が高い。大きく膨らむ胴部は無文で、底部は直立する高台が作出される。注口部は欠損し失われている。注口部の破損面にはアスファルトと思われる黒色物質の付着が観察できる。このため製作後、破損した注口部を復元しようとしていたことが窺える。法量は口径10.3cm、器高17.1cm、底径4.0cmを測る。図12-14は唯一出土した注口部だが、基部に黒色物質の付着は確認できなかった。基部下端に小型の貼瘤が1ヶ所確認でき、体部は若干反る形で、注口部先端には沈線が1条巡る。図12-16～23は器形が壺か注口土器になるもので、横走する平行沈線間に直交する刻目列が施文され、弧状沈線の交点に瘤状突起が付くもの(図12-16～18、図13-1～3)や、刻目の代わりに連続する刺突列が施文されるもの(図13-4・5)や、瘤状突起が連続して貼付されるもの(図13-6～9)が見られる。図13-

1・2に見られる文様モチーフは図12-15の注口土器と類似する。本類は諸特徴から、後期末葉に位置付けられる。

IV群：地文縄文のみで構成するものを取りまとめ、32点図示した。中期後葉～後期にかけての粗製土器に比定できる。器種は深鉢が主体で、台付が含まれる。図14-1は口唇部を平坦に作出し、縄文を回転施文している。口縁部下には横方向の燃糸圧痕で区画し、その下位に縄文を回転施文している。器厚があり、焼成が良好で堅密に仕上がっており、III群a類に類似する。図14-3は緩やかに外反する口縁部を持ち、図14-4のように僅かに膨らむ胴部を伴う器形を呈すると考えられることから、縄文時代中期末葉～後期初頭の粗製土器である可能性が挙げられる。他は口縁部が内湾するもの多く（図13-10・16・17・19、図14-6～9・12）、底部も高台が付くものが目立つ（図13-11・18・21、図14-11・17～20）。図13-10・11は口縁に山形の突起が伴う。出土位置もIII群b類と共通性が見られる。

（浅田）

（2）石器（図15～18）

剥片石器は総数94点、1340.5 g 出土し、その内33点、451.9 g を図示した。また礫石器は総数29点、15879.2 g 出土し、その内12点、6053.8 g を図示した。

石器は帰属時期が明確でないものが多いため、時期毎の区分は行わずに図示したが、出土土器から類推すると縄文時代草創期から後期までのものが含まれているものと考えられる。

剥片石器の器種は、槍先形尖頭器、石鎚、石錐、両面加工石器、石箒、石匙、不定形の削器・搔器を確認した。出土点数は槍先形尖頭器12点、石鎚11点、石錐4点、両面加工石器2点、石箒2点、石匙10点、不定形の削器・搔器が53点である。石質は、図16-5の石鎚に玉髓質珪質頁岩が用いられている他は全て珪質頁岩である。また、剥片石器の実測図表現について、原礫面は濃いドット、二重バティナと判断した部分は薄いドットで表現している。

礫石器の器種は、敲磨器、磨製石斧を確認した。出土点数は敲磨器が27点、磨製石斧が2点である。敲磨器にはいわゆる敲き石、磨り石、凹石が該当するが、使用痕が複合して確認できるものが存在するため、敲磨器という総称を使用した。敲磨器の石質と点数は、凝灰岩が8点、デイサイト7点、安山岩6点、粗粒玄武岩6点である。一方、磨製石斧の石質は閃綠岩と緑色岩である。

遺構内出土石器は、出土した3点中、2点図示した。第3号土坑の2層から出土した削器1点（図15-1）と、第1号性格不明遺構の1層から出土した敲磨器1点（図15-2）である。図15-1は片面の一側縁に調整剝離を施している。図15-2は両面に敲き痕がみられ、片面に黒色物質が少量付着する。

遺構外出土石器の出土分布は、調査区北側ではほとんど見られず、調査区南側に偏っている。その内、槍先形尖頭器は縄文時代草創期の隆起線文土器が出土した調査区東端部の周辺にまとまって出土している。一方、石鎚などその他の器種は大半が纏まりなく、調査区南半に散在する傾向がみられた。なお、出土分布については、第7章にも記載している。

槍先形尖頭器の分類については、青森県内で縄文時代草創期のものと推定される槍先型尖頭器が多く出土した、野辺地町明前（4）遺跡（野辺地町教委2003）の分類基準を参考にした。まず器体形状の短軸に対し長軸が3倍となる比率（短軸：長軸=1：3）を基準とし、長軸が小さいもの（短軸：長軸=1：3以下）を木葉形、長軸が大きいもの（短軸：長軸=1：3以上）を柳葉形とする。また、大きさについては10cm以上のものを大型、10cm以下を小型と分類し、すべて図示した。なお、出土し

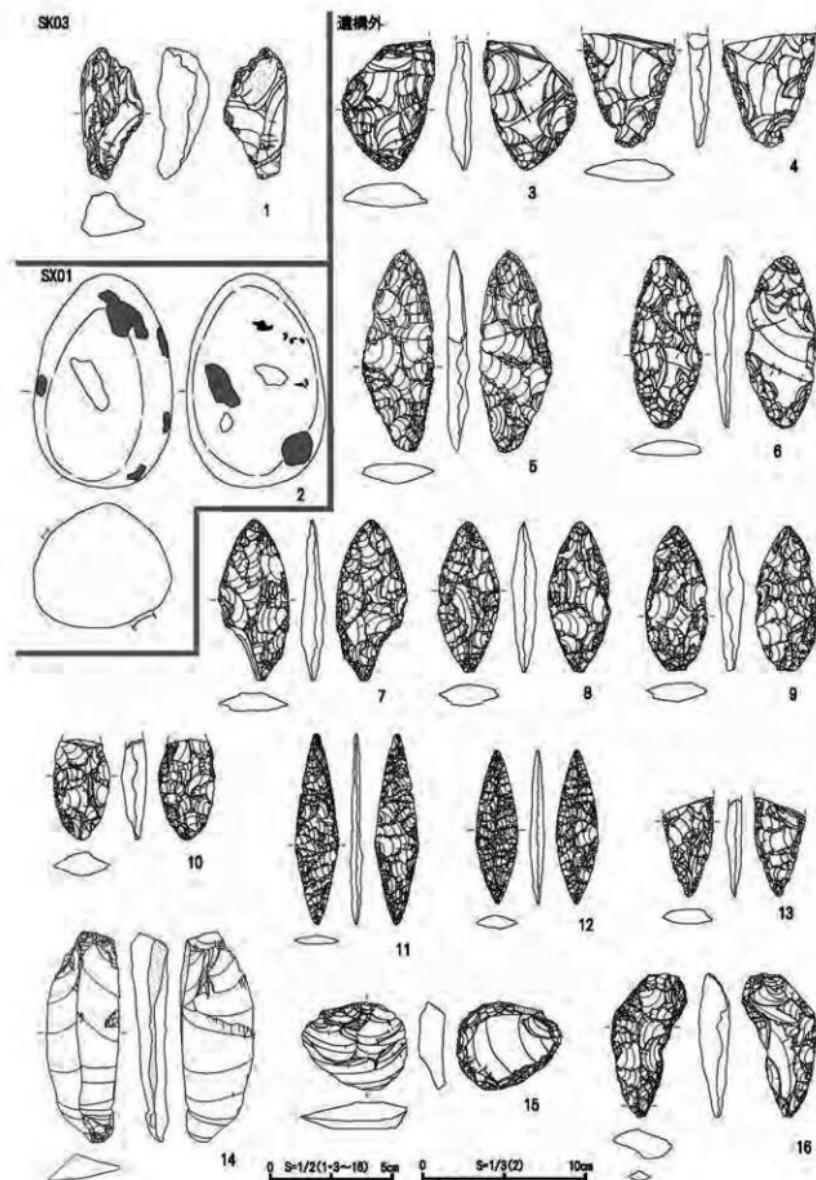


図15 鬼川辺(1)遺跡 石器-1

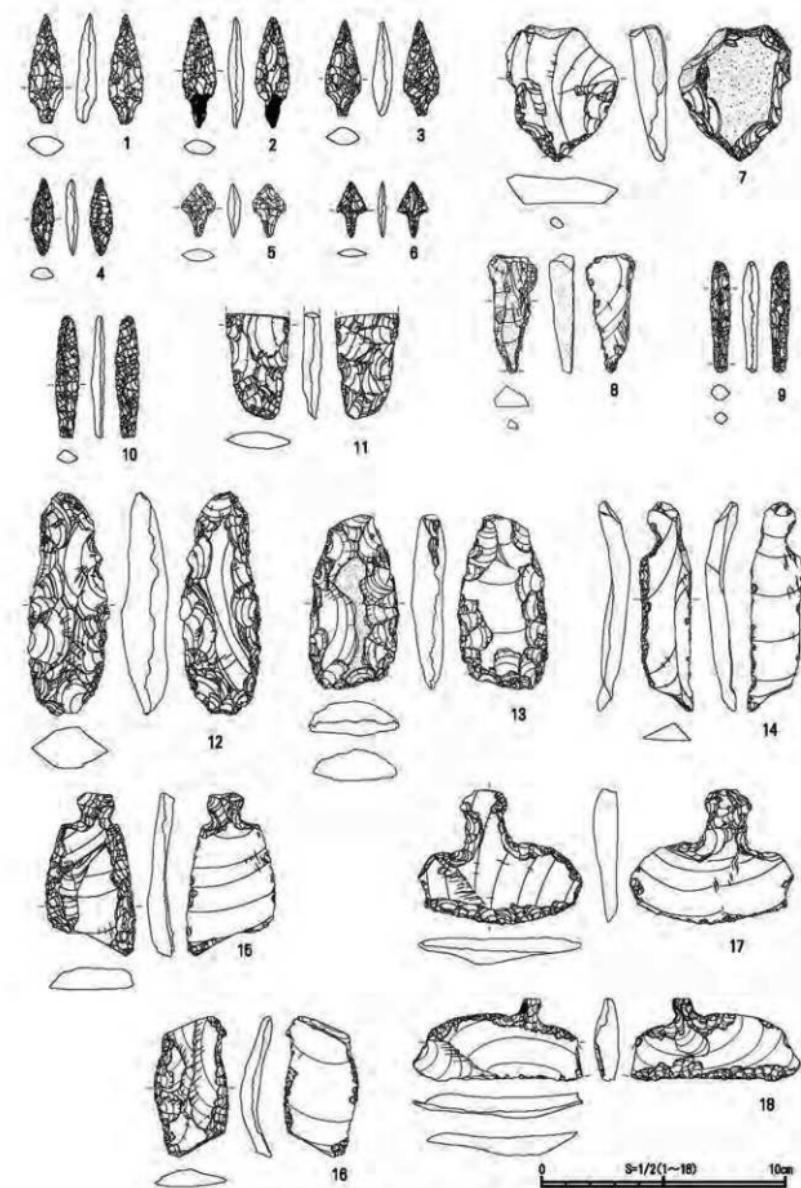


図16 鬼川辺(1)遺跡 石器-2

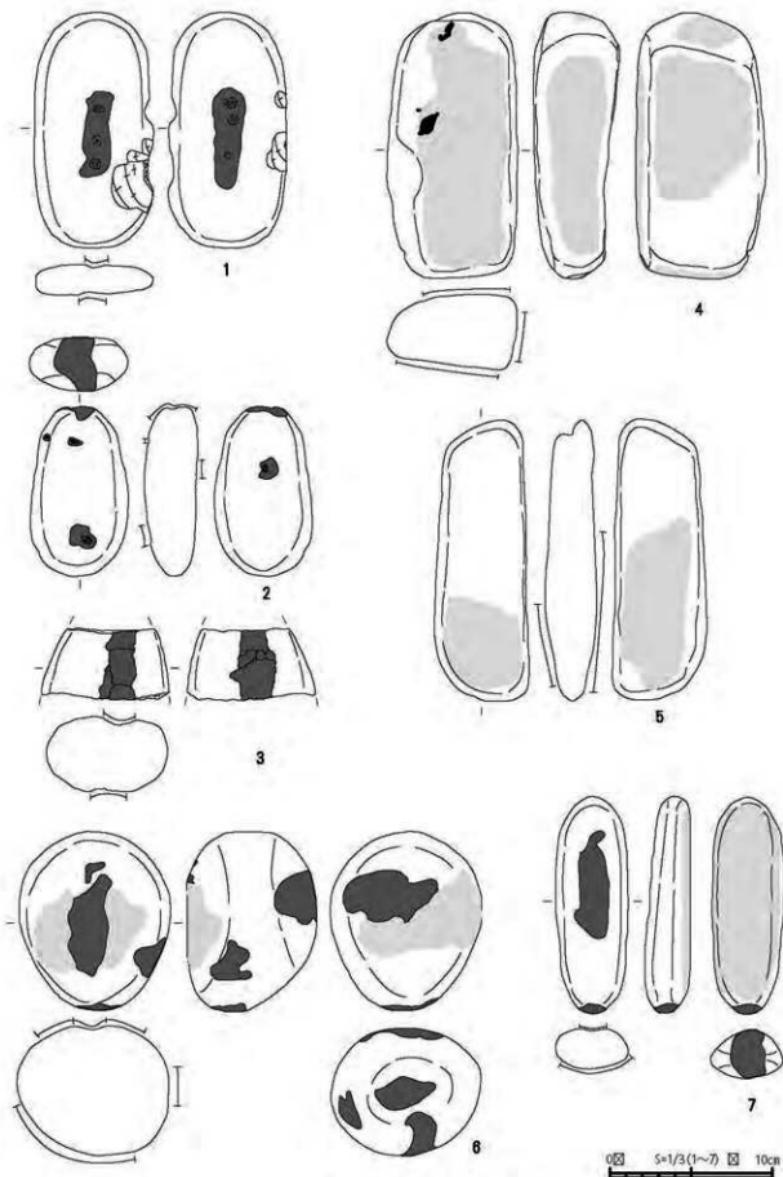


図17 鬼川辺(1)遺跡 石器-3

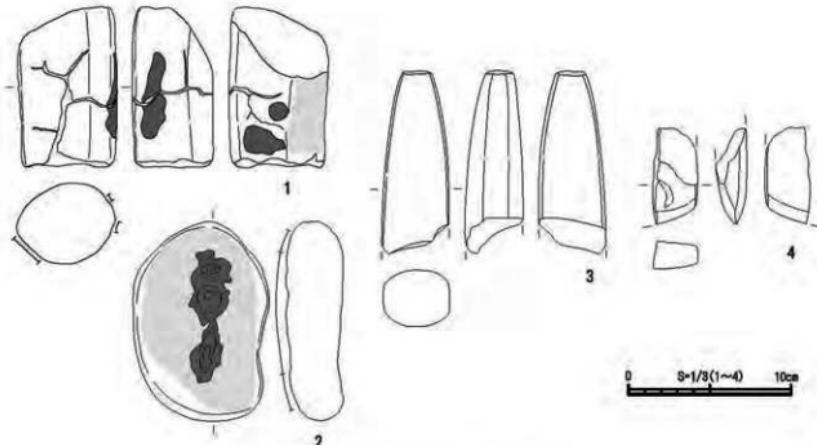


図18 鬼川辺(1)遺跡 石器-4

た12点すべて、基本層序Ⅱ層からの出土である。図15-3・4は基部と思われる破損品である。図15-3は残存長が5.3cm、図15-4は残存長が4.7cmを測り、鈍角な基部の形状と幅から木葉形で大型の器体と思われる。いずれも両面にある中軸線を越える大きな平坦剥離は、各々異なる側縁から施されているが、階段状の剥離があり、厚さを減じきていない。側縁は微細な調整剥離が施されている。図15-5は、ⅡL-84グリッドで出土した1点とⅡM-84グリッドで出土した1点とが接合したものである。長さ8.5cm、幅3.0cmを測り、器体のほぼ中央部に最大幅を有する木葉形で小型の器体である。両面ともに中軸線をこえる平坦で大きな剥離面を有し、その後の調整により階段状剥離も一部は残存するが、薄型に仕上げられている。また、両側縁に微細な剥離が施されている。図15-6～9は、短軸と長軸の比が1：3以下の木葉形で小型の器体である。ほぼ中央部に最大幅を有し、基部、尖頭部がやや鈍角である。これらはいずれも側縁からの調整剥離がほぼ中軸線上で交差している。また、側縁も微細剥離が入念に施されている。6は木葉形全体の中で最も風化の度合いが強く、銳利さに欠く。7は基部の折損後、片面に二次加工調整を施している。8は片面の中央付近にやや大きな階段状剥離が残存する。9は片面の中央付近に節理面が残存する。図15-10は基部と思われる破損品であり、残存長が4.1cmで、最大幅は残存し2.3cmである。鈍角な基部の形状と幅から木葉形で小型の器体ものと思われる。両面ともに階段状剥離が生じ、厚さを減じきていない箇所がある。両面の側縁に微細剥離を丁寧に施す縁と施していない縁があることから、未成品の可能性がある。また、石質も灰白色である。図15-11～13は短軸と長軸の比が1：3以上あり、長さが10cm以下で尖頭部、基部が鋭角な柳葉形で小型の槍先形尖頭器である。11は、側縁から中軸線をこえる平行な調整剥離を丹念に施し、階段状剥離も残らず、非常に薄く成形されている。また、尖頭部、基部を作出するための側縁の微細な調整剥離も丁寧に施されている。12は側縁からの調整剥離がほぼ中軸線上で交差しており、稜がみら

れるが、緩い角度の調整剥離を入念に施していることで薄く仕上げている。側縁の微細調整剥離は、11と同様に丁寧に施している。なお、この2点は石質が特に類似しており、11が若干風化している様子が観察できる。図15-13は基部と思われる破損品である。残存長が4.1cmであるが、幅は最大幅付近で破損しており、全体像は不明である。但し、折損の状況から残存幅が実測値の2.1cmを超えることは間違いない、柳葉形の大型品の可能性がある。片面は側縁から中軸線をこえる平坦な調整剥離を施し平坦な面を作出しているが、もう片面は側縁から中軸線までのやや鋭角な調整剥離であるため稜がある。また、階段状剥離もある。一方、側縁の微細剥離は丁寧に施している。出土地点、石器の特徴等から図15-3~13については、隆起線文土器に伴う可能性が高いと考えられる。

掻器は、特徴のある2点(図15-14・15)を図示した。図15-14は縦長剥片を作出する際のものと思われる微細な調整痕が先端部に観察できる。また、その反対側の先端部に急角度の調整剥離を施し、掻器としての機能を作出している。図15-15は片面の側縁全体に急角度で調整剥離を施す円形の掻器である。石質は珪質頁岩であるが、器体に微化石と思われる白い斑点状の物質が観察できるものである。なお、出土地点、石器の特徴等から隆起線文土器に伴うものである可能性が考えられる。

図15-16は、両面加工で片面側縁に微細な調整剥離を施し、一端に尖部を作出している削器である。石鑿は、凸基5点(図16-1~3・5・6)と尖基1点(図16-4)を図示した。1~3の平面形は二等辺三角形で、2は両面の茎部にアスファルトと思われる黒色物質が付着している。4は片面に急角度の調整剥離を施し、小型ではあるが厚みがある。5・6の平面形は正三角形で、小型である。石錐は、3点を図示した(図16-7~9)。7・8は不定形な剥片の一端に両端から調整剥離して錐部を作出したものである。9は両面加工を施した棒状のものであるが、錐部、基部ともに摩耗している。



図19 鬼川辺(1)遺跡 土製品

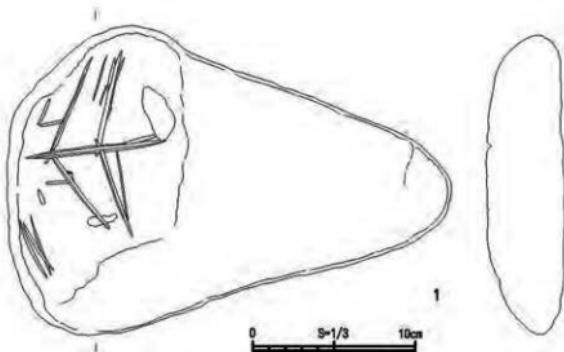


図20 鬼川辺(1)遺跡 石製品

両面加工石器は、3点を全て図示した（図16-10～12）。10は両側縁からの丁寧な調整剥離で薄く仕上げられている。11は側縁に微細な調整剥離を施し、刃部を作出する意図が窺える。12は調整加工が比較的粗く、階段状剥離が多く残存する。石箇の未完成の可能性も考えられる。石箇は1点を図示した（図16-13）。両面加工であるが、片面に一部に素材面が残存し、側縁の調整剥離は急角度で粗い。また、石質も珪質頁岩ではあるが、光沢感に欠く。石匙は縦型の3点（図16-14～16）と横型の2点（図16-17・18）を図示した。14はつまみ部の抉りを作出するための調整剥離が片側は入念であるのに対し、もう片方は粗雑である。一方で15は側縁の刃部とつまみ部の抉りを作出する調整剥離は入念に施している。16は屈曲した縦長剥片素材を用いた側縁の調整剥離を施すもので、つまみ部側が折損している。17は厚みのある素材剥片を用い、側縁にやや急角度の調整剥離を行った後に刃部を作出するための微細な二次調整剥離を施している。18は両端部が欠損している横型の石匙であるが、つまみ部にアスファルトと思われる黒色物質が付着している。

造構外出土の砾石器は、敲磨器9点（図17-1～7、図18-1・2）と磨製石斧2点（図18-3・4）を図示した。1～3は亜円礫の両面に凹みを確認したものである。1は薄手の扁平な形状で両面に敲打によると思われる剥離がある。2は一端部に敲き痕がある。4・5は両面に磨り痕を確認したものである。4は長方形の板状砾で一側面にも擦り痕がある。6は球状砾の両面と一側面、一端部に敲き痕、磨り痕を確認したものである。7は亜円礫の片面と一端部に敲き痕、もう片面と一側面に磨り痕が確認したものである。図18-1は棒状砾の片面と一側面に敲き痕、もう片面に磨り痕を確認したものである。2は亜円礫の片面に凹みと磨り痕を確認したものである。3・4は磨製石斧で、3は刃部が欠損している。基部の端部に平坦で光沢のある顯著な磨り痕が確認でき、再利用の可能性も考えられる。4は器体の大半が欠損した刃部である。

この他、剥片が総数1229点、17869.1g出土した。平面分布は調査区南側と東側にまとまりがあり、北側、西側は希薄である。出土層位はⅠ層が多数を占める。石質は黒曜石が4点、水晶が2点あり、その他は頁岩、珪質頁岩である。

(能代谷)

(3) 土製品（図19）

1点出土した。図19-1は土製円盤で、一部欠損しているものの、円形を呈する。焼成は良好で堅緻に仕上がっている。全面をミガキ調整しており、特別な装飾は見られない。Ⅱ層出土で製作時期に関する詳細情報は得られなかった。

(浅田)

(4) 石製品（図20）

1点出土した。図20-1は三角形の板状砾で、石質は凝灰岩である。片面に鋭利な工具による線刻が施されている。半分が剥離により失われているが、中心線から対称となる斜方向の刻線が伸びており、意図的に文様を刻んだものと判断した。Ⅱ層からの出土で、所産時期も詳細は不明であるが、鋭利な線刻は金属器によるものと想定されることから、古代以降の所産と推測する。

(能代谷)

第4章 鬼川辺(2)遺跡の検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構

(1) 穫穴住居跡

総数5軒検出した。分布を見ると調査区南側で3軒、北側で2軒となっている。調査区南側で検出した3軒は、周囲より僅かだが標高の高い微高地に立地する。南東には段丘を開析する沢が、西側は美山湖につながる段丘崖が存在する。一帯は耕作に伴う削平を受けており、表土除去を行うとすぐに礫や地山が露出した。このため第1号は炉のみの確認であり、その他もプラン把握が困難であった。

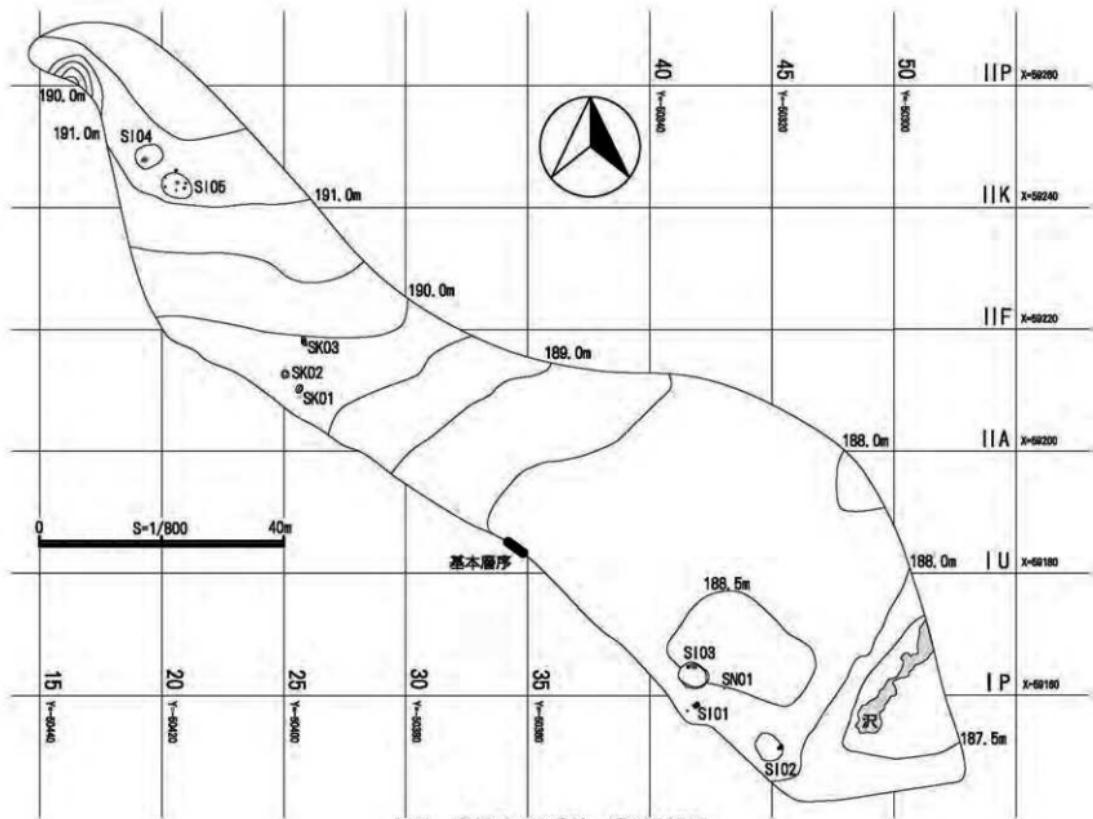
調査区北側で検出した2軒も、耕作による削平により床面まで影響が著しく、特に第5号は柱穴と炉を基に図上に復元したものである。以下に詳細を記載する。

第1号 穫穴住居跡 [S101] (図22)

[位置と確認] I 0-41・42グリッドに位置する。Ⅲ層上面で石囲炉のみを検出した。炉だけの検出であるため、調査当初は屋外炉と捉えたが、遺跡内で唯一の大型石囲炉であり、竪穴住居跡に伴う可能性が高いと判断した。**[重複関係]** 第3号と隣接するが、プランが把握できないため直接的な新旧関係は不明である。**[規模・平面形]** 床面、壁面とも確認できなかったため全体像は不明である。**[堆積土]** 検出しなかった。**[壁面・床面]** 検出しなかった。**[柱穴]** 検出しなかった。**[炉]** 石囲炉を1基検出した。長軸107cm、短軸85cmの方形に礫を並べている。礫は棒状や板状の形状が多く用いられている。南側には比較的大型の礫が目立ち、密に並んでいるのに対し、北側は小型の礫が多く間隔が空いている。堆積土は2層に分層できた。自然堆積の様相を呈するが、いずれも被熱している。1層は炉の外側に拡がるが、範囲は北側のみで、南側は礫で区画された内側に収まっている。また、底面はIV層を掘り込んで一定の平坦面となっているが、全体的に強く焼け込んでいる。被熱の厚さは14cmを測り、堆積土と同様の厚さとなっている。**[出土遺物]** 織文土器が炉内から1点、6.6g、石器を含む剥片が床面から4点、55.2g出土した。いずれも図示はしていない。出土状況から堆積土と共に周囲より流入したものと思われる。**[小結]** 詳細な機能時期を比定するのは困難であるが、周辺の遺構や出土土器の様相から、織文時代後期～晩期にかけての所産と推定する。

第2号 穫穴住居跡 [S102] (図23)

[位置と確認] I M-45グリッド他に位置する。Ⅲ層上面で褐色土のプランとして検出した。**[重複関係]** 無し。**[規模・平面形]** 確認したプランは長軸483cm、短軸378cmの椭円形を呈する。壁面の立ち上がりを確認できなかったため、さらに拡大する可能性がある。**[堆積土]** 褐色土の単層であった。IV層由来の礫が混入しているが、自然堆積の様相を呈する。**[壁面・床面]** 壁面は検出しなかった。床面は南西から北東に向かって下る傾斜となる。またIV層を床面としているため礫が多く露出している。**[柱穴]** 検出しなかった。**[炉]** 石囲炉を1基、確認プランの東端で確認した。長軸97cm、短軸67cmの方形を呈する。底面はIV層が焼け込んでいるのを確認した。第1号のような棒状や板状礫の規則的な配置は見られず、礫層であるIV層を窪むように掘り込み、周囲に残存した礫をそのまま利用して



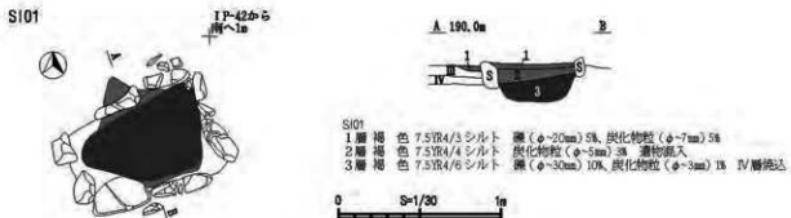


図22 鬼川辺(2)遺跡 第1号竪穴住居跡

いる感を受ける。【出土遺物】縄文土器が27点、256.3 g出土した。また疊石器が1点、111 g、剥片石器が1点、12.3 g、いずれも1層から出土した。この内、縄文土器5点、疊石器1点を図示した(図29・33)。縄文時代後期初頭が中心だが、縄文時代晚期前葉の鉢が含まれている。【小結】遺構内出土遺物の様相から、少なくとも縄文時代晚期前葉には廃絶しており、出土量から縄文時代後期初頭頃に機能していたと推定する。

第3号竪穴住居跡 [SI03] (図24)

【位置と確認】 I-P-41 グリッド他に位置する。Ⅲ層上面で検出した。【重複関係】 第1号竪穴住居跡と隣接するが、第1号のプランが把握できないため直接的な新旧関係は不明である。【規模・平面形】長軸474cm、短軸405cmの楕円形を呈する。【堆積土】 全部で3層に分層できた。埋没開始後、南側壁際を除き3層で埋まっており、残りの空間を2層が埋めている。1層は最上部の微窪地に流入したⅡ層起源の堆積土と思われる。北側3層内に焼土範囲を検出した。3層堆積に伴う攢入された焼土の可能性が高い。【壁面・床面】 壁は北西側以外で検出した。掘り込んだⅣ層を面にして、やや開き気味に立ち上がる。壁高は28cmを測り、本遺跡の中で最も多く残存している。床面は若干凹凸が見られるものの、第2号竪穴住居跡と比較すればほぼ平坦である。【柱穴】 検出しなかった。【炉】 検出しなかった。当初は上述した焼土範囲を炉として認識していたが、調査の進展に従い床面への明確な被熱痕が確認できなかった。【出土遺物】 縄文土器が106点、1015.0 g出土した。この内、床面から9点、54 g、3層から11点、87.2 g出土し、残りは1層からの出土である。また疊石器が総数6点、3567.3 g出土した。この内、床面からは1点出土している。以上の中から縄文土器8点、疊石器4点を図示した(図29・33)。縄文土器は後期初頭～前葉が中心だが、晚期前葉が1点含まれている。【小結】 遺構内出土土器の様相から、少なくとも縄文時代晚期前葉には廃絶しており、出土量から縄文時代後期初頭～前葉頃に機能していた可能性がある。

第4号竪穴住居跡 [SI04] (図25)

【位置と確認】 II-M-18グリッド他に位置する。Ⅳ層上面で検出した。【重複関係】 第5号に隣接するが、直接的な重複関係は無い。【規模・平面形】 長軸454cm、短軸361cmの不整圓丸方形を呈する。【堆積土】 3層に分層できた。炉上部で確認した3層は疊を多く含んでおり、限定的な堆積状況を示すことから、意図的に盛られた可能性がある。1、2層は自然堆積の様相を呈する。【壁面・床面】 壁面



図23 鬼川辺(2)遺跡 第2号竪穴住居跡

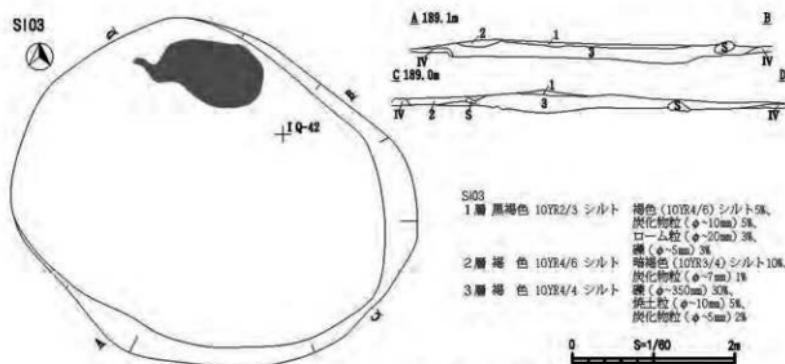
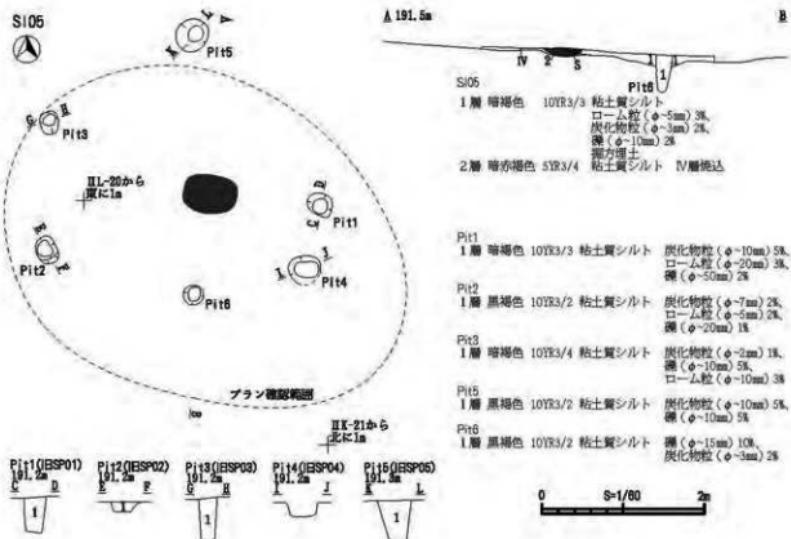
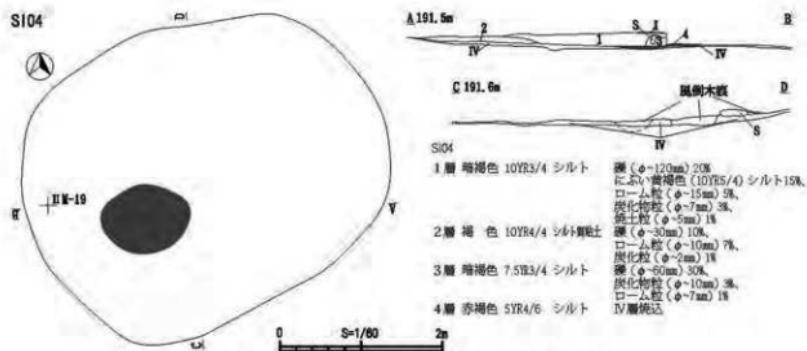


図24 鬼川辺(2)遺跡 第3号竪穴住居跡



は検出しなかった。床面は南西に向かって僅かに下る傾斜を持つ。IV層を床面としており、礫が所々露出する状況にある。【柱穴】検出しなかった。【炉】地床炉を遺構中央から南西側に寄った位置で1基検出した。平面形は長軸111cm、短軸85cmの不整橢円形を呈する。被熱の厚さは最大4cmを測る。【出土遺物】縄文土器が1層を中心に23点、141.7g出土した。また礫石器が1層から1点、546.3g、剥片石器が1点、63.5g出土した。この内、縄文土器2点、剥片石器1点、礫石器1点を図示した(図29・33)。出土土器は円筒上層c式、d式が中心となる。【小結】遺構内出土土器の様相から、縄文時代中期中葉頃に機能していたと推定する。

第5号竪穴住居跡 [SI05] (図26)

【位置と確認】II K-20グリッド他に位置する。IV層上面で検出した。遺構検出時に不明瞭な暗褐色土のプランと、その内部に焼土範囲を確認したが、検出作業を繰り返す毎にプランが縮小する結果となつた。このため最初に確認した範囲で住居が広がっていたと捉え、さらに遺構確認を進めた結果、最終的に6基の柱穴を確認し、焼土遺構を取り囲むように配置できることから、竪穴住居跡として復元した。【重複関係】第4号に隣接するが、直接的な重複関係は無い。【規模・平面形】明確な範囲は抑えることができなかつたが、少なくとも長軸520cm、短軸390cmの長楕円形のプランを確認した。しかしPit5がそのプラン外に位置すること、北側が斜面上方に当たり、削平をより強く受けたことから、もう少し拡大し、第4号竪穴住居跡のような隅丸方形のプランになる可能性がある。【堆積土】1層確認したが、Pit6が掘り込んでいたこと、一部が地床炉の被熱面に含まれていることから、床面を形成した掘方埋土と捉えた。従って住居廃絶後の堆積土は検出していない。【壁面・床面】壁面は検出しなかった。床面は確認が掘方埋土であることから、削平により失われたものと思われる。【柱穴】6基検出した。Pit1・3・5・6は直径が確認面からの掘り込みが40~50cm程あり、炉を取り囲むような方形の配置となることから主柱穴と考えられる。堆積土は黒褐色~暗褐色の単層で柱痕は検出しなかつた。Pit2・4は掘り込みが浅い共通点が見られる。【炉】柱穴に囲まれた中央部で地床炉を検出した。長軸67cm、短軸49cmの隅丸方形を呈する。IV層と埋土1層にまたがって被熱しており、厚さは最大10cmを測る。【出土遺物】1層と炉焼土から縄文土器が6点、57.0g出土した。1点を図示した(図29)。【小結】炉跡出土遺物の時期から、縄文時代中期末葉頃に機能していた可能性を挙げておきたい。

(浅田)

(2) 土坑 (図27)

3基いずれもIII層上面で検出した。調査区中央からやや北西側に寄った、南北に分布する竪穴住居跡の間に纏まっている。重複は確認できなかつた。平面形は第1・3号は長楕円形、第2号は隅丸方形を呈する。堆積土は第1・3号が2層に分層でき、第2号は単層であった。竪穴住居跡と比較すると掘り込みは明確で、上部が削平の影響を受けているにもかかわらず18~38cmの掘り込みを確認した。第1・2号の底面はほぼ平坦だが、第3号は北側を一段深く掘り込んでいる。いずれも出土遺物は無く、周辺の状況から縄文時代以降に機能していたものと推測する。

(浅田)

(3) 焼土遺構 (図28)

I基検出した。調査区南側の第1・3号竪穴住居跡に隣接するIP-43グリッドに位置する。確認面



図27 鬼川辺(2)遺跡 土坑

はⅢ層上面で第1号竪穴住居跡とした石畳炉のように、床面以上が削平された竪穴住居跡内の炉である可能性もあるが、規模や焼け込みに明確な根拠が示せないことから焼土遺構として掲載した。平面形は不整円形を呈し、長軸38cm、短軸31cmを測る。堆積土は単層で、礫を多く含んでいる。掘り込んだ際にⅣ層中の礫が露出しており、石敷炉のような状況を作り出している。遺物は出土していない。周囲の遺構、出土遺物の時期と関連する可能性が考えられることから、縄文時代後期～晩期に機能していたものと推測する。

(浅田)

第2節 出土遺物

(1) 縄文土器 (図29～32)

出土土器は総数1460点、16317.1g出土した。その内、遺構外から1297点、14840.5g出土している。また、約9割がⅠ層からの出土となっている。遺構内からの出土量は少ないが、調査区北側の段丘縁辺部、II J-19グリッド周辺から縄文土器が纏まって出土している。遺構内外含めて唯一纏まとった範囲からの出土であったが、出土層位が全てⅠ層であった。この要因について、調査前の土地所有者が遺構を耕作し、天地返しが起きた遺物をまとめて耕作地の脇に廃棄したものと捉えるならば、遺構外出土遺物の中に遺構に帰属するものが含まれている可能性が高い。このグリッド出土土器は本遺跡Ⅱ群土器が多く含まれ、調査区北側では明確にできなかった、後期の遺構が存在した可能性がある。

器形や施文方法などの諸特徴より、以下のように分類した。

- I群：縄文時代中期、円筒上層式に比定される。主に文様施文から以下のように細分した。
- a類：粘土紐の隆帯上に連続する燃糸圧痕が、また粘土紐間に馬蹄形状の燃糸圧痕が施され、円筒上層b式に比定される。遺構外から出土した3点を図示した。図29-17～19は接合しないが、胎土や調整の一一致から同一個体と考えられ、口縁部から底部までの情報を確認できる。胎土は共通して砂粒を多く含み、白色粒が目立つ。口縁部は緩やかに外傾する。口縁部と胴部の境界は横方向の隆帯で区



図28 鬼川辺(2)遺跡 焼土遺構

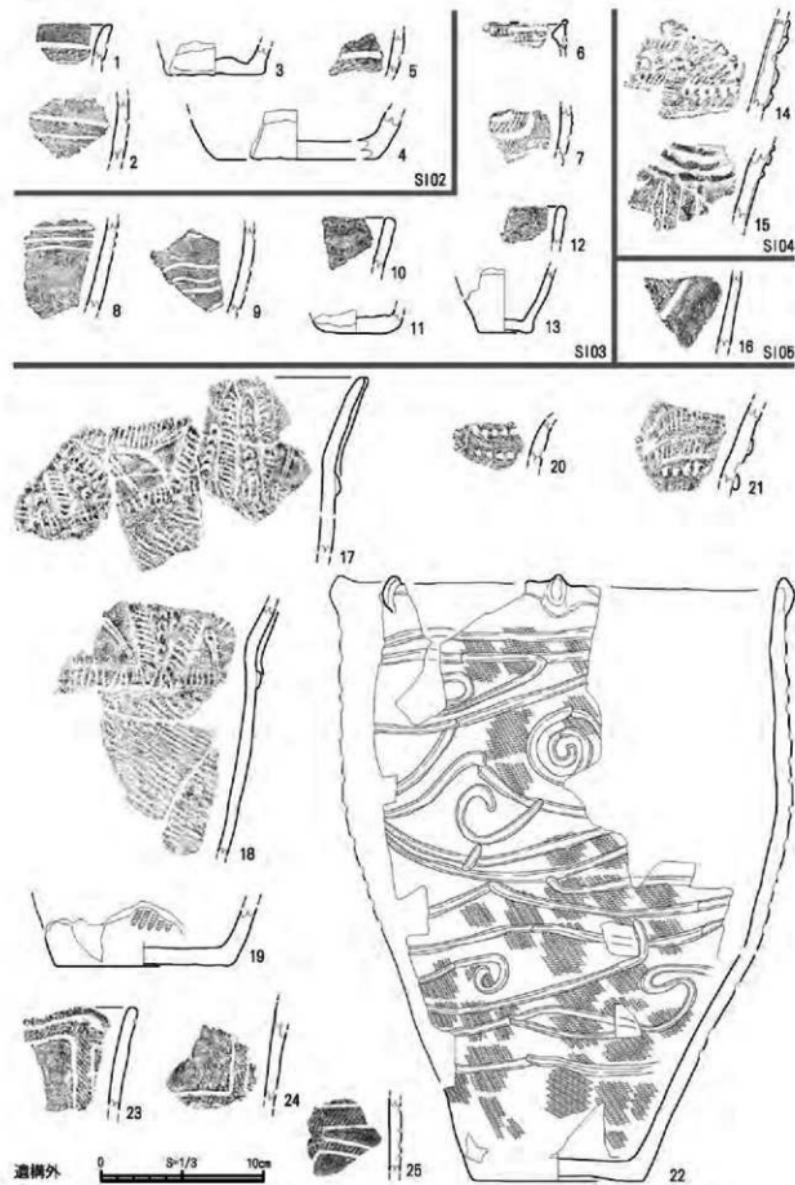


図29 鬼川辺(2)遺跡 繩文土器-1

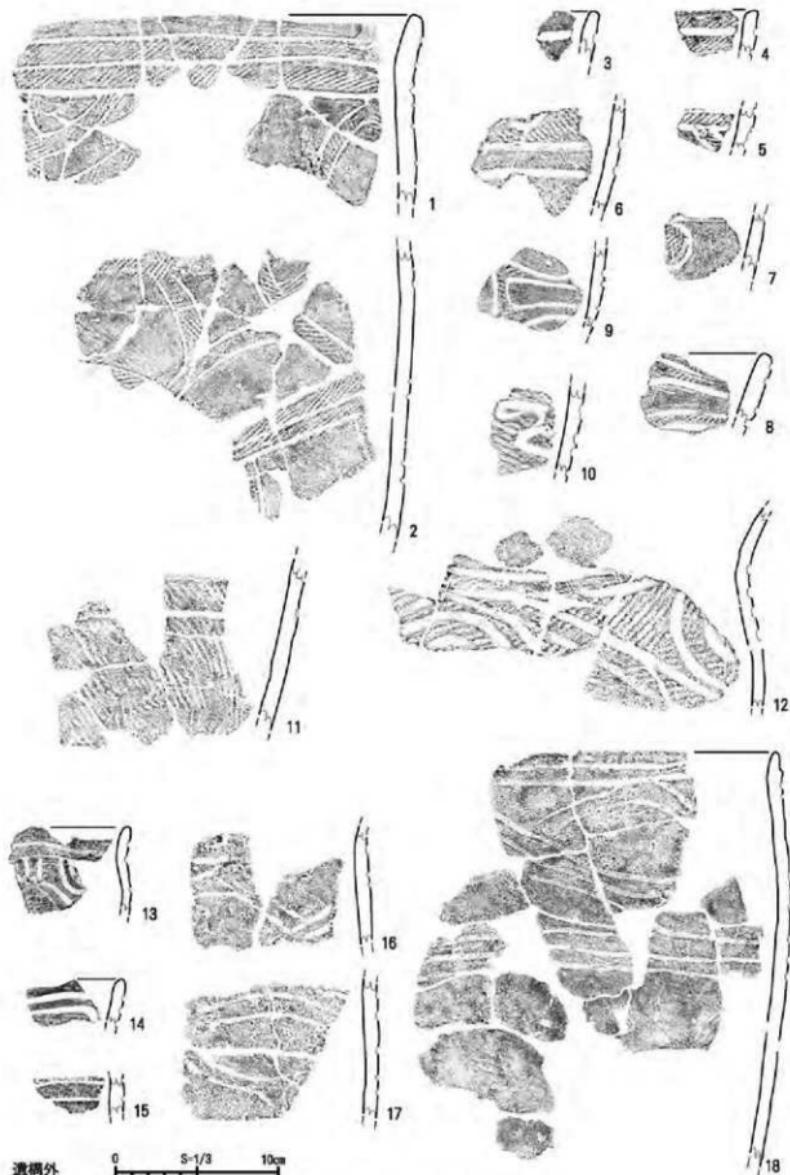


図30 鬼川辺(2)遺跡 繩文土器-2

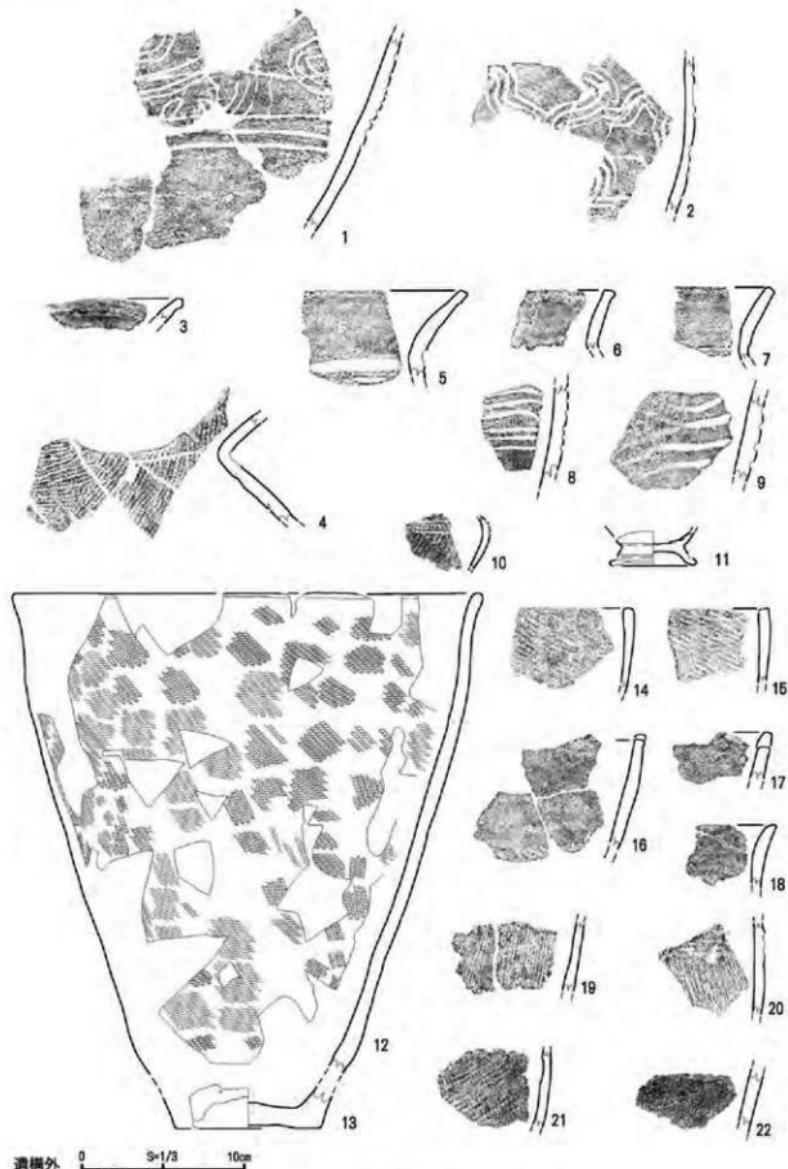


図31 鬼川辺(2)遺跡 繩文土器-3

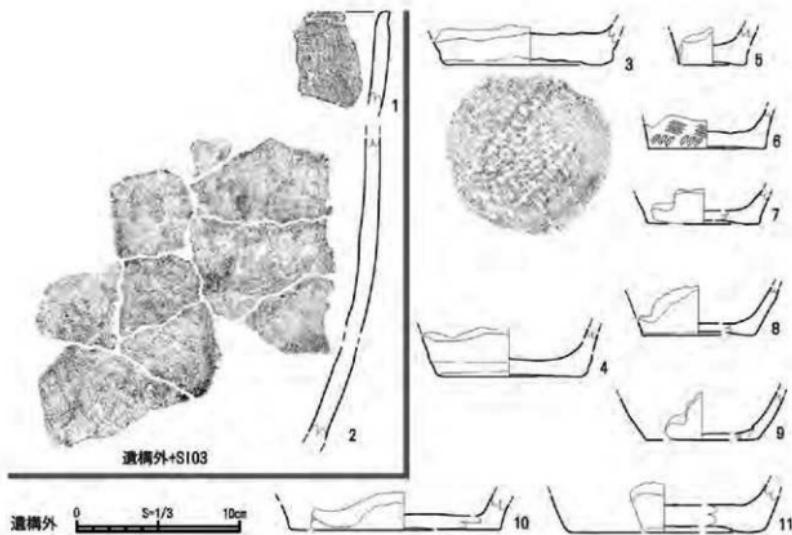


図32 鬼川辺(2)遺跡 縄文土器-4

画している。隆帯上は連続する撚糸圧痕により刻目状になっている。波状口縁の頂部からM字状に隆帯を貼り付け、内部に連続する馬蹄形圧痕を施している。馬蹄形圧痕の無い区画は、2列の平行する斜方向の撚糸圧痕を施している。

b類：粘土紐による隆帯上に連続する撚糸圧痕が、また粘土紐間に半截竹管状工具による連続刺突が施され、円筒上層c式に比定される。遺構内外合わせて3点を図示した。胎土には白色粒の混入が目立つ。図29-14は第4号竪穴住居跡から出土した胴部破片である。ヘラ状工具の先端を使用した押し引きにより連続刺突を行っている。図29-20・21は遺構外から出土した胴部破片である。図29-20は角棒状工具の先端を利用した押し引きにより連続刺突を行っている。図29-21は刺突の最奥部両端が深くなっており、工具先端がフォークのような形状で鋭利になっていたと考えられる。

c類：粘土紐による隆帯貼付と沈線による文様が施され、円筒上層e式に比定される。胎土には白色粒の混入が目立つ。第4号竪穴住居跡から出土した1点を図示した。図29-15は上部に装飾の無い、幅が不安定な粘土紐を平行に3本貼り付け、下部に鋭利な先端を持つ棒状工具で縦方向の沈線を施している。

d類：幅の太い沈線で区画された磨消縄文を作り。中期後葉～末葉に比定される。第5号住居跡から出土した1点を図示した。図29-16は深鉢胴部破片で、縄文施文後に沈線で区画し、丁寧な磨消が施されている。内面のミガキ調整も丁寧である。胎土に海綿骨針の混入が目立つ。

II群：主に沈線や縄文による文様が施され、縄文時代後期に比定される一群である。施文方法により以下のように細分可能である。

a類：主に沈線による施文が観察でき、部分的に磨消処理を含む縄文施文が施されているもので、後期初頭に比定される。遺構内外出土の20点を図示した。沈線と縄文の関係で以下のように細分した。

1種：平行する沈線間に縄文施文が観察できるもの。第2号竪穴住居跡出土の図29-1・2・5と第3号竪穴住居跡出土の図29-7、遺構外出土の図29-23~25、図30-1~9を図示した。沈線施文の後、縄文を充填する順序が多い。口縁形態は波状口縁（図29-23）と平口縁（図30-1）が見られる。口唇部は完全な平坦化はしていないが、器形は口縁部にかけて緩やかに外反するものが多い。

2種：地文縄文上に沈線文を施文するもの。図29-22、図30-10~12を図示した。図29-22は唯一器形復元可能な個体である。底部は高台状になっており、本遺跡IV群に含まれる底部のみの資料の特徴と一致する。口縁は平口縁に山形突起が付き、突起部分外面には縱長の隆帯が付く。沈線は先端が丸く、太めの棒状工具で施文している。胴部文様は横走沈線間に弧状線が配置され、さらに空いた空間に渦巻文が施文されている。胴下半には波状的なモチーフも含まれる。図30-12と図31-5~7は胎土や焼成が類似しており、図30-12の口縁部と胴部の境界にある横走沈線と図31-5下端の横走沈線の様相が類似することから、同一個体の可能性がある。図31-5~7は外反の度合いや長さに格差があり、同一個体だとすると歪みが大きい器体になる可能性が高い。いずれも無文の口縁部で、口唇部に平坦面を作出する。

b類：沈線のみの施文が確認できるもので、後期前葉に比定されると考えられるが、破片資料については後期初頭が含まれている可能性がある。第3号竪穴住居跡出土図29-8・9、遺構外出土の図30-13~18、図31-1・2・8・9を図示した。図29-1・2・8・9はいずれも胴部破片で、丁寧なミガキ調整が施され、3本1単位の棒状工具による横走・曲線文が施される。図30-13は緩やかな波状口縁を持つ小型の深鉢で、口縁部と胴部間が僅かに括れる。器表面はススと思われる黒色物質の付着が観察できる。図30-14は平口縁に山形の突起が付くものと思われる。図30-15は非常に鋭利な先端を持つ工具で沈線を施文しており、断面形がV字を呈する。図31-1・2は胴部破片で、同一個体の可能性が高い。3~4本1単位の棒状工具を用いた平行沈線・曲線文が施される。胴部下半の横走沈線で区画された範囲に施文されており、下部は無文となっている。

c類：器面がミガキ調整のみで、文様施文が無い一群をまとめた。遺構内外から出土した9点を図示した。第3号竪穴住居跡から出土した図29-10~13は小型でミニチュア土器に該当する。図29-12・13は胎土や調整が一致することから同一個体と考えられる。

図32-1・2は深鉢で、第3号竪穴住居跡と遺構外出土土器が接合している。緩やかに開きながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。口唇部は平坦に作出され、外面は僅かに窪む。図31-16・17は直立する平口縁に山形突起が伴う。図31-18は外反する口縁部である。

III群：主に細かい縄文と沈線、刻目による施文が観察できる。縄文時代晩期に比定される一群で、施文方法により以下のように細分可能である。

a類：晩期前葉に位置付けられる。3点図示した。第3号竪穴住居跡出土の図29-6は鉢の口縁部と思われる。口唇部に瘤状の突起が付き両脇から刻目列が施文される。内側に大きく肥厚し、内面は丁寧なミガキ調整が施される。胎土には海綿骨針が観察できる。焼成も良好で堅緻に仕上がっている。外面は横走沈線施文後、先端が櫛歯状の凹凸となるヘラ状工具で横方向の刻目列を作出している。刻目列は上下にずらして施文していることから羊齒状文になるものと思われる。図31-3・4は遺構外

から出土した壺で、胎土に赤色粒と海綿骨針が特徴的に混入している。3は外反する口縁部で、口唇部は丸く、外面に沈線状の窪みがミガキ調整が顕著に観察できる。4は口縁部から胴部にかけて残存している。丸みを帯びた胴部から大きく外反する口縁部につながるため、屈曲の度合いが大きい。地文繩文は単節LRで、横方向に丁寧に施文している。屈曲部は沈線状に窪み、胴部側に粘土の捲れが生じている。これは胴部に繩文施文後、口縁部にミガキ調整を行う際、屈曲部に特に強い調整を施した結果と思われる。器形や色調は弥生時代前期の壺にも類似するが、現段階では本群に分類しておく。

b類：晩期中葉に位置付けられる。2点を図示した。図31-10は鉢の胴部である。非常に薄手で、屈曲する胴部最大径の部分に非常に細く鋭利な工具で引いた平行横走沈線間に連続刺突を施す。図31-11は台付鉢で、大きく張り出した台部下部に横方向の沈線が施される。胎土には赤色粒の混入が観察できる。

IV群：後期から晩期にかけての粗製土器で、第2号竪穴住居跡出土の図29-3・4、遺構外出土の図31-12~15・19~22、図33-1~11の19点を図示した。図31-12・13は接合しないが、胎土や調整に類似点が多く、同一個体と判断した。図31-12に用いられている繩文原体は無節と単節が確認できたが、部位毎の明確な使い分けは確認できない。底部より大きく開きながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。図31-13は外底面中央が窪みになっており、結果的に僅かな高台状を呈する。器形からはII群に属する可能性がある。図29-3・4と図32-3~11は底部のみ確認できたもので、胴部に文様が入る可能性があるが、判断材料に乏しいため本類に一括したものである。図32-3は底部中央の窪み部分に網代痕が観察できる。その他の底部も底面中央が窪み、高台状を呈するものが多い。この特徴は図31-13と共通している。図31-14・15は内湾する口縁部で、口唇部を平坦に作出している。図31-19~22は胴部で、図31-19・20は縱方向の条痕文が観察できる。また図31-20は上部に浅い横走沈線が少なくとも2条は確認できる。図31-21は器表面にススの付着が観察でき、胎土に赤色粒を多く含む。図32-22は内面に黒色物質が皮膜状に付着している。一部剥落しており疎らになっているが、当初は面上に存在した可能性が高い。胎土には赤色粒を多く含む。

(浅田)

(2) 石器 (図33~34)

剥片石器は総数21点、527.3g出土し、その内12点、226.0gを図示した。また、礫石器は総数15点、7098.7g出土し、その内11点、4940.4gを図示した。剥片石器の器種は、石鎌、石鏟、石匙、両面加工石器、不定形の削器・搔器を確認した。出土点数は、石鎌が2点、石鏟が1点、石匙が2点、両面加工石器が2点、不定形の削器・搔器が14点である。石質は全て珪質頁岩である。また、剥片石器の実測図表現について、原礫面は濃いドット、二重バティナと判断した部分は薄いドットで表現している。

礫石器の器種は、敲磨器、台石、磨製石斧を確認した。出土点数は、敲磨器が12点、台石が1点、磨製石斧が2点である。敲磨器にはいわゆる敲き石、磨り石、凹石が該当するが、使用痕が複合して確認できるものが存在するため、敲磨器という総称を使用した。敲磨器の石質と点数は、凝灰岩が5点、安山岩が2点、ディサイトが2点、緑色凝灰岩が2点、粗粒玄武岩が1点である。一方、台石は凝灰岩、磨製石斧は粗粒玄武岩と緑色岩である。遺構内出土石器は、第2号竪穴住居跡から剥片石器が1点と敲磨器1点、第3号竪穴住居跡から敲磨器が5点と台石が1点、第4号竪穴住居跡から剥片

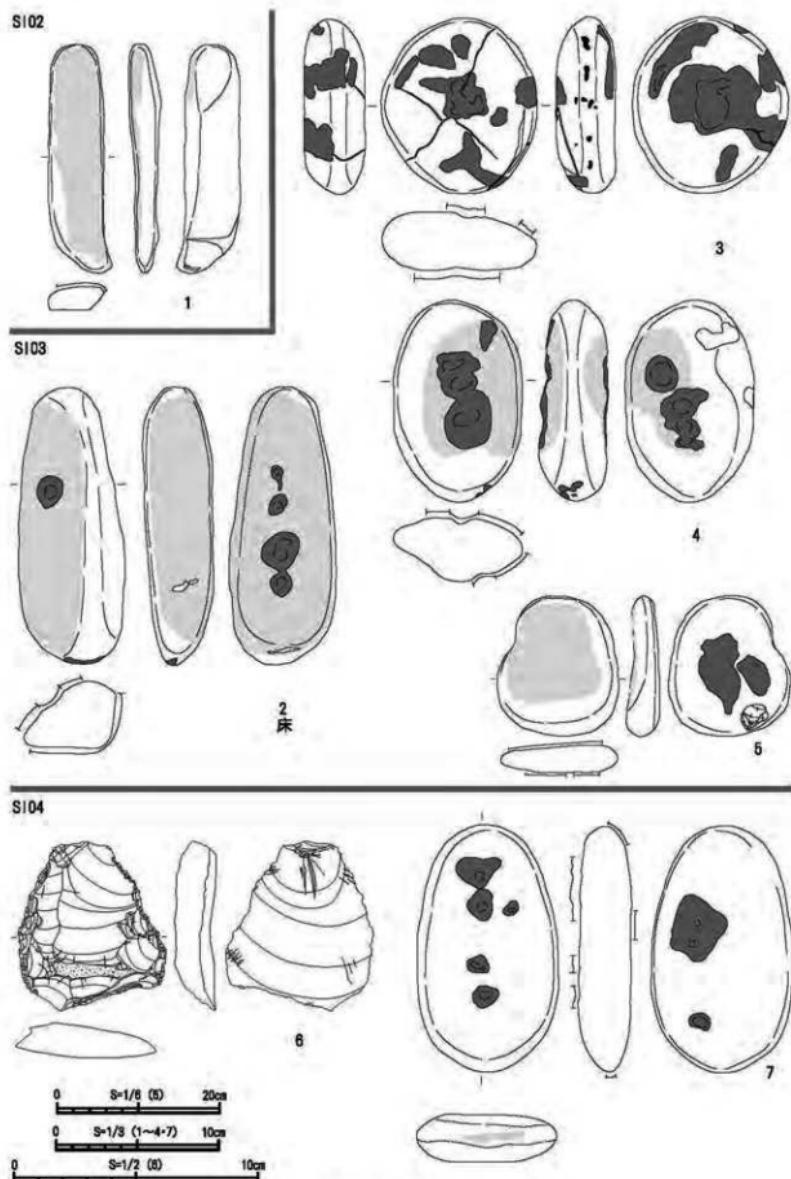


図33 鬼川辺(2)遺跡 石器-1

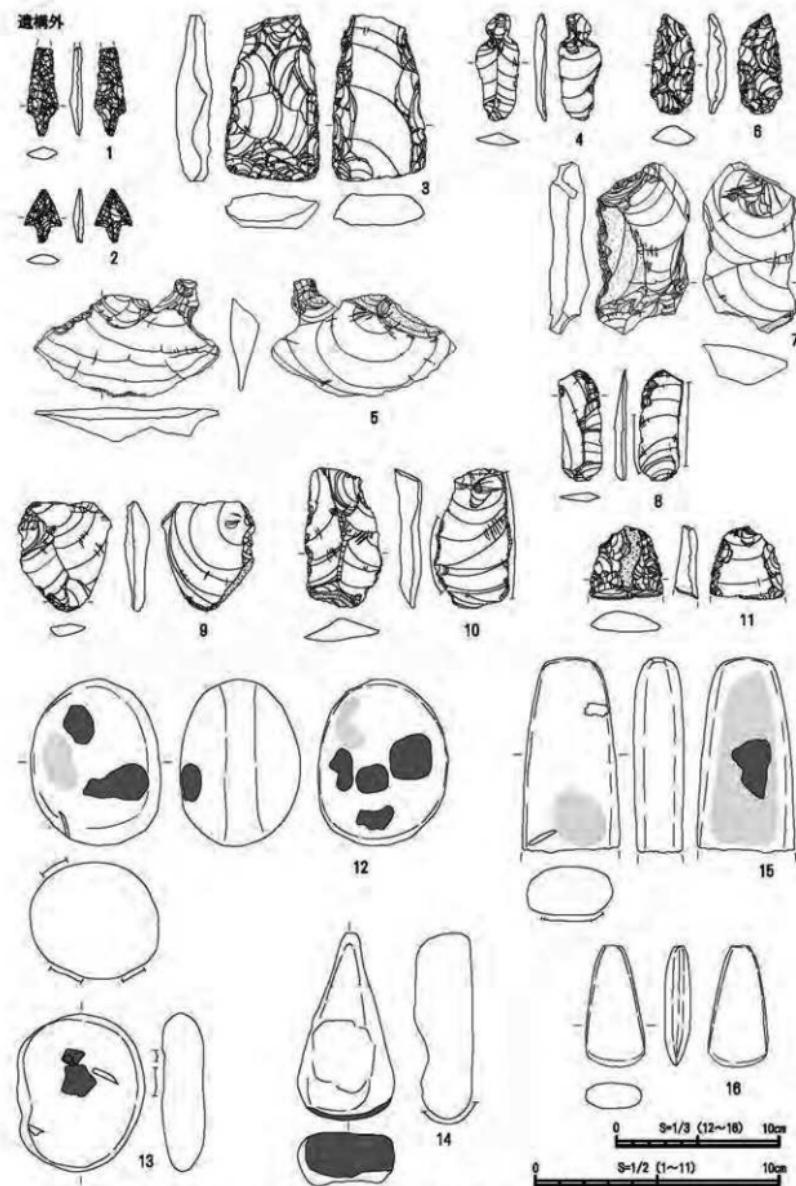


図34 鬼川辺(2)遺跡 石器-2

石器が1点と敲磨器が1点出土した。第2号竪穴住居跡は、敲磨器1点(図33-1)を図示した。細長い板状礫の両面と一側面に磨り痕がある。第3号竪穴住居跡は、敲磨器3点(図33-2~4)を図示した。図33-2は床面から出土し、亞円礫の両面に凹み、敲き痕、磨り痕があり、一側面に磨り痕、一端部に敲き痕がある。図33-3は板状の亞円礫の両面に凹みと敲き痕、側面に敲き痕がある。また、一側面に黒色物質が少量付着する。図33-4は楕円状礫の両面に凹み、磨り痕、敲き痕があり、一側面にも磨り痕、敲き痕がある。図33-5は、台石であり、板状の亞円礫の片面に磨り痕があり、もう片面に敲き痕及び使用に伴うものと思われる剥離が一端部にある。第4号竪穴住居跡は、剥片石器1点(図33-6)と敲磨器1点(図33-7)を全て図示した。図33-6は台形状剥片の片面側縁に調整剥離を施しており、削器として機能したものと思われる。また、石質は灰白色の珪質頁岩であるが、縞状の模様が両面にみられる。なお、端部は黒色がかっているが、付着物ではなく、石そのものの発色によるものと肉眼で観察できる。図33-7は、亞円礫の両面に凹みと敲き痕があり、一端部に磨り痕がある敲磨器である。

遺構外石器は、出土点数が剥片石器と礫石器あわせて26点と少量であるが、出土状況は土器と同様に調査区南側と北側に偏る傾向があり、また、遺構に近いグリッド付近からの出土が目立った。剥片石器から順に器種毎に提示した。石鏃は出土した2点すべて図示した(図34-1・2)。ともに基部形態がY字形を呈している凸基である。図34-1は先端部が折損しているが、平面形は二等辺三角形を呈するものと思われる。図34-2は平面形が正三角形を呈し、小型である。石鏃は1点出土し、図示した(図34-3)。平面形は台形を呈する。側縁先端部に刃部を作出するための調整剥離が施されている。石匙は縦型1点、横型1点が出土し、すべて図示した(図34-4・5)。図34-4は縦型の石匙で小型である。つまみ部を作出する調整剥離は顕著であるが、刃部は微細剥離が一部にある程度である。図34-5は横型の石匙でつまみ部を作出する調整は粗い。また、刃部も一部に調整がある程度で無調整に近い。素材は風化度合いの強い珪質頁岩でもろさがある。両面加工石器は2点出土し、図示した(図34-6・11)。図34-6は両面とも端部から中軸線上までの調整剥離を施しているが、側縁は微細というほどどの調整はしていない。図34-11は両側縁からやや急角度に調整剥離を施しており、端部が欠損している。なお、器種の特定が困難であったため、両面加工石器とした。削器・搔器は13点出土し、4点図示した(図34-7~10)。図34-7は片面側縁の一部に調整を施し、削器として機能したものと思われる。図34-8・9は両面の側縁に調整を施し、削器として機能したものと思われる。図34-10は両面の側縁に微細剥離を施し、削器として機能したものと思われる。

礫石器は、敲磨器3点(図34-12~14)、磨製石斧2点(図34-15・16)を図示した。図34-12は亞円礫の両面に敲き痕、磨り痕があり、一側面に敲き痕がある。図34-13はやや円平な礫の片面に凹み、敲き痕がある。図34-14は、平面が三角形を呈する礫の一端部ほぼ全体に敲き痕がある。図34-15・16は磨製石斧である。図34-15は、刃部が欠損する。また、両面に光沢のある顕著な磨り痕と片面に敲き痕が確認でき、再利用の可能性も考えられる。図34-16は完形であり、小型で刃部は銳利である。

この他、剥片が総数227点、4057.1g出土した。平面分布は、剥片石器、礫石器同様、調査区南側と北側に集中する。出土層位は、大多数がI層である。石質は黒曜石の剥片が1点あり、その他は珪質頁岩、頁岩である。

(能代谷)

第5章 鬼川辺(3)遺跡の検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構

(1) 穫穴住居跡

総数7軒検出した。分布を見ると全て調査区南側、調査区中央を横断する沢と美山湖に挟まれた、馬の背状の地すべり堆上に立地する。立地部分は東方向に僅かに下る緩斜面地で、竪穴住居跡同士の重複は存在せず、遺構配置図（図35）を一見すると第2号と第7号以外は等間隔で弧状に並んでいる。この部分は周囲より僅かに高まりのある尾根筋であり、地形の変化に沿った構築であることを窺わせる。第2号は大きな傾斜の変化はない地点だが、第7号は地すべり堆の端部、急斜面に面した傾斜の変化点に位置する。以下に詳細を記載する。

第1号竪穴住居跡 [SI01] (図36)

[位置と確認] 1S-19グリッド他に位置する。IV層上面で検出した。【重複関係】無し。【規模・平面形】長軸528cm、短軸401cmの隅丸方形を呈するが、北西隅の丸みが大きく、内側に入り込んでいる。【堆積土】3層に分層できた。西壁際を中心に3層が堆積後、床面の大半を疊を多く含む2層が覆う。この段階では炉付近は露出しており、1層によって完全に埋没している。出土遺物は1層から多く出土しており、図示可能遺物は本層出土遺物が多数を占める。このことから、1層堆積時には周囲からの廃棄行為が行われていたと考えられる。【壁面・床面】壁は床面から聞くように立ち上がる。床面は西側で中央に向かいやや下る傾斜となるが、その他は平坦で、床面積は18.9m²を測る。また床面から壁の最高点までの比高差は42cmを測る。【柱穴】5基検出した。Pit 1・5は北東・南東隅に位置し、対になると考えられる。西側ではこれらに対応する柱穴を検出できなかった。Pit 2・3は規模が他より一回り小さく、掘り込みも浅い。堆積土はいずれも暗褐色粘土質シルトの単層で、柱痕跡は確認できなかった。【炉】石函炉を1基、床面ほぼ中央で検出した。深さ9cmの掘方を2層で埋め戻し、長軸70cm、短軸68cmと正方形に近い形に整えている。疊は四隅に配置されるように確認した。IV層が被熱しており、厚さは5cmを測る。【出土遺物】縄文土器は600点、5833.0g出土した。大半は堆積土中からの出土だが、Pit 4堆積土から37点、591.2g、Pit 5堆積土から1点、3.7g出土している。この内16点を図示した（図49）。II～IV・VI群土器が出土しているが、出土数が多いのはIV群土器である。石器は16点、2794.7g出土した。すべて堆積土中からの出土である。このうち、疊石器2点、剥片石器4点を図示した（図63）。【小結】Pit 4堆積土出土土器がIV群土器、中期後葉であることから、縄文時代中期後葉以前に廃絶していたと考えられる。

第2号竪穴住居跡 [SI02] (図37)

[位置と確認] 1R-21グリッド他に位置する。IV層上面で検出した。【重複関係】無し。【規模・平面形】長軸336cm、短軸253cmの不整隅丸方形を呈する。東西壁は大きく外側に膨らむ。【堆積土】4層に分層できた。4層は床面上に部分的な堆積を示し、3層は壁際を中心に堆積していることから、周囲からの流入土と考えられる。1層堆積以前は炉が露出する窪地状態だが、1層の堆積によって一気

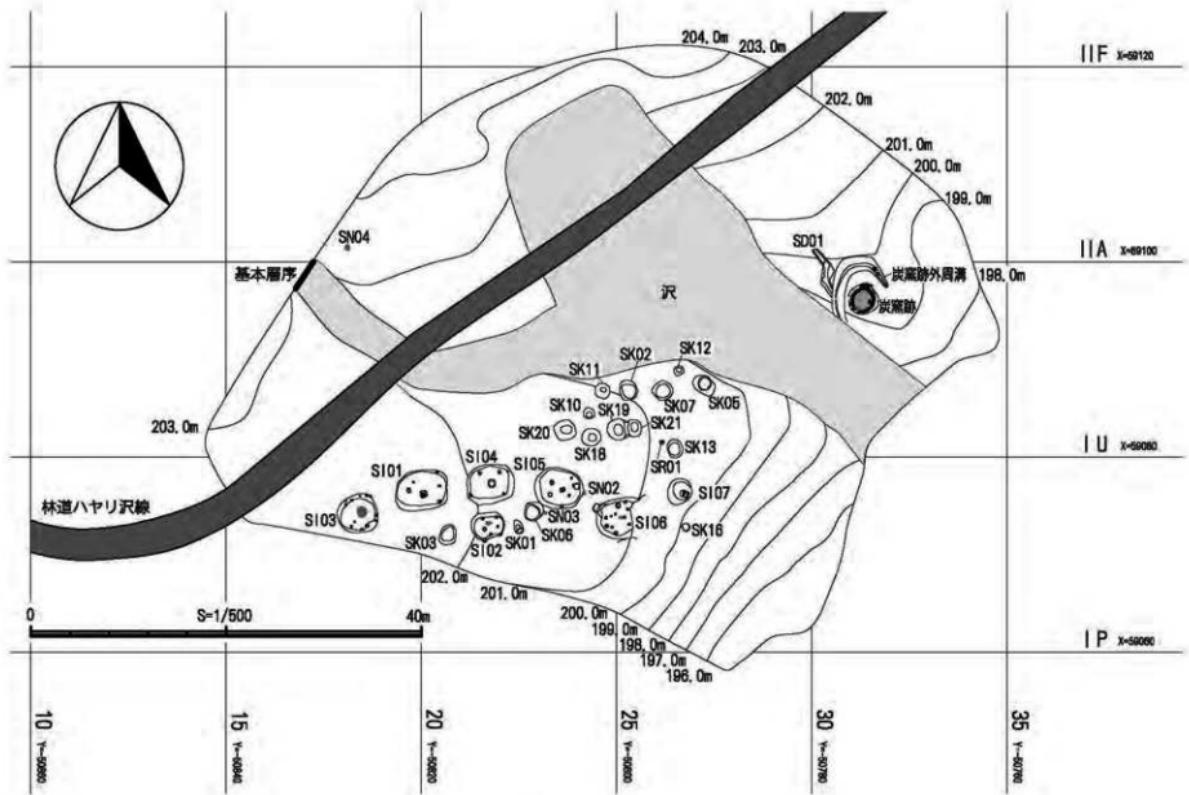


図35 鬼川辺(3)遺跡 遺構配置図

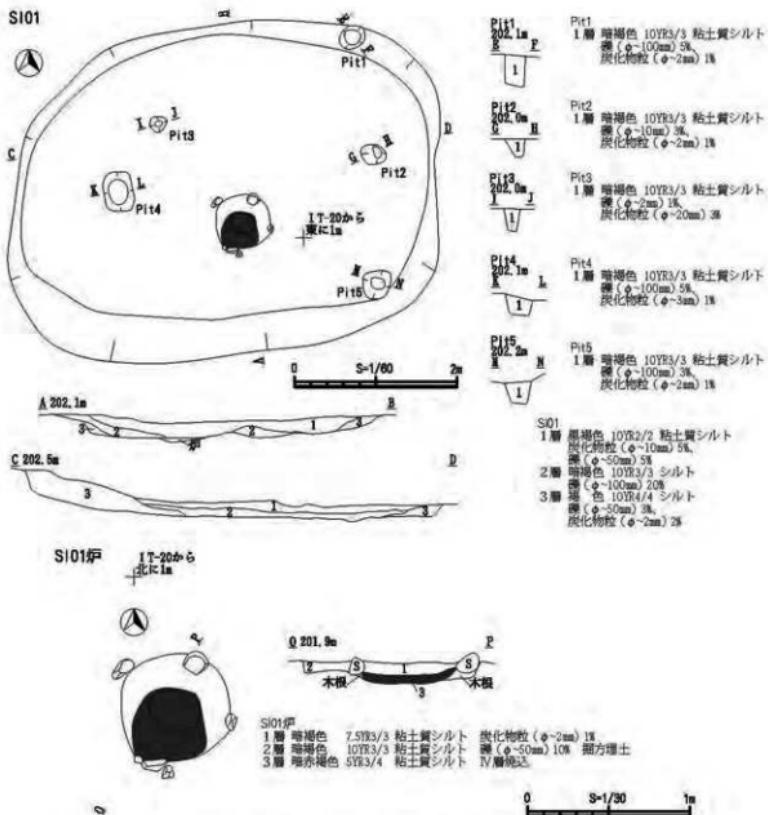


図36 鬼川辺(3)遺跡 第1号竪穴住居跡

に埋没していることがわかる。混入物には大型の礫が含まれ、遺物出土数は増加し、図示可能な土器は1層出土からの出土が多数を占める。このことから、1層堆積時には周囲からの廃棄行為が行われていたと考えられる。【壁面・床面】壁面は北側でやや開き気味に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。また床面から壁の最高点までの比高差は36cmを測る。【柱穴】7基検出した。Pit 4・5は南側壁から貼り出すように位置し、対になる。また、平面位置ではPit 2・3が北壁際で対になり、いずれも主柱穴になるとされる。堆積土は黒色～暗褐色の粘土質シルトで、礫を一定量混入している。いずれも単層で、柱痕は確認できなかった。【炉】地床炉をPit 2・3・6・7に囲まれた、床面中央やや北寄りで検出した。床面上に僅かな窓があり、その内部に焼土の堆積を確認した。焼土は周囲の床面より高く盛り上がっている。長軸65cm、短軸39cmの不整楕円形で、焼土の厚さは11cmを測る。

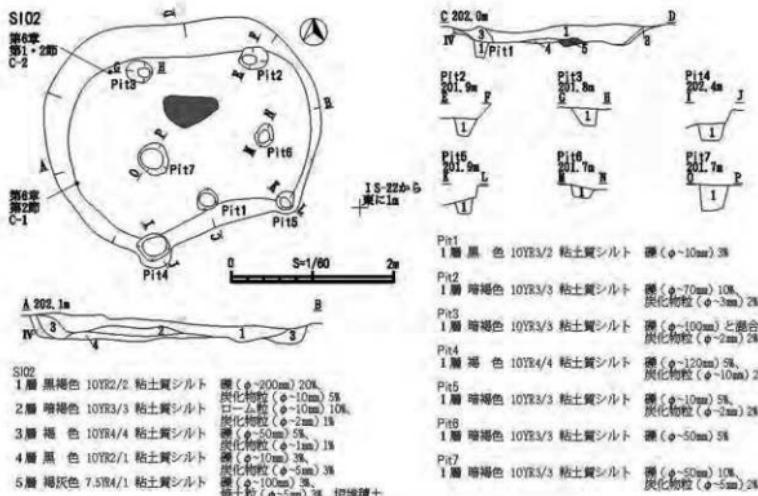


図37 鬼川辺(3)遺跡 第2号竪穴住居跡

【出土遺物】縄文土器は781点、5968.0g出土した。いずれも堆積土中からの出土である。この内23点を図示した(図50)。時期別ではⅢ・Ⅳ群土器が出土したが、Ⅲ群土器が主体となっている。石器は23点、1423.3g出土した。このうち、礫石器2点が床面から出土した。その他は堆積土中からの出土である。床面出土の2点を含む礫石器3点と剥片石器6点を図示した(図63・64)。

東壁際から出土した炭化材の1点(C-1)を放射性炭素年代測定した結果、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正ありで4400±20yrBP、IntCal10データベースを用いた曆年較正年代(2σ)で3093calBC-2927calBC(95.4%)との結果を得た(第6章第1節)。また同一試料を樹種同定した結果、クリとの結果を得た(第6章第2節参照)。この他、クリの炭化子葉が1点堆積土から出土している。【小結】放射性炭素年代測定の結果及び出土遺物の様相から、縄文時代中期中葉頃に機能していたと考えられる。

第3号竪穴住居跡 [S103] (図38)

【位置と確認】IS-17グリッド他に位置する。IV層上面で検出した。【重複関係】無し。【規模・平面形】全体としては長軸408cm、短軸400cmの不整円形を呈する。北西隅と南西隅は大きく丸みを帯び、西側だけ見ると圓丸形的な形状となる。【堆積土】2層に分層できた。2層の堆積により床面の大半が一気に覆われ、窪地状態となったところに1層が流入している。【壁面・床面】壁面は西側でやや開き気味に立ち上がるその他は明確な立ち上がりを確認できなかった。床面はほぼ平坦である。床面積は11.7 m²を測る。また床面から壁の最高点までの比高差は29cmを測る。【柱穴】12基検出した。大きく南北に6基ずつ分かれて分布している。いずれも単層で、柱痕は確認できなかった。暗褐色～褐色の粘土質シルトが堆積している。【炉】地床炉を床面中央より検出した。床面上に僅かな窪みが

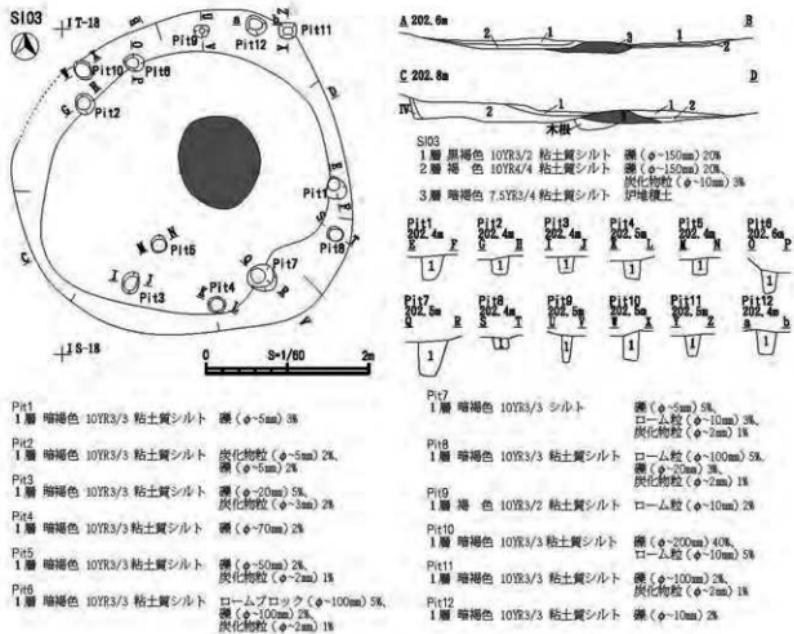


図38 鬼川辺(3)遺跡 第3号竪穴住居跡

あり、その内部に焼土の堆積を確認した。焼土は周囲の床面より高く盛り上がっている。平面形は梢円形を呈し、長軸116cm、短軸100cm、焼土厚は17cmを測る。【出土遺物】縄文土器は14点、161.4g出土した。内訳をみると、Pit 1から1点、2.4g、Pit 5から1点、8.0g、Pit 6から1点、11.3g、Pit 10から1点、12.3g、Pit 11から1点、11.0g、他は堆積土からの出土である。時期別ではIII、IV、VII群土器が見られる。この内4点を図示した(図50)。Pit内出土遺物は2基から各1点ずつ図示したが、いずれもVII群土器に比定される。石器は8点、1694.1g出土した。このうち、床面から剥片石器2点、礫石器1点が出土した。また、炉の確認面から剥片石器3点が出土し、Pit 10から剥片石器1点が出土した。その他の石器は、堆積土中からの出土である。床面出土の3点と炉から出土の3点のうち2点、Pit 10から出土した1点の計6点を図示した(図64)。【小結】堆積土出土遺物の所産時期は主に縄文時代中期中葉～後葉であるが、Pit出土遺物は縄文時代後期初頭と時期差を伴っている。住居廃絶後の最も初期的な堆積土であるPit埋没土から共通して出土している点から、縄文時代後期初頭頃に機能していた可能性が高い。このため縄文時代中期中葉～後葉の土器は、堆積土流入に伴うものと捉えておきたい。

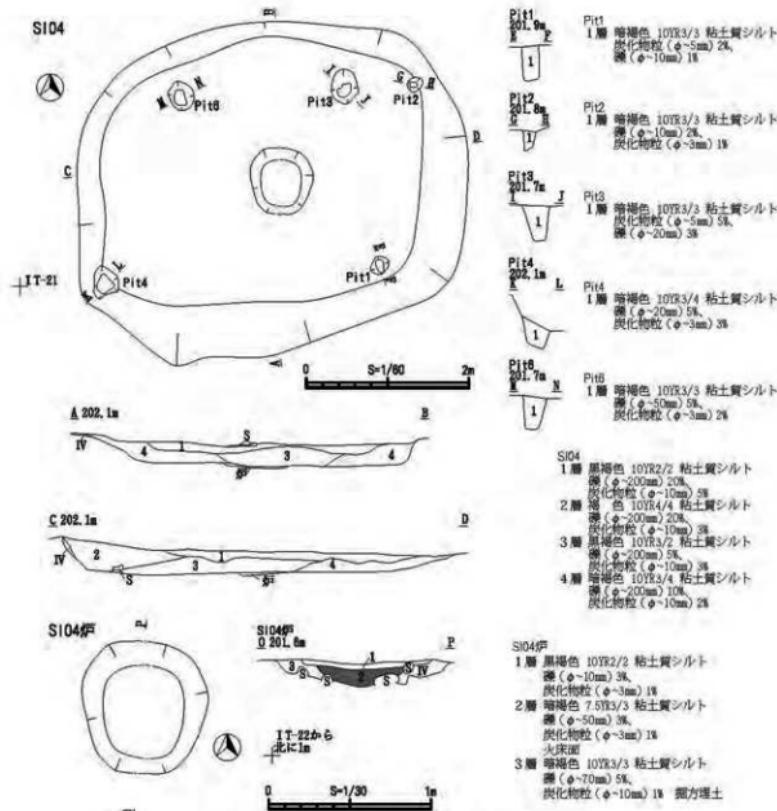


図39 鬼川辺(3)遺跡 第4号竪穴住居跡

第4号竪穴住居跡 [S104] (図39)

[位置と確認] 1S-21グリッド他に位置する。Ⅲ層上面で検出した。[重複関係] 無し。[規模・平面形] 長軸479cm、短軸400cmの開丸方形を呈する。北西側の丸みが大きくなっている。[堆積土] 4層に分層できた。始めに西壁側以外の壁際に4層が堆積する。この時点では炉は露出している。3層は4層によって形成した大きな窪地を埋めている。2層はさらに西壁側にできた小規模な窪地を埋没させ、微窪地となった部分に1層が堆積している。[壁面・床面] 北壁と西壁はやや開きながら立ち上がるが、南壁はさらに大きく開いている。東壁は明確な立ち上がりを確認できない。床面はほぼ平坦である。床面積は16.6m²を測る。また床面から壁の最高点までの比高差は47cmを測る。[柱穴] 5基検出した。Pit 1・2・4・6を住居隅で検出したが、Pit 2は掘り込みも浅く平面形も小さいため、

主柱穴としては西側に隣接するPit 3が該当するものと思われる。いずれも単層で、柱痕は確認できなかった。【炉】床面中央で検出した。長軸80cm、短軸75cmの方形を呈する。深さは16cmを測る。礫を多く混入するIV層を掘り込み、掘方埋土の3層で形を整えている。堆積土は2層に分層できた。2層は焼土の堆積層で、火床面にあたる。1層は黒褐色粘土質シルトで、住居内堆積土と類似する。

【出土遺物】縄文土器は1036点、8131.2g出土した。内訳はPit 1から1点、10.2g、Pit 3から1点、13.6g、Pit 5から5点、28.3g、その他は堆積土及び確認面からの出土である。この内26点を図示した(図51・52)。時期別にみると、Ⅲ・Ⅳ群土器が多く出土している。図51-13は第5号竪穴住居跡と遺構間接合している。石器は38点、15599.5g出土した。このうち、床面から剥片石器1点と礫石器1点が出土した。また、Pit 3から剥片石器2点、Pit 10から剥片石器1点が出土した。その他の石器は、堆積土や確認面からの出土である。床面出土の1点を含む礫石器計10点と床面出土の1点とPit内出土の2点を含む剥片石器計15点を図示した(図64~66)。

【小結】出土遺物の様相から縄文時代中期中葉～後葉頃に機能していたと考えられる。

第5号竪穴住居跡 [S105] (図40)

【位置と確認】1S-23グリッド他に位置する。IV層上面で検出した。【重複関係】第2号焼土遺構と東側で重複し、本遺構が古い。また南側に第6号土坑が接するように位置するが、明確な重複関係は確認できなかった。【規模・平面形】長軸505cm、短軸418cm、東西壁側が大きく外側へ膨らみ、梢円形に近い隅丸方形を呈する。【堆積土】5層に分層できた。5層は床面中央炉付近にのみ堆積が見られる。4層は壁際全面に堆積しており、壁際から流入したものと判断できる。3層から2層堆積時に窪地となった部分を埋没させ、西側に残存した微窪地に1層が堆積する。【壁面・床面】壁面はいずれも大きく開きながら立ち上がり、北壁と東壁はごく僅かしか残存していない。南壁は上部でさらに大きく開くよう傾斜が変化する。床面は中央に向かい僅かに播鉢状の傾斜が見られる。床面積は17.2m²を測る。また床面から壁の最高点までの比高差は51cmを測る。【柱穴】7基検出した。Pit 1は平面規模が長軸61cmと大きく、掘り込みが20cmと浅いことから、柱穴ではない可能性がある。いずれも単層で、柱痕は検出できなかった。【炉】石圓炉を床面中央で検出した。板状の礫を立て、一部溝状に掘り込んだ掘方に褐色土の3層を充填している。火床面はIV層が直接被熱しており、堆積土は単層で、周辺の住居内堆積土より暗い。長辺に2個、短辺に1個配置し、方形を形成している。規模は長軸54cm、短軸40cm、深さ21cmを測る。【出土遺物】縄文土器は557点、4612.8g出土した。内訳をみると、床面から3点、46.5g、Pit 1から3点、20.2g、Pit 2から7点、53.2g、Pit 4から7点、60.9g、Pit 7から2点、12.4g、他は堆積土中からの出土である。この内17点を図示した(図52)。時期別にみると、Ⅱ～V群土器まで見られるが、本調査区の竪穴住居跡の中では唯一V群土器が一定量出土している点が特徴といえる。いずれも堆積土中からの出土である。図51-13は第4号竪穴住居跡と遺構間接合している。石器は21点、13172.7g出土した。すべて堆積土中からの出土である。このうち、礫石器5点、剥片石器7点を図示した(図66～68)。

【小結】出土遺物の様相から縄文時代中期中葉～後葉頃に機能していたと考えられる。

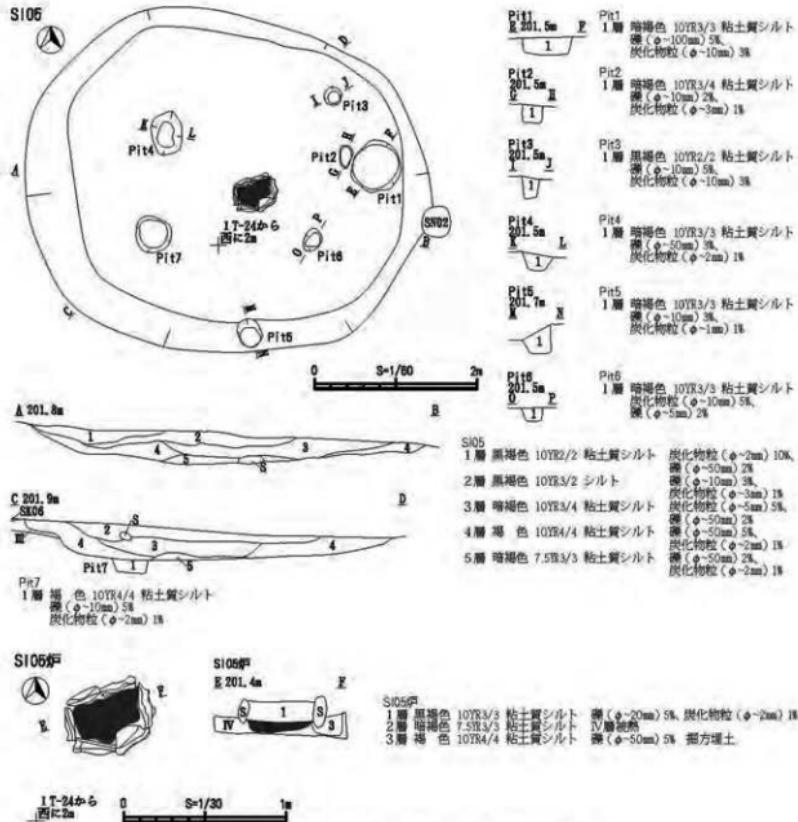


図40 鬼川辺(3)遺跡 第5号竪穴住居跡

第6号竪穴住居跡 [SI06] (図41)

[位置と確認] I R-24グリッド他に位置する。III層上面で検出した。[重複関係] 東側で風倒木痕と重複しており、本造構が壊されている。[規模・平面形] 残存部分で長軸415cm、短軸363cmの隅丸方形を呈すると推測する。南西隅は大きく丸みを帯びている。また床面から壁の最高点までの比高差は62cmを測る。[堆積土] 3層に分層できた。西壁側に3層が堆積後、2層が床面を一気に覆い、窪地状態になる。窪地は均一ではなく、南側はやや大きく開いた状態となっている。この窪みは1層の堆積によって埋没している。[壁面・床面] 残存する壁面はいずれも大きく開きながら立ち上がる。床面は西から東に向かってやや傾斜している。床面積は13.6m²を測る。また床面から壁の最高点までの比

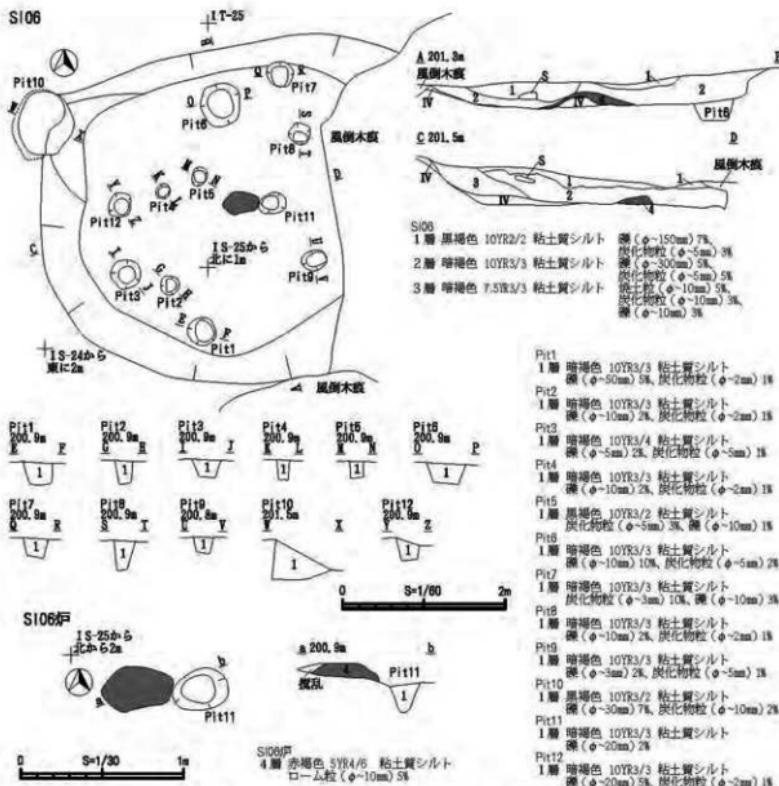


図41 鬼川辺(3)遺跡 第6号竪穴住居跡

高差は62cmを測る。[土坑・柱穴] 12基検出した。この内Pit10は北西隅の壁面を抉るように掘り込んでおり、袋状土坑となっている。柱穴としてはPit 1・3・12が西壁側で似た形状を持つ。一方東側は風倒木痕に壊されており詳細は不明である。Pit 7が類似する形状であり、Pit12と対になる可能性がある。いずれも単層で、柱痕は検出できなかった。[押] 地床炉を床面中央で検出した。長軸40cm、短軸26cmの橢円形を呈する。焼土の厚さは9cmを測る。床面上にIV層の掘り残しと思われる高まりがあり、その周囲に焼土が堆積している状況であった。[出土遺物] 織文土器は2500点、23222.3g出土した。内訳はPit 1から7点、64.5g、Pit 7から10点、55.8g、その他は堆積土及び確認面からの出土である。この内46点を図示した(図53~55)。時期別にみると、量的な中心はⅢ群であるが、Ⅱ~V・Ⅶ群土器まで確認でき、幅広い時期の土器が混じっている状況である。図54-2は第13号土坑と遺構間接合している。石器は40点、6167.7g出土した。すべて堆積土や確認面からの出土である。

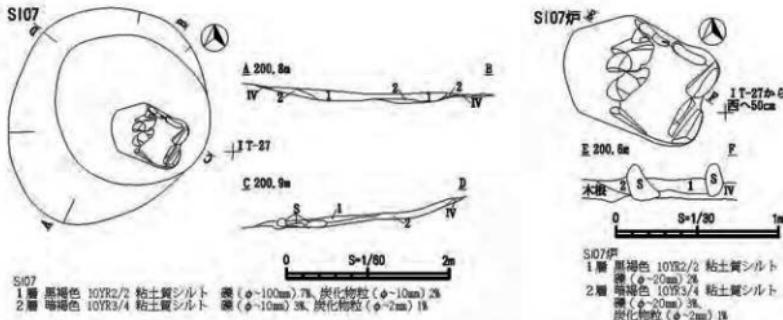


図42 鬼川辺(3)遺跡 第7号竪穴住居跡

このうち、硬玉製の磨製石斧を含む砾石器5点と剥片石器12点を図示した（図68・69）。[小結] 出土遺物の様相から縄文時代中期中葉頃に機能していたと考えられる。

第7号竪穴住居跡 [SI07] (図42)

[位置と確認] I-S-26グリッド他に位置する。IV層上面で検出した。[重複関係] 無し。[規模・平面形] 長軸275cm、短軸242cmを測り、本調査区の竪穴住居跡の中でも最も小型である。南東側は斜面となっており、上端が検出できなかった。床面の形状から判断すると、平面形は円形に近い形状を呈すると思われる。また床面から壁の最高点までの比高差は42cmを測る。[堆積土] 2層に分層できた。壁際や床面上を中心に2層が堆積するが、床面を全面覆うまでは至らず、残りを1層が覆う。[壁面・床面] 壁は床面からの明確な立ち上がりが確認できず、壁面として捉えることが困難である。床は斜面の傾斜方向である東側に向かって緩やかに傾斜する。床面積は5m²を測る。非常に小型であることや、壁面が明瞭でないことから、周間に一段高いテラス状の床面が存在していた可能性もある。[柱穴] 検出しなかった。[炉] 石囲炉を床面中央より斜面寄り、南東側で1基検出した。長軸95cm、短軸69cm、深さは11cmを測る。床面に占める炉の占有率が非常に高くなっている。南側と北側は板状の礫を2個立てて並べているが、西側は厚みのある礫を用いている。炉としたが、焼土の検出はできなかった。[出土遺物] 縄文土器は9点、177.6g出土した。この内2点を図示した（図55）。時期別にみると、Ⅲ群土器が見られる。いずれも堆積土中からの出土である。石器は2点、459.1g出土した。出土層位は堆積土や確認面からである。砾石器1点、剥片石器1点全て図示した（図69）。[小結] 本調査で検出した竪穴住居跡としては最も小型であり、炉の壁側への偏在や斜面を向くように隣接して構築される点など、他の竪穴住居跡と比較して異なる点が多い特徴を持つ。このような特徴を持つ竪穴住居跡として、5m²程の床面積で複式炉を構築している、八戸市田代遺跡第56号竪穴住居跡（青森県教委2011）が挙げられる。この遺構は縄文時代中期末葉に位置付けられている。本調査区全体から出土した縄文時代中期末葉の出土遺物はごく僅かだが、形態的特徴も加味し、縄文時代中期末葉頃に機能していた可能性を挙げておきたい。

(浅田)

(2) 土坑 [SK] (図43・44)

総数15基検出した。平面分布は竪穴住居跡と同様、いずれも調査区南側、調査区中央を横断する沢と美山湖に挟まれた、馬の背状の緩傾斜地に立地する。竪穴住居跡の検出範囲の北側、調査区中央の谷に面した縁辺部を中心に検出している。重複が少なく、意図的に重複しない構築場所を選地しているものと思われる。遺物は繩文土器と石器が出土した。繩文土器は2353点、18932.1g出土した。重量比で最も多く出土した第2号で506点、5015.5g、次いで第13号の562点、3888.1g、第6号の503点、3057.0g、第1号の275点、3039.1g、第3号の196点、1901.2gと続く。その他は1000g未満の出土量となっている。出土層位はいずれも堆積土や確認面からで、底面など遺構機能時に伴うものは無く、埋没過程で廃棄、流入したものと捉えられる。この内49点を図示した(図55~59)。石器は総点数33点、22976.2g出土した。その出土層位は、堆積土や確認面からである。このうち、礫石器11点、剥片石器13点を図示した(図69~71)。

平面形はいずれも円形を基調としているため、断面形を基準とし、以下のように分類した。さらに細分可能な場合はその都度基準を提示した。

I群：断面形状がフ拉斯コ型を呈するもの。第2・5・7号が該当する。いわゆるフ拉斯コ型土坑で、沢に面する段丘縁辺部に3基並んだ状態で検出した。土坑の北側は沢に向かって急傾斜となる。いずれもIV層上面での検出である。平面形は不整円形を呈するが、断面形を見るといずれも開口部が大きく開くこと、堆積土に壁面崩落土の流入が観察できることから、機能時は最も径の小さい中間部分の平面形状である円形を呈するものと推測する。開口部の径はいずれも長軸200cmを、深さは100cmを超える。堆積土はいずれも自然堆積の様相を呈する。いずれも1~3層は黒褐色~暗褐色の色調を呈するが、4層以下は褐色やぶい黄褐色が増加し、礫の混入が増加するなど、廃棄行為に伴う流入土である可能性が高い。壁面の抉れはそれほど大きくない。底面はほぼ平坦である。底面からの遺物出土は見られなかった。堆積土中からは繩文土器を中心に出土している。これは堆積土の記述で述べたように、4層以下が人為的な廃棄行為に伴う流入土であることと関連するものと考える。第2号では完全形の深鉢が逆位で出土しており(図56-1)、単純に投棄されたものではなく、意図的に置かれた可能性もある。第2号の出土土器を時期別にみるとⅢ・Ⅳ群土器が多く、Ⅴ群土器が僅かに含まれる。

II群：断面形状が逆台形を呈するもの。

a類：掘り込みが深いもの。第11・18・19・20・21号が該当する。

b類：掘り込みの浅いもの。第1・3・6・10・12・13・16号が該当する。さらに平面規模で細分できる。

1種：平面規模が長軸・短軸共に150cm以上。第3・6・13号が該当する。

2種：平面規模が長軸・短軸共に150cm以下。第1・10・12・16号が該当する。

a類はI群の南西側、1U-24グリッド周辺に纏まりを見せる。第18号は、断面形状以外は開口部の規模や堆積土の状況など、I群と類似点が見られる。第11号や第20号も開口部の規模は類似する。第19号と第21号は数少ない重複遺構で、第19号が新しい。出土遺物はⅢ~Ⅴ群土器が中心だが、隣接する第18号と第20号から出土した図58-12はⅦ群土器、繩文時代晚期で、遺構間接合している。

b類1種では、堆積土の様相が単純なものが多い。第13号は第1号埋設土器遺構の東側に隣接しており、接合資料が出土している。また、第6号竪穴住居跡堆積土出土土器と本遺構確認面出土土器が遺構間接合する(図54-2)。その他にもⅢ群土器を中心に土器の出土が見られる。第6号は第5号竪穴住居

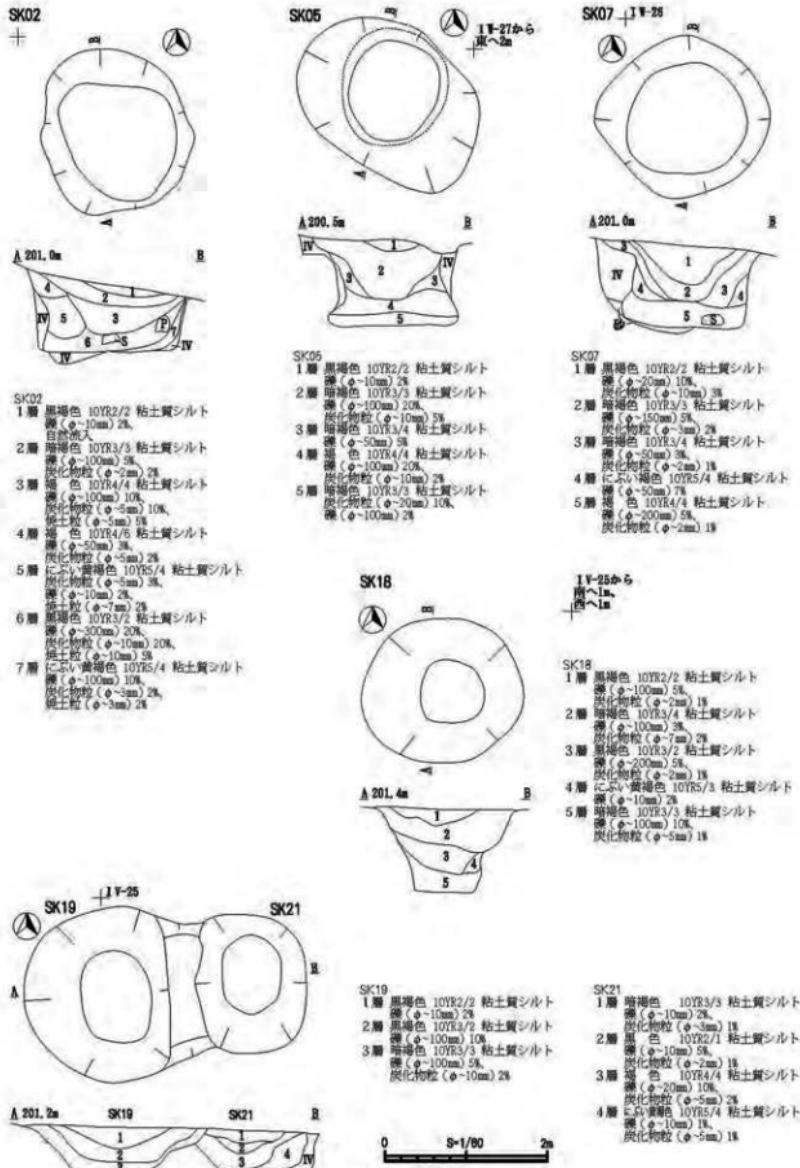


図43 鬼川辺(3)遺跡 土坑-1

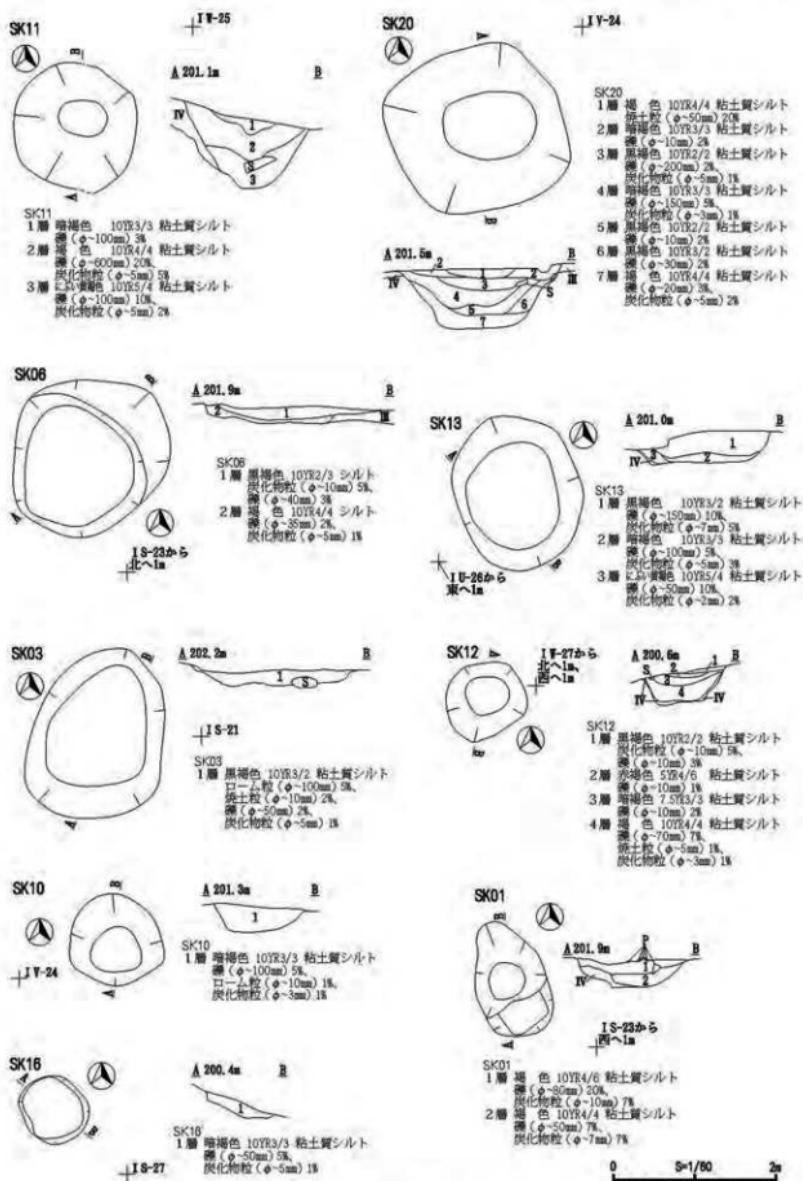


図44 鬼川辺(3)遺跡 土坑-2



図45 鬼川辺(3)遺跡 土器埋設遺構



図46 鬼川辺(3)遺跡 焼土遺構

跡や第3号焼土遺構と隣接する。また第3号は第1・2・4号竪穴住居跡と等間隔で接する位置にある。このように、Ⅰ群やⅡ群a類の分布範囲からさらに南側へ範囲がずれている。b類2種の分布は特に纏まりが見られず、竪穴住居跡や土坑の各群類の分布範囲内に散在するが、重複するものは1基も無い。出土土器は隣接する竪穴住居跡の様相と共に通する傾向にあり、第1・3号は第2号竪穴住居跡と同様にⅢ群土器が、第6号は第5号竪穴住居跡と同様にⅤ群土器の出土が見られる。(浅田)

(3) 土器埋設遺構 [SR] (図45)

I-U-26グリッドで1基検出した。現代の切株除去を行っていた際にⅢ層上面で確認した。当初は土器埋設遺構と判断できず、一部の取り上げを行ったが、途中でほぼ1個体埋まっていることを確認したことから土器埋設遺構と認定した。調査段階では口縁部を欠いている状態であったが、整理段階で確認面出土の口縁部と一部接合した。また隣接する第13号土坑から出土した破片との遺構間接合を確認している。正立状態で埋設しており、他の個体が混在している様子は確認できなかった。掘方塗土はⅣ層起源のにぶい黄褐色粘土質シルトで、掘方構築時に出土した土を使用しているものと思われる。土器内部の堆積土は確認できなかった。出土土器は図59-1に示した。口縁部は外反し、平口縁となる。口縁部から胴部上半にかけて細い粘土紐縦帶を横走もしくは弧状に貼り付けている。地文繩文は単節LRとRLの結合第1種で、横方向に施文している。意図的な穿孔等の二次加工は確認でき

なかった。本調査区では唯一のⅡ群土器を伴う遺構となり、確認できた範囲では最も古くなる。

(浅田)

(4) 焼土遺構 [SN] (図46)

3基検出した。第2号は第5号竪穴住居跡の東側で重複し、本遺構が新しい。また第3号は第5号竪穴住居跡の南側、第6号土坑の東側に隣接するが、直接的な重複関係は確認できなかった。上記2基はⅢ層上面で検出し、規模が長軸、短軸とも30cm台と類似する。直接被熱した痕跡は確認できず、焼土が浅い窪地に堆積している状況である。なお、第2号の堆積土中から扁平で半円状の中心に穿孔のある石製品(図72-1)が1点出土した。

一方、第4号は、唯一調査区北西側、沢支流の北側で検出した。Ⅳ層上面で検出した。焼土が浅い窪地に堆積している状況は共通するが、長軸67cm、短軸52cmと規模が大きい点で上記2基とは様相が異なる。なお、確認面から火はじけと思われる痕跡を確認でき、被熱を受けたと思われる両面加工石器(図71-6)が1点出土した。

(浅田)

(5) 溝跡 [SD] (図47)

1条検出した。第1号溝跡はIX-30グリッド他に位置する。Ⅳ層上面で確認した。南側で炭窯跡の外周溝と重複し、本遺構が途切れている。確認した部分で全長490cm、幅は斜面上方で56cm、下方で63cmだが、中に膨らみがあり、その部分は112cmを測る。深さは最も深いところで70cmとなる。平面形はクランク状に折れ曲がっており、短い3本の直線的な溝をつなぎ合わせて構築しているものと思われる。断面形は逆台形を呈する。堆積土は2層に分層できた。2層はⅣ層起源のロームブロックを含み、掘方埋土の可能性もある。1層は暗褐色粘土質シルトで、周囲からの流入土と考えられる。出土遺物もなく、構築時期比定の検討材料に乏しい。現段階では隣接する炭窯跡との関連性を指摘するに留める。

(浅田)

(6) 炭窯跡 [SX] (図47・48)

1基検出した。IX-30グリッド他に位置する。表土除去後、Ⅳ層上面で多量の礫と焼土範囲を検出した。またその範囲を囲むように帯状の掘り込みを確認し、併せて調査を行った。調査当初は性格不明遺構として取り扱ったが、最終的に炭窯跡と判断し、取り囲む帯状の掘り込みを外周溝とした。炭窯跡は平面形が円形を呈し、直径310cmを測る。壁は基礎として亜円礫や扁平な形状の礫を石垣状に積み上げ、その隙間や表面を粘土で固めて仕上げているが、大半が強い被熱により焼土化している。積み上げた石は天井部の崩落により明確ではないが、残存しているところで4段を数える。残存壁高は62cmを測る。窯南側にある斜面下方は礫の出土が少なく、焚口と考えられる。その対面は壁面が一段奥に掘りこまれ、煙道部が構築されている。堆積土は全部で11層に分層できた。この内1~4層は窯外に位置するが、2層で硬化部分を確認できたことから、焚口部前面が作業場所であったことがわかる。5・6層は焼土塊を多量に含み、天井及び壁面の崩落土と捉えることができる。7層は底面上に堆積した細粒化した炭化物が多量に混入し黒化している。残留炭化物は製品としての炭を取り出した後、細かくて価値の低いものが残存したものと考えられる。8・9層は煙道部堆積土で、10・11

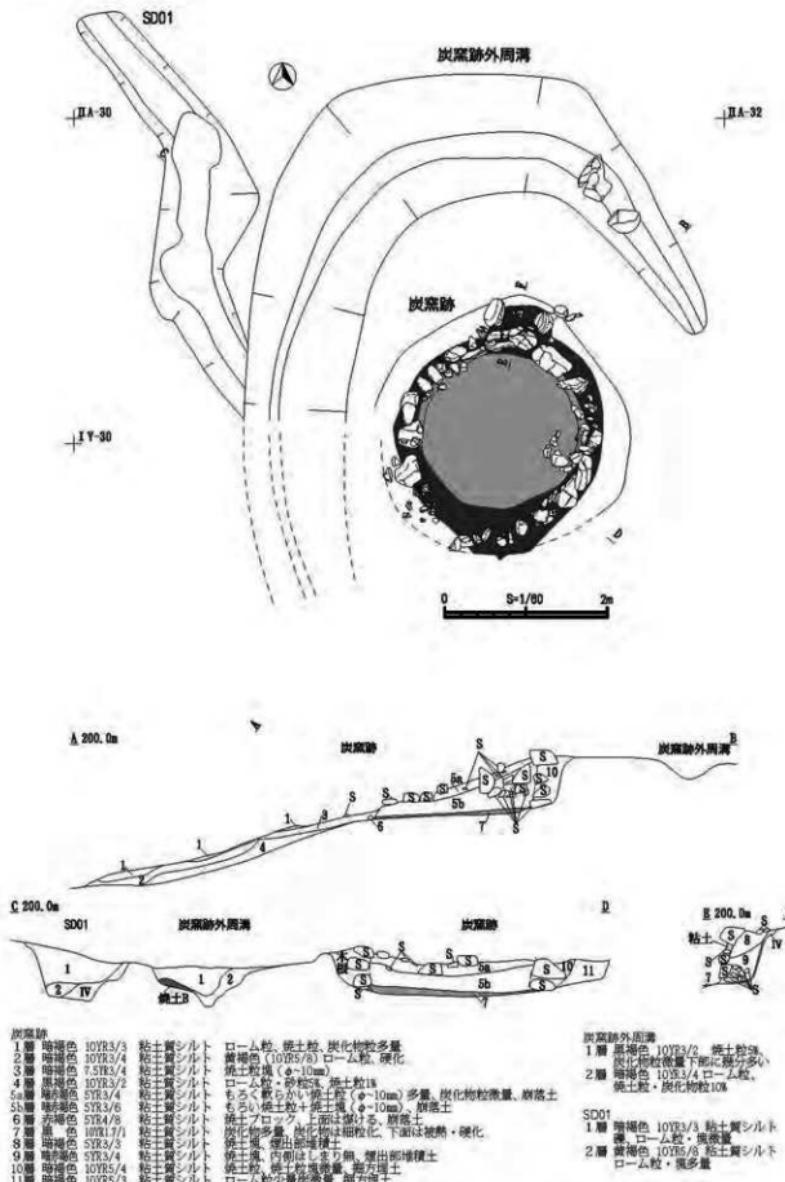


図47 鬼川辺(3)遺跡 炭窯跡-1・溝跡

層は礫を積み上げる前の掘方埋土である。7層下の底面は焼け込みが著しく、硬化していた。掘方検出時に焚口部前面でPit 1・2を、煙道部両端でPit 3・4を検出した。いずれも掘り込みが浅く、用途を推定する情報を得ることができなかった。出土遺物は炭化物のみで、4点で樹種同定を行ったところ、トチノキが3点とサワグルミが1点であった(第6章第2節参照)。

(浅田)

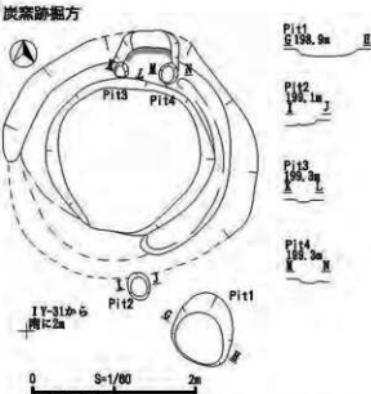


図48 鬼川辺(3)遺跡 炭窯跡-2

第2節 出土遺物

(1) 繩文土器 (図49~61)

総数10129点、91603 g出土した。鬼川辺(1)遺跡や鬼川辺(2)遺跡と比較し、点数比、重量比とも約7倍となっている。この内、遺構外からの出土は2128点、21911.8 gである。このことから、本調査で出土した繩文土器は大半が遺構内からあると言える。また、遺構外出土遺物の出土分布を見ると、調査区西側で僅かに出土が見られた以外は、大半が遺構の立地する調査区南側に集中している。このことから、繩文時代の活動範囲が調査区南側に限定的であったことを窺わせる。また、調査区中央に存在する谷については、沢に面した土坑に廃棄行為が確認できたことから、遺物の廃棄に伴う流入等の利用があるものと想定していた。しかし、結果的には遺物出土自体が皆無に近く、廃棄行為を含め、意図的な沢の利用が無かったものと思われる。遺構内出土土器については、床面出土遺物が非常に少なく、遺存状況も良好ではない。大多数が堆積土及び確認面からの出土であり、遺構埋没過程の窪地を利用した廃棄行為に伴うもの、もしくは周辺からの流入土に伴う混入によるものと捉えることができる。この内、遺構内外を合わせ217点を図示した。諸特徴により以下のように分類を行った。

I群：地文繩文上に細い粘土紐による隆帯貼付を行い、棒状工具による連続刺突を隆帯に沿って施文する。中期中葉、円筒上層c式に比定される(小笠原2008)。遺構外から出土した5点を図示した(図59-2・3・5~7)。図59-2・3は接合しないが、胎土や焼成に類似点が見られることから、同一個体の可能性が高い。また図59-5~7も同様に同一個体の可能性が高い。図59-2・3は波状口縁を持ち、波頂部に穿孔を施している。細い隆帯を弧状に施文し、隆帯間を先端のやや角ばった棒状工具で浅い連続刺突を施している。一方図59-5~7は、波状口縁で細い隆帯を弧状に施文し、隆帯間には先端が矢印上に鋭利になった薄いヘラ状工具を用い、細かな連続刺突を施している。いずれも胎土に細粒軽石を含む砂粒を多く混入している。

II群：地文繩文上に細い粘土紐による弧状の隆帯貼付のみによる施文を行う。中期中葉、円筒上層d式に比定される(小笠原2008)。遺構内外から出土した5点を図示した(図49-3、図52-12、図53-1)

12、図59-1・11)。第1号竪穴住居跡出土の図49-3は外反する平口縁で、肥厚する口縁部に波状の隆帯を施文している。外面の隆帯は剥離が著しいため文様は不明だが、横方向に施文されていたと推測する。第5号竪穴住居跡出土の図52-12は厚手で結束第1種の羽状繩文を施文している。隆帯は断面形が円形に近い。胎土に海綿骨針が含まれている。第6号竪穴住居跡の図53-12は波状口縁で、非常に細い隆帯を貼り付けている。波状口縁の頂部中央に瘤状の粘土粒貼付が施され、隆帯はそこから縦方向に2本平行に垂下する。また口縁に沿って波状に隆帯が施文される。また瘤状粘土粒右下に補修孔のような小さい穴が開けられているが、外面に粘土の盛り上がりが確認できることから、焼成前に穿孔している。第1号土器埋設遺構出土の図59-1は第13号土坑資料と接合している。平口縁で、口縁部が短く外反し、底部で窄まる器形をしている。口唇部は肥厚し、剥離のため一部しか残存していないが、横方向へ波状の隆帯が施されていたものと推測する。胸部は結束第1種の羽状繩文を横方向に施文後、隆帯による横方向の弧状文を施文している。縦方向の区画は見られない。内面は丁寧なミガキが施されている。本遺跡I群のような胎土への砂粒混入は目立たない。遺構出土の図59-11は波状口縁で、外面は細い隆帯を波状に施文するが、隆帯上を押さえるような連続刻目が観察できる。隆帯間の刺突は観察できないことから本群に含めた。内面には「ハ」の字状に沈線施文が施される。

III群：口縁部を中心に粘土紐による隆帯貼付を行い、胸部は沈線による横方向の弧状文を主体的に施文する。中期中葉、円筒上層e式に比定される(小笠原2008)。器形全体が判別できるものは少ないものの、出土量は本遺跡I・II群と比較し、大幅な増加となっている。79点を図示した(図49-4・11、図50-1~7・9・11~14・16・24、図51-1~8、図52-11、図53-1~11・13~16、図54-1~6・9、図55-15・18~20、図56-1・2・11~14・16・17、図57-1・6、図58-2・4~6・11、図59-4・8~10・12、図60-1・2・4・5・9~11、図61-5)。器形は胸部から口縁まで大きく聞くように外傾するもの(図51-1、図53-2、図56-11、図57-1、図58-4・11、図60-4・5、図61-5)、胸部が直立気味に立ち上がり、口縁部が外反するもの(図53-1・15・16、図54-2、図56-1、図60-1)、胸部が丸みを持ち、頸部が括れ、口縁部が外反するもの(図54-9、図56-1)が見られる。口縁部は平口縁も見られるが、3~4単位の波状口縁になるものが多い。波状口縁の頂部形態は、頂点が尖る山形(図50-5・24、図51-3~6・8、図52-11、図53-1・3~8・11・13・15・16、図54-1・2・9、図55-19、図56-1・12・14・16・17、図58-2・4、図59-9、図60-4・5)、頂部に平坦部を作出する台形(図50-1・2・4、図51-1・2、図52-1~6・8、図52-11、図53-2、図56-2・11、図57-1、図59-8)、台形の上部両端に突起が付随する台形(M字)(図50-3)、五角形(図50-7、図57-6、図59-10・12)が見られる。波状口縁中央部に貫通孔を伴うものがある。図53-16は対辺の頂部にも貫通孔を持ち、1対となっている。口唇部の施文は撫糸圧痕や側面圧痕および棒状工具による短沈線の刻目列が主に見られる。口縁部の隆帯施文は、口唇部や波頂部を中心に見られ、波頂部では横走や頂点からの放射状、弧状、円形が形作られる他、縁取るように貼り付けるものがある。また口唇部に直交する2本1単位の短い貼付(図56-16)も見られる。波頂部内面にも施文するものがあり、隆帯を外面同様施文するものが多い。胸部文様は2本もしくは3本の平行沈線を1単位とする弧状文が施文される。波状口縁の波頂部直下から縦方向の区画となる隆帯や沈線が垂下するものがある。縦方向に隆帯が施文されるのは第2号竪穴住居跡出土の図50-16に見られる。縦方向に沈線区画を施すのは、第6号竪穴住居跡出土の図53-15・16に見られる。15は縦方向に垂下する沈線施文後、横方向の施文を行っており、縦方向の沈線が

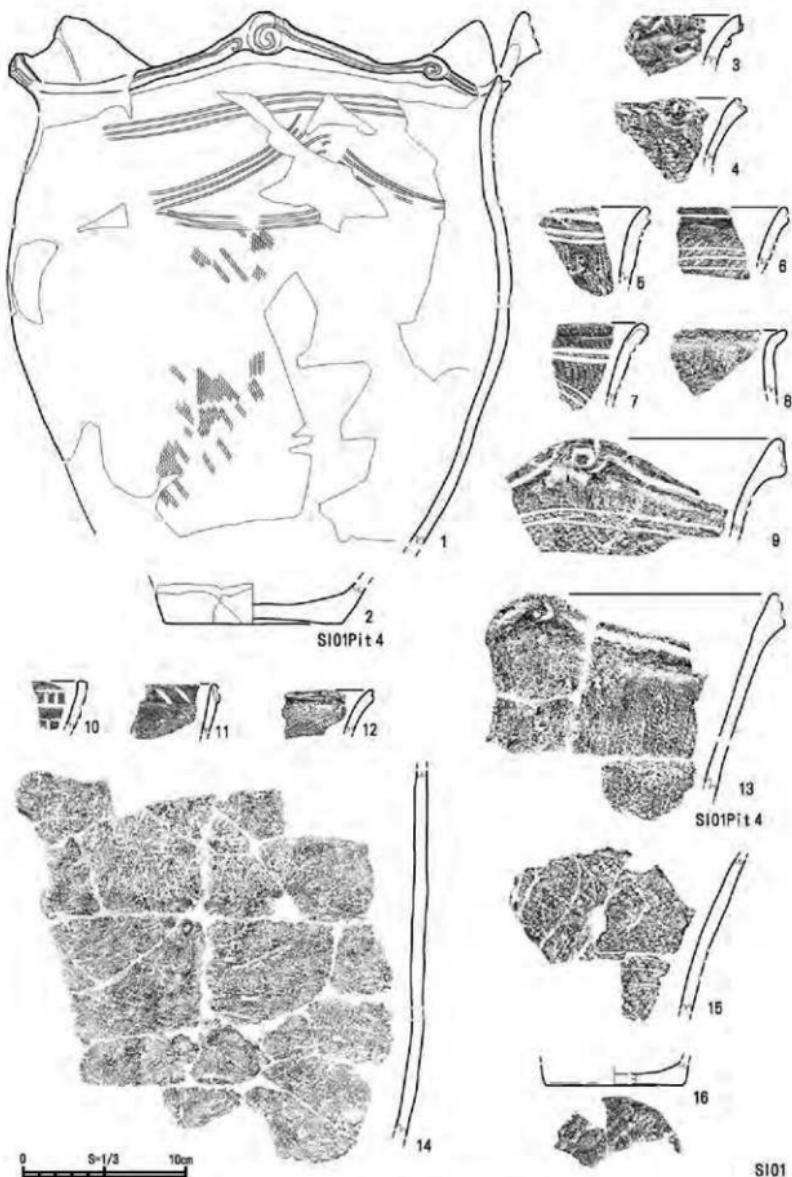


図49 鬼川辺(3)遺跡 繩文土器-1

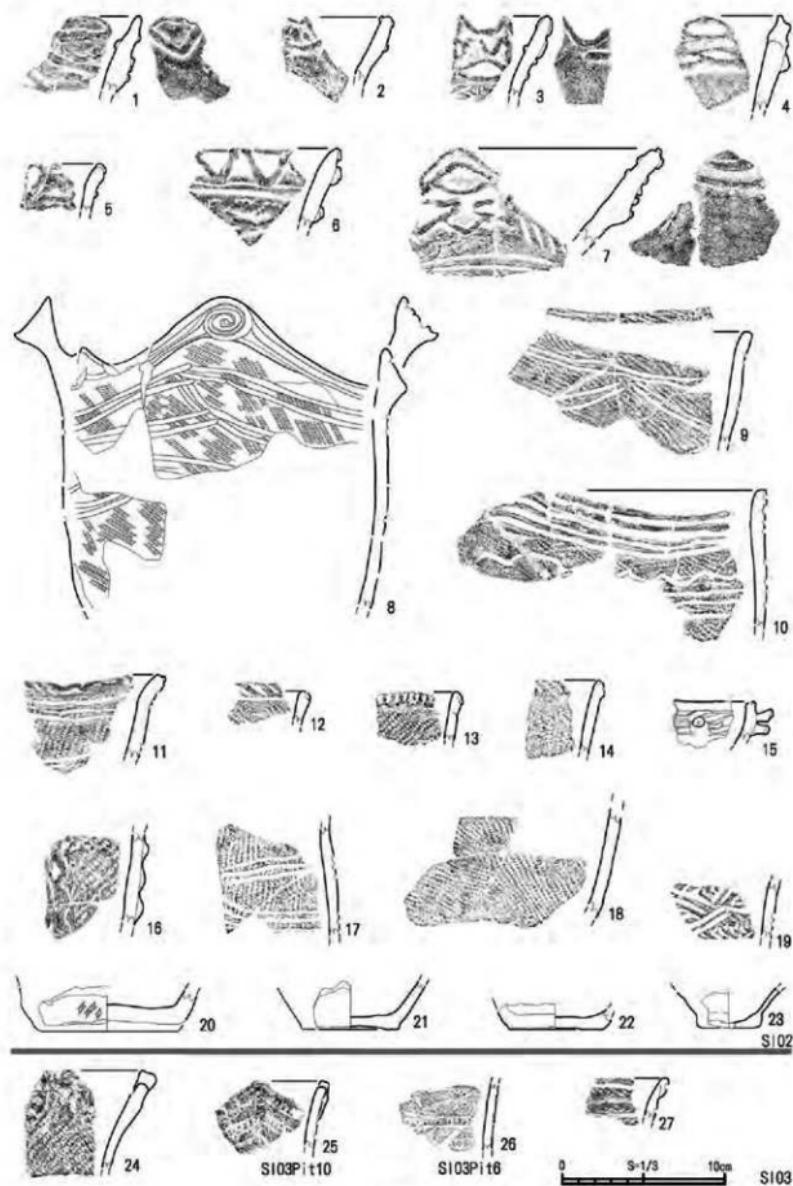


図50 鬼川辺(3)遺跡 繩文土器-2

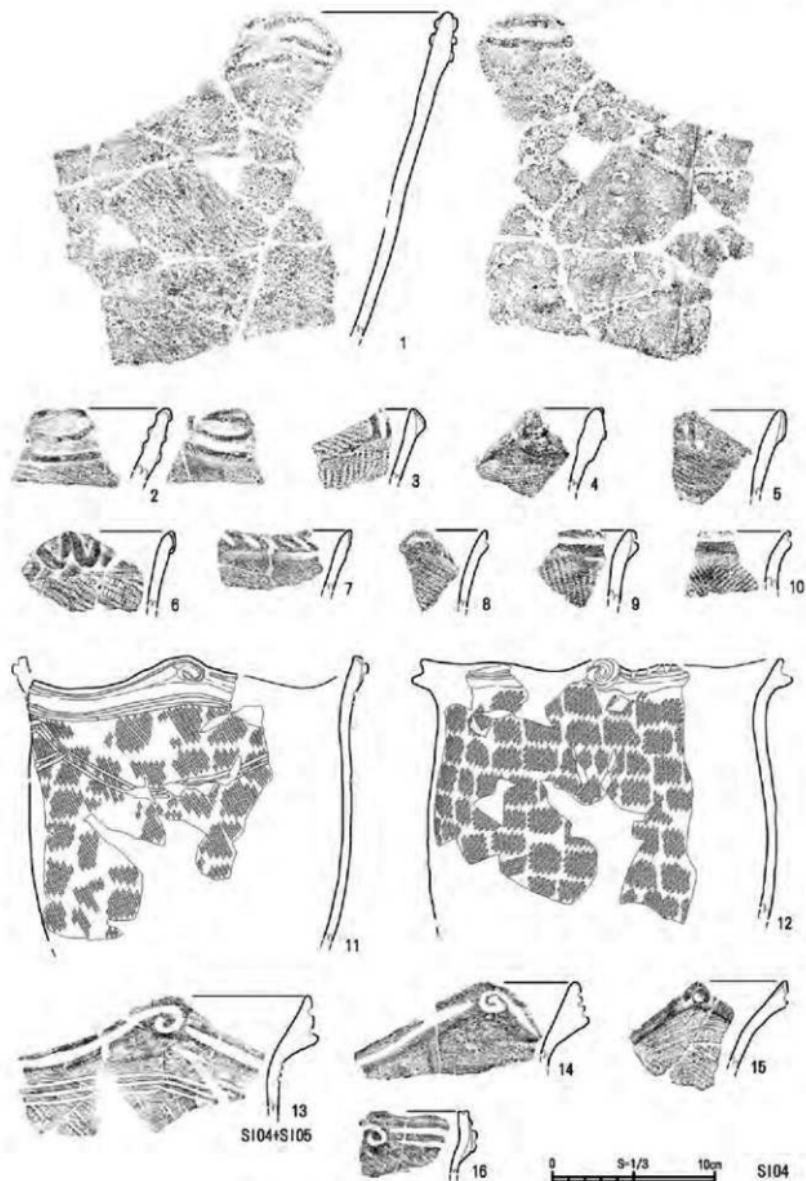


図51 鬼川辺(3)遺跡 繩文土器-3

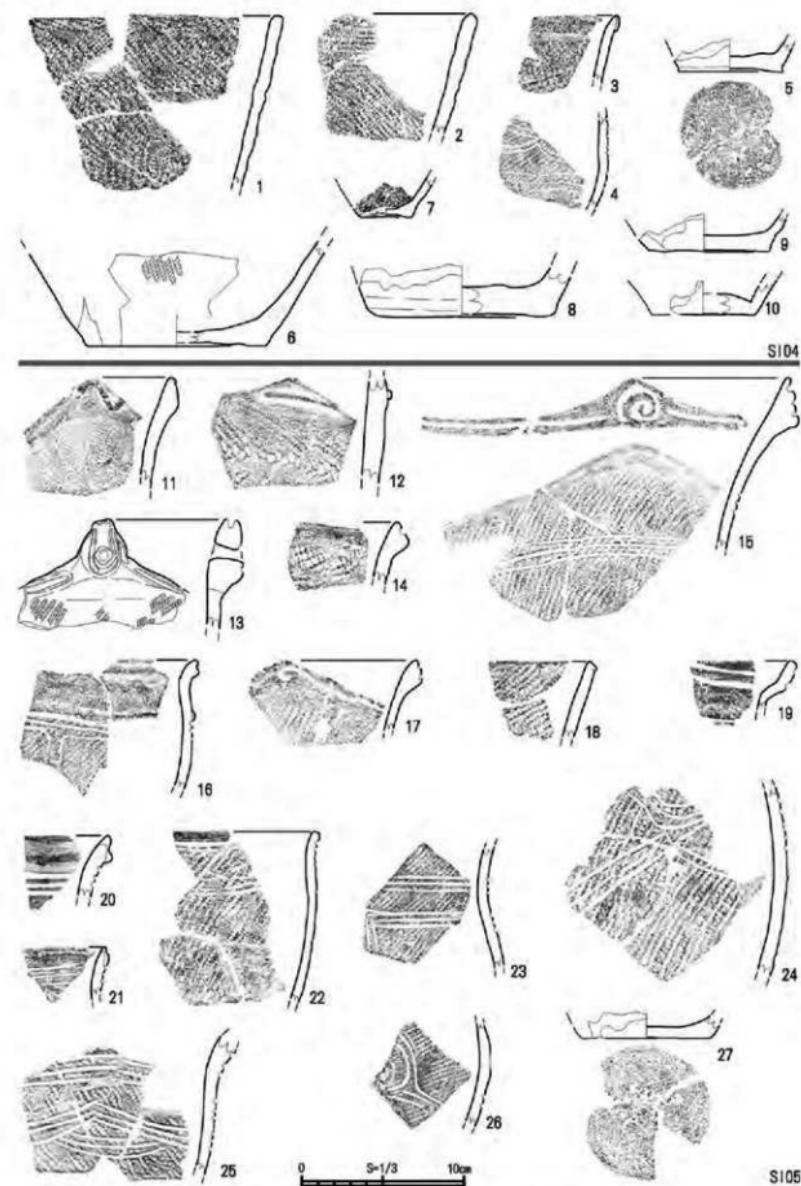


図52 鬼川辺(3)遺跡 繩文土器-4

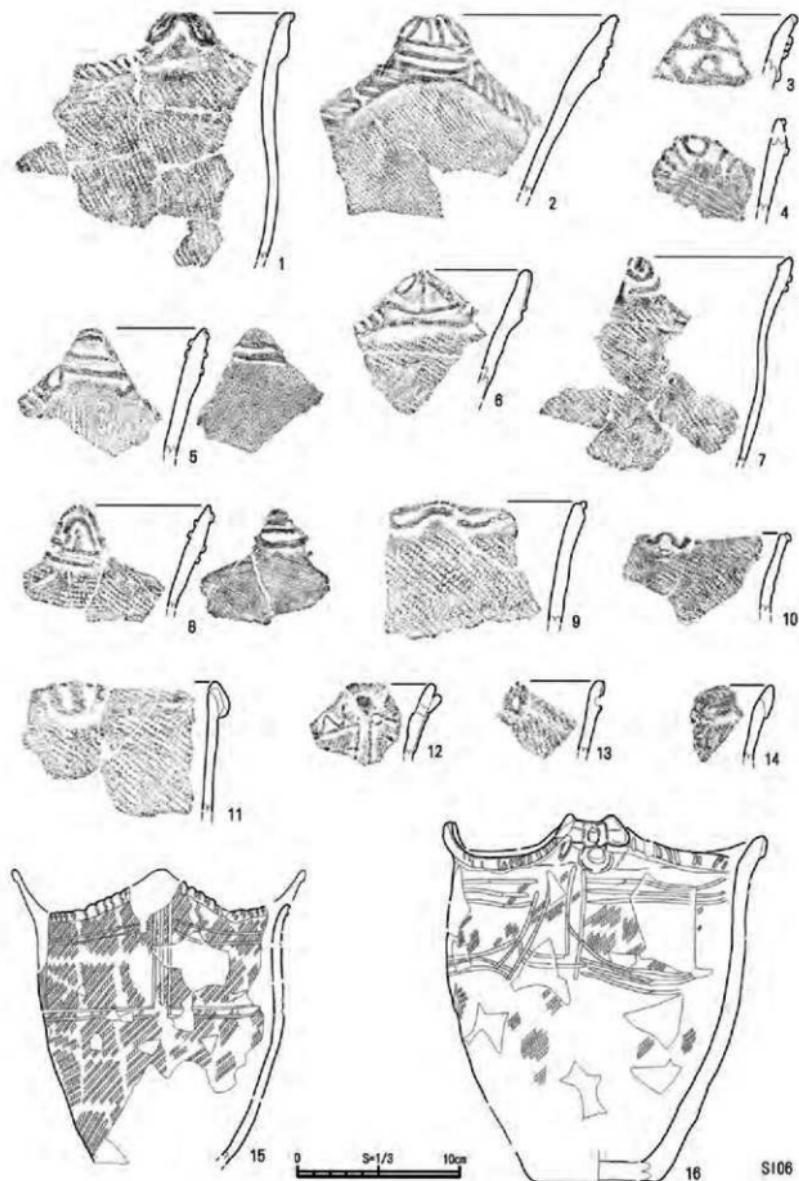


図53 鬼川辺(3)遺跡 繩文土器-5

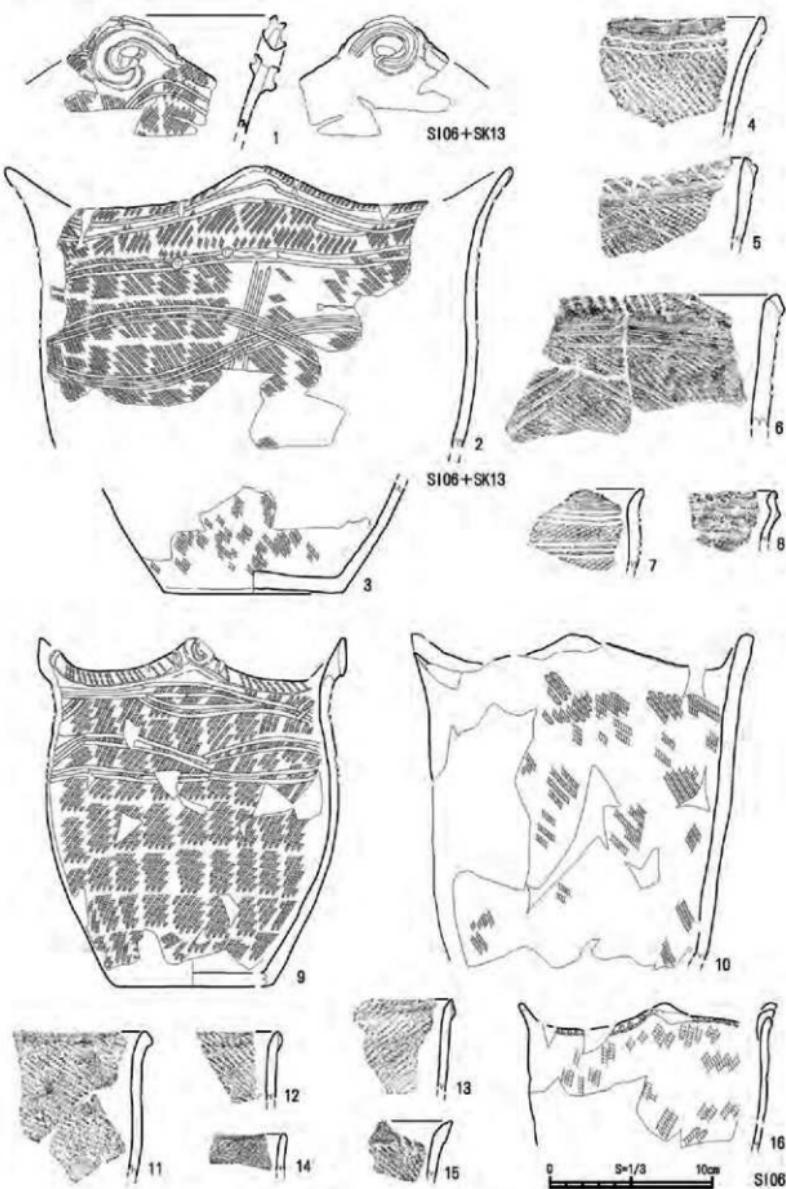


図54 鬼川辺(3)遺跡 繩文土器-6

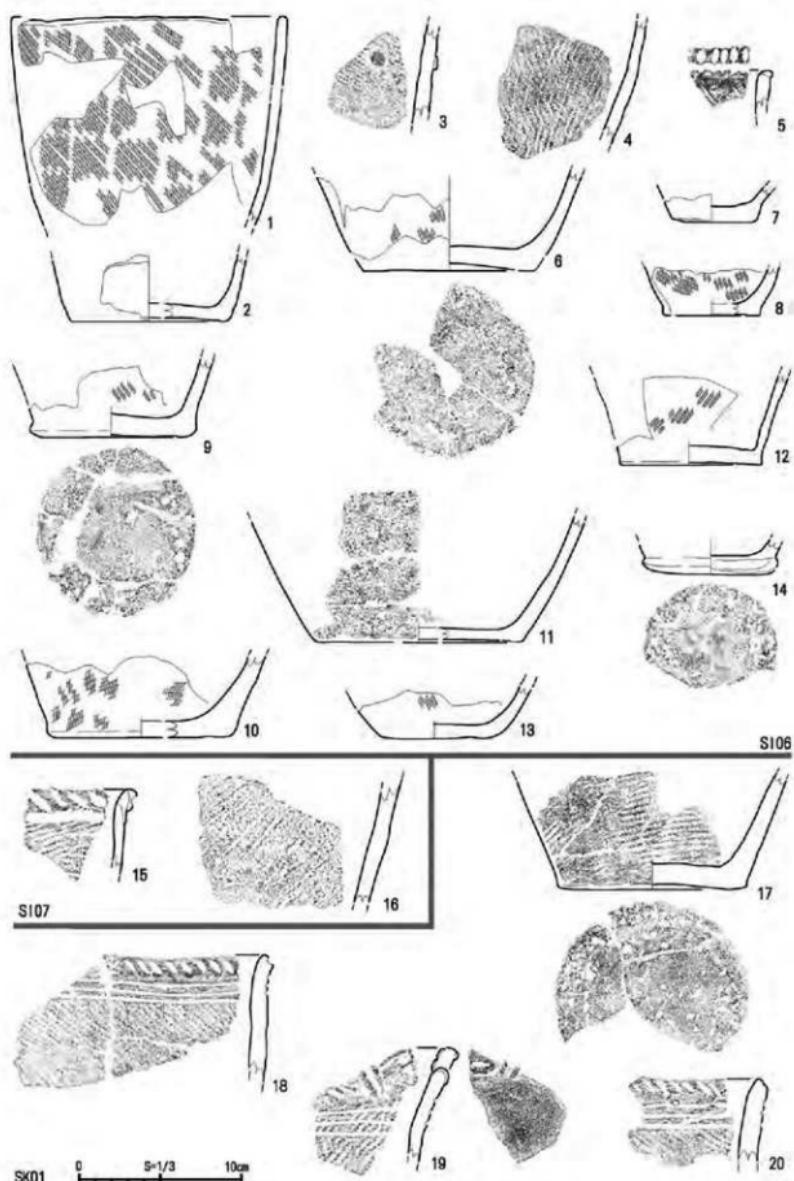


図55 鬼川辺(3)遺跡 繩文土器-7

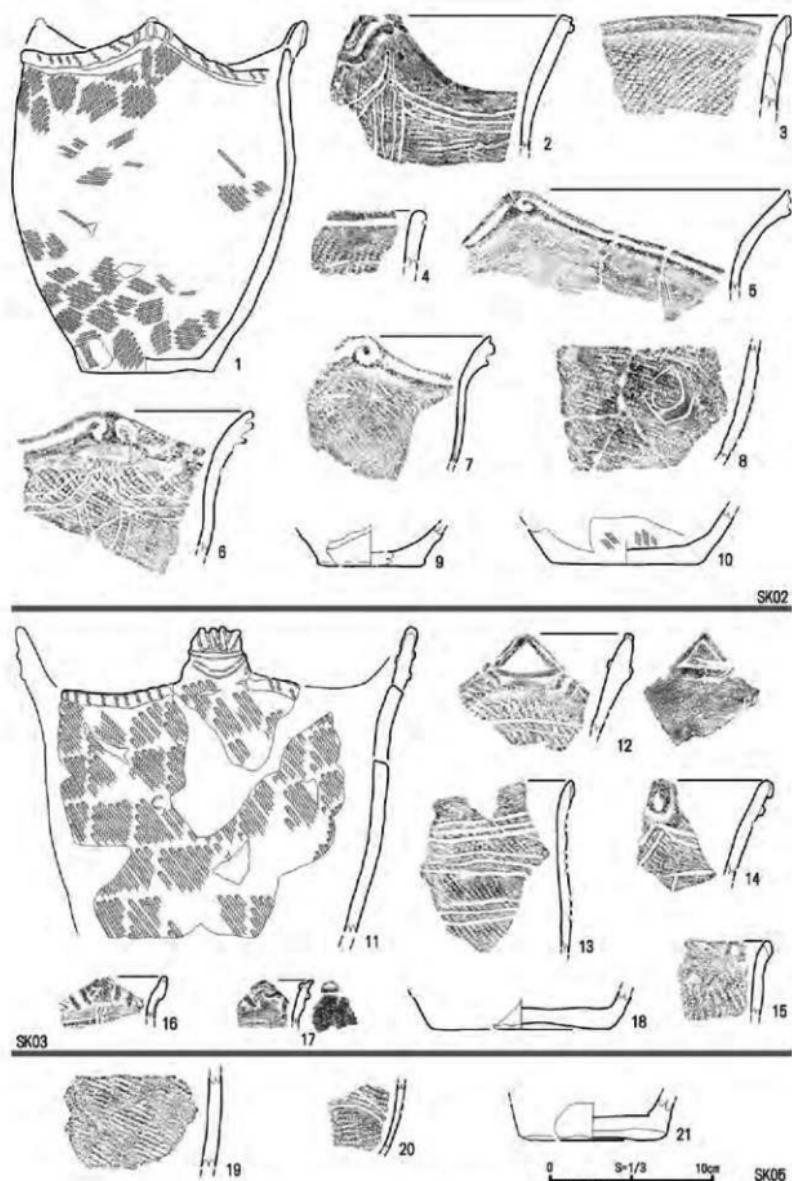


図56 鬼川辺(3)遺跡 繩文土器-8

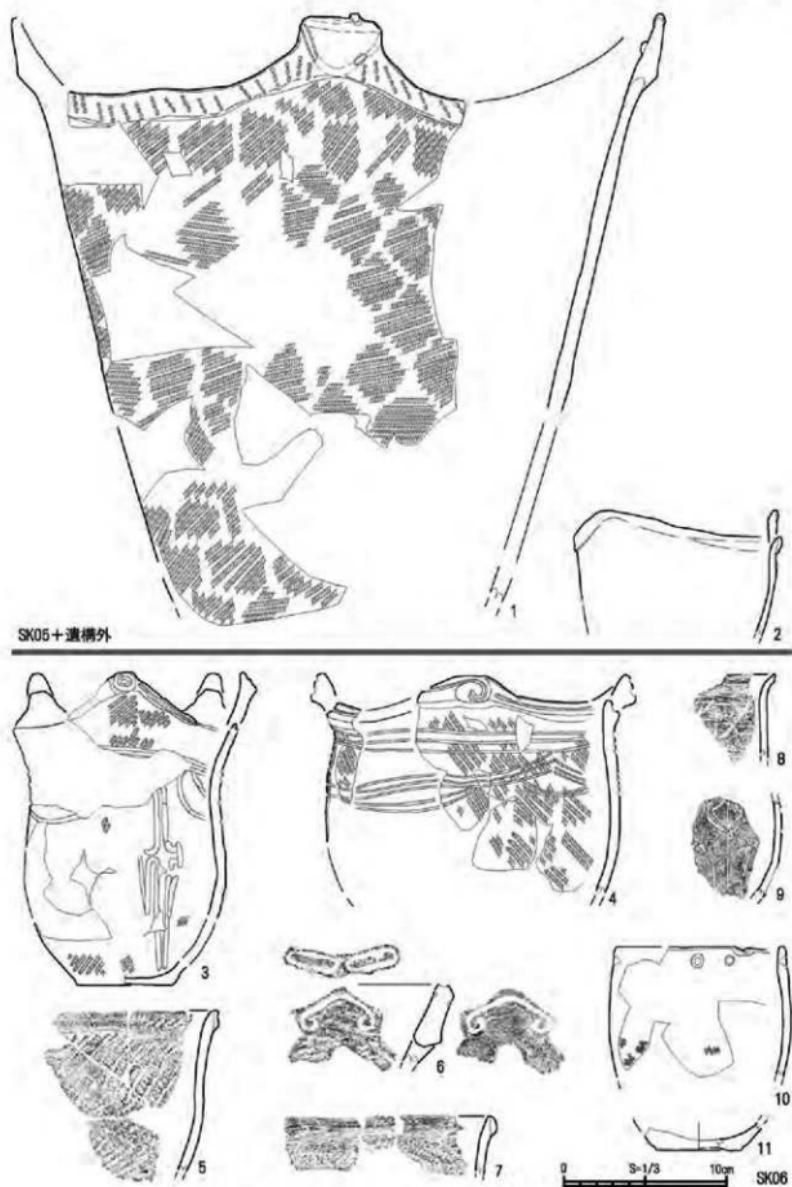


図57 鬼川辺(3)遺跡 繩文土器-9

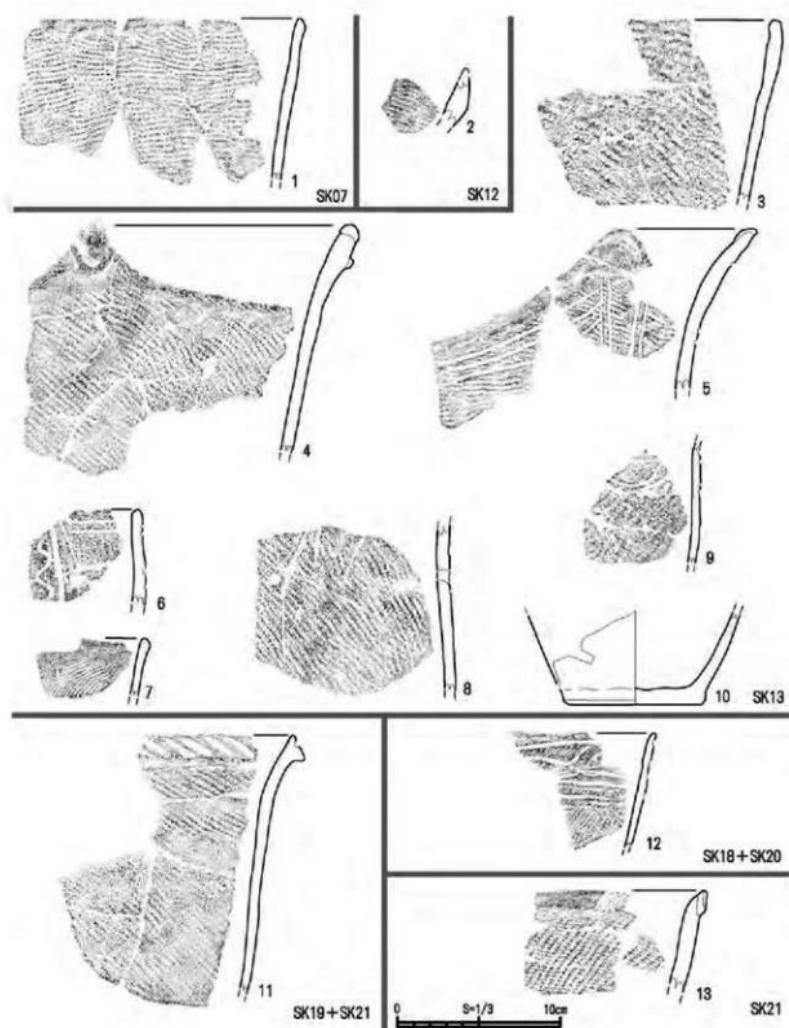


図58 鬼川辺(3)遺跡 繩文土器- 10

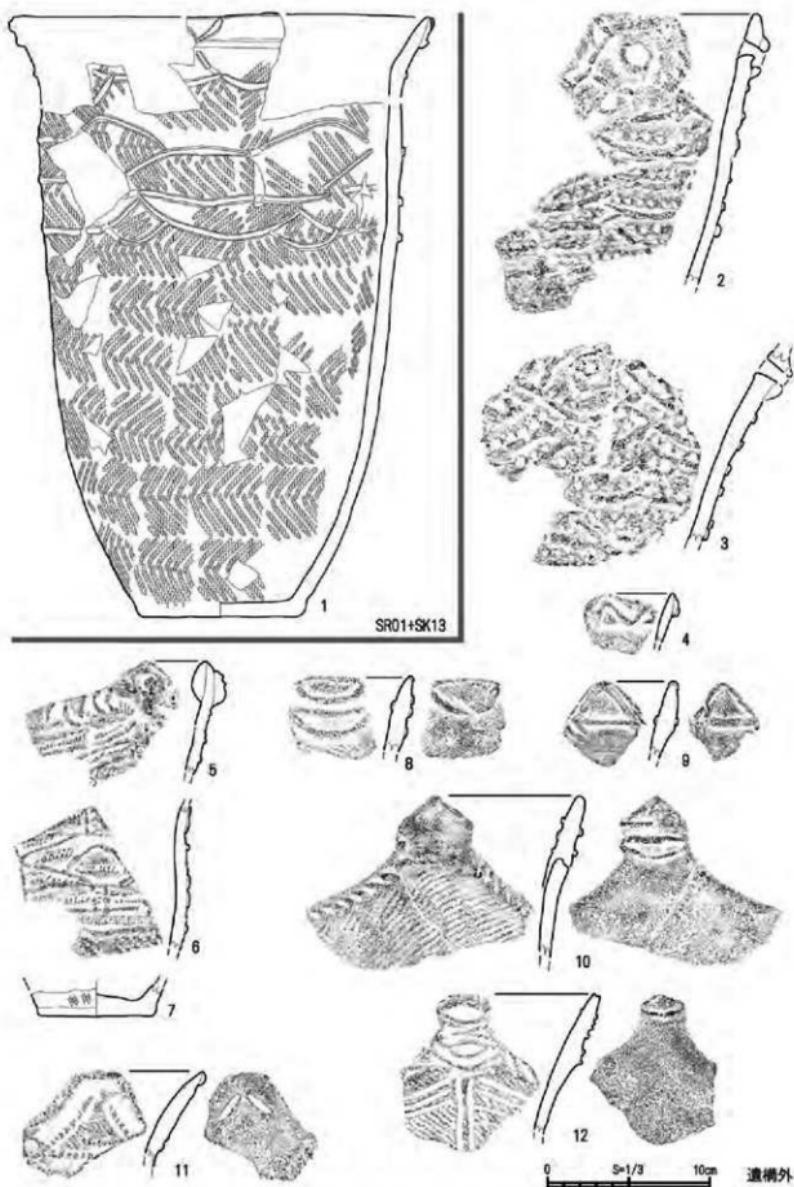


図59 鬼川辺(3)遺跡 繩文土器 - 11

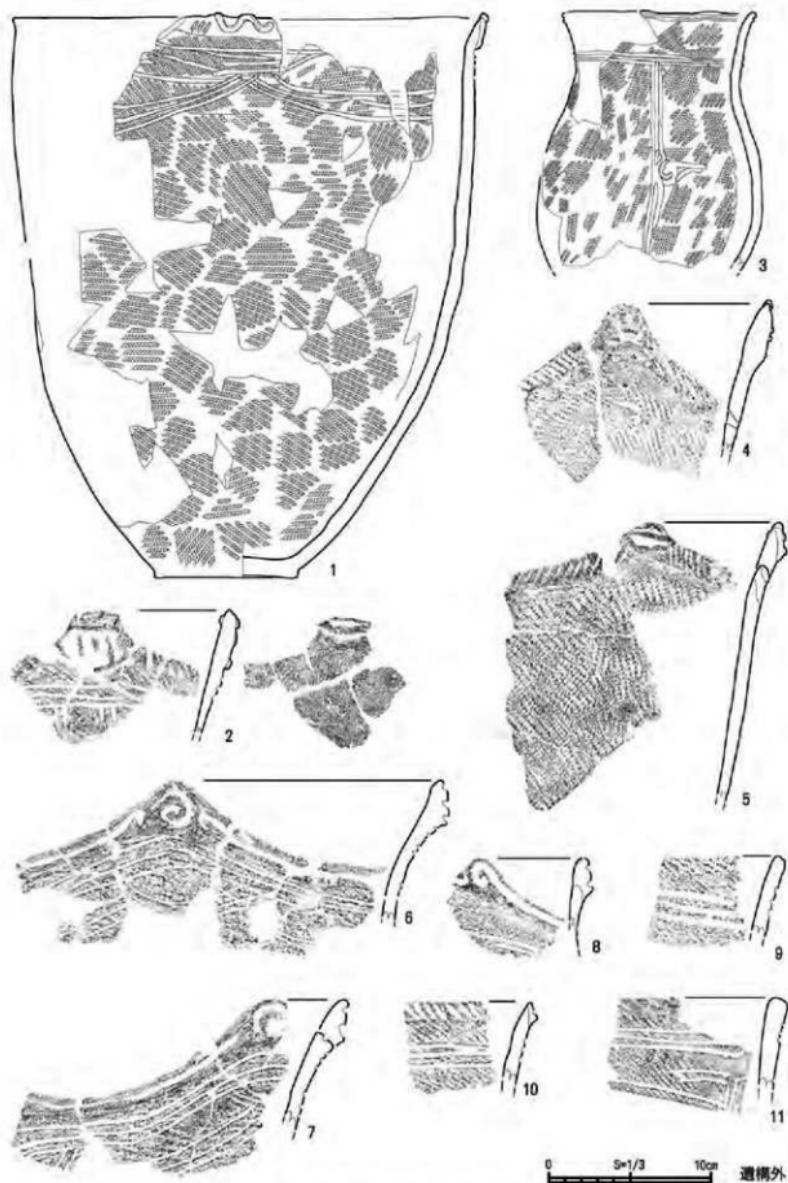


図60 鬼川辺(3)遺跡 繩文土器- 12

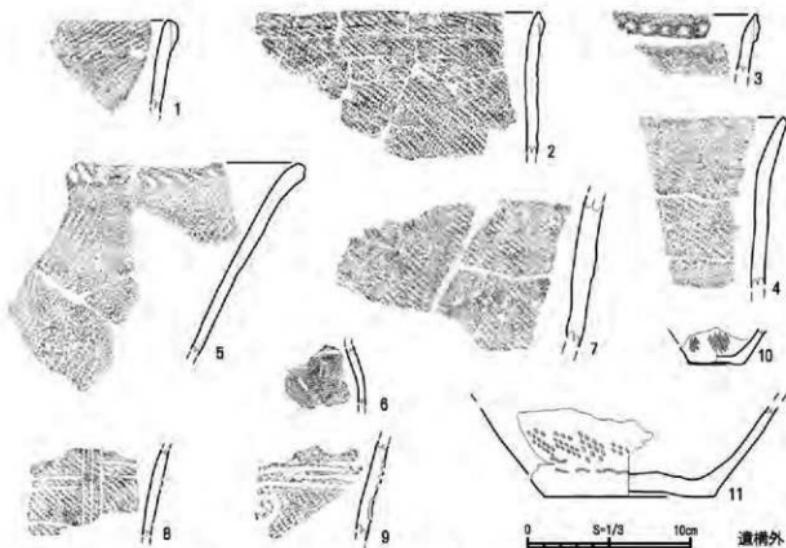


図61 鬼川辺(3)遺跡 繩文土器-13

文様区画帯の意味を成している。一方16では、2本1単位の縦方向に垂下する沈線が2単位とも波状口縁直下からはずれた位置に配置される。また縦方向沈線の下部は、それぞれやや開き気味に湾曲し、僅かに弧状化した胴部最大径部分の横走沈線と接している。縦方向の沈線下端部をつなぐように、2本1単位の弧状線が付随する。縦方向の沈線が区画の意味を失い始めるとともに、図52-25に見られるような、本遺跡IV群で基本となる沈線文モチーフの重層する弧状文への変化を見て取ることができる。

本群の中でも特に異質な土器として、図54-1～3が挙げられる。薄手の器厚と器表面の磨滅の進行具合、焼成等に類似点が多く、同一個体である可能性が高い。出土遺構は第6号竪穴住居跡だが、1・2は第13号土坑確認面から出土したものと遺構間接合する。各遺構間は6mほど離れている。1は山形の波状口縁で、波頂部の内外面に隆起となで付けによる大型の渦巻文が施文される。さらに頂部には細い粘土紹による装飾が付くが、剥離が著しく文様は不明である。渦巻文の中心は貫通孔になつてあり、内部に未調整の凹凸が観察できる。また輪積痕が貫通孔脇に観察できることから、波状口縁製作時に、構造に粘土を積み上げて貫通孔を作出したと考えられる。2は1のような装飾を持たない4単位の山形波状口縁で、口唇部には縦文施文が施される。1と同一個体であれば、波頂部の文様施文が一律でないことになる。口縁下に2本1単位の沈線を口唇部に平行に、その下部にまた2本1単位の横走平行沈線が施される。波頂部の下、横走平行沈線から下で、3本1単位の縦方向平行沈線が少なくとも胴部最大径までは施文されている。さらに3本1単位の平行沈線を上下に動かし、丁度縦

方向の沈線部分で交差するようにしているため、連続する弧線文のようになっている。この文様構成は本遺跡IV群に近い要素となっている。これらの諸特徴は本遺跡では他に例がない。1に見られる波状口縁部の渦巻文は本遺跡IV群の特徴であるが、本資料は内外面に施される点や貫通孔を伴う、粘土紐で装飾する。隆帯などで付けによる立体的な施文を行う点は本遺跡IV群に見られない特徴を伴う。本遺跡III群に伴う渦巻文としては、第6号土坑出土の図57-6が参考となる。波状口縁端部が五角形で貫通孔を伴い、内外面に沈線端部に渦巻文を施文している。頂部にも沈線で装飾がなされる。いずれも波頂部の施文に粘土紐の隆帯を用いる本群の主体的な特徴とは異なり、大木系の影響を受けた可能性がある。なお、2個1対の補修孔を胴部に確認できる。3の底部も1・2同様に器厚が薄く、磨滅の度合いが共通している。

IV群：肥厚する口唇部に凹状の沈線が施され、山形の波状口縁頂部に沈線による渦巻文が特徴的に施文される。中期後葉、櫻林I式に比定される（小保内2008）。37点図示した（図49-1・2・5～7・9・13、図50-8・10・15・27、図51-9～16、図52-13～15・17・19～22・24・25、図56-4～7、図57-4、図60-6～8）。胴部は本遺跡III群の文様モチーフをそのまま用い、2条もしくは3条1単位を中心とした平行沈線による弧状文が施文される。波状口縁部から縱方向に区画する沈線や隆帯は見られなくなり、弧状文の端部は波状口縁下からずれるものが多くなる。また弧状文は口縁部と並行する2条もしくは3条の横走沈線から下に施文されるようになる。出土量は本遺跡III群と比べ減少するが、それ以外の群と比較すると多くなっている。器形は本遺跡III群と同様に、胴部から口縁まで大きく外傾するもの（図49-13）、胴部が直立気味に立ち上がり、口縁部が外反するもの（図50-8、図51-11、図56-5～7）、胴部が丸みを持ち、頸部が括れ、口縁部が外反するもの（図49-1、図51-12、図57-4）が見られる他、口縁部が内湾するキャリバー型を呈するもの（図50-15、図51-16、図52-19）が新たに含まれる。口縁部は3～4単位の波状口縁になるもの他、3単位の波状口縁間に小規模な波頂部を3単位作出する例（図49-1、図50-8）が新たに見られる。図52-13は波状口縁の頂部を刺突し、貫通孔を閉むように沈線施文が施される。本遺跡III群、もしくは大木系の影響を受けた可能性がある。

V群：本遺跡IV群の胴部文様である弧状沈線文が無くなり、胴部下半に縱方向に垂下する沈線文や渦巻文が施文される。胴部に2条もしくは3条1単位の平行沈線による渦巻文やクランク文が見られる。口縁部と頸部の境界に横走する沈線や隆沈線による区画が施され、口縁部の文様施文が少なくなる。本遺跡IV群に後続する様相を示すものであるが、本遺跡IV群と比較して出土量が極端に減少し、遺存状況も良くない。全体像を把握できる資料が少ないことから、詳細な検討材料に乏しく、ここでは中期後葉、櫻林II式から櫻林III式にかけてに比定されるとしておく（小保内2008）。9点図示した（図52-16・23・26、図56-8、図57-3・8・9、図60-3、図61-8）。器形は概ねIV群と類似する器形になるものと思われるが、胴部が球体を呈し、頸部が短く強く外反する壺に似た器形は新たに見られるものである。第6号土坑出土の図57-3と遺構外出土の図60-3の2点を図示した。図57-3は口唇部に渦巻文と沈線が伴う波状口縁で、括れ部に2本1単位の横走沈線が施文される。さらに波頂部から右側にずれた位置で、区画沈線から縱方向の沈線施文がなされる。胴部最大径付近で一旦途切れ、左右へ伸びる。その下部は少し間隔をあけて縱方向沈線が施文される。その左側の沈線は逆U字形になっている。図60-3は平口縁で、口唇部に隆沈線を巡らし、括れ部にも区画帶となる隆沈線を巡らす。胴部は縱方向底部付近まで垂下する隆沈線を施文する。胴部最大径付近で小さな渦巻文と

横方向に伸びる棘状の隆沈線が確認できる。口縁部は地文範文のみとなる。図52-16は胴部最大径に2本1単位の平行沈線を横方向に施文し、上部に平行する隆帶が付く。平行沈線の下には1本の沈線が平行して施文され、縦方向の平行沈線部分で途切れる。隆線から口縁部にかけては無文となっている。図52-23は括れ部に3本1単位の横走する平行沈線が施文され、その下部に3本1単位の平行沈線によるクランク文が確認できる。図52-26は胴部に施文された渦巻文が確認できる。図56-8は胴部に直線をつなぎ合わせて作出した非常に粗い渦巻文が確認できる。渦巻の先が続かないことから、円形を意識した可能性もある。図57-8・9は胎土や器厚、焼成状況が類似する。これらの外面には細い沈線で施文され、8は横方向の平行沈線、9は縦方向の沈線を中心線とする粗い直線をつなぎ合わせた渦巻もしくは円形の施文が施され、図56-8と類似する技法となっている。

III～V群：分類基準となる隆帶や沈線等が施文されない口縁部～胴部、もしくは欠損等により確認できない底部等で、胎土や焼成等から本遺跡Ⅲ～V群のいずれかに属する可能性があるものを本群にまとめた。73点を図示した（図49-8・12・15・16、図50-17～23、図52-1～10・18・27、図54-7・8・10～16、図55-1～4・6～14・16・17、図56-3・9・10・15・18～21、図57-2・5・7・10・11、図58-1・3・7～10・13、図61-1～3・7・10・11）。口縁部の形態は主に、胴部から直線的に外傾するもの（図52-1・2、図52-18、図58-1・3・7）、口縁部が強く外反するもの（図49-8・12）、緩やかに外反するもの（図52-3、図54-7・11～15、図56-15、図57-5・7、図58-13、図61-2）となる。他にも、図57-10は胴部から口縁部まで僅かに内傾する。補修孔を1対作出しようとしたと思われるが、いずれも貫通していない。図54-10・16は直立気味に口縁部まで立ち上がり、口縁部は4単位の波状口縁となる。同様の形態で平口縁となるのは図55-1である。形態や出土した第6号竪穴住居跡出土土器に本遺跡Ⅲ群が多いことから、いずれも本遺跡Ⅲ群に伴う可能性がある。図54-8は沈線文様等は確認できないが、器形がキャリバー型となることから、本遺跡IV～V群になる可能性がある。図61-11は数少ない複節RLRが確認できたもので、本遺跡IV群とした図60-6・7と類似する。底部のみ残存するものは大半が深鉢で、底面中央が浅く窪み、高台状を呈するものが多い（図49-16、図50-22・23、図52-5～10・27、図55-6・8・9～13・17、図56-18・21、図57-11、図61-10・11）。

VI群：土器成形時の粘土接合が外傾接合になり、器形が緩やかな口縁部外反と括れを伴う。中期末葉から後期初頭にかけての一群と捉えることができる。2点図示した（図49-14、図61-4）。第1号竪穴住居跡出土の図49-14は胴部破片で、器表面の磨滅が著しい。直線的に立ち上がる器形と外傾接合から本群に分類した。遺構外出土の図61-4は口縁部が緩やかに外反し、口唇部は先細る。胴部の割れ口は横方向に平行しており、成形時の接合部分に沿っているものと思われる。

VII群：範文時代後期に位置付けられるものをまとめた。文様や整形技法で以下のように細分した。

a類：3点図示した。第3号竪穴住居跡Pit10出土の図50-25は深鉢の口縁で波状を呈する。口縁底部に縱長の隆帶を施し、そこから斜行する平行沈線間に棒状工具による刻目列が施される。刻目の間隔は細かく後述する本群b類との差異は明瞭である。口縁部の縱長隆帶は鬼川辺(2)遺跡から出土した図29-22と類似している。Pit6出土の図50-26は胴部破片で、図50-25と同様、平行沈線間に細かい刻目列が施されている。また、胎土や焼成が類似する。遺構外から出土した図61-9は範文を施文後、横走する3本1単位の沈線の上下に渦巻文を施文するものと思われる。器厚があり焼成も良好で、内面のミガキ調整も丁寧に行われている。沈線施文の工具が鬼川辺(2)遺跡第II群b類に見ら

れるような太いものではなく、本遺跡Ⅲ群からV群に見られる細めて鋭利な先端を持つものに近い。いずれも後期初頭に比定される。

b類：1点図示した。第1号竪穴住居跡から出土した図49-10は平坦に作出された口唇部を持ち、平行する横走沈線間に直交する刻目列を施文する。a類に比べ棒状工具の径が太いため、沈線幅が大きい。鉢の口縁部と思われるが、小破片のため詳細は不明である。鬼川辺(1)遺跡第Ⅲ群b類土器と同時期と考えられ、後期後葉に比定される。

V群：縄文時代晚期前葉に位置付けられるものをまとめた。3点図示した。第6号竪穴住居跡から出土した図55-5は、口唇部に連続する刻目を施文している。第18・20号土坑から出土した図58-12は鉢の口縁部で、器厚が薄く、口縁部に浅い沈線で人組文を施文している。胴部縄文は細かい。遺構外出土の図61-6は壺の胴部と思われる。筋の細かい縄文を外面に施文している。 (浅田)

(2) 土師器 (図62)

2点出土し、全て図示した(図62-1・2)。出土地点はいずれも調査区西側に片寄り、1は風倒木痕堆積土からの出土、2は表採資料である。いずれも胎土に砂粒が多く混入する壺の胴部破片と思われる。2は器面の磨滅が著しいが、1は外面敵方向のナデ調整が確認できる。ナデ調整時に引きずった砂粒により、器面上に明瞭な擦痕が生じている。2点とも色調、製作技法等に共通点が多く、同一個体の可能性がある。当遺跡では古代の遺構を検出してないが、同じ美山湖左岸でほぼ同じ段丘面上に位置する大川添(3)遺跡で平安時代の竪穴住居跡を検出していることから、本遺跡西側でも何らかの活動が行われた可能性を考えられる。 (浅田)

(3) 石器 (図63~71)

剥片石器は総数137点、2413.7g出土し、その内66点、1118.3gを図示した。剥片石器の器種は、石鏃、石槍、石錐、石窓、石匙、両面加工石器の他、不定形の削器・搔器を確認した。出土点数は石鏃28点、石槍2点、石錐5点、石窓5点、石匙2点、両面加工石器19点、不定形の削器・搔器が76点である。石質は石鏃の図64-9に玉髓が用いられている他の全て珪質頁岩である。また、剥片石器の実測図表現について、原礫面は濃いドット、二重バティナと判断した部分は薄いドットで表現している。

礫石器は総数67点、67618.0g出土し、その内39点、45212.9gを図示した。礫石器の器種は、敲磨器、台石、磨製石斧を確認した。出土点数は敲磨器が54点、磨製石斧が7点、台石が6点である。敲



図62 鬼川辺(3)遺跡 土師器

磨器にはいわゆる敲き石、磨り石、凹石が該当するが、使用痕が複合して確認できるものが存在するため、敲磨器という総称を使用した。礫石器のうち、敲磨器の石質と点数は、緑色凝灰岩が21点と最も多く、統いて火山礫凝灰岩が11点、安山岩が10点、凝灰岩が5点、粗粒玄武岩が4点。デイサイトが3点である。鬼川辺(1)遺跡、鬼川辺(2)遺跡と比較すると、両遺跡では最も多く石材選択されている凝灰岩が少なく、緑色凝灰岩。火山礫凝灰岩が多く選択されていることがわかる。また、火山礫凝灰岩は本遺跡でのみ選択されており、明らかに様相が異なる。台石の石質と点数は、火山礫凝灰岩が2点、安山岩が2点、流紋岩が1点、花崗閃綠岩が1点である。磨製石斧の石質と点数は緑色岩5点、粗粒玄武岩1点、硬玉1点である。以下に掲載石器の詳細を出土地点毎に記載する。

第1号竪穴住居跡では、1層から凹基の石鎌(図63-1)が出土した。基部両面にアスファルトと思われる黒色物質が付着している。図63-2・3はいずれも1層からの出土した両面加工石器である。2は側縁から中軸線付近まで、やや鋭角の調整剥離を施しており、3は先端部に微細な調整を施している。図63-4は側縁に微細剥離をもつ削器であり、堆積土中から出土した。図63-5・6は1層と堆積土から出土した敲磨器である。5は長方形の板状礫の両面に凹み痕があり、先端に剥離がある。6は亜円礫の両面に敲き痕がある。

第2号竪穴住居跡では、床付近からの緑色岩製の磨製石斧(図63-14)が1点と、敲磨器(図64-1)が1点出土した。14は基部側の一側面に微細な敲打痕が観察でき、一部その敲打痕上に磨り痕が観察できる。また、刃部の片側側縁も磨り痕による片減りがみられることから、敲磨器に転用した可能性が考えられる。このような事例は対岸の遺跡である芦沢(2)遺跡(青森県教委2014刊行予定)にも存在する。なお、使用時の擦痕も図示はしていないが観察できる。また、片面の中央付近にある凹みは火はじけによるものと思われる。敲磨器は、亜円礫の両面と一先端部に敲き痕、一側面に磨り痕を観察できる。図63-7は、1層から出土した凸基の石鎌で、平面形が二等辺三角形を呈する。調整剥離が粗めであり、断面形状も厚みがある。図63-8は1層から出土した両面加工石器で、大きな調整剥離の後に両端部をやや粗く調整をしている。階段状の剥離がみられ、断面形状に厚みがある。図63-9・10は1層から出土した、先端及び側縁に微細剥離をもつ削器である。図63-11は1層から出土した、片面の側縁に鈍角な調整を施す削器である。図63-12は粗く、大きな調整剥離を両側縁から中軸線付近まで施す両面加工石器であり、1層から出土した。図63-13は1層から出土した敲磨器である。片面に磨り痕、先端部に敲打に伴う剥離がある。

第3号竪穴住居跡では、床付近から剥片石器として、平面形が二等辺三角形で凸基の石鎌(図64-3)が1点と、分厚い縱長剥片の片側両縁に調整を施した搔器(図64-5)が1点出土した。礫石器は平面が三角形を呈する礫で側面に磨り痕のある敲磨器(図64-7)が1点出土した。また、炉からは両面の先端部に微細な調整を施す石錐(図64-4)が1点と側縁の一端に微細剥離を施す削器(図64-6)が1点出土した。またPit10の1層から、先端部が折損し、鈍角で厚みのある石槍(図64-2)が出土した。調整剥離が端部から中軸線までに留まり、階段状剥離も残存するなど粗さも観察できる。

第4号竪穴住居跡では、床付近から細身で凸基の石鎌(図64-12)が1点と、基部が折損している緑色岩製の磨製石斧(図66-3)が出土した。両面に二次的な敲き痕と磨り痕が観察でき、敲磨器へ転用した可能性が考えられる。また、Pit 3の堆積土中から、平面形が二等辺三角形で凸基の石鎌(図64-10)が1点、Pit10の堆積土中から細身で尖基の石鎌(図64-13)が出土した。床付近やPit以

外では、先端部が欠損した凸基の石鎌（図64-9）が1点と、平面形が二等辺三角形で凸基の石鎌（図64-11）が1点、調整剥離が粗く、幅のある尖基と思われる石鎌（図64-8）がいずれも堆積土中から出土した。図64-14は堆積土中から出土した石箇で、片面に調整を施し、刃部を作出している。図64-15は堆積土中から出土した石錐である。平面形から石鎌の転用品と思われ、端部に摩滅がある。図65-1・2は、いずれも縱型の石匙である。1は堆積土中からの出土で、つまみ部の抉りが深く、側縁の調整剥離は入念に施されている。2は確認面からの出土で、つまみ部の抉りは浅く、側縁の調整剥離は粗い。図65-3～5は両面加工石器で、いずれも堆積土中からの出土である。3・4は側縁部から中軸線付近までの粗い調整剥離で、階段状剥離が残存し、厚みがある。図65-5は片面に急角度で側縁から中軸線付近までの調整剥離が見られ、山なりに厚みを残す断面形状を呈している。図65-6・7は削器で、堆積土中からの出土である。6は小型で、側縁の一端部に微細剥離を施す。7は片面の側縁に急角度な調整剥離を施す削器である。礫石器は敲磨器が6点、台石が1点、磨製石斧が2点出土した。敲磨器は、すべて堆積土中から出土した。図65-8は亜円礫の両面に凹みが、図65-9は長方形の板状礫の両面に凹みが、図65-10・11、図66-1・2は亜円礫の両面に凹みが観察できる。図65-10はもう一側面でも敲きと磨り痕が観察でき、図65-11は先端に磨り痕が観察できる。図66-1は片面の凹みの隣に磨り痕が観察でき、2は両面の凹み痕の外側に磨り痕が観察できる。図66-6は片面に敲き痕と凹みがある台石であり、堆積土中からの出土である。図66-4・5はいずれも基部の欠損した磨製石斧であり、4は粗粒玄武岩製で確認面から、5は緑色岩製で1層から出土した。

第5号竪穴住居跡では、1層から石鎌が2点出土した。内訳は平面形が二等辺三角形で凸基（図66-7）と、平面形が正三角形で平基（図66-8）である。搔器は4点出土した。図67-1は1層から、図66-9・10と図67-2は堆積土中からの出土である。図66-9・10は接合資料であり、その状況を図示した。9・10とも片面に同一種の表皮があり、同じ母岩から直接打撃により縦長剥片を得ている。一側縁に急角度な調整剥離を施し、その後に微細な二次加工を施している様子が窺える。また、刃つぶしも観察でき、刃先が銳利でないことから搔器として機能していたものと思われる。もう一側縁に部分的に大きな剥離があるが、使用の際に持ち手部分を作出する調整痕の可能性が考えられる。9は先端部がほぼ無調整であるのに対し、10は一端部に急角度の調整剥離とその後の微細な二次加工を施しており、搔器として機能していたものと思われる。もう片方の端部は階段状の剥離が大きく残存しており、同じ搔器としての機能を作出するために調整剥離を試みたが、途中で断念したものと推測する。図67-1・2は両面加工で末端部に調整剥離を施し、刃部を形成している。図67-3は一側縁に微細剥離を施した両面加工石器であり、1層からの出土である。礫石器は、敲磨器が4点と台石が1点である。敲磨器は、3層（図67-4）と1層（図67-5・図68-1）及び堆積土中（図67-6・図67-7）から出土している。図67-4は亜円礫の両面に凹みがあり、一側面に平坦な磨り痕が観察できる。図67-5は、亜円礫の両面に凹みと磨り痕がある。また、図67-6は長方形の板状礫の両面に磨り痕と敲き痕がある。図68-1は亜円礫の両面と一側面に凹み、敲き痕がある。図67-7は片面に凹みと敲打痕が観察できる台石である。

第6号竪穴住居跡では、堆積土中から平面形がともに二等辺三角形で凸基の石鎌2点（図68-2・3）が出土した。1層から出土した石鎌を転用したと思われる石錐（図68-4）は、先端部が摩耗している。石箇（図68-5～7）は、5・7が確認面、6が堆積土中からの出土である。いずれも両面

加工を施している。5は基部が幅狭で刃部が広いが調整剥離は粗く、階段状の剥離が残る。また、刃部の調整も粗い。6は体部が円形を呈しており、片面の刃部は階段状の剥離が残り、調整も粗い。7は折損しているが、幅広で台形状を呈するものと思われる。調整剥離は粗く、階段状の剥離が残る。刃部の調整も微細ではない。搔器(図68-8)は堆積土中から1点出土した。小型で片面の側縁に急角度の調整剥離を施している。図68-9・10は削器で、ともに堆積土中からの出土である。9は両面の一側面に微細な調整剥離を施し、もう一側面は原礫面を残す。10は片面の側縁部に緩い角度の調整剥離を施すが、もう片方の側縁部は刃つぶしの調整が見られる。図68-11~13は両面加工石器で、11と13は1層、12は堆積土中からの出土である。11は側縁からの調整剥離がひとときわ粗く、階段状剥離がほぼ全面にあることから、未成品の可能性も考えられる。また、風化度合いの強い石材を使用しているため、銳利さに欠ける。12は片面の一側縁にやや急角度の調整剥離がみられる。13は器体の先端部に緩い角度の微細な調整剥離がみられる。

礫石器は、敲磨器が3点、磨製石斧が2点出土した。図68-14・15、図69-1は敲磨器で、いずれも堆積土中から出土している。形状はいずれも亜円礫である。14は一側面に磨り痕があるもの、15は両面に凹み、片面に磨り痕があるもの、図69-1は両面に凹み、一側面に敲き痕が見られる。磨製石斧は2点出土している。出土層位は図69-2が1層、図69-3が堆積土中からである。特に2は柴調査員等による顕微鏡観察を行った石質鑑定の結果、硬玉との結果を得ている。全体的に淡緑色~灰白色を呈しており、濃い緑色の斑点が部分的にみられる。なお、一側面に黒ずんだ箇所が観察でき、被熱をうけた可能性も考えられる。製作方法は磨り切り技法によるもので、溝状の痕跡が側縁に顕著に観察できる。器体に穿孔は無く、刃部の端部は欠けている。器体は長さ7.3cm、幅2.4cm、厚さ1.0cmと薄手の小型であり、整形時に丁寧な磨きが施されているが、両面に観察できる整形前の瘤み部分は粗いままだとなっている。特に刃部作出に伴う体部との境界に生じる瘤は明瞭である。硬玉製の磨製石斧は全国的に出土事例が極めて少なく、貴重である。3は緑色岩で基部が欠損しており、刃部は瘤が立つが、片減りしている。

第7号竪穴住居跡では、堆積土中より削器(図69-4)が出土した。片面の側縁に鋭角の調整剥離を施している。礫石器は、緑色岩の磨製石斧(図69-5)が確認面から出土した。刃部は瘤が立っている。また、両面と側面の基部側に微細な敲打痕が集中し、その敲打痕上に別の対象物を磨った痕跡が観察できることから、敲磨器に転用された可能性が考えられる。

第1号土坑では、1層から微細な調整剥離で錐部を作出し、基部が欠損している石錐(図69-6)が出土した。また、両面加工石器(図69-7)も1層からの出土で、片面の調整剥離は比較的丁寧に施されているが、反対側の面は階段状の剥離が残存している。削器(図69-8)は2層から出土した。片面にやや急角度の調整剥離の後、側縁部に微細な二次加工を施している。礫石器は、石錐(図69-9)1点と敲磨器1点である。1層から出土した9は両側縁に抉りのある小型の石錐である。また、2層から出土した10は、亜円礫の両面と一側面に敲き痕がある敲磨器である。

第2号土坑では、図69-11の長方形の板状礫の片面に敲き痕、両面に磨り痕のある敲磨器1点が堆積土中から出土した。

第3号土坑では、堆積土中から平面形が二等辺三角形で、凸基の石錐(図69-12)が1点出土した。また1層から両面加工石器(図69-13)が出土した。片面は平行な調整剥離によりほぼ平坦となるが、

もう片面は側縁からの調整剥離を中軸線付近まで急角度で施しているため、厚みが残っている。礫石器は、敲磨器1点と台石1点である。図69-14は亜円礫の両面に凹みと敲き痕、一側面に敲き痕がある敲磨器であり、確認面から出土した。図70-1は、片面に敲打痕のある台石であり、堆積土中から出土した。

第6号土坑では、1層から削器（図70-2）が1点、2層から削器（図70-3）が1点出土した。いずれも片面の一側縁に微細な調整剥離を施している。

第10号土坑では、堆積土中から亜円礫の片面に敲き痕のある敲磨器（図70-4）が1点、出土した。

第11号土坑の堆積土中から、礫石器が3点（図70-5～7）出土した。5は楕円礫の両面に敲き痕のある敲磨器である。また、6は片面に敲打痕が観察できる台石であり、7は片面に磨り痕がある台石である。

第13号土坑では、堆積土中から削器が2点（図70-8・9）と敲磨器（図70-10）1点が出土した。8は一側縁に微細な調整剥離を施している。9は両側縁にやや急角度の調整剥離を施している。また、10は長方形の板状礫の片面に凹み、もう片面に磨り痕が確認できる。

第18号土坑では、堆積土中から一側縁に微細な調整剥離を施す削器（図71-1）が出土した。

第19号土坑では、堆積土中から両側縁に微細な調整剥離を施す削器（図71-2）と、階段状剥離が残存する粗い調整の両面加工石器（図71-3）が、また、第19号土坑と第21号土坑の確認面から、両面に凹み、敲き痕、一側面に磨り痕がある敲磨器（図71-4）が出土した。

第20号土坑では、堆積土中から両側縁に微細な調整剥離を施した両面加工石器（図71-5）が出土した。

第4号焼土遺構では、確認面から両面加工石器（図71-6）が出土した。調整剥離は側縁から中軸線付近までやや鈍角かつ粗めに施されている。階段状剥離が残存し、厚みがある。また、両面に火はじけと思われる凹みがある。

遺構外石器は出土した剥片石器13点のうち2点（図71-7・8）、礫石器9点のうち1点（図71-9）を図示した。平面分布は、遺構が集中する調査区南側にほぼ纏まりがある。また、出土層位も1層が大半を占めている。7は平面形が二等辺三角形で、凸基の石礫である。8は平面形が長方形を呈する両面加工の石簾である。一部素材面が残存し、刃部はやや鋭角の調整がなされている。図71-9は亜円礫で片面に凹み、もう片面に凹みと磨り痕、両端に敲き痕がみられる敲磨器である。

この他、剥片が総数1967点、26145.2 g 出土した。出土地点も石器とほぼ同じ範囲となり、遺構が集中する調査区南側に偏る。遺構内からは総数1709点、21713.1 g 出土し、出土層位は1層と堆積土中が大半を占める。また、遺構外からは258点、4432.1 g 出土し、出土層位はおおむね1層である。石質は珪質頁岩、頁岩である。

（能代谷）

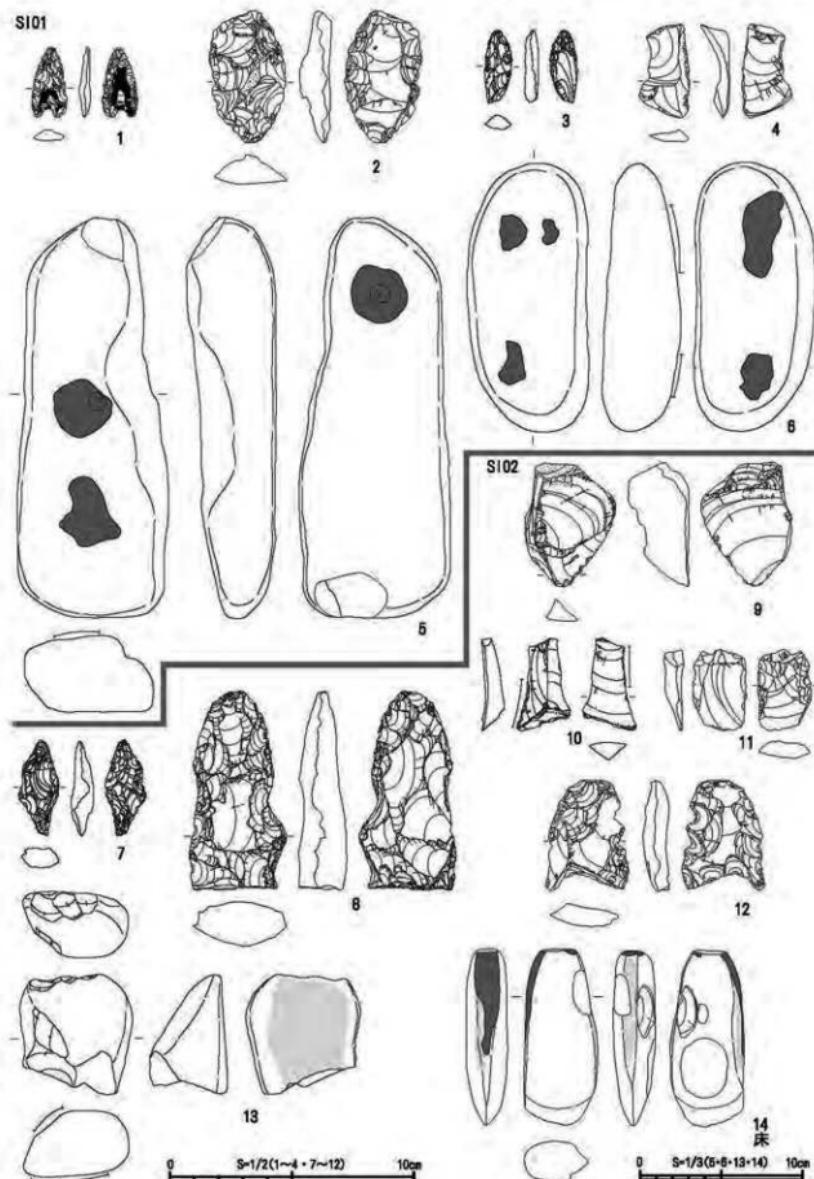


図63 鬼川辺(3)遺跡 石器-1

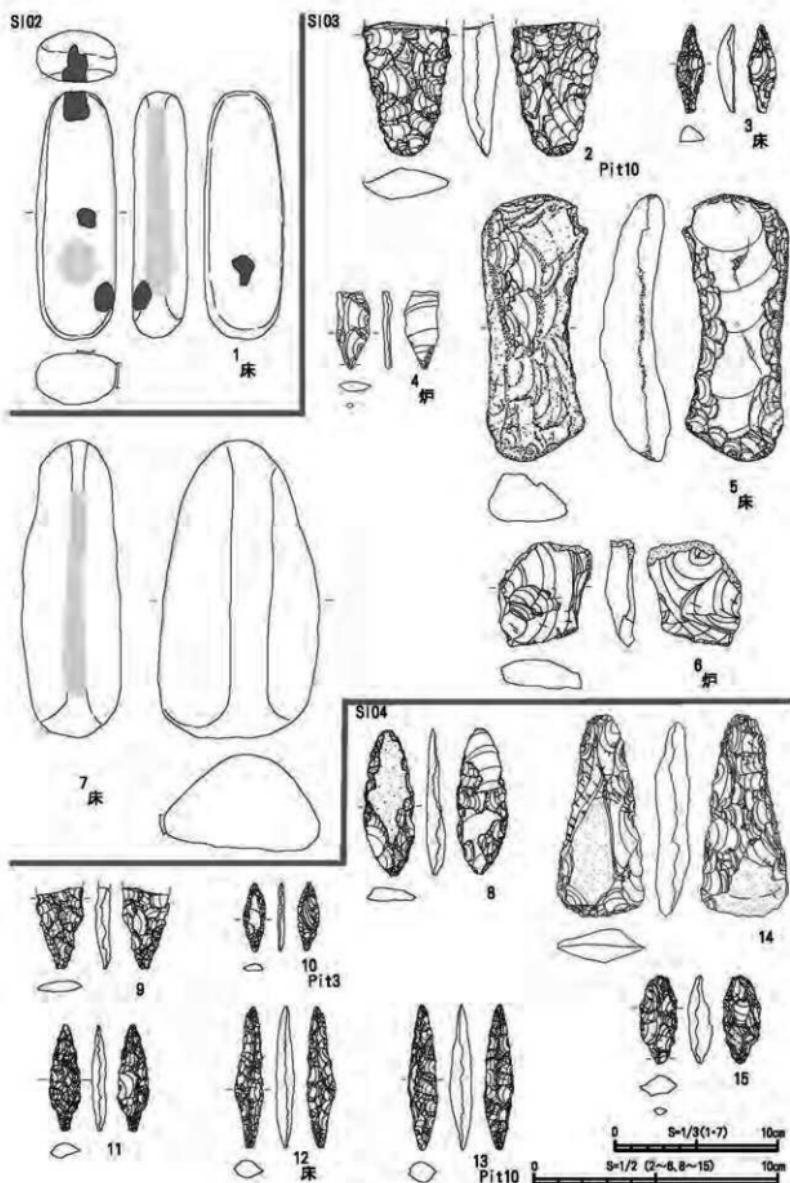


図64 鬼川辺(3)遺跡 石器-2

S104

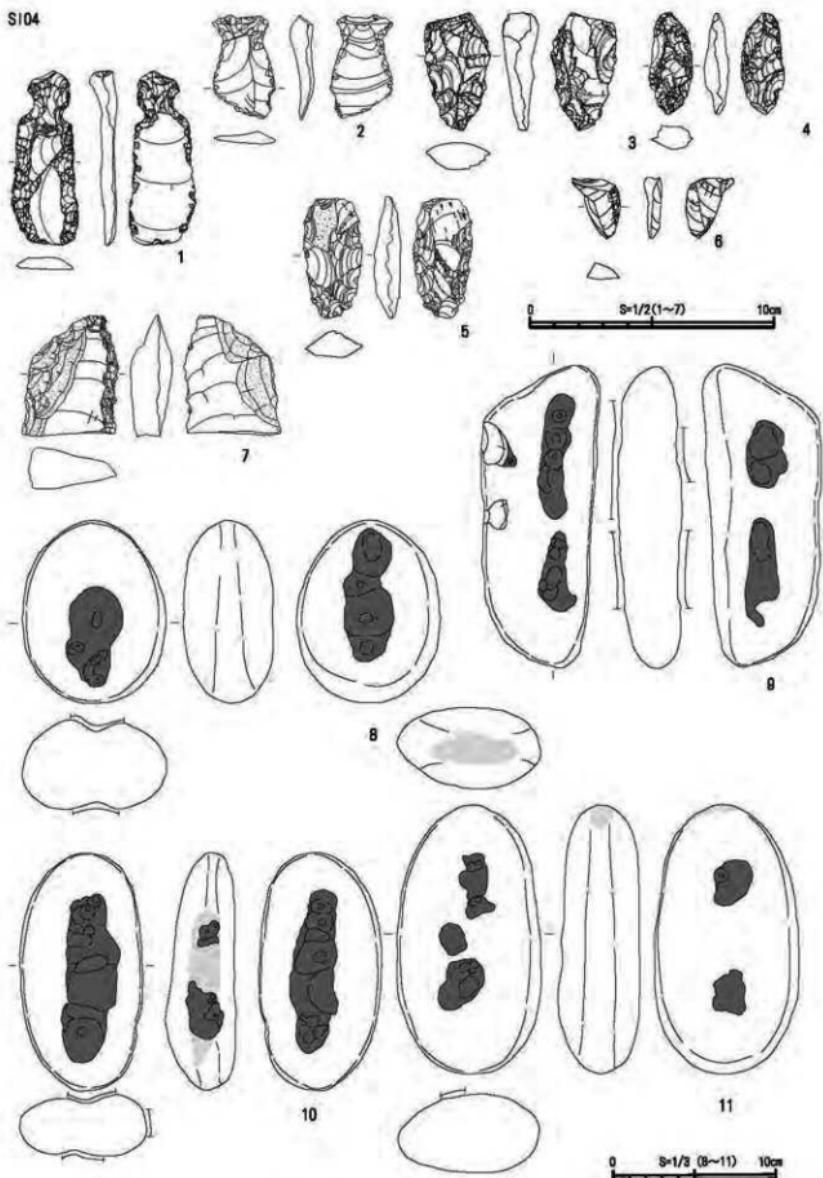


図65 鬼川辺(3)遺跡 石器-3

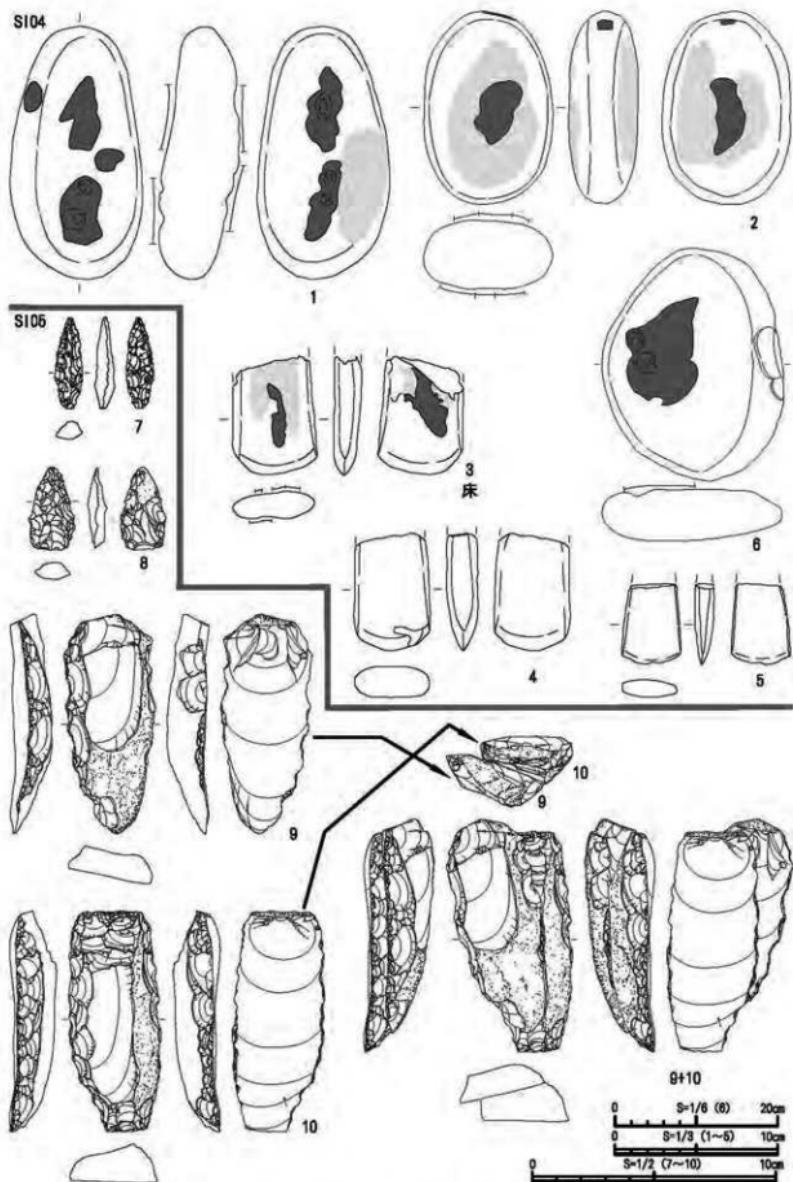


図66 鬼川辺(3)遺跡 石器-4

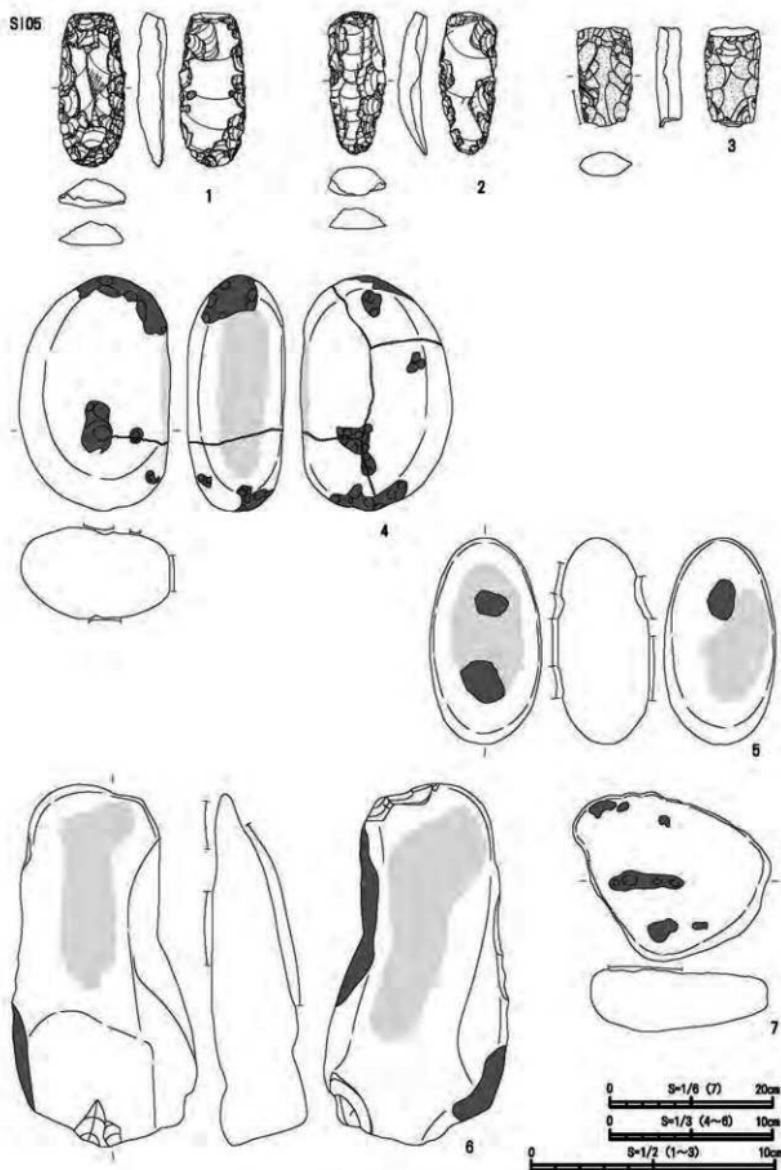


図67 鬼川辺(3)遺跡 石器-5

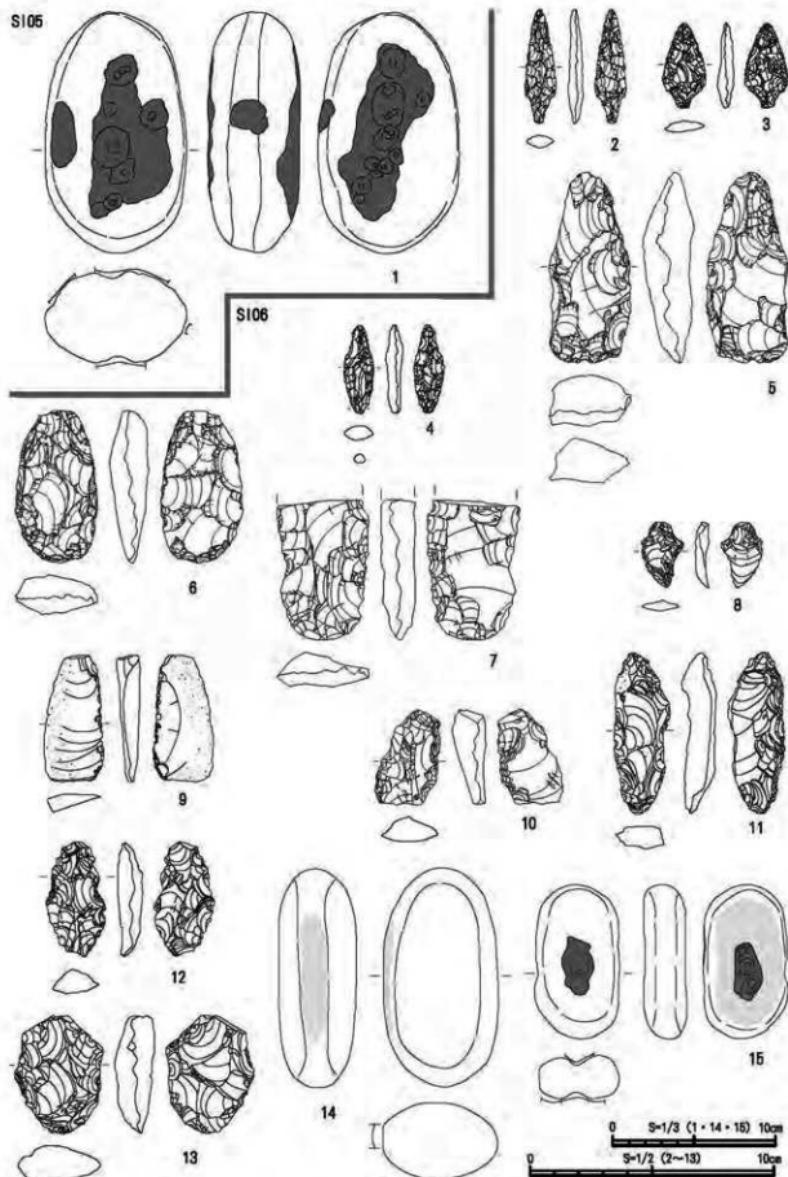


図68 鬼川辺(3)遺跡 石器-6

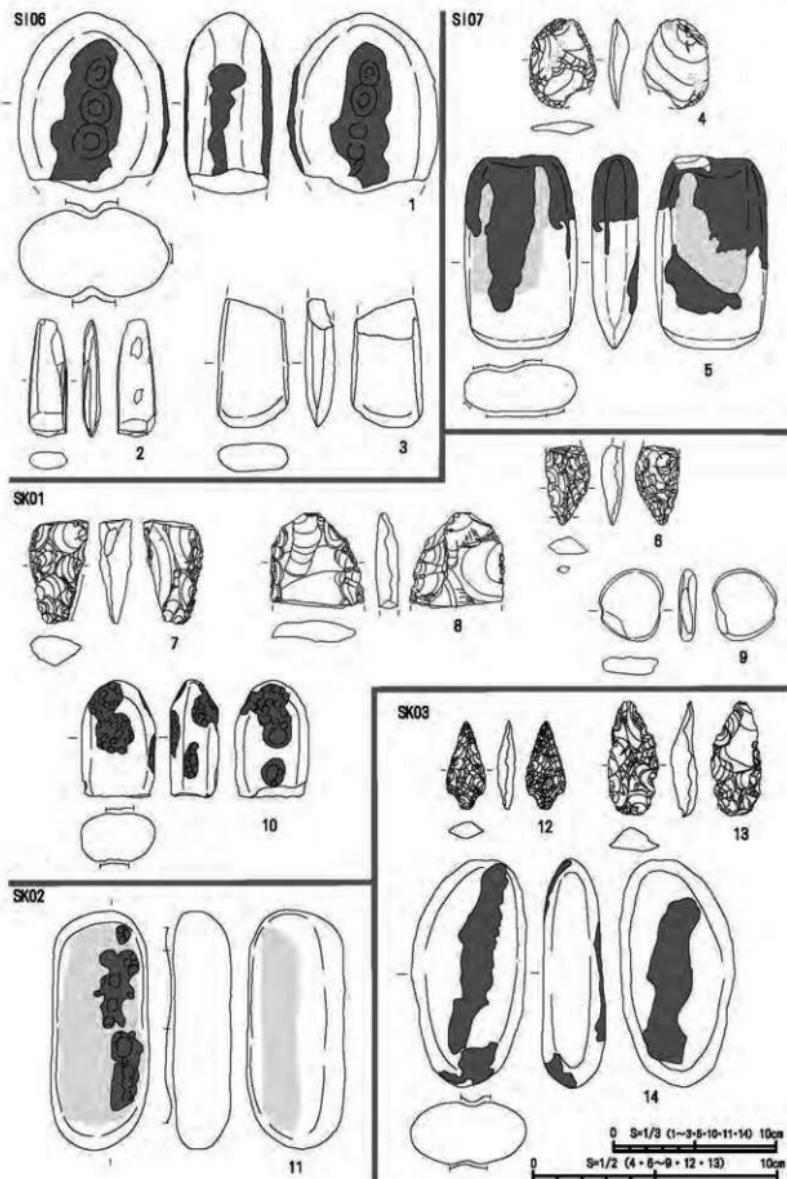


図69 鬼川辺(3)遺跡 石器-7

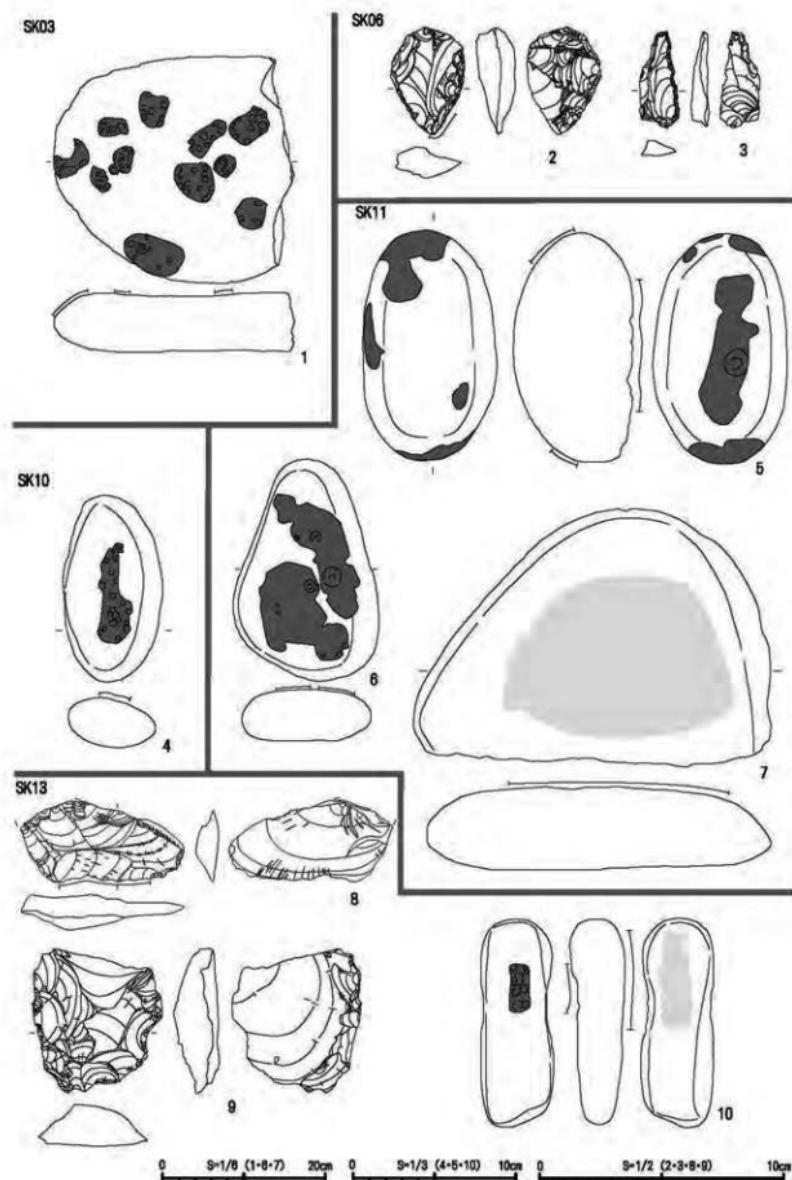


図70 鬼川辺(3)遺跡 石器-8

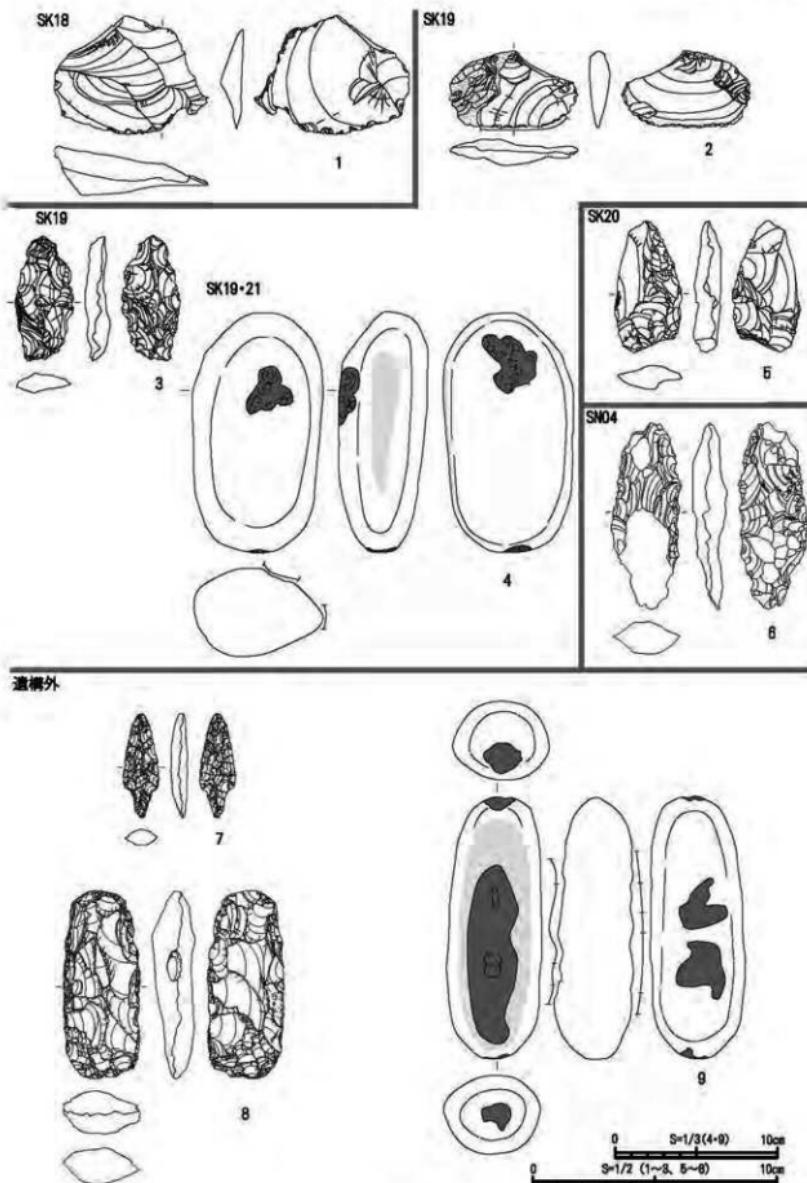


図71 鬼川辺(3)遺跡 石器-9

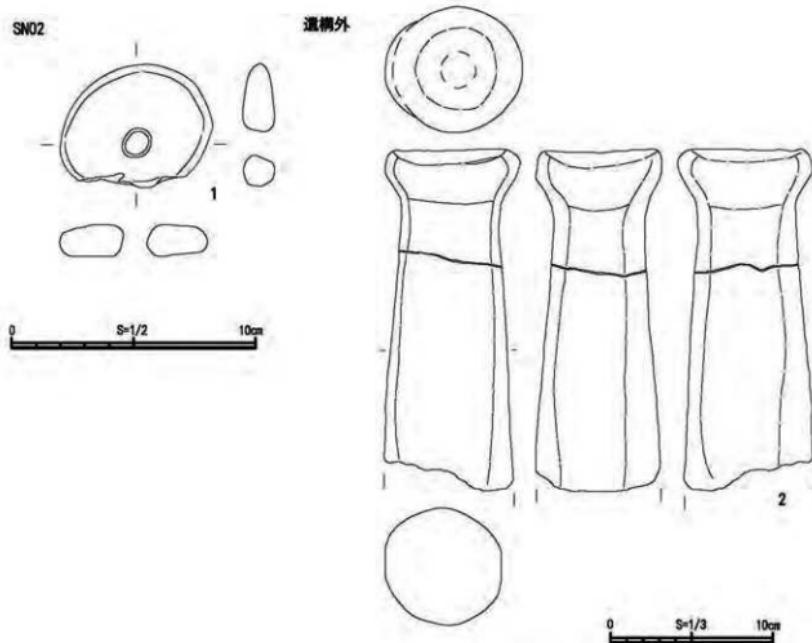


図72 鬼川辺(3)遺跡 石製品

(4) 石製品(図72)

図72-1は器面のほぼ中央に貫通する穿孔がある石製品である。第2号焼土遺構から出土している。孔は外径1.2~1.4cm、内径は0.9cmで、片面外側から内側にむかい窄まり、もう片面にむかい広がる形状から、両面から穿たれているものと推測できる。石質は安山岩であるが、器面全体にざらつきがあり、光沢のある細粒が混入している。図72-2は、棒状の頭部に凹みをもつ石棒である。遺構外から2点出土し、接合している。断面形状は円形を呈する。欠損しているため全体形状は把握できないが、欠損部に向かって径が大きくなっていく様子が観察できることから、大型品の可能性もある。器体全体に整形のための磨り痕が明瞭に観察できる。石質は安山岩である。被熱や敲打痕など二次利用痕跡は確認できなかった。

(能代谷)

第6章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

鬼川辺(1)遺跡は、青森県中津軽郡西目屋村大字砂子瀬字鬼川辺（北緯 $40^{\circ} 31' 55''$ 、東經 $140^{\circ} 14' 26''$ ）に所在し、岩木川（現美山湖）左岸の段丘上に位置する。測定対象試料は、製炭土坑と考えられる土坑から出土した木炭4点と遺物包含層Ⅱ層出土土器内面付着炭化物1点である（表1）。時期は木炭が古代以降、土器は縄文時代草創期の隆起線文土器と推定されている。

鬼川辺(3)遺跡は、青森県中津軽郡西目屋村大字砂子瀬字鬼川辺（北緯 $40^{\circ} 31' 50''$ 、東經 $140^{\circ} 14' 01''$ ）に所在し、岩木川（現美山湖）左岸の段丘上に位置する。測定対象試料は、竪穴住居跡から出土した木炭1点である（表3）。この木炭は縄文時代中期中葉の土器とともに出土した。

2 測定の意義

鬼川辺(1)遺跡で確認された製炭土坑の年代及び相互関係、出土土器の時期を年代測定によって明確にする。また、鬼川辺(3)遺跡で確認された竪穴住居跡及び共伴遺物の年代を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除き、必要量の試料を採取、乾燥させ、秤量する（付表「処理前試料量」）。
- (2) 土器付着炭化物は潜在的な汚染を考慮し、①アセトン、②クロロホルム・メタノール1:1混液、③アセトンの順に有機溶媒を用い、各々超音波洗浄機で処理を行う（OS）。処理後、乾燥させ、秤量する（付表「OS 処理後試料量」）。
- (3) 酸-アルカリ-酸（AAA: Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させ、秤量する（付表「AAA処理後試料量」）。AAA処理における酸処理では、通常 1 mol/l (1 M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、 0.001 M から 1 M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。
- (4) 必要量を採取、秤量（付表「燃焼量」）した試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (5) 真空ラインで二酸化炭素を精製、定量する。この二酸化炭素中の炭素相当量を算出する（付表「精製炭素量」）。
- (6) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (7) グラファイトを内径 1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイルにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置 (NEC社製) を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C

濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。測定回数と ^{14}C カウント数を付表に示す。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である (表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と記注する。 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比は付表に記載する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma=68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma=95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal10データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.2 較正プログラム (Bronk Ramsey 2013) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

6 測定結果

試料の測定結果を表2、4及び付表に示す。

鬼川辺(1)遺跡試料の ^{14}C 年代は、No. 1-1~4のうちNo. 1-2とNo. 1-4の値が誤差 ($\pm 1\sigma$) の範囲で一致する。これら2点とNo. 1-1、No. 1-3の3者の間には年代差が認められる。历年較正年代 (1σ) は、No. 1-1が中世、No. 1-2、No. 1-4が近世以降、No. 1-3が中世から近世に相当する値となっている (佐原2005)。試料No. 1-5の ^{14}C 年代は12610±30yrBP、历年較正年代 (1σ) は13158~12747 cal BCの間に2つ範囲で示され、この炭化物が付着した土器が縄文時代草創期の隆起線文土器と推定

されていることに整合する結果である（小林編2008）。

鬼川辺(3)遺跡試料の¹⁴C年代は4400±20yrBP、曆年較正年代（1σ）は3089～2935cal BCの間に3つの範囲で示され、縄文時代中期中葉頃に相当する（小林編2008）。共伴した土器の時期と整合する結果となっている。

試料の炭素含有率はすべて60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), 337-360
 小林達雄編 2008 総覧縄文土器、総覧縄文土器刊行委員会、アム・プロモーション
 Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years
 cal BP, *Radiocarbon* 51 (4), 1111-1150
 Stuiver M and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, *Radiocarbon* 19 (3), 355-363

表1 鬼川辺(1)遺跡 放射性炭素年代測定結果（δ¹⁴C補正値）[#5923] [#6235]

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ¹⁴ C (%) (AMS)	δ ¹⁴ C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-130788	No.1-1(C-1)	SK07 2層	木炭	AAA	-26.23 ± 0.21	690 ± 20	91.75 ± 0.20
IAAA-130789	No.1-2(C-4)	SK08 2層	木炭	AAA	-26.70 ± 0.19	160 ± 20	98.07 ± 0.22
IAAA-130790	No.1-3(C-1)	SK10 1層	木炭	AAA	-25.04 ± 0.24	350 ± 20	95.71 ± 0.21
IAAA-130791	No.1-4(C-1)	SK11 2層	木炭	AAA	-25.51 ± 0.22	160 ± 20	97.97 ± 0.21
IAAA-132350	No.1-5(34-1)	包含層 II層	土器付着炭化物	AAA	-25.27 ± 0.22	12,610 ± 30	20.80 ± 0.08

表2 鬼川辺(1)遺跡 放射性炭素年代測定結果（δ¹⁴C未補正値、曆年較正用¹⁴C年代、校正年代）[参考値]

測定番号	δ ¹⁴ C補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1σ 曆年代範囲		2σ 曆年代範囲	
	Age (yrBP)	pMC (%)					
IAAA-130788	710 ± 20	91.52 ± 0.20	691 ± 17	1278calAD - 1294calAD (68.2%)		1274calAD - 1300calAD (84.7%)	
						1369calAD - 1381calAD (10.7%)	
IAAA-130789	190 ± 20	97.72 ± 0.21	156 ± 17	1676calAD - 1687calAD (8.3%) 1731calAD - 1777calAD (38.8%) 1799calAD - 1809calAD (8.1%) 1927calAD - 1941calAD (13.0%)		1667calAD - 1695calAD (15.8%) 1726calAD - 1783calAD (44.9%) 1796calAD - 1814calAD (11.4%) 1838calAD - 1843calAD (0.9%) 1852calAD - 1868calAD (2.8%) 1874calAD - 1876calAD (0.4%) 1917calAD - 1949calAD (19.2%)	
IAAA-130790	350 ± 20	95.70 ± 0.20	352 ± 17	1481calAD - 1522calAD (35.2%) 1575calAD - 1583calAD (5.4%) 1591calAD - 1624calAD (27.6%)		1466calAD - 1526calAD (45.0%) 1556calAD - 1633calAD (50.4%)	
IAAA-130791	170 ± 20	97.87 ± 0.20	164 ± 17	1675calAD - 1682calAD (6.6%) 1735calAD - 1777calAD (44.8%) 1799calAD - 1805calAD (6.1%) 1930calAD - 1941calAD (10.8%)		1666calAD - 1692calAD (16.8%) 1728calAD - 1784calAD (49.7%) 1796calAD - 1812calAD (10.6%) 1921calAD - 1951calAD (18.4%)	
IAAA-132350	12,620 ± 30	20.79 ± 0.08	12,613 ± 31	13158calBC - 12842calBC (63.5%) 12779calBC - 12747calBC (4.7%)		13233calBC - 12642calBC (95.4%)	

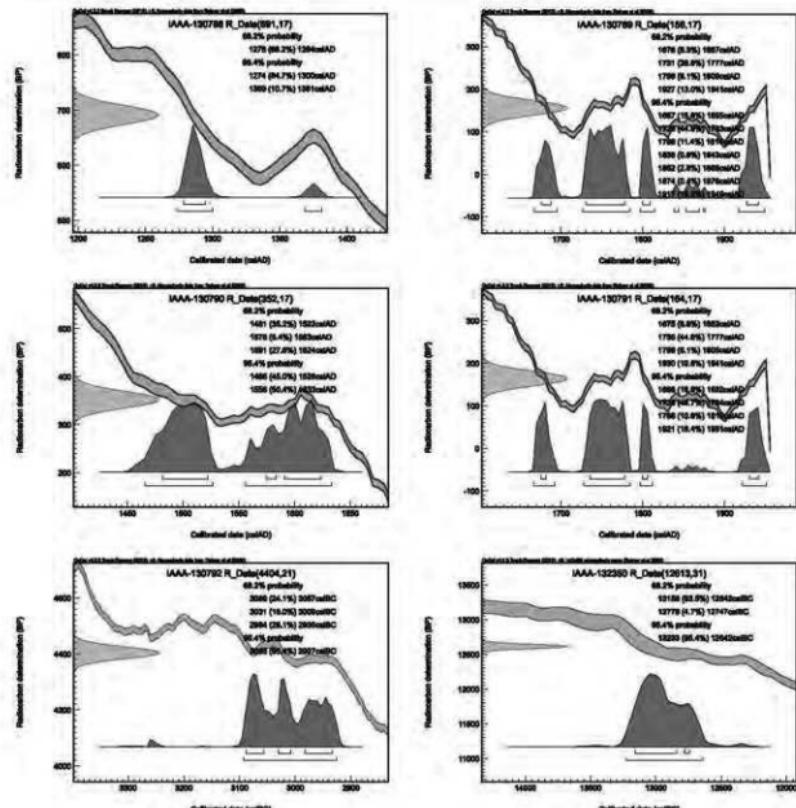
表3 鬼川辺(3)遺跡 放射性炭素年代測定結果($\delta^{14}\text{C}$ 補正值)[#5924]

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{14}\text{C} (\text{‰})$ (AMS)	$\delta^{14}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-130792	No.3-1(C-2)	S102 1層	木炭	AAA	-24.35 ± 0.24	4,400 ± 20	57.79 ± 0.16

表4 鬼川辺(3)遺跡 放射性炭素年代測定結果($\delta^{14}\text{C}$ 未補正值、曆年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)[参考値]

測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1σ 曆年年代範囲	2σ 曆年年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-130792	4,390 ± 20	57.87 ± 0.15	4,404 ± 21	3089calBC - 3057calBC (24.1%) 3031calBC - 3009calBC (16.0%) 2984calBC - 2935calBC (28.1%)	3093calBC - 2927calBC (95.4%)

〔参考〕曆年較正年代グラフ



付表

試料名	測定機関番号	採取場所	試料形態	前処理方法	処理前の試料量(mg)	OS処理後の試料量(mg)	AA処理後の試料量(mg)	燃焼量(ng)	精製炭素量(ng)	測定回数	^{14}C カウント数	$^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比(%)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)(AMS)	Libby Age(yrBP)	yrBP・丸め込みなし	層年較正年代(1σ層年代範囲)	層年較正年代(2σ層年代範囲)
No. 1-1 (C-1)	IAAA-130788	SK07 2層	木炭	AAA	31.51		26.22	4.72	3.30	11	251796	1.1160	-26.23 ± 0.21	690 ± 20	691 ± 17	1276calAD-1294calAD (68.2%)	1274calAD-1300calAD (84.7%) 1369calAD-1381calAD (10.7%)
No. 1-2 (C-4)	IAAA-130789	SK08 2層	木炭	AAA	37.35		32.20	4.58	3.19	10	255548	1.1155	-26.70 ± 0.19	160 ± 20	156 ± 17	1676calAD-1687calAD (8.3%) 1731calAD-1777calAD (38.8%) 1799calAD-1809calAD (8.1%) 1927calAD-1941calAD (13.0%)	1667calAD-1695calAD (15.8%) 1726calAD-1783calAD (44.9%) 1796calAD-1814calAD (11.4%) 1834calAD-1843calAD (0.9%) 1852calAD-1868calAD (2.8%) 1874calAD-1876calAD (0.4%) 1917calAD-1949calAD (19.2%)
No. 1-3 (C-1)	IAAA-130790	SK10 1層	木炭	AAA	22.71		16.39	4.58	3.00	11	273503	1.1173	-25.04 ± 0.24	350 ± 20	352 ± 17	1481calAD-1522calAD (35.2%) 1575calAD-1583calAD (5.4%) 1591calAD-1624calAD (27.6%)	1466calAD-1526calAD (45.0%) 1556calAD-1633calAD (50.4%)
No. 1-4 (C-1)	IAAA-130791	SK11 2層	木炭	AAA	44.27		30.75	4.64	3.06	11	274715	1.1168	-25.51 ± 0.22	160 ± 20	164 ± 17	1675calAD-1682calAD (6.6%) 1735calAD-1775calAD (44.8%) 1799calAD-1805calAD (6.1%) 1930calAD-1941calAD (10.8%)	1666calAD-1692calAD (16.8%) 1723calAD-1784calAD (49.7%) 1794calAD-1812calAD (10.6%) 1921calAD-1951calAD (18.4%)
No. 1-5 (34-1)	IAAA-132350	粘合剂 II層	土器付骨炭化物	OS+AAA	64.86	48.11	22.37	3.88	2.35	14	73229	1.1141	-25.27 ± 0.22	12610 ± 30	12613 ± 31	1315calIBC-12642calIBC (63.5%) 12779calIBC-12747calIBC (4.7%)	13233calIBC-12642calIBC (95.4%)
No. 3-1 (C-2)	IAAA-130792	SI02 1層	木炭	AAA	43.82		33.94	4.81	3.49	10	157641	1.1181	-24.35 ± 0.24	4,400 ± 20	4,404 ± 21	3089calIBC-3057calIBC (24.1%) 3031calIBC-3009calIBC (16.0%) 2984calIBC-2935calIBC (28.1%)	3093calIBC-2927calIBC (95.4%)

第2節 鬼川辺(1)・(3)遺跡出土炭化材の樹種同定

(株)パレオ・ラボ

1 はじめに

鬼川辺(1)・(3)遺跡は、共に岩木川左岸の河岸段丘上に立地する。鬼川辺(1)遺跡で伏焼式の製炭土坑と考えられる土坑から出土した炭化材と、鬼川辺(3)遺跡で竪穴住居跡と炭窯から出土した炭化材について樹種同定を行った。また、一部の試料を用いて放射性炭素年代測定が行われている(第6章第1節参照)。

2 試料と方法

試料は、鬼川辺(1)遺跡の製炭土坑と考えられるSK07から3点、SK08から5点、SK10から2点、SK11から3点の計13点、鬼川辺(3)遺跡の竪穴住居跡SI02から2点、炭窯SX02から4点の計6点で、総計で19点の出土炭化材である。

放射性炭素年代測定の結果では、鬼川辺(1)遺跡のSK07の試料No.1が中世、SK08の試料No.7が近世以降、SK10の試料No.9が中世～近世、SK11の試料No.11が近世以降となった。また発掘調査の所見では、鬼川辺(3)遺跡のSI02が縄文時代中期中葉、SX02が近代～現代と考えられている。

計測可能な試料については、復元直径と残存半径、残存年輪数の計測を行った。復元直径は、1cm刻みの同心円に試料を当てて求めた。残存半径は試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

炭化材の樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柾目)について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM-5900LV)にて検鏡および写真撮影を行った。試料の残りは、青森県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

3 結果

同定の結果、広葉樹のサワグルミとアサダ、クリ、トチノキの4分類群が産出した。鬼川辺(1)遺跡で確認されたのはクリが12点とアサダが1点、鬼川辺(3)遺跡で確認されたのはトチノキが3点とクリが2点、サワグルミが1点であった。

鬼川辺(1)遺跡の試料の復元直径の計測では、計測可能な試料が7点で、復元直径1～11cmの試料がみられ、偏りはみられなかった。年輪の計測結果では、残存半径2.8cm内に7年輪みられた試料No.13(クリ)のように年輪幅が比較的広い試料もあるが、多くは残存半径0.9cm内に6年輪みられた試料No.5(クリ)のように、年輪幅が詰まつた試料であった。

鬼川辺(3)遺跡で復元直径の計測が可能だったのは炭窯SX02の2試料で、9cmと4cmであった。年輪の計測結果では、竪穴住居跡SI02の2試料(クリ)は年輪幅が比較的詰まっていた。炭窯SX02の試

表1 出土炭化材の樹種同定結果

遺跡名	鬼川辺(1)			鬼川辺(3)		合計	
	時期	中世～近世	縄文時代	近代	中期中葉～現代		
樹種 遺跡	SK07	SK08	SK10	SK11	SI02	SX02	
サワグルミ						1	1
アサダ	1						1
クリ	2	5	2	3	2		14
トチノキ						3	3
合計	3	5	2	3	2	4	19

料では残存半径1.1cm内に2年輪みられた試料No.16（サワグルミ）のように年輪幅の広い試料もあつたが、1.6cm内に13年輪みられた試料No.19（トチノキ）のように年輪幅の狭い試料が多かった。

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) サワグルミ *Pterocarya rhoifolia* Siebold et Zucc. クルミ科 図版1 1a-1c (No.16)

中型の道管が単独ないし2～3個複合してやや疎らに散在し、年輪の終わりにかけて徐々に径を減じる半環孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は單穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が直立する異性で、1～2列となる。

サワグルミは北海道南部から九州にかけての谷筋の溪流沿いなどに多く分布する落葉高木の広葉樹である。材は軽軟で、切削加工等は極めて容易である。

(2) アサダ *Ostrya japonica* Sarg. カバノキ科 図版1 2a-2c (No.1)

小型の道管が単独ないし2～7個放射方向に複合してやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は單穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、1～4列となる。

アサダは北海道中南部から九州にかけての温帯から暖帶上部に分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で割れにくく、切削加工等は困難である。

(3) クリ *Castanea crenata* Siebold. et Zucc. ブナ科 図版1 3a-3c (No.4)、4a (No.5)、5a (No.7)、6a (No.8)、7a (No.15)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は單穿孔を有する。放射組織は同性で単列となる。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で耐朽性が高い。

(4) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 図版1 8a-8c (No.17)

小型の道管が単独ないし2～3個複合してやや密に散在する散孔材である。道管は單穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で単列である。放射組織は、接線断面では層階状に配列する。

トチノキの分布の北限は北海道南部で、九州まで広く分布するが、東北に多くみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや軽軟で、切削加工は極めて容易である。

4 考察

以下、遺跡ごとに考察を行う。

・鬼川辺(1)遺跡

中世～近世の伏焼式の製炭土坑と考えられているSK07とSK08、SK10、SK11から出土した炭化材は、SK07でアサダが1点みられた以外はいずれもクリであった。これらの炭化材は、焼成された炭（以下炭製品と呼ぶ）か、炭製品を焼成する際の燃料材であったと考えられる。伏焼式の製炭土坑では、焼成部と燃焼部の境が曖昧であり、炭製品と燃料材の区別は難しい。また取上げ後の試料の形状観察からは、炭製品であったか燃料材であったかの判断はできなかった。

燃料材としてのクリは、高い火力は得られないが長時間燃焼するという材質を持ち、薪炭材としての利用が多い。また、アサダも現代では薪炭材として利用される（平井，1996）。一般的に、現代の製炭などの薪炭材には、コナラ属クヌギ節（以下クヌギ節）やコナラ属コナラ節（以下コナラ節）が適しているとされ（樋口，1993）、東北地方でも山形県高畠町高安窯跡群に所在する9世紀後半～10世紀前半の炭窯で、コナラ節が選択的に利用されていることが確認されている（小林・北野，2013）。今回の鬼川辺(1)遺跡で確認されたのは主にクリであり、遺跡周辺の森林にクリが卓越して生育していた、または遺跡周辺の森林からクリを選択伐採していたなどの理由から、クリが多く利用されていた可能性がある。

復元直径の計測では、復元直径1～11cmの試料がみられたが、特定の直径に偏りはみられなかった。また、試料の肉眼観察では、原形を留めていない試料が多く、割材の有無の確認はできなかった。今回の製炭土坑では、大小さまざまな直径のクリの原木を割材にせずに製炭を行なっていた可能性や、大きな直径のクリの原木は割材して大きさを揃え、製炭を行なっていた可能性などが考えられる。今回は試料数が少ないが、数多ければ傾向が掴める可能性がある。

・鬼川辺(3)遺跡

縄文時代中期中葉の竪穴住居跡SI02では、クリが2点みられた。いずれも建築材の可能性がある。クリがもつ、重硬で割裂性が良く、軸方向に割れやすいという材質は建築材にも適しており、建築材として選択的に利用されていた可能性がある。

青森平野周辺の縄文時代前期から後期の遺跡で出土した木製品や自然木などの樹種組成の解析の結果、縄文時代前期～後期に人間によるクリ林の管理が行なわれていたと考えられている（Noshiro and Suzuki, 2006）。今回の試料は2点のみで少ないが、鬼川辺(3)遺跡周辺にもクリが多く生育していた可能性がある。

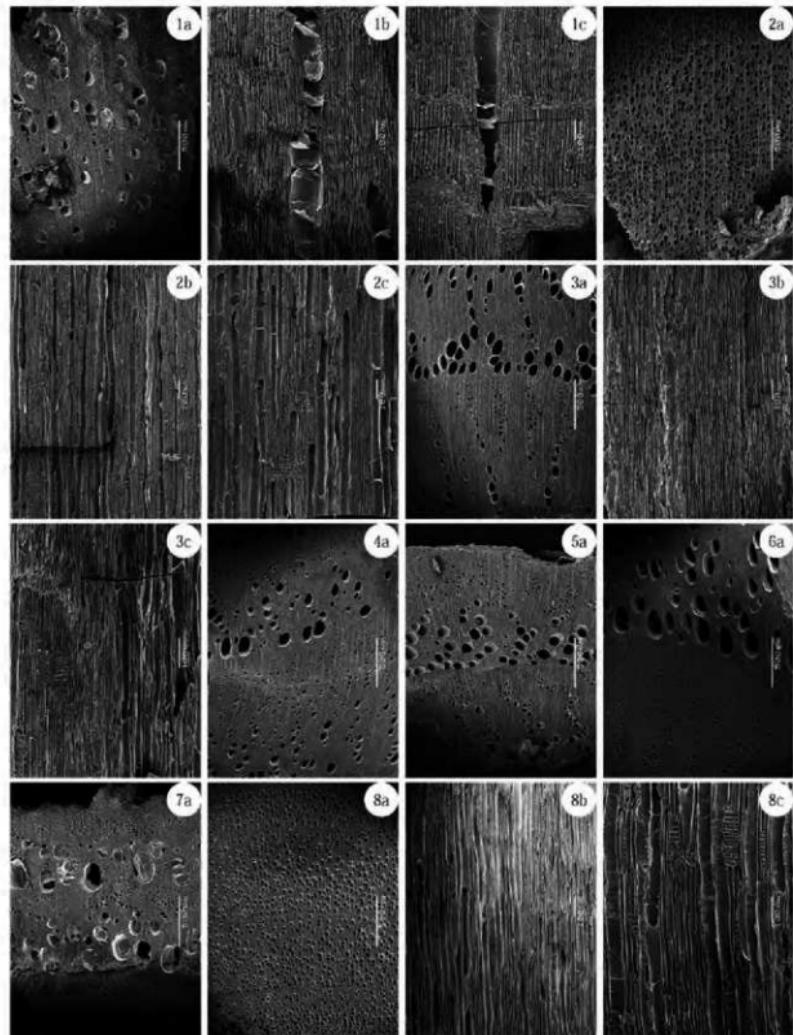
近代～現代の炭窯であるSX02は、白炭生産用の炭窯であったと考えられている。産出した炭化材はトチノキが3点とサワグルミが1点で、いずれも湿地に生育しやすい樹種である。現代の家庭の暖房用や炊事用に生産される白炭は、一般的に広葉樹を用いられる場合が多い（樋口，1989）。鬼川辺(3)遺跡の近代～現代の炭窯では、岩木川の河畔林として生育し、入手が容易であったサワグルミやトチノキが利用されていたと考えられる。

引用文献

- 樋口清之（1993）ものと人間の文化史71・木炭。286p, 法政大学出版局。
平井信二（1996）木の大百科－解説編－。642p, 朝倉書房。
小林克也・北野博司（2013）山形県高畠町高安窯跡群にみる古代窯業における燃料材選択と森林利用。植生史研究, 22 (1), 13-21.
Noshiro, S., Suzuki, M. (2006) Utilization of forest resources in the early Jomon period at and around the Sannai-maruyama site in Aomori Prefecture, northern Japan. 辻 誠一郎・能城修一編「植生史研究 特別第2号」：83-100, 日本植生史学会。

付表1 出土炭化材の樹種同定結果一覧

試料 No.	遺跡名	遺構名	グリッド	層位	取上 番号	樹種	残存半径 (cm)	残存 年輪数	復元 直径 (cm)	時期	年代測定 番号
1	鬼川辺 (1) 遺跡	SK07	II V-60	2層	C-1	アサダ	1.9	7	—	中世	IAAA-130788
2			II V-60	2層	C-2	クリ	—	—	—		
3			II V-60	2層	C-3	クリ	1.2	3	—		
4	SK08	II Q-68	2層	C-1	クリ	1.2	7	2	近世以降		
5		II Q-68	2層	C-2	クリ	0.9	6	5			
6		II Q-68	2層	C-3	クリ	2.0	18	—			
7		II Q-68	2層	C-4	クリ	0.5	3	1		IAAA-130789	
8		II Q-68	2層	C-5	クリ	1.6	4	7			
9	SK10	II Q-76	1層	C-1	クリ	3.9	21	11	中世～ 近世	IAAA-130790	
10		II Q-76	1層	C-2	クリ	3.4	24	—			
11	SK11	II I-77	2層	C-1	クリ	1.0	7	—	近世以降	IAAA-130791	
12		II I-77	2層	C-2	クリ	2.2	8	6			
13		II I-77	2層	C-3	クリ	2.8	7	8			
14	SI02	I S-21	1層	C-1	クリ	2.1	7	—	縄文時代 中期中葉		
15		I S-21	1層	C-2	クリ	1.5	13	—		IAAA-130792	
16	SX02	床面	1	サワグルミ	1.1	2	—	近代～ 現代			
17		床面	3	トチノキ	0.5	8	9				
18		沢の近く 前庭部	2	トチノキ	1.2	11	4				
19		床面		トチノキ	1.6	13	—				



図版1 鬼川辺(1)・(3)遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. サワグルミ (No. 16)、2a-2c. アサダ (No. 1)、3a-3c. クリ (No. 4)、4a. クリ (No. 5)、5a. クリ (No. 7)、
6a. クリ (No. 8)、7a. クリ (No. 15)、8a-8c. トノキ (No. 17)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

第7章 総括

第1節 鬼川辺(1)遺跡

鬼川辺(1)遺跡は岩木川（現美山湖）左岸、大きく蛇行する流路に囲まれた半島状に突き出す段丘の東側に位置する。調査の結果、遺構は縄文時代以降と考えられる土坑7基、中世～近世の製炭土坑4基、性格不明遺構5基を検出した。検出遺構の大半は調査区東側、美山湖に面する段丘縁辺部に偏在しており、西側では土坑3基の検出に留まる。この内、製炭土坑は調査区内に散在し、底面上に細かい炭化物を多く含み、底面や壁面の一部が被熱しているなどの共通点が見られた。時期が特定できる遺物は出土しなかったが、放射性炭素年代測定の結果、中世～近世までの年代が得られた。また出土炭化材の樹種同定を行い、大半がクリとの結果を得た。このことから、中世から近世にかけて、伏焼式の製炭土坑を用いた炭生産が行われていたことが判明した。また、樹種同定の結果、時代を超えてクリが用いられており、遺跡周辺にクリが恒常的に生育していたことが窺われる。

出土遺物では、調査区東部の段丘先端部、II-L-84・85、II-M-85グリッド周辺から、縄文時代草創期の隆起線文土器が4点出土したことが特筆される。また、隆起線文土器の出土地点周辺から、槍先型尖頭器や搔器が出土した。いずれの出土層位も表土下のII層であり、他の時期の縄文土器と同一層位である。出土位置の記録はグリッド一括に留まっているが、出土土器の時期判別可能な資料は概ね図示していることから、掲載遺物の時期別分布状況を把握するため、グリッド単位で出土位置をプロットしたものが図73である。縄文時代中期中葉は主に調査区中央、地すべり堆の裾野を中心に出土している。一方、縄文時代後期後葉は美山湖に面した南東側、第1号性格不明遺構周辺に出土している。縄文時代草創期は縄文時代後期後葉の分布域の東端部と接するように存在している。一方、縄文時代中期中葉の土器範囲とは、一定の距離が空いていることがわかる。次に掲載した出土剥片石器の器種別分布を図74に示した。槍先型尖頭器と搔器は調査区東側を中心に纏まりを見せ、縄文時代草創期土器の出土地点周辺に位置している。一方、石匙、石筐、石鍬は縄文時代中期中葉の分布範囲から後期後葉の分布範囲まで出土が見られるが、縄文時代草創期の分布範囲である調査区東側では出土が見られず、器種毎に分布の違いが確認できる。このような状況から、縄文時代草創期土器と出土位置での関連性が高い石器と判断できるのは、槍先型尖頭器と搔器になる。

縄文時代草創期の土器は、小破片ではあるが、諸特徴に六ヶ所村表館(1)遺跡出土の隆起線文土器との類似点が多く観察できること、また土器付着炭化物を用いた放射性炭素年代測定を行い、12600±30yrBPという結果を得たことから、隆起線文土器と認定した。津軽地方では当該時期の土器は初めての出土である。口縁部から脣部にかけて横方向の細い粘土紐貼付後、ナデ付けによる隆起線が施文されることから、現段階では山形県高畠町日向洞窟I b群、村上昇の分類によるIII群（村上2007）にあたるものと捉えておきたい。これらは隆起線文土器の中では後方に位置付けられており、これまでの放射性炭素年代測定結果と比較すると、本遺跡の分析結果は隆起線文土器の範囲内であるが、やや古い値が出ていることになる（国立歴史民俗博物館2009）。本県での隆起線文土器の出土事例は未だ少ないとから、年代測定結果の問題については今後の資料増加に期待したい。

次に槍先型尖頭器について触れてみたい。今回出土した槍先型尖頭器は木葉形と柳葉形に分類することができる。この内、柳葉形は折損した1点を含む3点とも薄く仕上がっており、一目して調整剥

離が丁寧であることがわかる。石質もほぼ同色の珪質頁岩を用いている。一方、木葉形で注目したいのが、大型品の折損面に再加工痕が1点見られる点である。これは、折損した大型の槍先型尖頭器をより小型品へ形態変化させようとしていた可能性が考えられる。加えて木葉形の小型品は6点とも柳葉形に比べ大きな調整剥離で、器面に階段状剥離が残存する。これらも柳葉形へ形態変化させる前の未成品にあたる可能性がある（秦昭繁氏のご教示による）。槍先型尖頭器の形態変化については、新潟県本ノ木遺跡資料を用いた研究（久保田2008）や山形県日向洞窟遺跡西地区出土石器群の研究（佐川・鈴木2006）において、槍先型尖頭器が再加工に伴い木葉形から柳葉形へ形態変化することが示唆されている。これを本遺跡に当てはめると、調整剥離の粗い木葉形の大型品から小型品。そして調整剥離の丁寧な柳葉形への形態変化、つまり一連の製作工程上に存在する資料である可能性が挙げられる。本遺跡では素材となるブランクや石器製作に伴う纏まつた剥片、チップは確認されていないため、直接的な石器製作を示す資料は存在しないが、上記の内容は遺跡近隣で石器製作を行っていた可能性を示唆するものと思われる。他にも石刃技法で打ち剥がされた縦長剥片を使用した搔器は、打面調整の痕跡が確認できる。また、片面両端に弧状の刃部を形成している円形搔器は山形県日向洞窟西地区出土資料に類似するものがあり、いずれも縄文時代草創期に伴う可能性が考えられる。

以上のように、縄文時代草創期の土器や石器が一定範囲に纏まって出土した調査区東部の段丘先端では、当該期に一時的かもしれないが占地した人々により、何らかの活動が行われていたものと推測する。

第2節 鬼川辺(2)遺跡

鬼川辺(2)遺跡は岩木川（現美山湖）左岸、鬼川辺(1)遺跡と同一段丘上の西側に位置する。検出遺構は竪穴住居跡5軒、土坑3基、焼土遺構1基である。竪穴住居跡は調査区南側の微高地周辺で縄文時代後期から晩期の遺物が伴う3基、また調査区北側の段丘縁辺部で縄文時代中期中葉と後葉の土器が伴う2基と、時期によって分布域が分かれている。土坑はその分布域の中間に3基纏まっている。出土遺物も無く、南北の竪穴住居跡との関連を窺うこととはできない。焼土遺構は南側の竪穴住居跡範囲と重なり、削平を受けた竪穴住居跡に伴う炉跡である可能性がある。出土土器は調査区南側では遺構内外を含め、縄文時代後期～晩期に比定されるもの、調査区北側では縄文時代中期中葉～末葉に比定されるものが中心となる。石器は出土点数が剥片石器、礫石器とともに3遺跡の中で最も少ない。また、出土分布を見ると、土器と同様、調査区の北側と南側に偏り、中央付近が希薄である。遺構分布や土器の出土状況とも重なることから、縄文時代の活動範囲が南北に限定的であったことを示しているものと思われる。

第3節 鬼川辺(3)遺跡

鬼川辺(3)遺跡は、鬼川辺(2)遺跡から西へ約500m離れた、岩木川（現美山湖）の段丘崖に接する地すべり堆上に立地する。遺跡の主体となるのは縄文時代中期中葉～後期初頭の集落跡である。竪穴住居跡は段丘崖と調査区中央を横切る沢に挟まれた。調査区南側の尾根筋に沿って列状に7軒検出した。竪穴住居跡同士の重複は1基も見られなかった。これは埋没過程で一定期間窪地状態であったことを示していることから、竪穴住居跡の新規構築に伴う占地の際、前代の遺構を意図的に避けてき

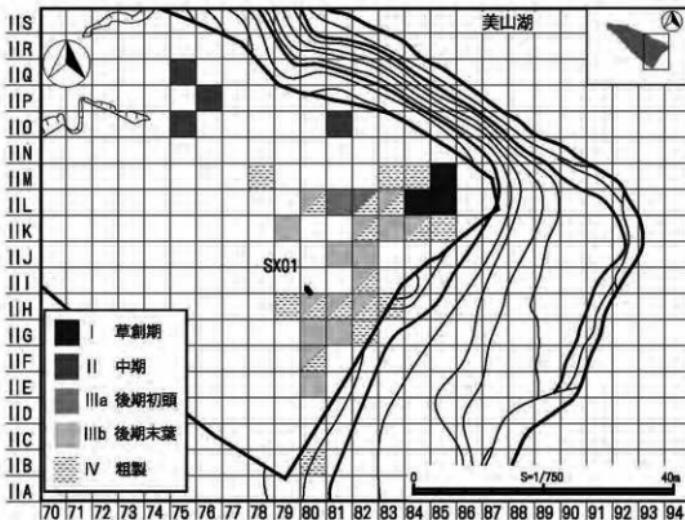


図73 鬼川辺(1)遺跡 繩文土器時期別分布図

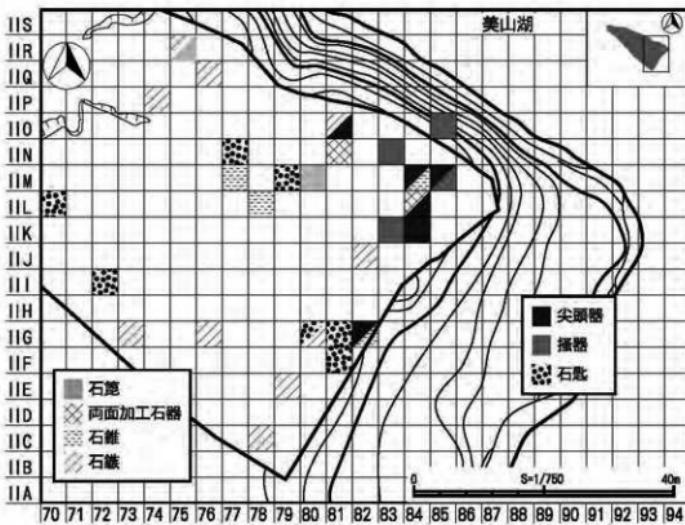


図74 鬼川辺(1)遺跡 剥片石器種別分布図

た結果と考えられる。土坑は竪穴住居跡の北側、調査区中央の谷に面した縁辺部を中心に15基検出した。特にプラスコ型土坑としたI群は調査区中央の沢に沿って縁辺部で列状に検出した。土器埋設遺構は竪穴住居跡の分布範囲内で1基のみ検出した。焼土遺構は第5号竪穴住居跡周辺で2基と調査区西側で1基検出した。調査区北側で検出した遺構は石積の炭窯跡で、外周溝を作り、構造の特徴から、近代以降の白炭製作と推測する。溝跡は1条検出したが出土遺物もなく、炭窯外周溝より古いことから近世以降としておきたい。

出土遺物は大半が遺構内堆積土からの出土となっている。竪穴住居跡内からの出土土器も大半が堆積土からの出土で、遺構機能時に帰属する床面遺物や掘方埋土からの出土は非常に少ない。内部の遺物は住居廃絶時に片づけられたものと推測する。遺存状態も悪いため、直接遺構の機能時期を推定する材料を欠く状況である。堆積土中から出土した土器は所産時期に幅があり、特定の時期に一括廃棄されたものではないことを物語っている。ただ、遺構内出土土器の主体となる時期を、時期別に追うことで、遺構の変遷傾向を窺う参考になると考え、図75に区分状況を提示した。以下、出土土器の主体となる群毎に概観し、それに伴う遺構の特徴を加味していく。

I群が主体的に出土した遺構は存在せず、遺構外遺物出土のみとなっている。このことから本群土器が廃棄される段階の活動痕跡は少ないと見える。II群が主体的に出土した遺構は、土器埋設遺構のみであり、この段階までの積極的な土地利用は確認できない。III群は出土量が急激に増加し、主体的に出土した遺構は、第2・6号竪穴住居跡で多く出土している。これらの竪穴住居跡は規模に差が見られるものの、東西方向に長軸を持つ隅丸方形で、南北方向に柱を並べ、地床炉を伴う共通点を持つ。土坑ではI群でも東側に位置する第5・7号や、第6号竪穴住居跡や土器埋設遺構と遺構間接合が見られた第13号土坑でIII群が主体的に出土している。また第2号竪穴住居跡の東西に位置する第1・3号土坑もIII群の出土が目立つことから、第2号竪穴住居跡との関連が窺われる。IV群はII群と比べ出土量が減少する。主体的に出土した遺構は第1・4号竪穴住居跡で、軸方向がほぼ一致し、平面形態にも類似性が見られる。炉は第1号竪穴住居跡が石囲炉、第4号が地床炉と差が見られる。土坑では第2号土坑からまとめて出土している。V群はさらに出土量が減少する。出土遺構も第5号竪穴住居跡と隣接する第6号土坑と出土量に比例して少なくなっている。第5号竪穴住居跡は長短軸の差が少くなり、石囲炉が伴う。VI群は出土量が激減し、遺構内から主体的に出土したものはない。第7号住居跡を立地や炉の偏りから、中期末葉に機能した可能性を指摘したが、住居規模も含め、本遺跡内での活動は活発では無かったものと思われる。VII群もVI群同様出土量が少ない。第3号竪穴住居跡に伴う柱穴2基の堆積土から出土している。平面形態は不整円形で、炉は地床炉となっている。竪穴住居跡はこれ以降の構築が見られなくなる。VIII群は第18号土坑と第20号土坑の出土資料が接合している。その他も第2号焼土遺構の周辺から出土している。第2号焼土遺構は第5号竪穴住居跡より新しい重複関係を示す。このため縄文時代中期後葉以降の構築となるが、土器の出土状況を考慮し、焼土遺構が晩期の活動に伴う可能性を考慮しておきたい。

以上のように、遺構内出土土器の主体となる帰属時期と遺構の形態には相関関係が窺える。このことから、竪穴住居跡は第2・6号→第1・4号→第5号→第7号→第3号の順に構築されたと考えておきたい。

石器については、製作時の擦り切り痕が明瞭に観察できる、硬玉製の磨製石斧が特筆される。堆積

土の最上層からの出土で、同じ層位からは縄文時代中期中葉と縄文時代晚期が出土しているが主体となるのは中期中葉である。このため所産時期の特定は難しい。本県では硬玉製磨製石斧の発掘調査出土事例は皆見の限りない。類似するものとして、むつ市不備無遺跡で出土しているのは軟玉製で、縄文時代晚期の所産である（弘前大学人文学部付属亀ヶ岡文化研究センター2012）。亀ヶ岡遺跡出土品（重要文化財）は定角式で形態が異なる（青森県立郷土館2001）。全国的にも硬玉製磨製石斧の出土事例は極めて珍しい。東北地方での出土事例としては、山形県の吹浦遺跡で2例ある。1点は硬玉製で擦り切り技法により製作された小型磨製石斧である。時期は縄文前期末葉としている（山形県教委1988）。もう1点は硬玉製の玉斧と表記されているもので、擦り切り技法を用いており、時期は縄文時代前期末葉としている（山形県教委1984）。但しこれについては、ヒスイに比定されているものの、必ずしも確認は得られていないとする見解もある（小林圭一2005）。

その他、第5号竪穴住居跡から出土した挿器2点は接合資料で、同一母岩から連続して縦長剥片を作出し、調整剥離を施している。いずれも外皮がそのまま残存したままになっている特徴を持つ。

礫石器では他に、使用石材で火山礫凝灰岩が比較的多く用いられていることが特徴として挙げられる。鬼川辺(1)遺跡、及び鬼川辺(2)遺跡では火山礫凝灰岩の使用事例自体が無く、その特徴を際立たせている。

（能代谷・浅田）

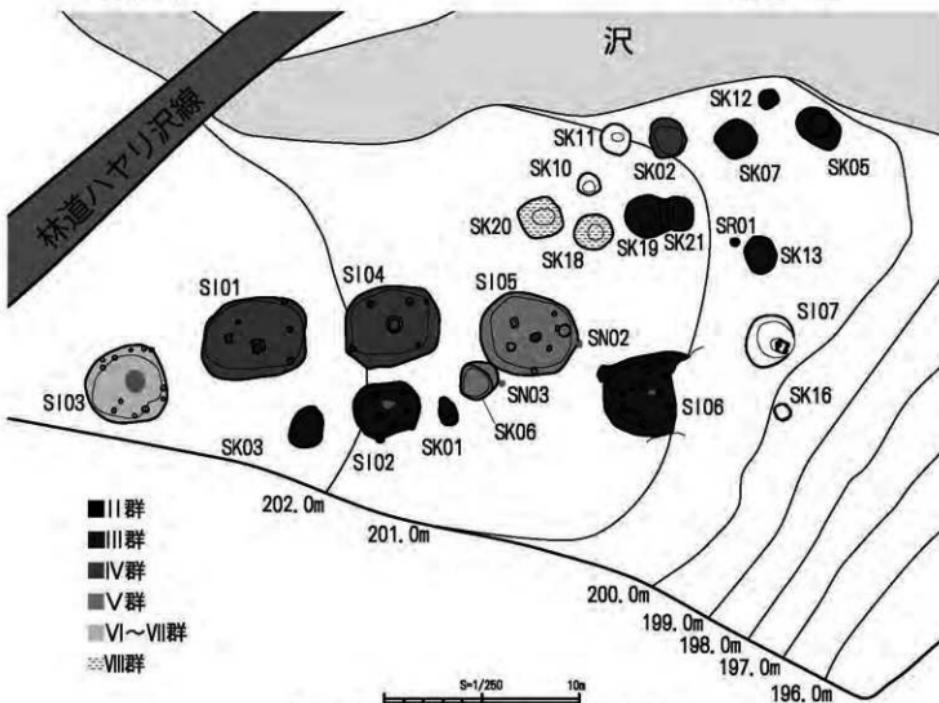


図75 鬼川辺(3)遺跡 遺構時期別分布図

引用参考文献

- 青森県教育委員会 1983『轟平(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第73集
青森県教育委員会 1987『大湊近川遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第104集
青森県教育委員会 1987『芦茶沢(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第116集
青森県教育委員会 1989『表館(1)遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第120集
青森県教育委員会 1994『野場(5)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第150集
青森県教育委員会 2005『川野遺跡Ⅶ』青森県埋蔵文化財調査報告書第394集
青森県教育委員会 2006『川原平(1)・(4)遺跡・大川原(2)遺跡・水上(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第409集
青森県教育委員会 2008『大川原(1)・(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第415集
青森県教育委員会 2008『坪毛沢(1)遺跡Ⅱ・柴山(1)遺跡Ⅱ・大坊頭遺跡・赤平(1)遺跡・赤平(2)遺跡Ⅱ』
青森県埋蔵文化財調査報告書第493集
青森県教育委員会 2008『水上遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第452集
青森県教育委員会 2009『砂子漁港跡・水上(3)遺跡・水上(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第466集
青森県教育委員会 2010『砂子漁港跡Ⅱ・大川原(2)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第482集
青森県教育委員会 2011『大川原(1)遺跡・水上(4)遺跡Ⅱ・芦沢(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第500集
青森県教育委員会 2011『田代遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第505集
青森県教育委員会 2011『青森県遺跡群細分布調査報告書23』青森県埋蔵文化財調査報告書第510集
青森県教育委員会 2012『砂子漁港跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第513集
青森県教育委員会 2012『大川原(2)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第515集
青森県教育委員会 2013『水上(2)遺跡Ⅱ・水上(3)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第528集
青森県教育委員会 2013『川原平(4)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第527集
野辺地町教育委員会 2003『明前(4)遺跡・明前(5)遺跡・野辺地盤田(11)遺跡』野辺地町文化財調査報告書第9集
山形県教育委員会 1984『吹浦遺跡』第1次緊急発掘調査報告書-1 山形県埋蔵文化財調査報告書第82集
山形県教育委員会 1988『吹浦遺跡-第3・4次緊急発掘調査報告書-1』山形県埋蔵文化財調査報告書第120集
弘前大学人文学部付属鹿ヶ岡文化研究センター 2012『下北半島における鹿ヶ岡文化の研究-不確実遺跡発掘調査報告書-1』
弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告8号
大塚達郎 1982『藤起線文土器群見聞-関東地方出土当該土器群の型式的位置-』『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第1号
小笠原雅行 2003『円筒上層式土器』『絶賛繩文土器』株式会社アム・プロモーション
小栗康寛 2008『他地域からみた津南町草創期遺跡群-藤起線文土器段階を中心に-』『津南シンポジウムIV 繩文文化の胎動』
予稿集 津南学術講演会 第8回 信濃川火船街道連携協議会、津南町教育委員会
小保内裕之 2004『八戸市松ヶ崎遺跡出土の縄文時代中期後半の土器について』『東北・北海道の縄文時代中期後葉の諸問題-資料集-』海浜研究年会
小保内裕之 2006『徳島大木系土器(楕円柱・楕円花・大木10式併行土器)』『絶賛繩文土器』株式会社アム・プロモーション
加藤晋平・小林達雄・藤本強 1995『繩文文化の研究7 道具と技術』雄山閣出版株式会社
川口廣 2011『大平山元跡群の位置付け』『大平山元 旧石器時代から縄文時代への移行を考える遺跡群』外ヶ浜町教育委員会
久保田健太郎 2008『新潟県本ノ木遺跡における尖頭器製作の一侧面』『津南シンポジウムIV 繩文文化の胎動』予稿集
津南学術講演会 第8回 信濃川火船街道連携協議会、津南町教育委員会
小林圭一 2005『山形県内出土の縄文時代ヒスイ製石品について』『玉文化』第2号 日本玉文化研究会
佐川正敏・鈴木雅 2006『日向洞窟遺跡新西地区出土石器群の研究』有限公司社六一書房
佐藤雅彦 2008『藤起線文土器群』株式会社アム・プロモーション
鈴木道之助 1981『回錐・石器の基礎知識III 縄文』柏書房株式会社
間根達人 2005『「十腰内Ⅲ・IV・V・VI群土器」に関する今日の理解』『北東の考古学-葛西勲先生還暉記念論文集-』
葛西勲先生還暉記念論文集刊行会
秦昭繁 2007『珪質真岩の供給』『縄文時代の考古学6 ものづくり-道具製作の技術と組織-』(株)同成社
秦昭繁 2010a『押出遺跡の「両刃石刀」からみる石器消費生態』『山形考古』第9巻第2号 山形考古学会
秦昭繁 2010b『秋田県の珪質真岩石材環境』『第24回「東北日本の旧石器文化を語る会」予稿集』
秦昭繁 2013『石器製作実験による発生剥片の法則性と応用』『山形考古』第43号 山形考古学会
村上昇 2007『日本列島東部における縄文時代草創期藤起線文土器の編年-関東地域を中心-』『古代』第120号
早稲田大学考古学会
村上昇 2008『縄文時代草創期の土器編年研究とその顯微』『津南シンポジウムIV 繩文文化の胎動』予稿集 津南学術講演会 第8回
信濃川火船街道連携協議会、津南町教育委員会
青森県立郷土館 2001『火船土器と翡翠の大珠-土の芸術、石の美、そして広域交流-』資料集
青森県史編さん考古部会 2002『青森県史 別編 三内丸山遺跡』青森県
癡跡研究会 1997『古代の土器誕生と焼成遺構』真陽社
国立歴史民俗博物館 2009『企画展示 繩文はいつから!?-1万5千年前になにがおこったのか-』資料集
信濃川火船街道連携協議会、津南町教育委員会 2008『津南シンポジウムIV 繩文文化の胎動-予稿集-』津南学術講演会 第8回
横浜市立博物館 1993『第45回企画展 進歩・創る『唐く』』資料集
横浜市歴史博物館 (財)横浜市ふるさと歴史財团埋蔵文化財調査センター 1996『縄文時代草創期』資料集

観察表の表記について

遺構法量に関する数値を括む（ ）は残存値を表す。縄文土器の計測値で口径・底径における（ ）内の数値は推定復元値を、器高における（ ）内の数値は現存値を示す。また、石器の計測値における（ ）内の数値は現存値を示す。単位は長さをcm、面積をm²、重量をgに統一している。

表1 鬼川辺(1)遺跡 土坑観察表

回 番号	遺構 番号	略号	位 置	長 軸	短 軸	深 さ	備 考
10 1	SK01	II 0-84		89	72	39	II 層上面墻認 II 検
10 2	SK02	II 0-83		97	81	47	II 層上面墻認 II 検
10 3	SK03	II K-83・84		81	67	26	II 層上面墻認 II 検
10 4	SK04	II 0-82, II P-82		67	47	13	III 層上面墻認 II 検
10 5	SK05	II W-84, II 0-84		50	34	11	II 層上面墻認 II 検
10 6	SK06	II 0-83		55	42	8	III 層上面墻認 II 検
10 7	SK07	II V-59・60, II W-59		157	142	7	IV 層上面墻認 I 検 放射性炭素年代測定(第6章第1節参照) 樹種同定(第6章第2節参照)
10 8	SK08	II Q-68		104	89	10	IV 层上面墻認 I 検 放射性炭素年代測定(第6章第1節参照) 樹種同定(第6章第2節参照)
10 9	SK09	II V-65・66, II W-65		309	299	76	IV 层上面墻認 II 検
10 10	SK10	II P-76・77, II 0-76・77		151	113	20	IV 层上面墻認 I 検 放射性炭素年代測定(第6章第1節参照) 樹種同定(第6章第2節参照)
10 11	SK11	II I-77		142	122	22	IV 层上面墻認 I 検 放射性炭素年代測定(第6章第1節参照) 樹種同定(第6章第2節参照)

表2 鬼川辺(1)遺跡 性格不明遺構観察表

回 番号	遺構 番号	略号	位 置	長 軸	短 軸	深 さ	備 考
11 1	SK01	II B-80, II I-80		161	71	(18)	II 層上面墻認 石棺基か
11 2	SK02	II K-63		(79)	77	10	II 層上面墻認
11 3	SK03	II K-83・84		(161)	121	11	II 層上面墻認
11 4	SK04	II K-78・79		62	53	11	III 層上面墻認
11 5	SK05	II K-77, II L-77		107	90	4	II 層上面墻認 火山灰堆積

表3 鬼川辺(1)遺跡 縄文土器観察表

回 番号	出土 位置	層位	器種	形位	施文・表面調整・法量	備 考	分類	整理 番号
12 1	II L-84	II	縄鉢	口	口：平 外：粘土紐貼付による痕跡起起、 指先による捻り 内：ミガキ 器高：(2.7)	炭化物は等、放射性炭素 年代測定(第6章第1節参照) 12-2-3と類似	I	I-35-1
12 2	II L-85	II	縄鉢	脚	外：粘土紐貼付による痕跡起起 内：ミガキ 器高：(2.4)	12-1-3と類似	I	I-36-2
12 3	II M-85	II	縄鉢	脚下	外：粘土紐貼付による痕跡起起、北側？ 内：ミガキ 器高：(5.0)	12-1-2と類似	I	I-36-3
12 4	II O-75	II	縄鉢	口	口：波状台形 口周底付 外：隆帶貼付、縦帶、LR横、 波紋 内：縦帶、器高：(8.5)	II a 1-41		
12 5	II O-81	II	縄鉢	口	口：平 外：隆帶貼付、RL斜 内：ミガキ 器高：(5.6)	II a 1-43		
12 6	II P-76	II	縄鉢	脚	外：縦帶貼付、RL斜 内：磨滅 器高：(4.1)	II a 1-45		
12 7	II P-76	II	縄鉢	口	波状台形 外：隆帶貼付、RL 内：ミガキ 器高：(3.9)	II a 1-44		
12 8	II Q-75	II	縄鉢	口	波状台形 外：磨状突起、LR斜 内：磨滅 器高：(3.7)	II b 1-42		
12 9	II Q-75	II	縄鉢	脚	外：沈線、丸模 内：磨滅 器高：(4.0)	II b 1-46		
12 10	II Q-75	II	縄鉢	口	波状台形 外：RL横 口縁隆帶剥離 内：ミガキ 器高：(5.8)	II 1-47		
12 11	II Q-75	II	縄鉢	底	外：磨滅 内：ミガキ 底面：磨滅 器高：(4.0)	II 1-48		
12 12	II L-81	II	縄鉢	口	口：平、口唇肥厚 外：沈線 内：ミガキ 器高：(2.9)	III a 1-80		
12 13	II L-82	II	縄鉢	脚	外：ミガキ、沈線、磨状突起 内：ミガキ 器高：(3.1)	III a 1-32		
12 14	II E-80	II	注口	注口	外：ミガキ、沈線、磨状突起 内：ナデ 厚：(5.5) 幅：(0.8)	III b 1-2		
12 15	II K-83 II L-83	II	注口	口～底	口：平 外：磨状突起、RL斜、沈線、ミガキ 内：ナデ 底面：高台、ミガキ、注口部欠損 厚：10.3 底径：4.0 器高：17.1	二次加热、スス付等 注口部にアズブアルトと思われる黑色物質付着	III b 1-34	

番号	出土位置	層位	器種	部位	描文・表面調整・法線	備考	分類	整理番号
12 16	II F-80	II	深鉢	口	口: 平、山形突起 外: 薄帶貼付、刺突、LR横、沈線 内: ミガキ 器高: (5.7)		III b	1-3
12 17	II H-82	II	壺	口	口: 平、山形突起 外: 刺突、刻目、沈線 内: ミガキ 器高: (2.6)	12-18と同一個体	III b	1-13・2
12 18	II H-82	II	壺	腹	外: 沈線、刻目、瘤状突起 内: ミガキ 器高: (3.0)	12-17と同一個体	III b	1-13・1
12 19	II J-81	II	深鉢	脚	外: 瘤状突起、三方牛 内: ナデ 器高: (4.5)		III b	1-18
12 20	II H-81	II	壺	脚	外: 刻目、沈線、ミガキ 内: ミガキ 器高: (6.4)		III b	1-8
12 21	II G-81	II	鉢	脚	外: 瘤状突起、沈線、纏文磨痕 内: ナデ 器高: (2.7)	12-22と同一個体	III b	1-4・3
12 22	II G-80	II	鉢	脚	外: 瘤状突起、沈線、LR横・縫、磨痕 内: ミガキ 器高: (3.4)	12-21と同一個体	III b	1-4・1
12 23	II H-82	II	小型壺	口	口: 平、外: LR横、沈線、磨痕 内: ミガキ 器高: (2.2)		III b	1-10
13 1	II L-80	II	深鉢	口～脚	口: 平、山形突起 外: 沈線、刻目、瘤状突起、LR横 内: ミガキ 器高: (9.5)	13-2と同一個体	III b	1-28・1
13 2	II L-80	II	深鉢	脚	外: 沈線、刻目、瘤状突起 (9.8)	口盤: 欠損、13-1と同一個体	III b	1-28・2
13 3	II K-79	II	深鉢	口	口: 平、山形突起 外: 瘤状突起、刻目、沈線 内: ミガキ 器高: (6.6)		III b	1-20
13 4	II K-83	II	深鉢	口	口: 平、山形突起 外: 沈線、刺突、ナデ 内: ミガキ 器高: (3.6)	13-5と同一個体	III b	1-25・1
13 5	II K-83	II	深鉢	口	口: 平、山形突起 外: 沈線、刺突、ナデ 内: ミガキ 器高: (6.0)	13-4と同一個体	III b	1-25・2
13 6	II K-83	II	鉢	脚	外: 瘤状突起、ミガキ、沈線、LR横 内: ミガキ 器高: (3.2)		III b	1-21
13 7	II K-83	II	鉢	口	口: 平、外: 瘤状突起、ミガキ、沈線、刻目 内: ナデ 器高: (3.2)		III b	1-22
13 8	II J-82	II	深鉢	脚	外: ミガキ、沈線、瘤状突起 内: ミガキ 器高: (2.9)	13-9と同一個体	III b	1-19・1
13 9	II J-82	II	深鉢	脚	外: ミガキ、沈線、瘤状突起 内: 三方牛 器高: (2.5)	13-8と同一個体	III b	1-19・2
13 10	II L-83	II	深鉢	口～脚	口: 平、外: LR横・縫、内: ナデ 口径: (28.7) 器高: (16.0)	13-11と類似	IV	1-35・1
13 11	II L-83	II	深鉢	底	外: ミガキ 内: 磨痕 底面: ミガキ 底径: (8.0) 器高: (2.0)	13-10と類似	IV	1-35・2
13 12	II H-80	II	深鉢	口	口: 平、山形突起 外: LR横 内: ミガキ 器高: (4.2)		IV	1-7
13 13	II K-82	II	鉢	口	口: 平、山形突起 外: ミガキ 内: 輪模痕、ナデ 器高: (5.4)		IV	1-24
13 14	II L-80	II	深鉢	口	口: 平、外: LR横 内: ミガキ、ナデ、輪模痕 器高: (4.0)		IV	1-29
13 15	II K-84	II	深鉢	口	口: 平、外: LR横 内: ミガキ 器高: (4.4)		IV	1-26
13 16	II K-82	II	深鉢	口	口: 平、外: LR横・縫 内: ナデ 器高: (6.6)		IV	1-23
13 17	II L-82	II	深鉢	口～脚	口: 平、外: LR横・縫、内: ナデ 口径: (22.1)	13-18と類似	IV	1-33・1
13 18	II L-82	II	深鉢	底	外: ミガキ 内: ミガキ 底面: ミガキ 底径: (10.0) 器高: (1.6)	13-17と類似	IV	1-33・2
13 19	II H-81	II	深鉢	口～脚	口: 平、外: LR横・縫 内: ミガキ 器高: (7.0)	13-20・21と類似	IV	1-15・1
13 20	II H-81	II	深鉢	脚	外: 刻斜 内: 三方牛 器高: (8.0)	13-19・21と類似	IV	1-15・2
13 21	II H-81	II	深鉢	底	外: ミガキ 内: ミガキ 輪模痕 底面: ミガキ 底径: (11.0) 器高: (2.1)	13-19・20と類似	IV	1-15・3
14 1	II M-84	II	深鉢	口	口: 平、口唇上部凹、底面 外: 橫方向LR側面圧痕、LR縫 内: ミガキ 器高: (7.5)	14-2と類似	IV	1-40・1
14 2	鬼城水跡 II M-84	堆積土	深鉢	脚	外: LR横 内: ミガキ 器高: (6.3)	14-1と類似	IV	1-40・2
14 3	II L-82	II	深鉢	口	口: 平、外: LR横 内: ミガキ 器高: (6.3)		IV	1-31・1
14 4	II L-82	II	深鉢	脚	外: LR横 内: ナデ 器高: (1.1)	胎土がざっくりした感じ	IV	1-31・2
14 5	II B-80	Ib	深鉢	口	口: 平、外: LR縫 内: ナデ 器高: (3.5)		IV	1-1
14 6	II H-79	II	深鉢	口	口: 平、外: LR横 内: ミガキ 器高: (4.3)		IV	1-6
14 7	II H-82	II	深鉢	口	口: 平、外: LR横 内: ミガキ 器高: (3.1)		IV	1-12
14 8	II H-83	II	深鉢	口	口: 平、外: ナデ、LR横 内: ナデ 器高: (3.5)		IV	1-14
14 9	II I-82	II	深鉢	口	口: 平、口唇貼付、ナデ 外: LR横 内: ミガキ 器高: (5.7)	14-10・11と同一個体	IV	1-16・1
14 10	II I-82	II	深鉢	脚	外: LR横 内: ミガキ 器高: (5.0)	14-9・11と同一個体	IV	1-16・2
14 11	II H-81	II	深鉢	底	外: ミガキ、ナデ 底面: ヘラケズリ 底径: (5.8) 器高: (1.7) 壁形状: 壁状	14-9・10と同一個体	IV	1-16・3
14 12	II G-82	II	深鉢	口	口: 平、外: LR横・縫 内: ミガキ 器高: (5.9)		IV	1-5
14 13	II M-78	II	深鉢	脚	外: 無記 内: ミガキ、輪模痕 器高: (4.8) 器高: (4.2)	14-18と類似	IV	1-39・2
14 14	II K-85	II	深鉢	脚	外: 無記 内: ウルシ葉模様の黒色物質付着		IV	1-27
14 15	II J-81	II	深鉢	脚	外: LR右斜、LR横、スス 内: ナデ 器高: (7.2)		IV	1-17
14 16	II H-82	II	台付鉢	脚	外: ミガキ 内: ナデ 器高: (3.7)		IV	1-9
14 17	II M-78	II	深鉢	底	外: 磨痕 内: 磨痕 底面: 磨痕 底径: 4.8 器高: (1.2)	内面に燒成後の製打痕、 二次加工の可能性	IV	1-37
14 18	II M-78	II	深鉢	底	外: ミガキ、内: ミガキ 底面: 三方牛 底径: 5.4 器高: (1.2)	14-13と類似	IV	1-39・1
14 19	II H-82	II	壺	底	外: ナデ 内: ナデ 底面: 無文 底径: (4.8) 器高: (1.2)		IV	1-11
14 20	II M-78	II	深鉢	底	外: ナデ 内: ミガキ 底面: ナデ 底径: (6.4) 器高: (2.2)		IV	1-38

表4 鬼川辺(1)遺跡 石器観察表

図	番号	出土位置	層位	器種	石質	長	幅	厚	重	備考	整理番号
15	1	SK03	2	削器	珪質頁岩	5.4	2.6	2.1	22.4		ハク1001
15	2	SK01	1	敲磨器	デイサイト	13.3	8.6	7.8	1213.2	敷き	レキ101
15	3	II-L-84	II	尖頭器	珪質頁岩	(5.4)	(3.8)	(1.0)	18.5	木薙形、先端部欠損	ハク1079
15	4	II-K-84	II	尖頭器	珪質頁岩	(4.7)	(3.8)	(1.0)	13.3	木薙形、先端部欠損	ハク1011
15	5	II-L-84	II	尖頭器	珪質頁岩	8.2	2.9	0.9	19.1	木薙形、縫合	ハク1019
15	6	II-L-84	II	尖頭器	珪質頁岩	7.1	2.9	0.8	13.4	木薙形	ハク1077
15	7	II-L-84	II	尖頭器	珪質頁岩	6.4	2.9	0.9	11.9	木薙形、折損後の二次加工痕有	ハク1021
15	8	II-L-84	II	尖頭器	珪質頁岩	6.1	2.5	1.0	12.5	木薙形	ハク1074
15	9	II-O-81	II	尖頭器	珪質頁岩	5.9	2.5	1.0	12.1	木薙形	ハク1075
15	10	II-O-85	II	尖頭器	珪質頁岩	(4.1)	(2.3)	(1.0)	8.9	木薙形、先端部欠損	ハク1028
15	11	II-L-84	II	尖頭器	珪質頁岩	7.8	1.8	0.5	4.8	木薙形	ハク1076
15	12	II-O-82	II	尖頭器	珪質頁岩	6.3	1.7	0.6	5.2	木薙形	ハク1073
15	13	II-K-84	II	尖頭器	珪質頁岩	(4.1)	(2.1)	(0.6)	4.6	木薙形、先端部欠損	ハク1072
15	14	II-M-95	II	搔刮	珪質頁岩	8.6	3.0	1.6	31.5		ハク1032
15	15	II-O-85	II	搔刮	珪質頁岩	3.6	4.3	1.1	16.5		ハク1081
15	16	II-K-83	II	削器	珪質頁岩	5.6	2.7	1.3	13.7		ハク1010
16	1	II-E-79	1b	石核	珪質頁岩	4.5	1.4	0.8	4.1	凸起	ハク1065
16	2	II-P-74	II	石核	珪質頁岩	4.5	1.4	0.6	2.7	凸起、アスファルト付着	ハク1061
16	3	II-C-76	II	石核	珪質頁岩	3.9	1.4	0.8	3.1	凸起	ハク1070
16	4	II-J-82	II	石核	珪質頁岩	3.2	0.9	0.5	1.2	凸起	ハク1071
16	5	II-O-81	II	石核	珪質頁岩(主鉛質)	2.2	1.4	0.5	1.0	凸起	ハク1060
16	6	II-C-78	II	石核	珪質頁岩	2.3	1.2	0.3	0.4	凸起	ハク1062
16	7	II-G-82	II	石核	珪質頁岩	5.6	4.6	1.5	35.7		ハク1006
16	8	II-L-78	II	石核	珪質頁岩	4.9	2.0	1.0	7.3		ハク1091
16	9	II-M-77	1b	石核	珪質頁岩	4.6	0.8	0.7	2.5		ハク1066
16	10	II-K-81	II	石核	珪質頁岩	5.0	0.9	0.6	2.0	石核の可塑性有	ハク1068
16	11	II-L-84	II	石核	珪質頁岩	4.4	2.7	0.8	8.7		ハク1020
16	12	II-K-75	II	石核	珪質頁岩	9.2	3.3	1.9	49.3	石核の可塑性有	ハク1078
16	13	II-M-80	II	石核	珪質頁岩	7.0	3.6	1.3	37.0		ハク1080
16	14	II-N-79	II	石核	珪質頁岩	8.6	2.2	1.3	13.3	旋型	ハク1086
16	15	II-G-81	II	石核	珪質頁岩	6.9	3.7	1.1	22.3	旋型	ハク1083
16	16	II-N-77	II	石核	珪質頁岩	5.3	3.0	0.7	12.9	旋型	ハク1039
16	17	II-N-77	II	石核	珪質頁岩	5.6	6.7	1.1	24.3	横型	ハク1088
16	18	II-G-80	II	石核	珪質頁岩	3.2	6.9	1.0	15.6	横型、アスファルト付着	ハク1084
17	1	II-G-81	II	敲磨器	デイサイト	14.7	7.3	1.9	317.5	凹み	レキ111
17	2	II-K-80	II	敲磨器	粗粒玄武岩	10.5	5.5	3.4	235.3	凹み、敷き	レキ116
17	3	II-G-77	II	敲磨器	デイサイト	(4.5)	(8.1)	(4.7)	218.5	凹み、欠損	レキ127
17	4	II-G-77	II	敲磨器	デイサイト	16.6	8.1	5.4	1091.8	磨り	レキ124
17	5	II-L-80	II	敲磨器	凝灰岩	17.5	5.9	3.2	520.6	磨り	レキ118
17	6	II-L-82	II	敲磨器	安山岩	11.2	9.4	8.0	1137.5	磨り、敷き	レキ114
17	7	II-K-82	II	敲磨器	凝灰岩	13.5	4.5	2.8	227.4	磨り、敷き	レキ117
18	1	II-G-79	II	敲磨器	粗粒玄武岩	10.0	6.2	3.4	362.5	磨り、敷き	レキ103
18	2	II-G-77	II	敲磨器	凝灰岩	12.4	8.5	3.6	428.4	磨り、凹み	レキ128
18	3	II-G-72	II	磨製石斧	閃綠岩	(11.4)	(4.2)	(3.6)	258.7	刃部欠損、基部先端に磨り	レキ108
18	4	II-K-79	II	磨製石斧	綠色岩	(6.0)	(2.9)	(2.0)	42.9	刃部一部残存	レキ130

表5 鬼川辺(1)遺跡 土製品観察表

図	番号	出土位置	層位	器種	長	幅	厚	重	備考	整理番号
19	1	II-P-80	II	土製円盤	3.3	3.2	0.8	6.3	全面ミガキ	土1

表6 鬼川辺(1)遺跡 石製品観察表

図	番号	出土位置	層位	器種	石質	長	幅	厚	重	備考	整理番号
20	1	II-L-84	II	錐削器	凝灰岩	27.6	19.3	4.9	2178.3		石製品03

表7 鬼川辺(2)遺跡 積穴住跡観察表

回 番号	遺構 番号	略号	位 置	遺構 面積	付属施設	炉形態	備 考
22	1	S101	I-D-41・42	—	P1: 107×85×24	石窯炉	Ⅲ層上面確認
23	2	S102	I-E-44・45	(483) × (378) × (17) (15.0)	炉: 97×96×22 火床面: 40×30×6	石窯炉	Ⅲ層上面確認
24	3	S103	I-P-41・42	(474) × (405) × 28 (15.9)	—	—	Ⅲ層上面確認
25	4	S104	II-L-18-20	(454) × (361) × 15 (13.7)	炉: 111×85×4	地床炉	IV層上面確認
26	5	S105	II-E-20・21 II-L-20・21	(520) × (390) × (24) (16.0)	P1: 33×27×49、P2: 35×27×14、P3: 28×23× 54、P4: (39) × (36) × 21、P5: 42×38×51、 P6: 25×24×43、炉: 67×49×10	地床炉	IV層上面確認

表8 鬼川辺(2)遺跡 土坑観察表

回 番号	遺構 番号	略号	位 置	長軸	短軸	深さ	備 考
27	1	SK01	II-C-25	141	103	18	Ⅲ層上面確認
27	2	SK02	II-C-25、II-D-24・25	136	126	38	Ⅲ層上面確認
27	3	SK03	II-E-25	153	85	29	Ⅲ層上面確認

表9 鬼川辺(2)遺跡 焼土遺構観察表

回 番号	遺構 番号	略号	位 置	長軸	短軸	深さ	備 考
28	1	SNO1	I-P-43	36	31	5	Ⅲ層上面確認

表10 鬼川辺(2)遺跡 繩文土器観察表

回 番号	出 土	層位	器種	部位	萬文・器面調整・法蓋	備 考	分類	整理 番号
29	1	S102	1	深鉢	口: 平 外: 沈縁、ミガキ 無筋 内: ミガキ 器高: (2.4)		IIa1	2-1
29	2	S102	1	深鉢	頭: 外: 沈縁、ナデ 内: ミガキ 器高: (3.7)		IIa1	2-2
29	3	S102	1	深鉢	底: 外: ミガキ 内: ナデ 底面: ミガキ 底径: (5.8) 器高: (1.7)		IV	2-3
29	4	S102	1	深鉢	底: 外: ミガキ 磨痕 内: ナデ 底面: ミガキ 底径: (9.8) 器高: (2.5)		IV	2-4
29	5	S102	1	浅鉢	頭: 外: 沈縁、無筋 内: ミガキ 器高: (2.2)		IIa1	2-6・2
29	6	S103	1	浅鉢	口: 平 外: 口唇: 突起貼付 外: 沈縁、羊齒状紋 内: ミガキ 器高: (1.8)		IIIa	2-8・1
29	7	S103	3	深鉢	頭: 外: 沈縁、無筋 内: ナデ 器高: (3.2)		IIa1	2-10
29	8	S103	1	深鉢	頭: 外: 沈縁、ミガキ 内: ミガキ スス 磨痕: (5.5)	骨針合	II b	2-7
29	9	S103	1	深鉢	頭: 外: 沈縁、ミガキ 内: ミガキ 器高: (5.1)	骨針合	II b	2-9
29	10	S103	1	深鉢	口: 平 外: ミガキ 内: ナデ 器高: (3.4)	II c	2-5	
29	11	S103	1	直	底: 内: ナデ 底面: ミガキ 底径: 4.2 器高: (1.4)	II c	2-6	
29	12	S103	3	ミニチュア	口: 平 外: ミガキ 内: ナデ 器高: (2.2)	29-13と同一個体	II c	2-11・1
29	13	S103	1	ミニチュア	脚・頭: 外: ミガキ ナデ 内: ナデ 磨痕底、スス 底径: 3.0 器高: (3.75)	骨針合 29-12と同一個体	II c	2-11・2
29	14	S104	1	深鉢	頭: 外: 陶輪上端压痕、丸、刺突 内: 磨痕 器高: (5.6)	II b	2-13	
29	15	S104	1	深鉢	頭: 外: 陶輪、比縫、内: 磨痕 器高: (5.3)	II c	2-12	
29	16	S105	1	碗土	頭: 外: 磨痕底、LR、沈縁 内: ミガキ 器高: (4.4)	II d	2-14	
29	17	II-G-22	1	深鉢	口: 平、口唇: 突起貼付、腰帶: 外: LR横、刺突、腰帶、 腰: 内: ミガキ 器高: (10.8)	29-18・19と同一個体	I a	2-45・1
29	18	II-G-22	1	深鉢	頭: 外: 腰帶、腰帶压痕、腰突 内: ナデ 器高: (15.4)	29-17・19と同一個体	I a	2-45・2
29	19	II-G-22	1	深鉢	底: 外: RL斜、刺突、腰帶、RL右斜 内: 磨痕	29-17・18と同一個体	I a	2-45・3
29	20	II-H-23	1	深鉢	頭: 外: 腰帶压痕、腰突、腰帶、RL右斜 内: 磨痕 器高: (2.9)	I b	2-46・2	
29	21	II-H-23	1	深鉢	頭: 外: 横位腰帶、腰帶压痕、腰突 内: 磨痕 器高: (5.2)	I b	2-46・1	
29	22	II-J-19	1	深鉢	口: 平、山形突起、突起下縫合痕底外: LR横、磨痕、 内: 磨痕、口唇: 27.5 底径: 10.6 器高: 37.2	IIa2	2-56	
29	23	II-J-19	1	深鉢	口: 瓦狀山形 外: 沈縁、LR縫、瓦ガキ 内: ミガキ 器高: (6.3)	29-24・25と同一個体	IIa1	2-37・1
29	24	II-J-19	1	深鉢	頭: 外: 沈縁、ミガキ、LR縫、スス 内: ミガキ 器高: (6.3)	29-23・25と同一個体	IIa1	2-37・2
29	25	II-J-19	1	深鉢	頭: 外: 沈縁、ミガキ、LR縫、スス 内: ミガキ 器高: (4.5)	29-23・24と同一個体	IIa1	2-37・3
30	31	II-J-19	1	深鉢	口: 平 外: LR縫、綱、沈縁、ミガキ 内: ミガキ 器高: (11.5)	沈縁側面充満 30-2と同一個体	IIa1	2-57・1

番	書	出土位置	層位	器種	部位	施文・器面調整・法雲	備考	分類	整理番号
30	2	II J-19	I	深鉢	縁	外: 沈線、LR横、ミガキ 内: ミガキ 器高: (17.8)	30-1と同一個体	II a1	2-57・2
30	5	II J-19	I	深鉢	口	口: 平 外: 沈線、凹模 内: ミガキ 器高: (3.1)		II a1	2-50・3
30	4	圓底木箱	堆積土	深鉢	口	口: 平 外: 沈線、無脚、(磨滅) 内: ミガキ 器高: (2.6)	30-5と同一個体	II a1	2-19
30	5	圓底木箱	堆積土	深鉢	縁	外: 无筋、沈線、刺突 内: ミガキ 器高: (2.5)	30-4と同一個体	II a1	2-17
30	6	II J-19	I	深鉢	縁	外: 沈線、紅横 内: ナデ 器高: (6.5)		II a1	2-50・2
30	7	I R-43	I	深鉢	縁	外: 无筋、沈線、ミガキ 内: ミガキ 器高: (4.0)		II a1	2-25・4
30	8	II K-19	I	深鉢	口	口: 平 外: 沈線、隆帶(瘤)、凹模 内: 磨滅 器高: (4.1)		II a1	2-53
30	9	II J-19	I	深鉢	縁	外: 沈線、凹模、瘤 内: ミガキ 器高: (5.3)		II a1	2-50・1
30	10	II J-19	II	深鉢	縁	外: 沈線、LR横、スヌ 内: ミガキ 器高: (5.6)		II a2	2-54
30	11	II J-19	I	深鉢	縁	外: 沈線、無脚横 内: ミガキ 器高: (10.5)		II a2	2-49
30	12	II J-19	I	深鉢	縁	外: 沈線、LR横 内: ミガキ 器高: (12.2)	31-5~7と類似	II a2	2-48
30	13	I M-44	I	深鉢	口	口: 放状形 外: 沈線、ミガキ 内: ミガキ 器高: (5.2)		II b	2-15
30	14	II J-19	I	深鉢	口	口: 平、山形突起 外: 沈線、ミガキ 内: ミガキ 器高: (2.8)		II b	2-42
30	15	圓底木箱	堆積土	深鉢	縁	外: 沈線、ミガキ 内: ミガキ 器高: (2.5)		II b	2-16
30	16	I R-38	I	深鉢	縁	外: 沈線、ミガキ、スヌ付縁 内: ミガキ 器高: (7.0)	30-17と同一個体	II b	2-32・1
30	17	I R-38	I	深鉢	縁	外: 沈線、磨滅、スヌ付縁 内: ミガキ 器高: (8.5)	30-16と同一個体	II b	2-32・2
30	18	I R-38	I	深鉢	口~削	口: 平 外: 沈線、ミガキ 内: ミガキ、スヌ付縁 器高: (25.5)		II b	2-30
31	1	I Q-41	I	深鉢	縁	外: 沈線、スヌ付縁、ミガキ 内: ミガキ、磨滅 器高: (12.0)	31-2と同一個体	II a	2-31
31	2	I Q-41	I	深鉢	縁	外: 沈線、ミガキ 内: ミガキ 器高: (9.7)		II a	2-34
31	3	I Q-41	I	深鉢	底	口: 平 外: ミガキ 内: ミガキ 器高: (1.7)	31-4と類似	II a	2-25・2
31	4	I Q-41	I	深鉢	縁	外: ミガキ、LR横 内: ミガキ、ナデ、輪模底 器高: (6.5)	赤色粒、骨針合	II a	2-25・1
31	5	II J-20	I	深鉢	口	口: 平 外: 沈線、ミガキ 内: ミガキ 器高: (5.4)	30-12、31-5~7と類似	II a2	2-52・1
31	6	II J-20	I	深鉢	口	口: 平 外: ミガキ 内: ミガキ 器高: (3.6)	30-12、31-5~7と類似	II a2	2-52・2
31	7	II K-19	I	深鉢	口	口: 平 外: 沈線、ミガキ 内: ミガキ 器高: (4.4)	30-12、31-5~7と類似	II a2	2-52・3
31	8	I Q-41	I	深鉢	縁	外: 沈線、ミガキ 内: ミガキ 器高: (6.5)		II b	2-28・1
31	9	I S-42	I	深鉢	縁	外: 沈線、磨滅 内: 磨滅 器高: (5.6)		II b	2-35
31	10	I Q-41	I	鉢	縁	外: 沈線、制突、LR横 内: ミガキ 器高: (3.2)		II b	2-21
31	11	I Q-41	I	台付鉢	台	外: ミガキ、SL横 内: 輪模底、ナデ 底面: ミガキ 器高: (2.1)		III b	2-25・6
31	12	II J-19	II	深鉢	口~削	口: 平 外: 无斜料、縫、LR横 内: ミガキ 口径: 29.0 器高: (29.6)	31-13と同一個体	IV	2-47・1
31	13	II J-19	I	深鉢	底	外: ミガキ 内: ナデ 底径: 9.0 器高: (2.5)	31-12と同一個体	IV	2-47・2
31	14	I T-41	I	深鉢	口~縁	口: 平 外: 乳渠、磨滅 内: ミガキ 器高: (5.2)	31-15と同一個体	IV	2-36・1
31	15	I S-41	I	深鉢	口~縁	口: 平 外: LR横 内: ミガキ 器高: (4.4)	31-14と同一個体	IV	2-36・2
31	16	II J-19	I	深鉢	口~縁	口: 平、山形突起 外: ミガキ 内: ミガキ 器高: (7.1)	II c	2-55・2	
31	17	II J-19	I	深鉢	口	口: 平、山形突起 外: ミガキ 器高: (2.8)		II c	2-55・1
31	18	I P-44	I	深鉢	口	口: 平 外: ミガキ 内: ミガキ 器高: (3.8)		II c	2-18
31	19	I Q-42	I	深鉢	縁	外: 条底、磨滅 内: ナデ、磨滅、スヌ 器高: (4.4)		IV	2-23
31	20	I S-42	I	深鉢	縁	外: 条底、沈線、磨滅 内: ナデ、磨滅 器高: (5.5)		IV	2-24
31	21	I P-44	I	深鉢	縁	外: LR横、輪模底。スヌ 内: ナデ 器高: (4.7)		IV	2-22
31	22	I Q-43	I	深鉢	縁	外: ミガキ 内: ミガキ、黒斑状黒色物質付縁 器高: (4.0)		IV	2-26
32	1	S103	I	深鉢	口	口: 平 外: ミガキ 内: ミガキ 器高: (6.0)	骨針合、32-2と同一個体	II c	2-29・1
32	2	I Q-41	I	深鉢	口	ミガキ、スヌ 内: ミガキ、黒色物質 器高: (18.6)	骨針合、32-1と同一個体	II c	2-29・2
32	3	II J-19	I	深鉢	底	外: 磨滅、内: 磨滅、底面: 朝代旗 底径: 10.2 器高: (2.5)		IV	2-39
32	4	II J-19	I	深鉢	底	外: ミガキ 内: ミガキ 底面: ミガキ 底径: 8.5 器高: (3.0)		IV	2-51
32	5	II J-19	II	ミニチュア	底	外: ミガキ 内: ミガキ 底面: ミガキ 底径: 4.0 器高: (2.3)		IV	2-38
32	6	I R-40	I	深鉢	底	外: LR横、縫 内: ミガキ 底面: 軽微底 器高: (2.5)	二次被熟	IV	2-33
32	7	II J-19	I	深鉢	底	外: 磨滅 内: ミガキ、スヌ 底面: ナデ 底径: 7.0 器高: (2.2)	二次被熟	IV	2-40
32	8	II J-19	I	深鉢	底	外: 磨滅 内: ミガキ、スヌ付縁 底面: 磨滅 底径: 6.8 器高: (3.0)	二次被熟	IV	2-44
32	9	II J-19	I	深鉢	底	外: 無文、ミガキ 内: ナデ、輪模底 底面: ミガキ 底径: (7.0) 器高: (2.95)		IV	2-43
32	10	I Q-41	I	深鉢	底	外: ナデ、黒色物質付縁 内: ミガキ、黒色物質付縁、輪模底 底面: ミガキ 底径: (13.0) 器高: (2.3)		IV	2-27
32	11	II J-19	I	深鉢	底	外: 無文、ナデ 内: ナデ 底面: ナデ 底径: (11.6) 器高: (3.0)		IV	2-41

表11 鬼川辺(2)遺跡 石器観察表

回	番号	出土位置	層位	器種	石質	長	幅	厚	備考	登録番号
33	1	SI02	I	敲磨器	凝灰岩	14.2	4.0	2.0	111.0 売り	レキ201
33	2	SI05	床	敲磨器	デイサイト	17.2	6.7	4.4	599.7 凹み、磨り、敲き	レキ203
33	3	SI09	I	敲磨器	粗粒花崗岩	11.0	9.7	3.7	461.5 凹み、敲き	レキ204
33	4	SI03	I	敲磨器	凝灰岩	12.5	8.0	4.3	498.4 凹み、磨り、敲き	レキ205
33	5	SI03	I	台石	凝灰岩	17.0	14.6	4.1	1036.2 売り、敲き	レキ206
33	6	SI04	堆積土	刮削器	珪質頁岩	6.9	6.1	1.7	63.5	ハク2008
33	7	SI04	I	敲磨器	凝灰岩	15.4	8.8	3.3	546.3 凹み、磨り、敲き	レキ208
34	1	II-39	I	石核	珪質頁岩	(3.6)	(1.3)	(0.5)	1.6 凸起、先端欠損	ハク2020
34	2	IV-45	I	石核	珪質頁岩	2.2	1.5	0.4	0.7 凸起	ハク2021
34	3	IV-41	I	石核	珪質頁岩	6.8	3.8	1.5	44.1	ハク2009
34	4	III-18	I	石核	珪質頁岩	4.4	1.8	0.5	2.5 横型	ハク2018
34	5	II-P-45	I b	石核	珪質頁岩	4.8	7.6	1.4	25.4 横型	ハク2022
34	6	II-E-21	I	兩面刃	珪質頁岩	4.1	1.8	0.8	5.5	ハク2012
34	7	II-B-26	I	刮削器	珪質頁岩	7.0	3.8	1.6	42.1	ハク2011
34	8	IV-B-44	I	刮削器	珪質頁岩	4.5	1.8	0.5	3.5	ハク2010
34	9	II-J-19	I	刮削器	珪質頁岩	4.5	3.8	1.0	13.5	ハク2015
34	10	II-E-19	I	刮削器	珪質頁岩	5.7	3.2	1.1	15.9	ハク2017
34	11	II-M-18	I	兩面刃	珪質頁岩	(3.0)	(3.0)	(0.9)	7.9	ハク2019
34	12	II-K-19	I	敲磨器	安山岩	10.4	8.4	7.7	78.3 売り、敲き	レキ213
34	13	II-F-23	I	敲磨器	安山岩	9.9	8.1	2.6	243.0 凹み、敲き	レキ211
34	14	II-E-46	I	敲磨器	凝灰岩	12.0	6.0	3.7	243.5 敲き	レキ209
34	15	II-B-27	I	磨製石斧	粗粒玄武岩	(12.2)	(6.1)	(3.1)	354.5 先端欠損、 器表面に細かい敲打痕と二次利用の磨り	レキ214
34	16	II-B-41	I	磨製石斧	綠色岩	7.6	3.7	1.6	66.2	レキ215

表12 鬼川辺(3)遺跡 聖穴住居跡観察表

回	遺構番号	略号	位置	規模 面積	付帯施設	形態	備考
36	1	SI01	I-S-19+20 I-T-19+20	528×401×42 18.9	P1 : 33×26×39. P2 : 25×25×22. P3 : 21×19×28. P4 : 48×35×26. P5 : 36×33×27. 伊 : 70×68×9	石床炉	IV層上面確認
37	2	SI02	I-R-21+22 I-S-21+22	336×253×36 7.7	P1 : 26×24×21. P2 : 32×27×22. P3 : 32×26×22. P4 : 33×31×21. P5 : 23×22×17. P6 : 28×21×16. P7 : 39×36×32. 伊 : 65×39×11	地床炉	IV層上面確認 (第6章第1節) 樹樁同定 (第6章第2節)
38	3	SI03	I-S-17+18 I-T-18	408×400×29 11.7	P1 : 28×25×30. P2 : 24×22×22. P3 : 26×20×30. P4 : 21×19×23. P5 : 20×18×20. P6 : 24×20×29. P7 : 36×32×45. P8 : 19×17×14. P9 : 17×14×33. P10 : 25×19×35. P11 : 21×19×27. P12 : 25×23 ×30. 伊 : 116×100×37	地床炉	IV層上面確認
39	4	SI04	I-S-21+22 I-T-21+22	479×406×47 16.6	P1 : 24×20×43. P2 : 17×16×24. P3 : 43×32×44. P4 : 36×34×40. P5 : 33×29×41. 伊 : 80×75×16	地床炉	IV層上面確認
40	5	SI05	I-S-22+24 I-T-22+24	505×418×51 17.2	P1 : 61×57×20. P2 : 25×16×24. P3 : 21×21×27. P4 : 54×38×24. P5 : 34×28×35. P6 : 26×20×16. P7 : 31×29×25. P8 : 26×26×37. P9 : 24×24×20. P10 : 26×26×49. P11 : 34×25×18. P12 : 51×26 ×28. 伊 : 45×26×9	石圓炉	IV層上面確認
41	6	SI06	I-R-24+25 I-S-24+25	(415)×(363)×62 13.6	P1 : 35×34×28. P2 : 23×22×30. P3 : 36×34×23. P4 : 17×16×25. P5 : 23×16×21. P6 : 51×48×27. P7 : 31×29×25. P8 : 26×26×37. P9 : 24×24×20. P10 : 26×26×49. P11 : 34×25×18. P12 : 51×26 ×28. 伊 : 45×26×9	地床炉	IV層上面確認
42	7	SI07	I-S-26 I-T-26	275×242×38. 5.0	伊 : 95×69×11	石圓炉	IV層上面確認

表13 鬼川辺(3)遺跡 土坑観察表

回	遺構番号	略号	位置	長軸	短軸	深さ	備考
44	1	SK01	I-J-22	137	90	37	IV層上面確認 II床b類2種
43	2	SK02	IV-25	201	187	104	IV層上面確認 I床
44	3	SK03	I-S-20, I-R-20	203	168	24	IV層上面確認 II床b類1種
43	5	SK05	I-V-26+27, I-W-26+27	227	181	114	IV層上面確認 I床
44	6	SK06	I-S-22+23	215	188	24	IV層上面確認 II床b類1種
43	7	SK07	I-V-25+26	214	196	101	IV層上面確認 I床
44	10	SK10	I-U-24, I-V-24	115	113	33	IV層上面確認 II床b類2種
44	11	SK11	I-V-24	155	150	90	IV層上面確認 II床a類
44	12	SK12	I-W-26	101	100	33	IV層上面確認 II床b類2種

回 番号	遺構 番号	略号	位 置	長軸	短軸	深さ	備 考
44	13	SK13	I U-26, II T-26	166	167	41	IV層上面強度 II斜b類 1種
44	16	SK16	I S-26	88	78	17	IV層上面強度 II斜b類 2種
43	18	SK18	I U-24	201	177	102	IV層上面強度 II斜a類
43	19	SK19	I U-24・25	214	179	61	IV層上面強度 II斜a類
44	20	SK20	I U-23	218	204	81	IV層上面強度 II斜a類
43	21	SK21	I U-25	171	136	52	IV層上面強度 II斜a類

表14 鬼川辺(3)遺跡 土器埋設遺構観察表

回 番号	遺構 番号	略号	位 置	長軸	短軸	深さ	備 考
45	1	SR01	I U-26	(42)	(36)	(25)	III層上面強度 (切株内) 中期中葉

表15 鬼川辺(3)遺跡 焼土遺構観察表

回 番号	遺構 番号	略号	位 置	長軸	短軸	深さ	備 考
46	2	SN02	I T-24	37	34	8	III層上面強度
46	3	SN03	I S-23	32	30	10	III層上面強度
46	4	SN04	II A-18	67	52	9	IV層上面強度

表16 鬼川辺(3)遺跡 清跡観察表

回 番号	遺構 番号	略号	位 置	全長	幅	深さ	備 考
47	1	SD01	I Y-30, II A-30	(490)	112	63	IV層上面強度

表17 鬼川辺(3)遺跡 炭焼窯観察表

回 番号	遺構 番号	略号	位置	長軸	短軸	深さ	付属施設	備 考
47	1	SK02	I X-30・31 I Y-30・31 II A-30・31	310	300	62	煙出部: 75×(74)×65, 深: (855)×193×50 Pit 1: 34.6×26.9×3.7 Pit 2: 89.7×76.6×8.5 Pit 3: 18.6×17.4×2.3 Pit 4: 26.6×22.9×2.4	IV層上面強度

表18 鬼川辺(3)遺跡 繩文土器観察表

回 番号	出土 位置	層位	西端	部位	萬文、器面調整、法蓋	備 考	分類	整理 番号		
49	1	SI01	I	深鉢	口～脚	口: 波状山形(大3単位、小3単位)、口唇溝巻文、沈縁 外: 沈縁、唐縁、直横、内: ミガキ、口径: 30.9 縦高: (32.65)	49-2と類似	IV	3-1・1	
49	2	SI01	Pit4	堆積土	深鉢	底	外: 唐縁、内: 唐縁、底面: 唐縁、底径: 11.0 縦高: (2.2)	49-1と類似	IV	3-1・2
49	3	SI01	I	深鉢	口	平、口唇隆起、外: 隆起 内: 三才方子、器高: (3.0)		II	3-25	
49	4	SI01	I	深鉢	口	平、口唇隆起、外: 隆起 内: 三才方子、器高: (4.4)		II	3-39	
49	5	SI01	I	深鉢	口	平、口唇肥厚、沈縁、外: 沈縁、LR斜 内: 唐縁 縦高: (4.9)		IV	3-27	
49	6	SI01	I	深鉢	口	平、口唇肥厚、外: 沈縁、LR横 内: ミガキ 縦高: (4.0)		IV	3-28	
49	7	SI01	堆積土	深鉢	口	平、口唇肥厚 外: 沈縁、LR斜 内: ミガキ 縦高: (3.0)		IV	3-38	
49	8	SI01	I	深鉢	口	平 外: LR縫、スヌ 内: ミガキ 縦高: (3.8)		II-V	3-35	
49	9	SI01	I	深鉢	口	波状山形、口唇溝巻文、沈縁 外: 沈縁、ナデ、 織文唐縁 内: 唐縁 縦高: (6.0)		IV	3-30	
49	10	SI01	I	深鉢	口	平 外: 沈縁、劍目 内: ミガキ、スヌ 縦高: (3.0)		VIIb	3-34	
49	11	SI01	I	深鉢	口	平、口唇肥厚、斜方向割目 外: 沈縁 内: 唐縁 縦高: (3.0)		II	3-29	
49	12	SI01	堆積土	深鉢	口	平、口唇肥厚 外: ミガキ、LR横 内: ミガキ 縦高: (2.6)		II-V	3-33	
49	13	SI01	Pit4	堆積土	深鉢	口～脚	口: 波状山形、口唇溝巻文、沈縁 外: 沈縊、單軸絡条体 内: ミガキ、縦高: (12.4)		IV	3-36
49	14	SI01	Pit4	堆積土	深鉢	外: ナデ、ミガキ 内: ナデ 縦高: (22.6)	外縫接合	VI	3-37	
49	15	SI01	I	深鉢	脚	外: 沈縊、スヌ、直横 内: ミガキ 縦高: (9.4)	49-15と類似	II-V	3-41	
49	16	SI01	I	深鉢	底	外: 唐縁、内: ミガキ、唐縁 底面: 織目痕痕感 縦高: (9.4) 縦高: (1.3)	49-15と類似	II-V	3-26	

回	番号	出土位置	層位	器種	部位	施文・器面調整・法雲	備考	分類	整理番号
50	1	S102	1	深鉢	口	口：波状台形、隆帶、刻目 外：隆帶、磨感 内：隆帶、三方牛 器高：(4.7)		III	3-45・1
50	2	S102	1	深鉢	口	口：波状台形、口唇肥厚、隆帶 外：隆帶、磨感 内：ミガキ 脊高：(4.5)		III	3-51
50	3	S102	1	深鉢	口	口：波状台形 (M字)、口唇肥厚、隆帶 外：隆帶、沈線 内：ミガキ 脊高：(5.2)		III	3-45
50	4	S102	1	深鉢	口	口：波状台形、口唇肥厚、隆帶 外：隆帶、沈線、才字、隆帶、貼付 口：唇肥厚、隆帶、磨感 (S.7)		III	3-46・1
50	5	S102	1	深鉢	口	口：波状山形 外：隆帶貼付、磨感、貫通孔 内：磨感 脊高：(2.7)		III	3-59
50	6	S102	1	深鉢	口	口：平、隆帶、波状隆帶 外：隆帶、LR横 内：ミガキ 脊高：(5.1)		III	3-50
50	7	S102	1	深鉢	口	口：波状五角形、隆帶、口唇肥厚、刻目 外：隆帶、沈線 内：ミガキ ミニ字 器高：(6.2)		III	3-54
50	8	S102	堆積土	深鉢	口～開	口：波状山形 (大3単位、小3単位)、口唇肥厚、沈線 口：隆帶、沈線 内：ミガキ 口径：(22.0) 脊高：(9.2)		IV	3-2
50	9	S102	1	深鉢	口～開	口：波状、口唇肥厚 外：LR綫、ナデ、沈線、スス付替 内：ミガキ 脊高：(6.5)		III	3-42
50	10	S102	1	深鉢	口	口：波状、口唇肥厚 外：沈線、LR綫 内：ミガキ 脊高：(8.4)		IV	3-52
50	11	S102	1	深鉢	口	口：平、口唇肥厚、隆帶 外：隆帶、沈線、LR綫 内：ミガキ 脊高：(5.2)		III	3-62
50	12	S102	1	深鉢	口	口：平、口唇肥厚方向刻目、輪縁底 外：虹横 内：ミガキ 脊高：(2.1)		III	3-43
50	13	S102	1	深鉢	口	口：平、折底、口唇肥厚圧痕 外：LR横 内：ミガキ 脊高：(3.0)		III	3-61
50	14	S102	1	深鉢	口	口：平、口唇肥厚、刻目 外：ナデ、LR横、虹右脚、スス 脊高：(5.0)		III	3-60
50	15	S102	1	深鉢	口	口：平、口唇肥厚 外：隆帶、沈線、刺突 内：ミガキ 脊高：(2.6)		IV	3-58
50	16	S102	堆積土	深鉢	開	外：隆帶、LR横、指頭押圧 内：磨感、磨高：(5.5)	垂直方向の貼付隆帶	III	3-47
50	17	S102	1	深鉢	開	外：スス、沈線、虹脚 内：ミガキ 脊高：(6.9)	胎土鉢石多量混入	III-V	3-63
50	18	S102	1	深鉢	開	外：隆帶 (6.7)		III-V	3-53
50	19	S102	1	深鉢	開	外：沈線、虹横 内：ミガキ 脊高：(3.3)		III-V	3-64
50	20	S102	1	深鉢	底	外：棒状工具による削突、LR 内：ミガキ 底面：ヘラクス底、底径：(8.0) 磨高：(2.8)	骨針合	III-V	3-55
50	21	S102	1	深鉢	底	外：磨感 (赤、青) 内：ミガキ 底面：磨感、底径：(6.0) 脊高：(3.0)	底部中央上げ底	III-V	3-57
50	22	S102	1	深鉢	底	外：磨感 内：ミガキ 底面：磨感、底径：(6.0) 脊高：(1.2)	底部中央上げ底	III-V	3-56
50	23	S102	堆積土	ミニチュア	開～底	外：磨感 内：ミガキ 底面：磨感、底径：(3.4) 脊高：(2.5)		III-V	3-44
50	24	S103	堆記面	深鉢	口	口：波状山形、口唇肥厚面圧痕LR 外：隆帶、LR横、スス 内：ミガキ 脊高：(6.3)		III	3-65
50	25	S103 Pit10	1	深鉢	口	口：波状山形 外：突起點付、沈線、刻目列、スス、LR横 内：磨感 脊高：(4.2)	50-25と類似	IIIa	3-68
50	26	S103 Pit6	1	深鉢	開	外：沈線、刻目列、スス、LR横 内：ミガキ 器高：(4.0)	50-25と類似	IIIa	3-67
50	27	S103	1	深鉢	口	口：平 外：LR横、綫、沈線 内：ミガキ 脊高：(2.6)		IV	3-66
51	1	S104	堆積土	深鉢	口～開	口：波状台形、口唇肥厚、隆帶 外：隆帶、附貼、沈線、磨感 内：ミガキ、隆帶貼付 脊高：(20.0)		III	3-84
51	2	S104	堆記面	深鉢	口	口：波状台形、口唇肥厚、隆帶 外：隆帶、ナデ、LR横 内：磨感、才字		III	3-85
51	3	S104	堆積土	深鉢	口	口：波状山形、口唇肥厚、隆帶、虹横 外：虹横 内：ミガキ 脊高：(4.4)		III	3-91
51	4	S104	堆積土	深鉢	口	口：波状山形、口唇肥厚、隆帶 外：隆帶、贴付、LR斜 内：ミガキ 脊高：(5.5)		III	3-88
51	5	S104	堆積土	深鉢	口	口：波状山形、口唇肥厚、隆帶 外：隆帶、LR横 内：磨感、磨高：(5.0)		III	3-69
51	6	S104	堆積土	深鉢	口	口：波状山形、口唇肥厚、隆帶 外：隆帶、虹横 内：磨感、磨高：(4.8)		III	3-74
51	7	S104	堆積土	深鉢	口	口：波状、口唇肥厚、刻目 外：ミガキ、沈線 内：ミガキ 脊高：(3.7)		III	3-71
51	8	S104	堆記面	深鉢	口	口：波状山形 外：隆帶、虹横 内：ミガキ 器高：(4.8)		III	3-70
51	9	S104	堆記面	深鉢	口	口：波状、口唇肥厚、沈線 外：LR綫 内：ミガキ 脊高：(4.5)		IV	3-90
51	10	S104	堆積土	深鉢	口	口：波状、口唇肥厚、沈線 外：ハケヌ、LR横、綫 内：ミガキ 脊高：(3.6)		IV	3-93
51	11	S104	堆積土	深鉢	口～開	口：波状山形、口唇肥厚、隆帶 外：隆帶、虹横 内：ミガキ、口徑：(21.5) 脊高：(16.0)		IV	3-83
51	12	S104	堆積土	深鉢	口～開	口：波状山形、口唇肥厚、沈線 外：虹横、沈線 内：ナデ		IV	3-5
51	13	S104 S105	堆積土	深鉢	口	口：波状山形、口唇肥厚、沈線 外：沈線 (3条)、ナデ、虹横 内：ミガキ 器高：(7.5)		IV	3-86

番号	出土位置	層位	器種	部位	施文・画面調整・法書	備考	分類	整理 番号
51_14	S104	堆積土	深鉢	口	波状山形、口晋渕卷文。沈縁 外: 薙縫、磨感 内: ミガキ 振高: (4.8)		IV	3-87
51_15	S104	堆積土	深鉢	口	波状山形、口晋渕卷文。隆縫 外: 刻突、粗いナデ、 内: ミガキ 振高: (5.4)		IV	3-92
51_16	S104	堆積土	深鉢	口	平、口晋渕卷文。沈縁 外: 刻突、沈縁、貼付、 内: ミガキ 振高: (3.5)		IV	3-72
52_1	S104	堆積土	深鉢	口~胴	平 外: RL縫、RL左斜 内: 拇頭直痕、磨感 振高: (10.5)		II-V	3-81
52_2	S104	堆積土	深鉢	口	平 外: RL右斜、RL横 内: ミガキ 器高: (7.4)		II-V	3-75
52_3	S104	堆積土	深鉢	口	平、口晋肥厚。RL縫 外: RL縫 内: ミガキ 振高: (4.2)		II-V	3-76
52_4	S104	堆積土	深鉢	脚	外: 沈縁、LR横 内: ミガキ 振高: (5.4)		II-V	3-73
52_5	S104	礪面	深鉢	底	外: ミガキ 内: ミガキ 底面: ミガキ 直径: 6.4 振高: (2.0)		II-V	3-89
52_6	S104	堆積土	深鉢	底	外: RL横、磨感、内: 磨感 底面: 磨感 直径: 11.0 振高: (6.4)		II-V	3-82
52_7	S104	堆積土	ミニチュア	底	外: 磨感、内: ミガキ 底面: 磨感 直径: 3.0 振高: (2.5)		II-V	3-76
52_8	S104	堆積土	深鉢	底	外: 磨感、内: ミガキ 底面: ミガキ 直径: 11.0 振高: (3.0)		II-V	3-77
52_9	S104	堆積土	深鉢	底	外: 磨感、内: ナデ 底面: 磨感 直径: 7.6 器高: (3.0)		II-V	3-79
52_10	S104	礪面	深鉢	底	外: 磨感、内: ミガキ 底面: 磨感 直径: (6.2) 振高: (2.0)		II-V	3-80
52_11	S105	I	深鉢	口	波状山形、口晋肥厚 外: 隆帶、LR縫 内: ミガキ 振高: (6.8)		II	3-99
52_12	S105	堆積土	深鉢	脚	外: 隆帶、結果裏直接LR縫 内: ミガキ 高度: (6.5)		II	3-109
52_13	S105	I	深鉢	口	波状山形、口晋刻突、隆帶、沈縁、貫通孔、外: 沈縁、 貼付 内: ナデ 振高: (5.7)		IV	3-108
52_14	S105	I	深鉢	口	平、口晋肥厚、沈縁 外: LR横 内: ミガキ 振高: (3.9)		IV	3-94
52_15	S105	堆積土	深鉢	口~胴	波状山形、口晋渕卷文、沈縁 外: 沈縁、LR横、スヌ ミガキ 振高: (10.5)		IV	3-98
52_16	S105	堆積土	深鉢	口~胴	波状山形、口晋肥厚、脚側面压出LR縫 内: ミガキ 振高: (7.9)		V	3-103
52_17	S105	I	深鉢	口	波状山形、口晋渕卷文、沈縁 外: LR横 内: ミガキ 振高: (4.4)		IV	3-95
52_18	S105	堆積土	深鉢	口	平 外: ナデ、LR縫 内: ミガキ 器高: (4.7)		II-V	3-101
52_19	S105	堆積土	深鉢	口	平 外: 沈縁、RL横 内: ミガキ 振高: (3.4)		IV	3-100
52_20	S105	堆積土	深鉢	口	平 外: 隆帶、ミガキ、沈縁 内: 磨感 振高: (3.8)		IV	3-102
52_21	S105	I	深鉢	口	平、口晋肥厚、脚側面压出LR縫 内: ミガキ 振高: (3.0)		IV	3-105
52_22	S105	堆積土	深鉢	口~脚	波状山形、外: 沈縁、RL縫 内: ミガキ 振高: (10.4)		IV	3-96
52_23	S105	堆積土	深鉢	脚	外: RL縫、沈縁、スヌ 内: ミガキ 振高: (7.1)		V	3-104
52_24	S105	堆積土	深鉢	脚	外: 沈縁、LR横、スヌ 内: 磨感 振高: (11.6)		IV	3-107
52_25	S105	堆積土	深鉢	脚	外: 沈縁、LR縫 内: ミガキ 振高: (8.5)		IV	3-97
52_26	S105	堆積土	深鉢	脚	外: 沈縁、LR横、スヌ 内: ミガキ 振高: (6.4)		V	3-106
52_27	S105	I	深鉢	底	磨感、内: ミガキ 底面: 磨感、直径: (6.0) 振高: (1.5)		II-V	3-110
53_1	S106	礪面	深鉢	口~脚	波状山形、口晋刻突、隆帶、刻目 外: 隆帶貼付、 内: ハケヌ、隆縫 振高: (14.8)		III	3-111
53_2	S106	I	深鉢	口~脚	波状台形、口晋刻突、隆帶、刻目 外: 隆帶、ナデ、 RL縫 内: ミガキ、隆縫 振高: (11.0)		III	3-112
53_3	S106	堆積土	深鉢	口	波状山形、口晋肥厚、隆帶 外: 隆帶、磨感 内: 隆縫、磨感 振高: (4.2)		III	3-116
53_4	S106	堆積土	深鉢	口	波状山形、口晋肥厚、隆帶、内: 複通孔直接RL 縫、沈縁 内: 磨感 振高: (4.9)		III	3-115
53_5	S106	堆積土	深鉢	口	波状山形、口晋肥厚、隆帶 外: 隆帶、沈縁、磨感 内: 隆縫、磨感 振高: (7.9)		III	3-122
53_6	S106	堆積土	深鉢	口	波状山形、口晋肥厚、隆帶、刻目 外: 隆帶、ナデ、 RL縫 内: ミガキ、磨感 振高: (8.3)		III	3-131
53_7	S106	堆積土	深鉢	口~胴	波状山形、口晋肥厚、隆帶 外: 隆帶、RL縫 内: ミガキ 振高: (12.6)		III	3-132
53_8	S106	堆積土	深鉢	口	波状山形、口晋肥厚、隆帶 外: 隆縫、RL横・右斜 内: ミガキ 振高: (6.5)		III	3-128
53_9	S106	堆積土	深鉢	口	平、口晋隆帶 外: RL横、スヌ 内: ミガキ 振高: (7.4)		III	3-125
53_10	S106	堆積土	深鉢	口~胴	平、口晋隆帶 外: 隆縫、RL横 内: ミガキ 振高: (4.9)		III	3-119
53_11	S106	堆積土	深鉢	口~胴	平、口晋折返貼付 外: RL横 内: ミガキ、磨感 振高: (8.0)		III	3-118
53_12	S106	堆積土	深鉢	口	波状山形、口晋肥厚、隆帶 外: 细隆帶、突起、補修孔 内: ミガキ 振高: (4.5)		II	3-127
53_13	S106	I	深鉢	口	波状山形、口晋肥厚 外: 隆帶、刻突、ナデ、RL縫 内: ミガキ 振高: (4.5)		III	3-126
53_14	S106	堆積土	深鉢	口	波状山形、口晋肥厚、隆帶 外: 隆縫、LR横 内: ミガキ 器高: (4.7)		III	3-121

番号	出土位置	層位	器種	部位	施文・画面調整・法雲	備考	分類	整理番号
53 15	S106	堆積土	深鉢	口～胴	口：波状山形 4 単位、縦側面压痕。外：LR横、沈線 内：ミガキ 口径：18.0 高さ：(16.2)	太さの異なる条	III	3-6
53 16	S106	堆積土	深鉢	口～底	口：波状山形 4 単位。口唇部目、貫通孔一对 外：LR横 内：ミガキ 口径：19.4 底径：7.7 高さ：22.7	胎土輕石多量混入	III	3-4
54 1	S106 SK13	堆積土	深鉢	口	口：波状山形。口縦側面承巻文、隆起、貫通孔。 外：LR横、沈線、右斜 内：磨滅、崩落：(7.4)	54-2・3と類似	III	3-5・2
54 2	S106 SK13	堆積土	深鉢	口～胴	口：波状山形。LR横 外：LR横、沈線、一部磨滅、補修孔。 内：ミガキ 口径：(17.2)	54-1・3と類似	III	3-5・1
54 3	S106	堆積土	深鉢	底	外：紅横、磨滅、内：ミガキ、スヌ 底面：磨滅 底径：11.0 高さ：(7.0)	54-1・2と類似	III	3-5・3
54 4	S106	1	深鉢	口	口：平、外：ナデ、LR横、沈線、内：ミガキ 口径：(7.0)		III	3-114
54 5	S106	1	深鉢	口	口：波状、口唇部側面压痕 LR 外：LR横、沈線、ナデ 内：ミガキ 口径：(5.5)		III	3-188
54 6	S106	堆積土	深鉢	口～胴	口：波状、口唇部目 外：沈線、LR横 内：磨滅 高さ：(8.2)		III	3-117
54 7	S106	堆積土	深鉢	口	口：平、外：沈線、LR横、ミガキ 内：ミガキ 高さ：(4.7)		III-V	3-134
54 8	S106	堆積土	深鉢	口	口：平、外：隆起、沈線、構文磨滅 内：ミガキ 高さ：(3.0)		III-V	3-120
54 9	S106	堆積土	深鉢	口～底	口：波状山形 (4 単位)、口唇肥厚、底系圧痕、隆起 外：紅横、沈線 内：ミガキ 口径：21.0 高さ：21.5 底径：10.0		III	3-10
54 10	S106	堆積土	深鉢	口～胴	口：波状山形 (4 単位) 外：LR横、磨滅 内：ナデ 口径：20.2 高さ：(20.2)		III-V	3-11
54 11	S106	堆積土	深鉢	口～胴	口：平、口唇肥厚 外：LR横、スヌ 内：ミガキ 高さ：(8.9)		III-V	3-130
54 12	S106	堆積土	深鉢	口	口：平、口唇肥厚 外：LR横 内：磨滅、器高：(3.9)		III-V	3-129
54 13	S106	堆積土	深鉢	口	口：平、口唇肥厚 外：LR横 内：ミガキ、器高：(5.5)		III-V	3-136
54 14	S106	1	深鉢	口	口：平、外：LR横 内：ミガキ、器高：(2.3)		III-V	3-113
54 15	S106	堆積土	深鉢	口	口：波状山形、口縦側面压痕 LR、隆起 外：LR横 内：ミガキ 口径：(3.5)		III-V	3-133
54 16	S106	堆積土	1 深鉢	口～胴	口：波状山形、口唇部目 外：LR横、LR横、磨滅、器高 内：ミガキ、ナデ 口径：(16.0) 高さ：(8.8)		III-V	3-7
55 1	S106	堆積土	1 深鉢	口～胴	口：平、外：LR横 内：ミガキ 口径：(17.0) 高さ：(12.9)	55-2と類似	III-V	3-9・1
55 2	S106	1	深鉢	底	外：無文 内：ミガキ 底面：ミガキ 底径：(9.4) 高さ：(4.8)	55-1と類似	III-V	3-9・2
55 3	S106	堆積土	深鉢	脚	外：紅横、貼付脚部 内：磨滅、器高：(6.2)		III-V	3-140
55 4	S106	堆積土	深鉢	脚	外：紅横、右脚 内：ミガキ、器高：(7.8)		III-V	3-138
55 5	S106	堆積土	深鉢	口	口：平、口唇部目 外：紅横 内：磨滅、器高：(2.8)		VII	3-135
55 6	S106	堆積土	深鉢	底	外：紅斜 内：ミガキ 底面：ミガキ 底径：(10.6) 高さ：(6.5)		III-V	3-123
55 7	S106	堆積土	深鉢	底	外：磨滅 内：磨滅 底面：磨滅 底径：8.0 器高：(1.8)		III-V	3-141
55 8	S106	1	深鉢	底	外：紅横 内：ミガキ 底面：ナデ 底径：(5.4) 高さ：(2.7)		III-V	3-144
55 9	S106	堆積土	深鉢	底	外：紅横、磨滅 内：ミガキ、スヌ 底面：磨滅 底径：9.0 高さ：(4.8)		III-V	3-124
55 10	S106	堆積土	深鉢	底	外：LR横 内：ミガキ 底面：ミガキ 底径：(11.0) 高さ：(5.0)		III-V	3-146
55 11	S106	堆積土	1 深鉢	脚～底	外：LR横 内：ミガキ 底面：ミガキ 底径：(13.0) 高さ：(2.7)		III-V	3-143
55 12	S106	堆積土	深鉢	脚～底	外：LR横 内：ケズリ 底面：ミガキ 底径：8.6 高さ：(5.6)		III-V	3-8
55 13	S106	1	深鉢	底	外：紅横 内：ナデ、スヌ 底面：構造形、ナデ 底径：8.0×6.5 高さ：(3.0)		III-V	3-145
55 14	S106	堆積土	深鉢	底	外：磨滅 内：ナデ、脚部圧痕 底径：8.0 高さ：(2.2)		III-V	3-142
55 15	S107	堆積土	深鉢	口	口：平、口唇部目、刻目 外：LR横 内：ミガキ 高さ：(5.2)		III	3-147
55 16	S107	堆積土	深鉢	脚	外：LR横、筋節回転 内：ミガキ、器高：(7.5)		III-V	3-148
55 17	SK01	1	深鉢	脚～底	外：LR横 内：ミガキ、磨滅、スヌ 底面：ヘラケズリ 底径：11.4 高さ：(7.2)		III-V	3-151
55 18	SK01	1	深鉢	口～脚	口：平、口唇部目 外：沈線、LR横 内：ミガキ 高さ：(7.7)		II	3-149
55 19	SK01	1	深鉢	口	口：波状山形、口唇部目、脚部圧痕 外：隆帶、沈線、紅横 内：ミガキ 口径：(7.0)		III	3-150
55 20	SK01	1	深鉢	口	口：波状、口唇部目 外：沈線、紅横 内：ミガキ 高さ：(5.1)		III	3-203
56 1	SK02	6	深鉢	口～底	口：波状台形 (3 単位)、口唇部側面压痕 LR 内：ミガキ、磨滅、脚部圧痕 底径：16.5 底高：8.1 高さ：(2.1)		III	3-12
56 2	SK02	2	深鉢	口～脚	口：波状台形、口唇肥厚、隆帶 外：隆帶、沈線、LR横 内：ミガキ 口径：(6.3)		III	3-193
56 3	SK02	2	深鉢	口～脚	口：平、口唇肥厚 外：ナデ、紅横 内：ナデ 高さ：(6.1)		III-V	3-190

回	書	出土地	層位	器種	部位	施文・画面調整・法雲		備考	分類	整理 番号	
						口	内				
56	4	SK02	堆積土	深鉢	口	口：平 外：沈模、RL縫 内：磨滅 鋼高：(3.7)			IV	3-189	
56	5	SK02	2	深鉢	口	口：波状山形、口唇溝巻文、沈模 外：磨滅 内：磨滅 縫高：(6.2)			IV	3-190	
56	6	SK02	2	深鉢	口～胴	口：波状山形、口唇肥厚、溝巻文、沈模 外：沈模、RL縫 内：ミガキ 縫高：(3.9)			IV	3-194	
56	7	SK02	2	深鉢	口～胴	口：波状山形、口唇溝巻文、沈模 外：磨滅 鋼高：(7.8)			IV	3-195	
56	8	SK02	2	深鉢	胴	外：RL斜、沈模 内：ミガキ 縫高：(7.0)		粗い溝巻文	V	3-153	
56	9	SK02	堆積土	深鉢	底	外：ナデ、磨滅 内：ミガキ 底面：ナデ 縫怪：(6.4) 縫高：(2.6)			II-V	3-154	
56	10	SK02	2	深鉢	底	外：LR縫、斜、磨滅 内：ミガキ スス 底面：磨滅 縫怪：(9.0) 縫高：(3.0)			II-V	3-155	
56	11	SK03	1	堆積土	深鉢	口～胴	口：波状山形、口唇肥厚、繩削面压痕RL、薄帶 外：RL縫 内：ナデ 口径：(24.5) 縫高：(18.8)			III	3-13
56	12	SK03	1	深鉢	口	口：波状山形、口唇肥厚、繩削面压痕RL、薄帶、三方牛 縫高：(6.2)			III	3-159	
56	13	SK03	堆積土	深鉢	口～胴	口：波状山形、口唇肥厚、沈模 外：RL縫、沈模、スス 内：磨滅 縫高：(10.4)			III	3-158	
56	14	SK03	1	深鉢	口	口：波状山形 外：薄帶、沈模、紅横、斜 内：ミガキ 縫高：(5.6)			III	3-161	
56	15	SK03	1	深鉢	口	口：平、口唇肥厚 外：薄帶、RL縫、斜 内：ミガキ 縫高：(4.6)			II-V	3-162	
56	16	SK03	1	深鉢	口	口：波状山形、口唇肥厚、薄帶 外：薄帶、沈模、ナデ 内：ミガキ 縫高：(2.6)			III	3-160	
56	17	SK03	堆積土	深鉢	口	口：波状山形、口唇肥厚、薄帶 外：薄帶、ナデ 内：薄帶、ミガキ 縫高：(2.8)			III	3-156	
56	18	SK03	堆積土	深鉢	底	外：磨滅 内：ミガキ 底面：磨滅 底怪：(11.0) 縫高：(2.3)			II-V	3-163	
56	19	SK05	堆積面	深鉢	胴	外：無跡 内：ミガキ 縫高：(5.5)			II-V	3-165	
56	20	SK05	堆積面	深鉢	底	外：沈模、RL斜 内：ミガキ 縫高：(4.0)			II-V	3-164	
56	21	SK05	堆積面	深鉢	底	外：磨滅 内：ミガキ 磨滅 底面：磨滅 底怪：(9.0) 縫高：(3.1)			II-V	3-166	
57	1	SK05 堆積外 堆積面	1	深鉢	口～胴	口：波状山形、口唇肥厚、薄帶、繩削面压痕RL 外：RL縫、薄帶 内：ケズリ 口徑：(39.5) 縫高：(35.6)			III	3-21	
57	2	SK05 堆積外 堆積面	深鉢	口～胴	口	口：波状山形、口唇肥厚 外：ミガキ 内：ミガキ 縫高：(7.8)			II-V	3-14	
57	3	SK06	2	深鉢	口～胴	口：波状山形 3重目、口唇肥厚、溝巻文、沈模 外：薄帶、三方牛、RL縫、斜、磨滅 内：ミガキ 磨滅 縫高：口徑：(13.0) 縫怪：(6.0) 縫高：(19.5)			V	3-15	
57	4	SK06	2	深鉢	口～胴	口：波状山形 4重目、口唇肥厚、溝巻文、沈模 外：RL縫、 薄帶 内：ナデ 口徑：(19.0) 縫高：(13.0)			IV	3-16	
57	5	SK06	1	深鉢	口～胴	口：平、口唇肥厚 外：RL縫、スス 内：ミガキ 縫高：(9.9)			II-V	3-167	
57	6	SK06	1	深鉢	口	口：波状五角形、口唇溝巻文、沈模、刺突、貫通孔 内：ナデ、磨滅、内：溝巻文、ミガキ 縫高：(4.0)			III	3-172	
57	7	SK06	1	深鉢	口	口：平、口唇肥厚 外：ナデ 内：ミガキ 縫高：(3.6)			II-V	3-173	
57	8	SK06	2	深鉢	口～胴	口：平 外：沈模、ミガキ 内：ミガキ 縫高：(5.0)	57-9と類似		V	3-171	
57	9	SK06	2	深鉢	胴	外：沈模、ミガキ 内：ミガキ 縫高：(5.8)	57-8と類似		V	3-170	
57	10	SK06	2	深鉢	口～胴	口：平、口唇指壓痕 外：磨滅、長斜、補修孔未貫通、 刺突 内：ミガキ 口徑：(9.4) 縫高：(8.0)	57-11と類似		II-V	3-174・1	
57	11	SK06	2	深鉢	底	外：磨滅 内：ミガキ 底面：ミガキ 縫怪：(5.2) 縫高：(1.7)	57-10と類似		II-V	3-174・2	
58	1	SK07	堆積土	深鉢	口～胴	口：平 外：RL斜 内：ミガキ 縫高：(10.0)			II-V	3-175	
58	2	SK12	堆積土	深鉢	口	口：波状山形 口唇：肥厚 外：札模、斜 内：ミガキ 縫高：(3.6)			III	3-176	
58	3	SK13	堆積土	深鉢	口～胴	口：波状 外：RL縫 内：ミガキ 縫高：(11.2)			II-V	3-181	
58	4	SK13	堆積土	深鉢	口	口：波状山形、口唇肥厚、薄帶、RL 外：薄帶、RL縫 内：ミガキ 縫高：(14.2)			III	3-180	
58	5	SK13	堆積土	深鉢	口	口：波状 外：薄帶、紅横、沈模、ナデ 内：ミガキ 縫高：(3.8)			III	3-177	
58	6	SK13	堆積土	深鉢	口～胴	口：平 外：沈模、RL斜、磨滅 内：ミガキ 縫高：(5.7)	縦方向の蛇行文		III	3-178	
58	7	SK13	堆積土	深鉢	口	口：波状 外：ミガキ RL縫、スス 内：ミガキ 縫高：(3.6)			II-V	3-183	
58	8	SK13	堆積土	深鉢	胴	外：RL縫、沈模、補修孔 内：ケズリ 縫高：(10.0)			II-V	3-178	
58	9	SK13	堆積土	深鉢	口	外：RL縫、沈模 内：ミガキ 磨滅 縫高：(7.2)			II-V	3-184	
58	10	SK13	堆積土	深鉢	口～底	外：磨滅 内：磨滅 底面：磨滅 縫怪：(8.4) 縫高：(5.8)			II-V	3-182	
58	11	SK19 SK21	堆積土	深鉢	口～胴	口：平 外：口唇肥厚、刺突 外：ナデ、RL縫 内：磨滅 縫高：(16.0)			III	3-185	
58	12	SK18 SK20	堆積土	深鉢	口～胴	口：平 外：RL縫、沈模、スス 内：ミガキ、スス 縫高：(6.9)			II-V	3-187	
58	13	SK21	堆積土	深鉢	口	口：平、口唇肥厚 外：ミガキ、紅横 内：ミガキ 縫高：(6.3)			II-V	3-188	

図 番	出土 位置	層位	器種	部位	施文・器面調整・法量	備考	分類	整理 番号
59 1	SRI1 SK13	I 堆積土	深鉢	口～底	口：平、口唇肥厚、隆帯、外：結束第1種RL横、隆帯 内：ミガキ、底部：磨擦、口径：(26.0) 底径：100 器高：36.8		II	3-17
59 2	I S-28 IT-28	風削 木模	深鉢	口	波状台形、隆帯、貫通孔、外：隆帯、刺突、磨擦 内：ミガキ、器高：(16.6)	59-3と類似	I	3-20+1
59 3	IT-28	風削 木模	深鉢	口	波状台形、隆帯、貫通孔、外：隆帯、刺突、磨擦 内：ミガキ、磨擦、器高：(11.4)	59-2と類似	I	3-20+2
59 4	IR-26	I	深鉢	口	口：平、口唇肥厚、外：隆帯、磨擦、内：磨擦 器高：(3.1)		III	3-202
59 5	I S-28	I	深鉢	口	波状山形、口唇肥厚、隆帯、外：隆帯、刺突 内：ミガキ、ミガキ、器高：(7.1)	59-6・7と同一個体	I	3-205+1
59 6	I S-28	I	深鉢	脚	外：隆帯、刺突、RL横、内：ナデ、器高：(8.8)	59-5・7と同一個体	I	3-205+2
59 7	I S-28	I	深鉢	底	外：粘土、磨擦、底面：磨擦、底径：(2.0) 器高：(2.0)	59-5・6と同一個体	I	3-205+3
59 8	I S-27	I	深鉢	口	波状台形、口唇肥厚、隆帯、外：隆帯、磨擦 内：隆帯、磨擦、器高：(4.7)		III	3-204
59 9	IR-21 1.0	深鉢	口	波状山形、口唇肥厚、隆帯、外：隆帯、磨擦 内：ミガキ、器高：(4.7)		III	3-198	
59 10	IT-18	I	深鉢	口～脚	波状五角形、口唇刻目、肥厚、外：隆帯刺繩、RL横、 内：ミガキ、磨擦、器高：(10.0)		III	3-209
59 11	I S-28	I	深鉢	口	波状台形、口唇肥厚、外：隆帯上刻目、RL横 内：ミガキ、ミガキ、磨擦、器高：(5.0)		II	3-206
59 12	IP-27	I	深鉢	口～脚	波状五角形、口唇肥厚、隆帯、刺繩、器高：(5.6)		III	3-195
60 1	IT-26 IT-27	II	深鉢	口～底	口：平、口唇肥厚、隆帯、外：隆帯、刺繩、スズ 内：ミガキ、器高：(28.8) 底径：90 器高：34.5		III	3-22
60 2	IT-23	I	深鉢	口	波状台形、口唇肥厚、隆帯、刺目、外：隆帯、刺繩、 内：ミガキ、磨擦、器高：(7.5)		III	3-221
60 3	IT-26 I U-26	II	深鉢	口～脚	口：平、外：RL横、磨擦、隆帯、沈線、スズ、内：ミガキ 内：ミガキ、器高：(16.0)		V	3-18
60 4	I U-25	風削 木模	深鉢	口	波状山形、口唇肥厚、隆帯、刺目、外：隆帯、RL横、 貫通孔、内：ナデ、器高：(9.3)		III	3-196
60 5	IR-22	I	深鉢	口～脚	波状山形、口唇肥厚、隆帯、刺目、外：隆帯、RL横 内：ミガキ、ミガキ、磨擦、器高：(16.7)		III	3-200
60 6	IT-24 IT-26	II	深鉢	口	波状山形、口唇肥厚、RL横、外：RL横、 内：ミガキ、器高：(8.6)	60-7と同一個体、61-11と類似	IV	3-23+1
60 7	IT-26	II	深鉢	口	波状山形、口唇肥厚、RL横、外：RL横、 内：ミガキ、器高：(8.2)	60-6と同一個体61-11と類似	IV	3-23+2
60 8	IT-22	I	深鉢	口	波状山形、口唇肥厚、RL横、外：RL横、内：ナデ 内：ミガキ、器高：(5.4)		IV	3-211
60 9	IR-26	I	深鉢	口	口：平、口唇肥厚、RL横、外：沈線、磨擦、RL横 内：ミガキ、器高：(5.0)		III	3-201
60 10	IT-25	風削 木模	深鉢	口	口：平、口唇肥厚、RL横、外：沈線、RL横 内：ミガキ、ミガキ、器高：(5.2)		III	3-212
60 11	IT-18	I	深鉢	口	波状、外：沈線、RL横、内：磨擦、器高：(5.7)	細粒輕石多量含	III	3-210
61 1	I S-28	I	深鉢	口	口：平、口唇肥厚、RL外：RL横、内：ミガキ 器高：(5.7)		III-V	3-207
61 2	II S-26	堆積面	深鉢	口	口：平、口唇肥厚、RL外：RL横、内：ミガキ 器高：(8.5)		III-V	3-24
61 3	II A-32	I	深鉢	口	口：平、口唇肥厚、RL横、外：磨擦、器高：(3.7)		III-V	3-218
61 4	I U-28	堆積土	深鉢	口～脚	口：平、外：RL横、磨擦、器高：(10.4) 外縁接合		VI	3-216
61 5	IT-18	I	深鉢	口～脚	波状、口唇肥厚、RL横、外：RL横、内：ミガキ、 器高：(12.0)		III	3-208
61 6	IT-23	堆積面	鉢	脚	外：RL横、内：ミガキ、スズ、器高：(3.7)		VI	3-213
61 7	II D-31	I	深鉢	脚	外：RL横、スズ、内：磨擦、器高：(9.4)		III-V	3-219
61 8	I U-26	1.0	深鉢	脚	外：沈線、RL横、内：磨擦、器高：(5.3)		V	3-197
61 9	IT-25	堆積面	深鉢	脚	外：沈線、RL横、内：ミガキ、器高：(6.1)		V	3-214
61 10	IR-21	ミニ チュア	脚～底	外：RL横、内：ミガキ、底部：ナデ、底径：3.4 器高：(2.1)		III-V	3-199	
61 11	IT-26	II	深鉢	脚～底	外：RL横、RL横、磨擦、器高：内：ミガキ、底部：ミガキ、 器高：底径：10.3 器高：(5.5)	60-6・7と類似	III-V	3-19

表19 鬼川辺(3)遺跡 土師器観察表

図 番	出土 位置	層位	器種	部位	器面調整・法量	備考	分類	整理 番号
62 1	I W-17	風削 木模	壺	脚	外：ナデ 内：ナデ、ヨコナデ 器高：(11.2)		古代	3-217
62 2	表層	一	壺	脚	外：ナデ 内：ナデ 器高：(5.8)		古代	3-220

表20 鬼川辺(3)遺跡 石器観察表

図 番	出土 位置	層位	器種	石質	量	幅	厚	重	備考	分類	整理 番号
63 1	SI01	I	石核	珪質岩	2.9	1.4	0.6	1.6	凹溝		/ハク3116
63 2	SI01	I	石核 加工石器	珪質岩	5.4	3.2	1.3	18.4			/ハク3115

回	番号	出土位置	層位	種類	石質	長	幅	厚	重	備考	整理番号
63	3	S101	1	両面 加工石器	珪質頁岩	3.5	1.2	0.8	1.8		ハク3012
63	4	S101	堆積土	削器	珪質頁岩	3.9	2.1	1.2	4.2		ハク3004
63	5	S101	1	敲撲器	安山岩	24.6	9.4	5.6	1708.3	凹み	レキ301
63	6	S101	堆積土	敲撲器	安山岩	16.8	7.6	4.9	794.7	敲き	レキ302
63	7	S102	1	石鍬	珪質頁岩	3.9	1.6	0.9	4.7	凸起	ハク3117
63	8	S102	1	両面 加工石器	珪質頁岩	8.1	3.9	2.0	65.9		ハク3015
63	9	S102	1	削器	珪質頁岩	5.1	3.7	2.5	31.5		ハク3014
63	10	S102	1	削器	珪質頁岩	3.8	2.2	0.9	3.9		ハク3016
63	11	S102	1	削器	珪質頁岩	3.3	2.2	0.8	5.2		ハク3020
63	12	S102	1	両面 加工石器	珪質頁岩	4.6	3.4	1.3	14.5		ハク3019
63	13	S102	1	敲撲器	層灰岩	7.5	7.0	4.8	294.7	磨り、敲打による剥離	レキ303
63	14	S102	床	磨製石斧	綠色岩	11.0	4.6	2.6	212.1	器表面に細かい敲打痕と二次利用の磨り	レキ304
64	1	S102	床	敲撲器	火山噴出岩	15.2	5.0	3.4	379.0	磨り、敲き	レキ305
64	2	S103 Pit10	1	石槍	珪質頁岩	(5.4)	(3.6)	(1.5)	26.9	先端部欠損	ハク3037
64	3	S103	床	石鍬	珪質頁岩	3.6	1.2	0.7	2.1	凸起	ハク3118
64	4	S103 Pit	石錐	石錐	珪質頁岩	3.2	1.4	0.4	1.6		ハク3032
64	5	S103	床	搔器	珪質頁岩	10.8	4.3	2.3	116.6		ハク3035
64	6	S103 炉	削器	珪質頁岩	4.4	3.9	1.2	19.7		ハク3033	
64	7	S103	床	敲撲器	安山岩	18.2	9.8	6.2	1454.4	磨り	レキ306
64	8	S104	堆積土	石錐	珪質頁岩	6.0	2.0	0.8	7.8	尖差?	ハク3051
64	9	S104	堆積土	石錐	玉髓	(3.2)	(1.9)	(0.6)	3.3	凸起有茎、先端部欠損	ハク3121
64	10	S104 Pit5	堆積土	石錐	珪質頁岩	2.8	0.9	0.3	0.8	凸起	ハク3125
64	11	S104	堆積土	石鍬	珪質頁岩	4.4	1.3	0.7	2.8	凸起	ハク3041
64	12	S104	床	石鍬	珪質頁岩	5.8	1.2	0.7	3.7	凸起	ハク3126
64	13	S104 Pit10	堆積土	石鍬	珪質頁岩	6.0	1.1	0.9	5.2	尖端	ハク3123
64	14	S104	堆積土	石錐	珪質頁岩	8.3	3.5	1.4	33.8		ハク3042
64	15	S104	堆積土	石錐	珪質頁岩	3.6	1.5	1.0	4.1		ハク3056
65	1	S104	堆積土	石匙	珪質頁岩	7.1	2.7	1.0	14.6	旋型	ハク3122
65	2	S104	堆積土	石匙	珪質頁岩	4.3	2.6	0.9	6.1	旋型	ハク3039
65	3	S104	堆積土	両面 加工石器	珪質頁岩	4.7	2.6	1.5	16.0		ハク3050
65	4	S104	堆積土	両面 加工石器	珪質頁岩	4.1	1.7	1.0	6.0		ハク3046
65	5	S104	堆積土	両面 加工石器	珪質頁岩	4.9	2.4	1.3	11.9		ハク3055
65	6	S104	堆積土	削器	珪質頁岩	2.5	2.0	0.7	2.1		ハク3044
65	7	S104	堆積土	削器	珪質頁岩	5.0	3.9	1.7	28.0		ハク3052
65	8	S104	堆積土	敲撲器	安山岩	11.4	9.0	5.6	698.1	凹み	レキ313
65	9	S104	堆積土	敲撲器	綠色層灰岩	18.9	7.4	4.0	605.1	凹み、敲き	レキ308
65	10	S104	堆積土	敲撲器	ディサイト	14.8	7.7	4.4	597.3	凹み、磨り、敲き	レキ312
65	11	S104	堆積土	敲撲器	火山噴出岩	16.8	9.0	5.1	842.1	凹み、磨り	レキ311
66	1	S104	堆積土	敲撲器	綠色層灰岩	15.7	8.3	5.0	790.9	凹み、磨り	レキ314
66	2	S104	堆積土	敲撲器	火山噴出岩	12.0	8.0	4.3	557.4	敲き、磨り	レキ309
66	3	S104	床	磨製石斧	綠色岩	7.4	5.3	1.7	106.3	基部欠損、器表面に細かい敲打痕と二次利用の磨り	レキ3067
66	4	S104	堆積土	磨製石斧	粗粒玄武岩	7.3	4.9	1.9	106.4	基部欠損	レキ3066
66	5	S104	1	磨製石斧	綠色岩	5.1	3.7	1.2	35.0	基部欠損	レキ307
66	6	S104	堆積土	台石	安山岩	28.1	22.0	6.5	5280.0	凹み、敲き	レキ315
66	7	S105	I	石鍬	珪質頁岩	3.8	1.1	0.8	2.6	凸起	ハク3127
66	8	S105	I	石鍬	珪質頁岩	3.4	1.9	0.8	4.4	平鋸	ハク3060
66	9	S105	堆積土	搔器	珪質頁岩	9.0	3.7	1.5	69.1	66-10と接合	ハク3064
66	10	S105	堆積土	搔器	珪質頁岩	9.0	3.7	2.0	51.9	66-9と接合	ハク3065
67	1	S105	I	搔器	珪質頁岩	6.3	2.7	1.1	22.1	両面加工	ハク3058
67	2	S105	堆積土	搔器	珪質頁岩	5.8	2.3	0.9	10.9	両面加工	ハク3063
67	3	S105	I	両面 加工石器	珪質頁岩	4.1	2.3	1.0	9.5		ハク3057
67	4	S105	3	敲撲器	綠色層灰岩	14.6	9.4	5.7	926.4	凹み、磨り	レキ323
67	5	S105	1	敲撲器	安山岩	12.8	7.0	5.7	579.5	凹み、磨り	レキ318
67	6	S105	堆積土	敲撲器	凝灰岩	22.6	11.4	5.9	1138.0	敲き、磨り	レキ319
67	7	S105	堆積土	台石	火山噴出岩	20.4	23.9	7.5	4054.5	凹み、敲き	レキ321

回	番号	出土位置	層位	器種	石質	長	幅	厚	重	備考	整理番号
68	1	S105	1	敲磨器	火山噴 凝灰岩	15.0	8.8	5.7	9076	凹み、戴き	レキ316
68	2	S106	堆積土	石錐	珪質頁岩	4.7	1.3	0.6	29	凸起	ハク3074
68	3	S106	堆積土	石錐	珪質頁岩	3.5	1.8	0.7	3.0	凸起	ハク3075
68	4	S106	1	石錐	珪質頁岩	3.6	1.2	0.7	2.6		ハク3129
68	5	S106	礦認面	石錐	珪質頁岩	7.7	3.3	2.0	50.2		ハク3067
68	6	S106	堆積土	石錐	珪質頁岩	6.2	3.4	1.6	32.6		ハク3072
68	7	S106	礦認面	石錐	珪質頁岩	(5.8)	(3.8)	1.4	33.0	基部欠損	ハク3128
68	8	S106	堆積土	打削器	珪質頁岩	2.7	1.7	0.6	2.2		ハク3085
68	9	S106	堆積土	刮削器	珪質頁岩	5.2	2.5	1.0	9.7		ハク3075
68	10	S106	堆積土	刮削器	珪質頁岩	3.9	2.7	1.4	11.3		ハク3086
68	11	S106	1	兩面 加工石錐	珪質頁岩	6.6	2.3	1.4	19.1		ハク3081
68	12	S106	堆積土	兩面 加工石錐	珪質頁岩	4.7	2.4	1.8	10.0		ハク3084
68	13	S106	1	兩面 加工石錐	珪質頁岩	4.8	3.8	1.6	25.4		ハク3078
68	14	S106	堆積土	敲磨器	ディサイト	13.6	7.1	4.8	700.8	磨り	レキ334
68	15	S106	堆積土	敲磨器	綠色巖灰岩	9.6	5.5	2.7	181.5	凹み、磨り	レキ330
69	1	S106	堆積土	敲磨器	綠色巖灰岩	(11.3)	9.3	5.4	768.5	凹み、戴き、欠損	レキ333
69	2	S106	1	磨製石斧	砾石	7.3	2.4	1.0	31.1	磨り切り	レキ332
69	3	S106	堆積土	磨製石斧	綠色巖	(8.0)	4.4	1.8	99.1	基部欠損	レキ326
69	4	S107	堆積土	刮削器	珪質頁岩	(5.7)	(2.7)	0.6	5.9	欠損	ハク3138
69	5	S107	礦認面	石器	綠色巖	12.0	6.9	2.9	453.2	表面に細かい敲打痕と二次利用の磨り	レキ340
69	6	SK01	1	石錐	珪質頁岩	(3.3)	1.8	0.9	5.2	基部欠損	ハク3088
69	7	SK01	1	兩面 加工石錐	珪質頁岩	4.3	2.4	1.3	10.6		ハク3088
69	8	SK01	2	刮削器	珪質頁岩	(3.9)	(3.8)	0.9	15.3	欠損	ハク3091
69	9	SK01	1	石錐	綠色巖灰岩	4.5	4.0	1.1	26.9		ハク3090
69	10	SK01	2	敲磨器	火山噴 凝灰岩	7.4	4.6	3.0	127.7	凹み、戴き	レキ341
69	11	SK02	堆積土	敲磨器	綠色巖灰岩	14.9	6.1	3.6	462.0	戴き、磨り	レキ344
69	12	SK03	堆積土	石錐	珪質頁岩	3.6	1.6	0.7	3.1	凸起	ハク3093
69	13	SK03	1	兩面 加工石錐	珪質頁岩	4.7	2.1	1.1	8.5		ハク3092
69	14	SK03	礦認面	敲磨器	安山岩	14.0	7.1	3.9	502.7	凹み、戴き	レキ346
70	1	SK03	堆積土	台石	火山噴 凝灰岩	29.4	27.0	7.1	7980.0	戴き	レキ348
70	2	SK06	1	刮削器	珪質頁岩	4.4	3.0	1.6	15.6		ハク3094
70	3	SK06	2	刮削器	珪質頁岩	3.9	1.6	0.7	3.6		ハク3095
70	4	SK10	堆積土	敲磨器	粗粒玄武岩	11.6	6.2	3.1	315.0	戴き	レキ349
70	5	SK11	堆積土	敲磨器	火山噴 凝灰岩	14.3	9.2	7.4	1082.6	凹み、戴き	レキ351
70	6	SK11	堆積土	台石	安山岩	26.8	17.6	6.2	3797.6	戴き	レキ350
70	7	SK11	堆積土	台石	花崗閃綠岩	30.5	43.2	10.0	5000.0	磨り	レキ368
70	8	SK13	堆積土	刮削器	珪質頁岩	(3.3)	(6.7)	1.5	20.7	欠損	ハク3099
70	9	SK13	堆積土	刮削器	珪質頁岩	5.9	5.3	1.9	46.7		ハク3100
70	10	SK13	堆積土	敲磨器	綠色巖灰岩	13.0	4.5	3.4	265.0	凹み、磨り	レキ352
71	1	SK18	堆積土	刮削器	珪質頁岩	4.9	6.5	2.1	37.1		ハク3101
71	2	SK19	堆積土	刮削器	珪質頁岩	3.1	5.2	1.0	12.2		ハク3103
71	3	SK19	堆積土	兩面 加工石錐	珪質頁岩	5.1	2.3	1.0	10.2		ハク3102
71	4	SK19	礦認面	敲磨器	火山噴 凝灰岩	14.9	8.1	5.5	768.5	凹み、戴き、磨り	レキ354
71	5	SK20	堆積土	兩面 加工石錐	珪質頁岩	5.4	2.8	1.1	14.1		ハク3104
71	6	SK04	礦認面	兩面 加工石錐	珪質頁岩	7.7	2.9	1.4	22.9	火ばじけ痕跡	ハク3105
71	7	I-S-28	1	石錐	珪質頁岩	4.2	1.4	0.7	3.6	凸起	ハク3134
71	8	I-B-19	1	石錐	珪質頁岩	7.7	3.1	1.7	45.7		ハク3135
71	9	I-S-22	1	敲磨器	火山噴 凝灰岩	16.4	6.0	4.9	603.1	凹み、戴き、磨り	レキ360

表21 鬼川辺(3)遺跡 石製品観察表

回	番号	出土位置	層位	器種	石質	長	幅	厚	重	備考	整理番号
72	1	SW02	1	石製品	安山岩	5.1	6.3	1.3	28.7		レキ355
72	2	I-U-25	礦認面	石錐	安山岩	(21.3)	8.5	7.8	1621.2	折損	レキ364



鬼川辺(1)・(2)遺跡 遠景

南東より



調査区中央調査終了

北西より



調査区中央調査終了

南より



トレンチ35 基本層序断面

南東より



第1号土坑 断面



第1号土坑 完掘

西より



第2号土坑 断面

西より



第2号土坑 完掘

西より



第3号土坑 断面

南より



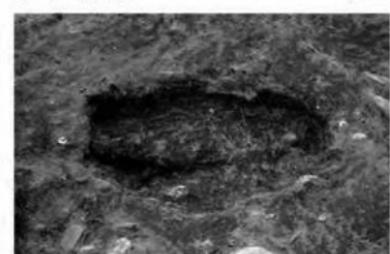
第3号土坑 完掘

北より



第4号土坑 断面

南より



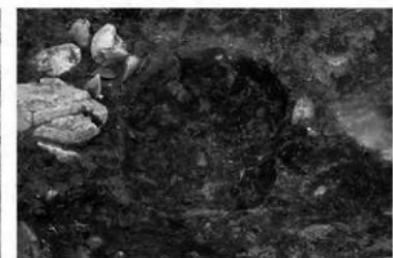
第4号土坑 完掘

南東より

写真図版 2



第5号土坑 断面



第5号土坑 完掘

西より



第6号土坑 断面

西より



第6号土坑 完掘

西より



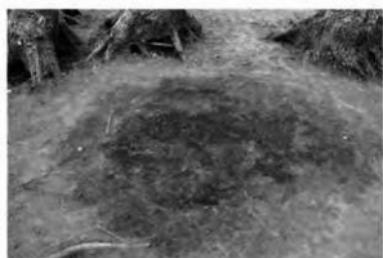
第7号土坑 断面

東より



第7号土坑 完掘

東より



第7号土坑 炭化物出土状況

東より



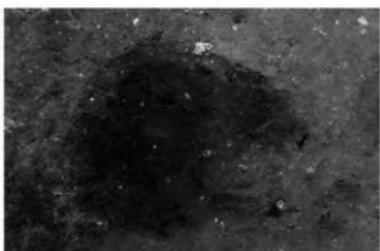
第7号土坑 炭化物出土状況

南より



第8号土坑 断面

西より

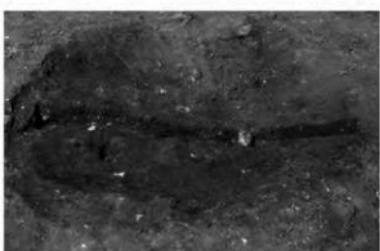


東より



第8号土坑 炭化物出土状況

東より



南より



第9号土坑 断面

南東より

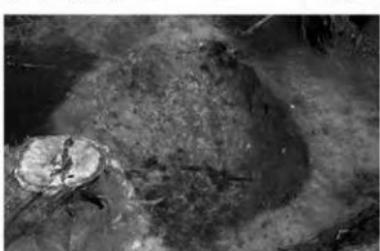


東より

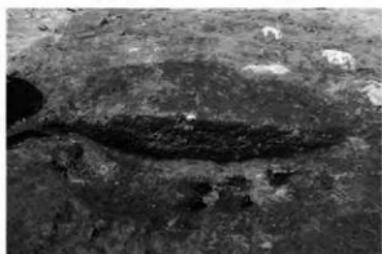


第10号土坑 断面

東より

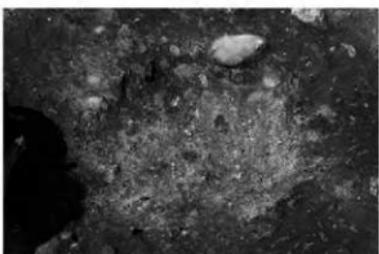


南より



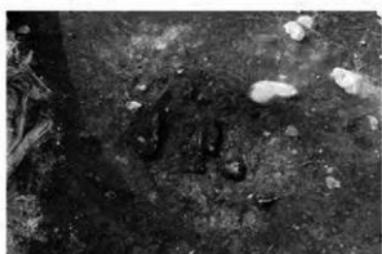
第11号土坑 断面

南東より



第11号土坑 完掘

南東より



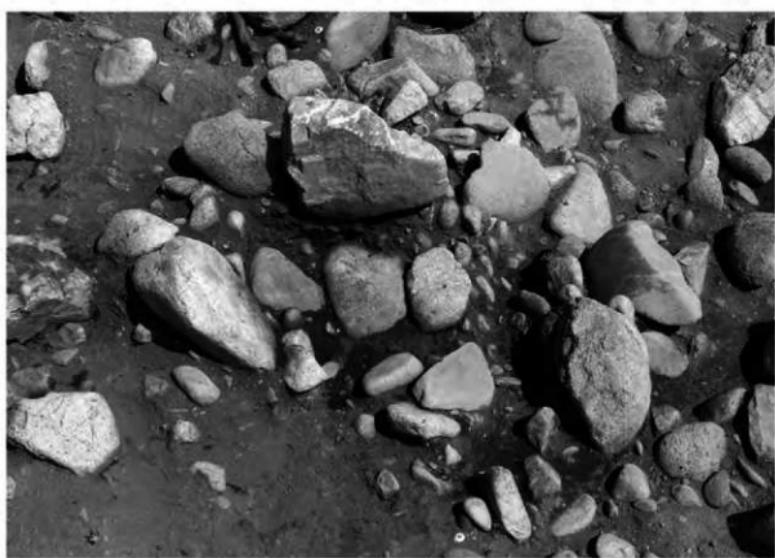
第11号土坑 炭化材出土状況

南東より



第1号性格不明遺構 確認

南東より

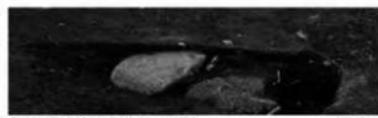


第1号性格不明遺構 完掘

南西より



南東より



南より



南より



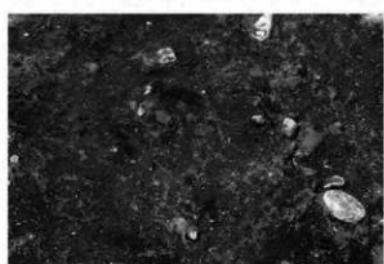
南より



南より



南より



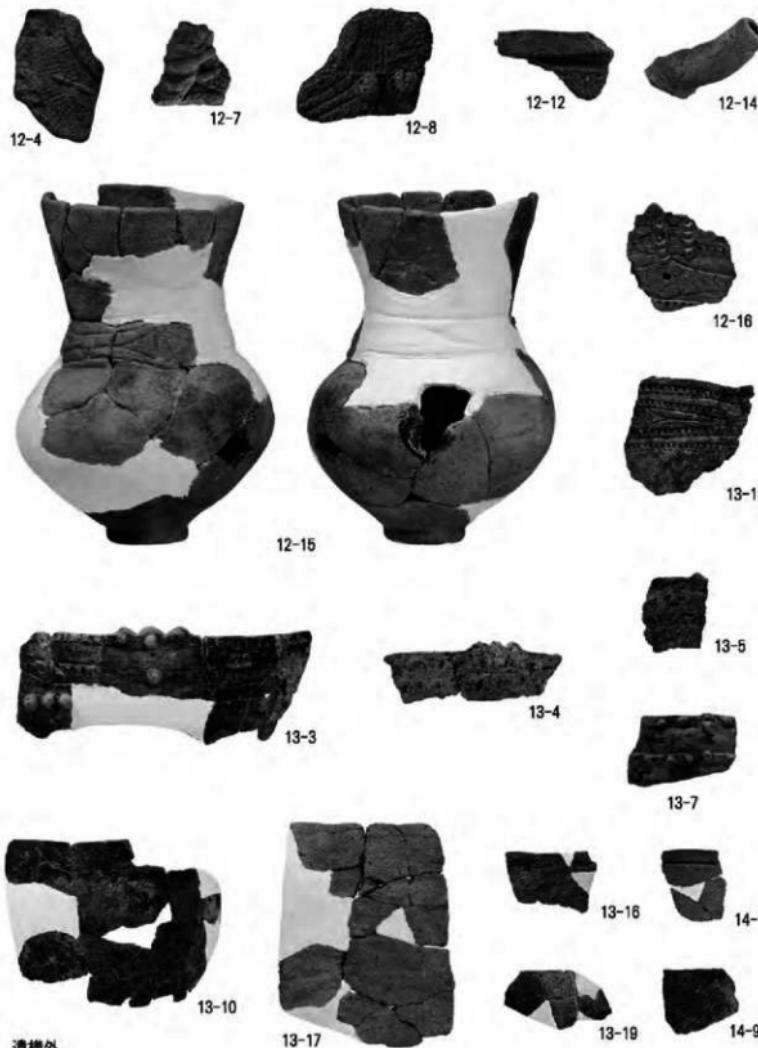
東より



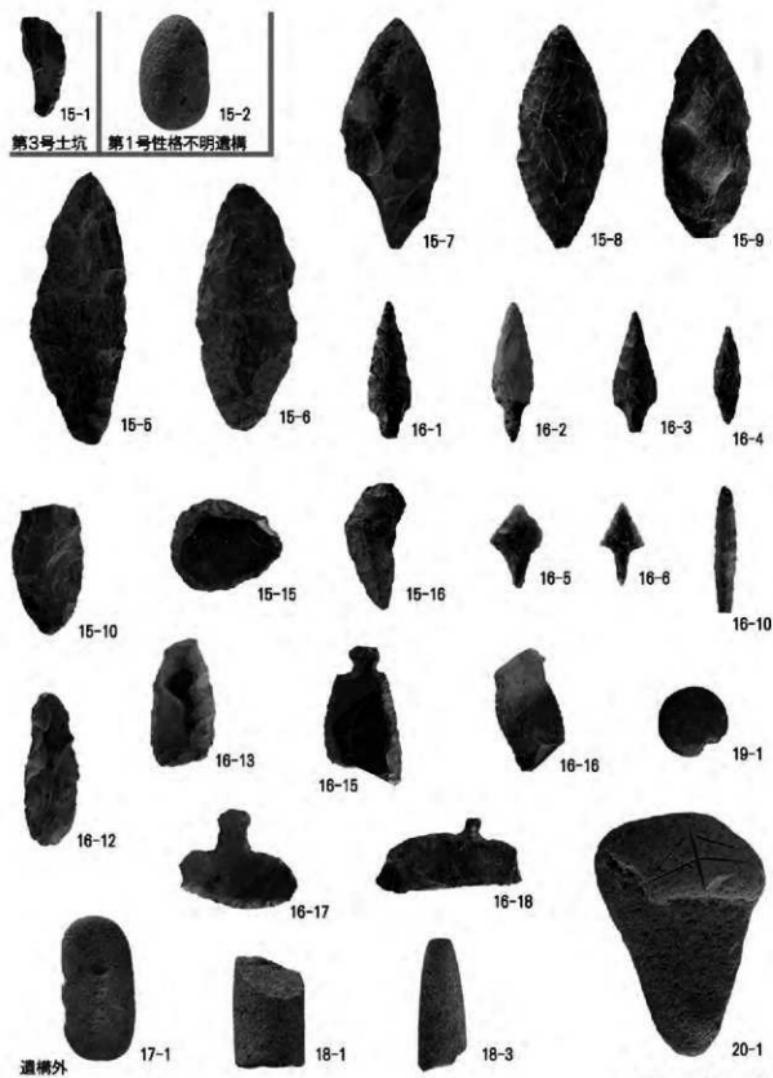
南東より



南東より



鬼川辺(1)遺跡



鬼川辺(1)遺跡



調査終了

北より



調査終了

東より



基本層序断面

北東より



南側沢完掘

南西より



第1号竪穴住居跡 炉断面

南西より

第1号竪穴住居跡 炉断面

南西より



第1号竪穴住居跡 炉確認

北より



第1号竪穴住居跡 完掘・炉完掘

北より



第2号竪穴住居跡 断面

東より



第2号竪穴住居跡 炉完掘

東より



第2号竪穴住居跡 完掘

東より



第3号竪穴住居跡 断面



東より 第3号竪穴住居跡 遺物出土状況 北東より



第3号竪穴住居跡 完掘

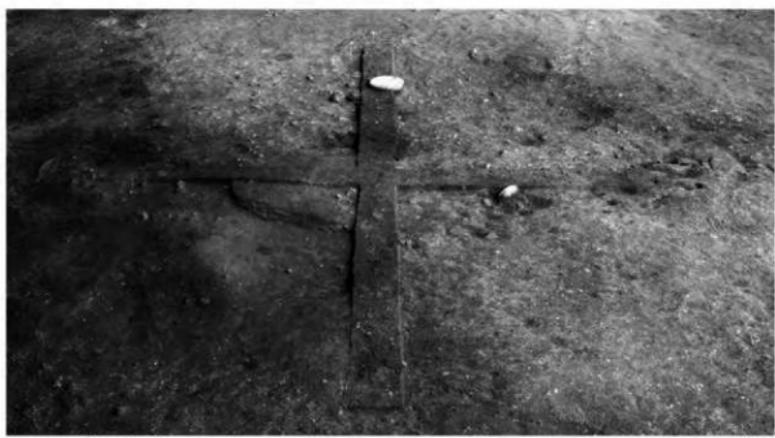
東より



第4号竪穴住居跡 断面

北より 第4号竪穴住居跡 炉断面 北より





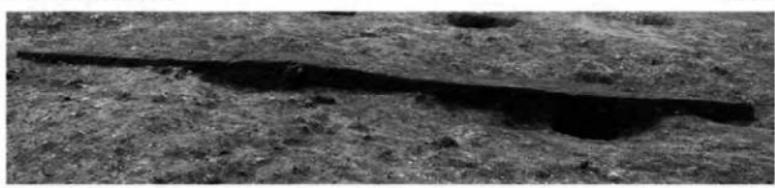
第4号竪穴住居跡 完掘

南より



第5号竪穴住居跡 完掘

南より



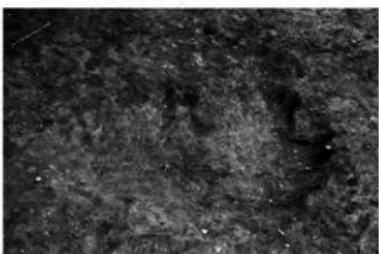
第5号竪穴住居跡 炉・Pit6 断面

西より



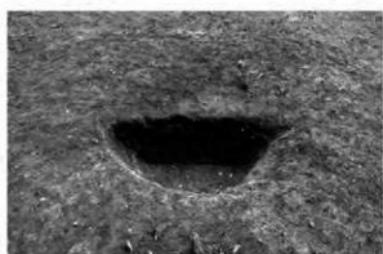
第1号土坑 断面

南東より



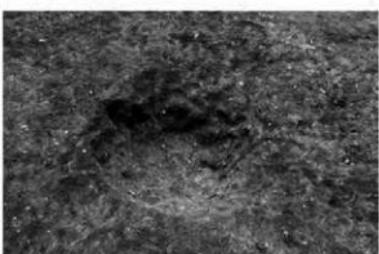
第1号土坑 完掘

東より



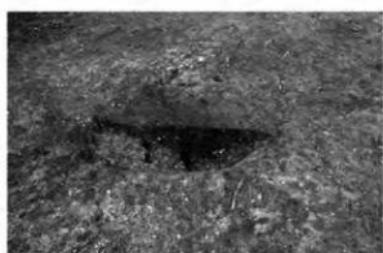
第2号土坑 断面

北より



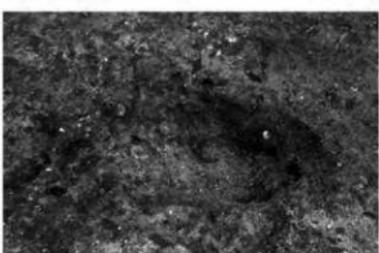
第2号土坑 完掘

北東より



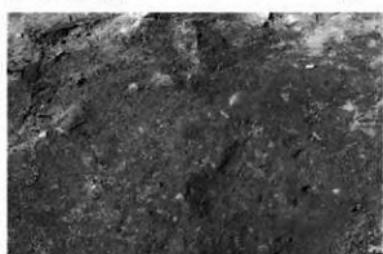
第3号土坑 断面

東より



第3号土坑 完掘

東より



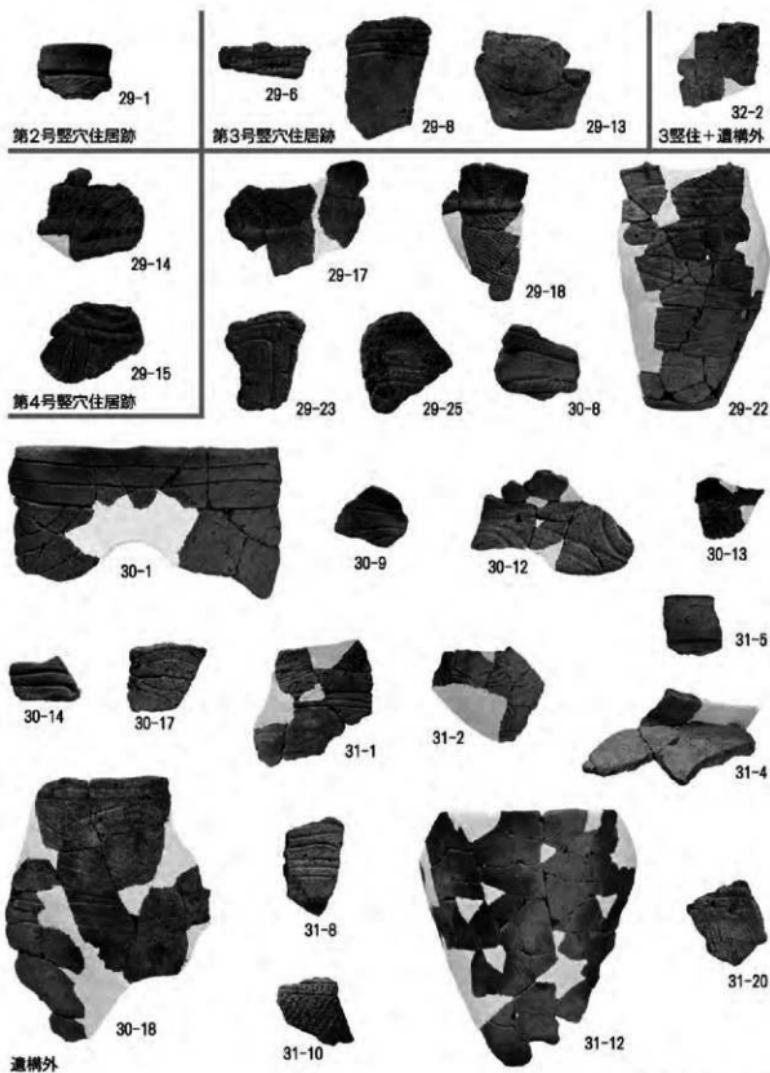
第1号焼土造構 確認

東より



第1号焼土造構 断面

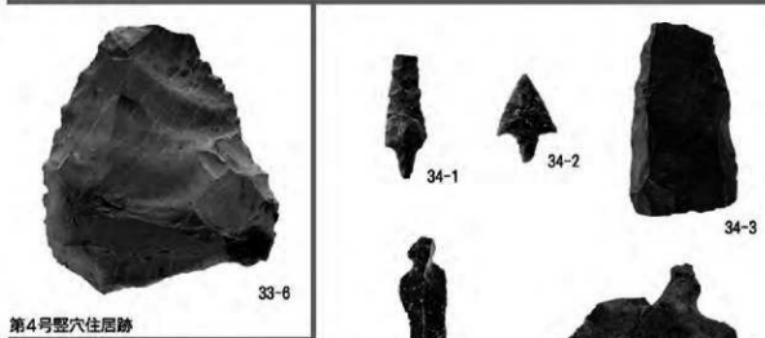
南西より



鬼川辺(2) 遺跡



第3号堅穴住居跡



第4号堅穴住居跡



遺構外

鬼川辺(2)遺跡



南側尾根調査終了（合成）

北東より



北東尾根調査終了

南より



北東尾根調査終了

南西より



林道北側調査終了

南西より



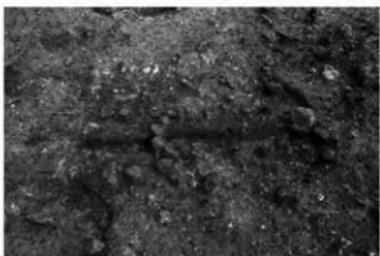
基本層序断面

南東より



第1号竪穴住居跡 断面

北東より



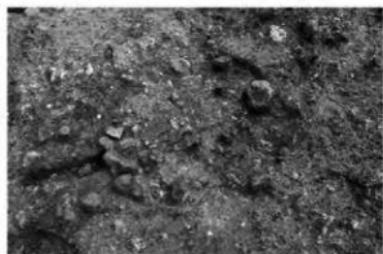
第1号竪穴住居跡 炉断面

南東より



第1号竪穴住居跡 完掘

西より



第1号竪穴住居跡 炉完掘

南東より



第1号竪穴住居跡 炉断割面

南東より



第1号竪穴住居跡 遺物出土状況

北より



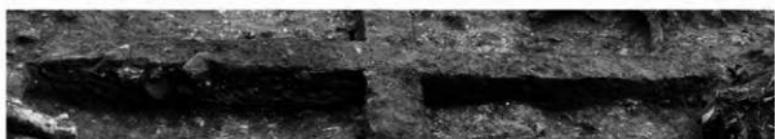
第1号竪穴住居跡 遺物出土状況

北より



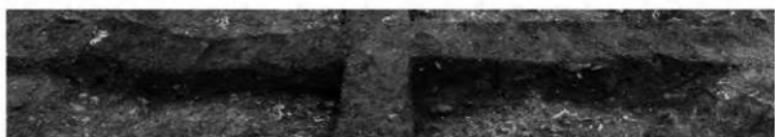
第2号竪穴住居跡 完掘

南より



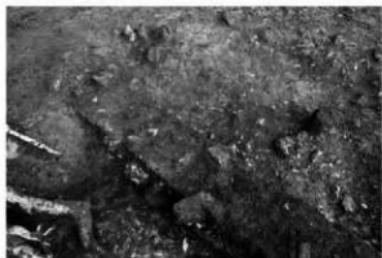
第2号竪穴住居跡 断面

南より



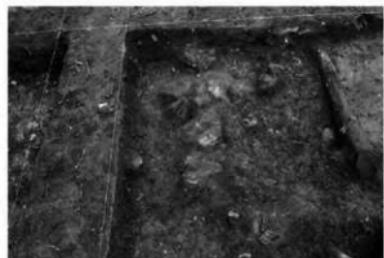
第2号竪穴住居跡 断面

東より



第2号竪穴住居跡 炭化物出土状況

南東より



第2号竪穴住居跡 遺物出土状況

東より



第3号竪穴住居跡 完掘

東より



第3号竪穴住居跡 断面

東より



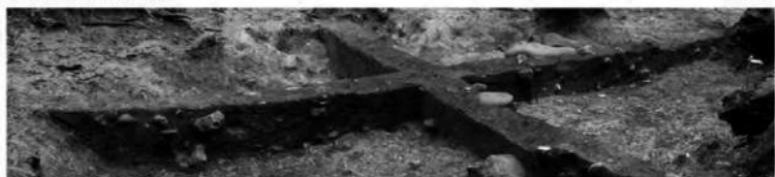
第4号竪穴住居跡 完掘

北東より



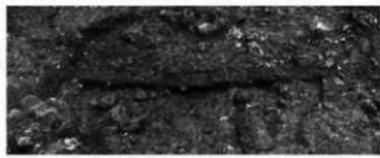
第4号竪穴住居跡 断面

東より



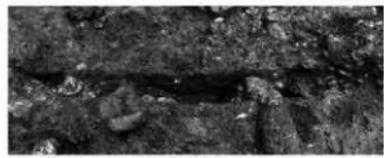
第4号竪穴住居跡 断面

南より



第4号竪穴住居跡 炉断面

東より



第4号竪穴住居跡 炉断面

東より



東より



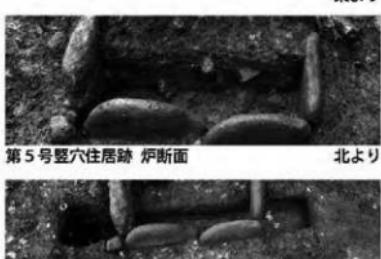
北より

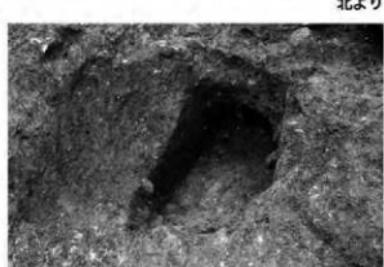
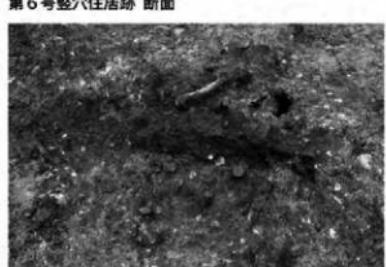
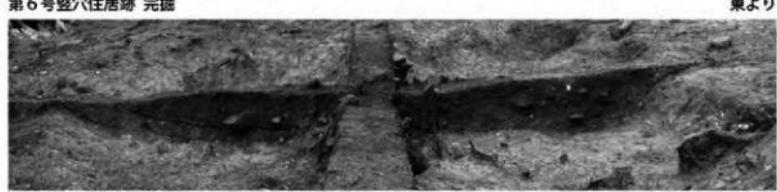


東より



東より







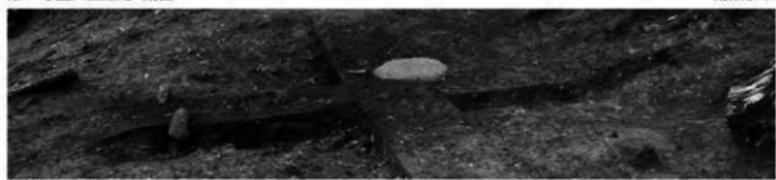
第7号竪穴住居跡 完掘

北東より



第7号竪穴住居跡 断面

南東より



第7号竪穴住居跡 断面

北東より



第7号竪穴住居跡 炉完掘

北東より

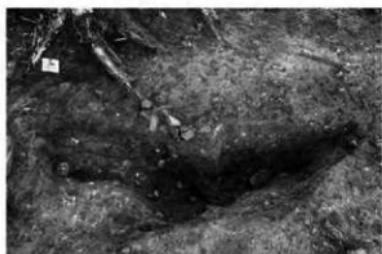


第7号竪穴住居跡 炉断面

南より



南より



第1号土坑 断面



第1号土坑 完掘

東より



第2号土坑 断面

東より



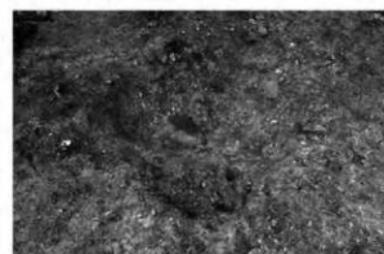
第2号土坑 完掘

北より



第3号土坑 断面

東より



第3号土坑 完掘

北より



第5号土坑 断面

東より



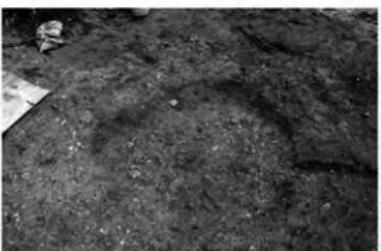
第5号土坑 完掘

南東より



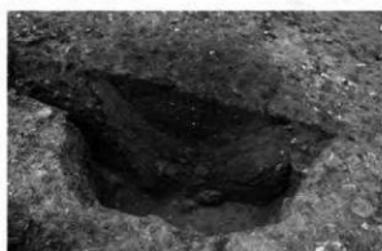
第6号土坑 断面

南東より



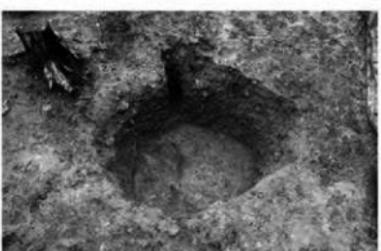
第6号土坑 完掘

南東より



第7号土坑 断面

東より



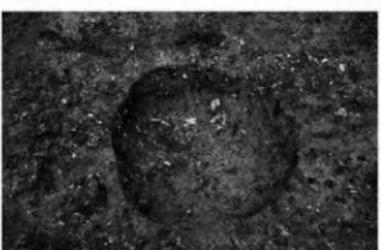
第7号土坑 完掘

北より



第10号土坑 断面

東より



第10号土坑 完掘

東より



第11号土坑 断面

東より

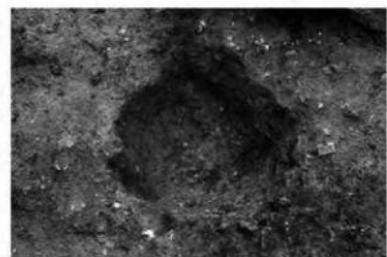


第11号土坑 完掘

北東より



第12号土坑 断面



第12号土坑 完掘

西より



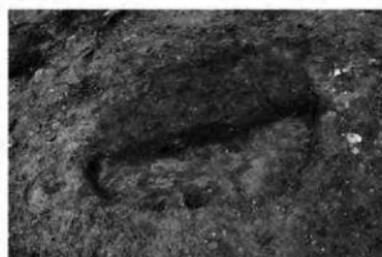
第13号土坑 断面

北東より



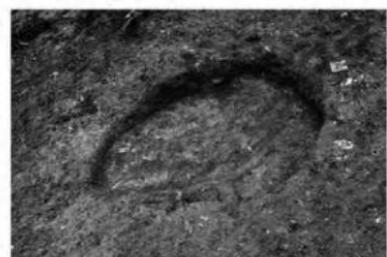
第13号土坑 完掘

北より



第16号土坑 断面

北東より



第16号土坑 完掘

北東より



第18号土坑 断面

東より



第18号土坑 完掘

北より



第19・21号土坑 断面

北より



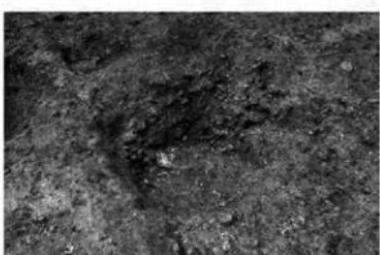
第19・21号土坑 完掘

北東より



第20号土坑 断面

西より



第20号土坑 完掘

北より



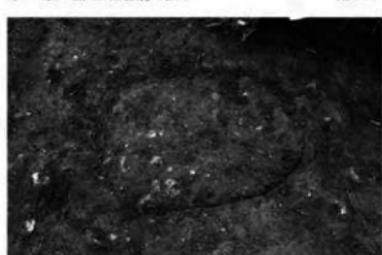
第1号土器埋設遺構 確認

南より



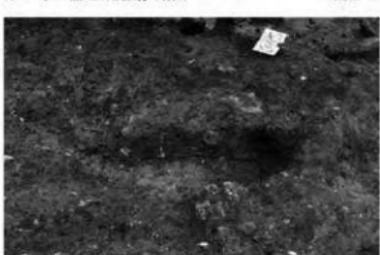
第1号土器埋設遺構 断面

南より



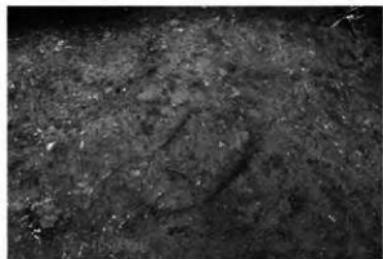
第2号焼土遺構 確認

東より

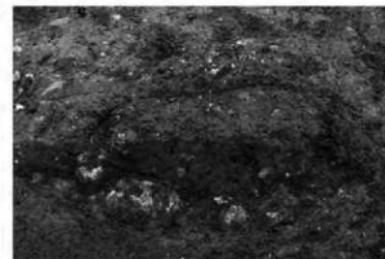


第2号焼土遺構 断面

東より



第3号焼土造構 確認



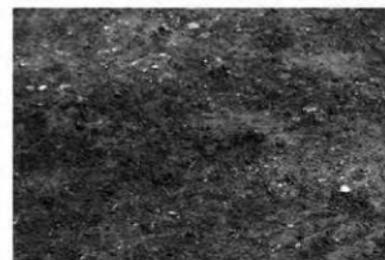
第3号焼土造構 断面

東より



第4号焼土造構 確認

北西より



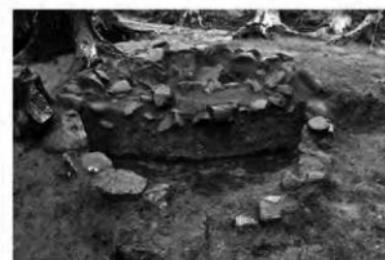
第4号焼土造構 断面

南より



炭窯跡 確認

南より



炭窯跡 断面 (C-D)

南西より



炭窯跡 断面 (A-B)

南東より



炭窯跡 断面北側 (A-B)

南東より



炭窯跡・外周溝完掘



炭窯跡 完掘

南西より



炭窯跡 煙道部確認

南より



南西より



炭窯跡 外周溝断面

南西より



南西より



第1号溝跡 断面

南西より



第1号溝跡 完掘

南より



49-8



49-9



49-14

第1号竪穴住居跡



50-1



50-3



50-6



50-7



50-10



50-11



50-8

第2号竪穴住居跡



51-11



51-12



51-16



52-1



51-13



51-14



51-15



52-3



52-7

第4号竪穴住居跡



52-11



52-13



鬼川辺(3) 遺跡



52-15



52-16



52-20

第5号竪穴住居跡



53-1



53-2



53-6



53-7



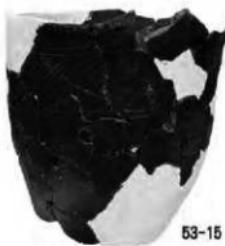
53-8



53-11



53-12



53-15



53-18



54-9



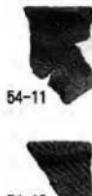
54-16



55-8



54-10



54-11



54-12



55-1



55-10



55-12

第6号竪穴住居跡

鬼川辺(3)遺跡



54-1



54-2

第6号堅穴住居跡 + 第13号土坑



55-17



55-18



56-1



56-2



56-3



56-5



56-6



56-7



56-11

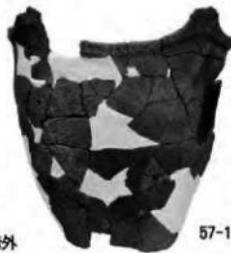


56-14



56-16

第2号土坑



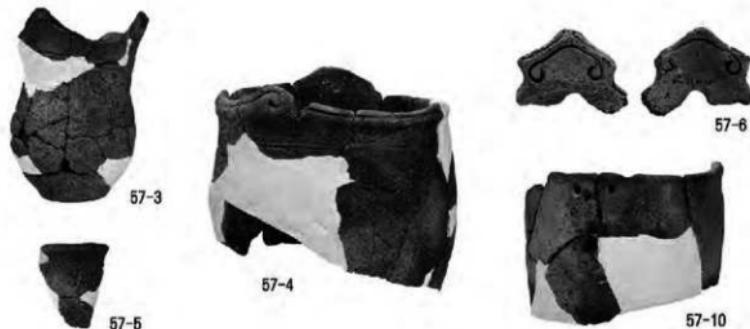
57-1



57-2

第5号土坑 + 通構外

鬼川辺(3)遺跡



第6号土坑



第7号土坑

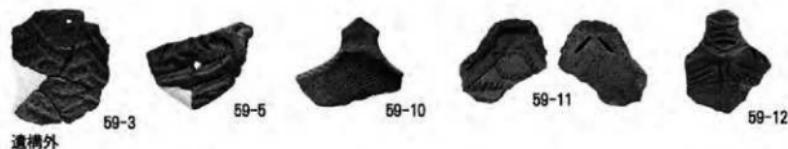
第13号土坑



第19号土坑+
第21号土坑

第18号土坑+第20号土坑

第21号土坑



遺構外

鬼川辺(3)遺跡



59-1

第1号土器埋設遺構+第13号土坑



60-2



60-4



60-5



60-6



60-3



60-8



60-10



61-2



60-11



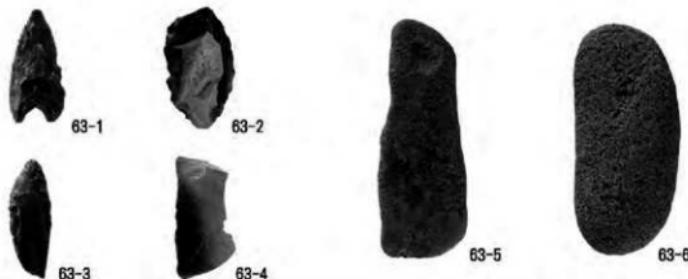
61-10



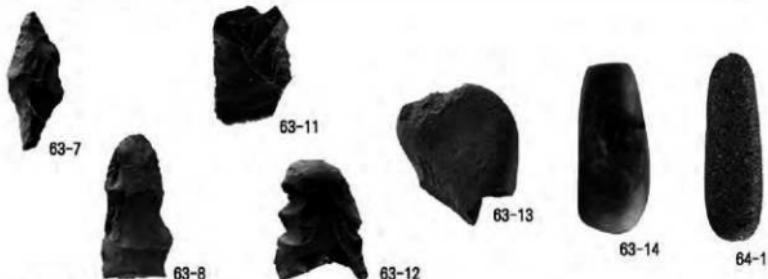
62-1

遺構外

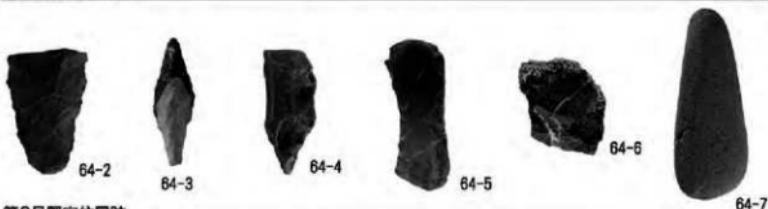
鬼川辺(3) 遺跡



第1号竪穴住居跡



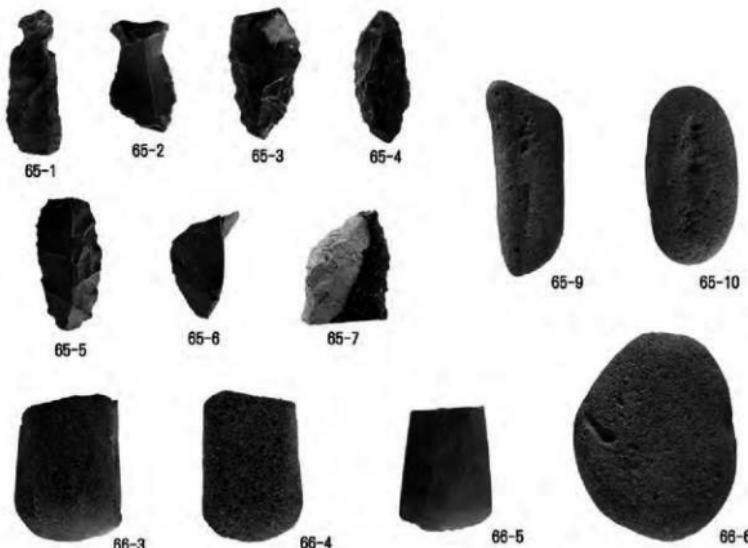
第2号竪穴住居跡



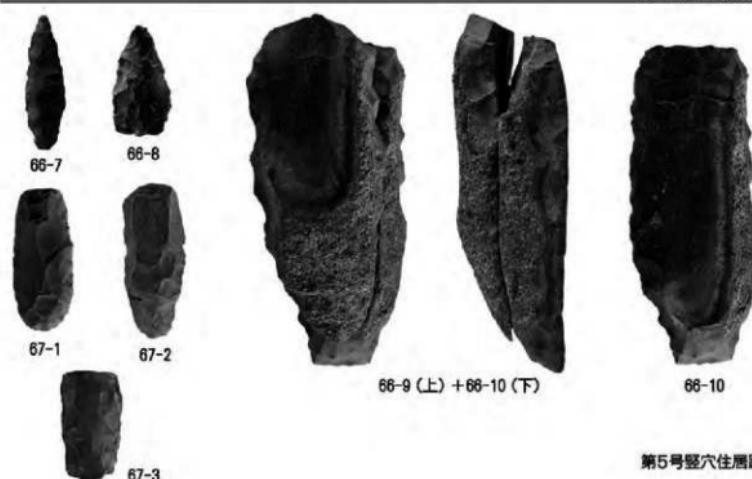
第3号竪穴住居跡



鬼川辺(3)遺跡

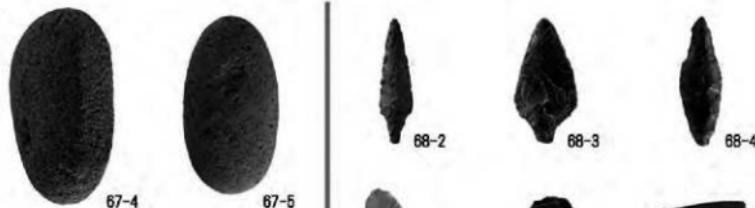


第4号竪穴住居跡

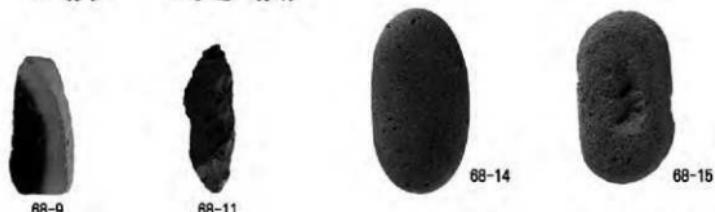


第5号竪穴住居跡

鬼川辺(3)遺跡



第5号竪穴住居跡



第6号竪穴住居跡



第7号竪穴住居跡

鬼川辺(3)遺跡



第1号土坑



第2号土坑

第3号土坑



第11号土坑

第6号土坑



第13号土坑

鬼川辺(3)遺跡



遺構外



鬼川辺(3)遺跡

報告書抄録

青森県埋蔵文化財調査報告書第541集

鬼川辺（1）遺跡
鬼川辺（2）遺跡
鬼川辺（3）遺跡

—津軽ダム建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2014年3月26日

発 行 青森県教育委員会

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15

TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702

印 刷 東奥印刷株式会社

〒030-0113 青森県青森市第二問屋町三丁目1-77

TEL 017-739-8951 FAX 017-739-8953
